
すばらしきかなこの世界

蝉時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すばらしきかなこの世界

【Nコード】

N6561I

【作者名】

蝉時雨

【あらすじ】

後ろに下がりがたがる剣士、前に出たがる魔術士、シスコン天才魔剣士、天然巨乳治癒士、同性愛者の猫耳少女、無口なストーリーカー射手、両刀使いの切れ目男。

十代の冒険者を育成する学園を中心に彼らが描くそれぞれの思いは、時に交わりながら一つの物語を紡ぎだす。

(不定期更新ですがご了承下さい)

序章（前書き）

本作品は作者の手元が狂って出来た作品です。気分を害する表現や描写及び設定が見られます。

もし本作品をお読みになられている最中に発熱、吐き気、目眩などの症状が現れたら最寄りの病院へお急ぎ下さい。インフルエンザの可能性があります。

序章

冒険者。

それは世界に数多存在するダンジョンと呼ばれる地を探索する者たちの総称である。

そのダンジョンの奥地にあると言われる財宝を、その栄光と名声を手に入れるため、彼らはダンジョン探索に乗り出した。

数々の偉業を成し遂げてきた者もいれば、日の目を見ることなく散つていく者もいた。言わば命を賭した博打である。ゆえに危険も多い。

ここ数十年で、冒険者の死亡者数は鰻登りだった。偉業とはなかなか達成出来ないから偉業なのだ。そう易々成功する者はいない。

ある時からか、冒険者たちは徒党を組み始めた。チームとして戦うのだ。それから暫く死亡者数は減った。しかし今度は新たな問題が生まれた。

それは新参者の死亡率上昇だ。特に十代の若者がダントツだった。新参者は得てして知識や経験に欠く。つまり熟練者より単純に判断能力が劣る。それはすぐに死へと直結する。それは由々しき事態だった。冒険者にならなければ問題は解決するがそうもいかない。

この現状を憂いた何人かの者たちは考えた。

知識や経験が無いならば、直接指導すればいいのではないか。実際、徒党を組んでいた団体の幾つかは新参者を引き入れ仲間にする過程で実戦による養成を行う者たちもいた。それをもっと大々的に行うというのだ。

そして出来たのが 冒険者養成校。つまり、新参者の冒険者を養成する学校だ。ここで彼らは指導を受け、冒険者としての知識と経験を積み上げる。

対象は十代の冒険者の卵たち。

世界各地から有名な冒険者たちを教師として招き、指導を行った。

若き冒険者たちはそれにより確実に成長していった。

それから十数年。十代の冒険者からも有力な者が輩出されるようになり、学校の有用性は証明された。

現在では学校は三つになり、生徒数は格段に増えた。未だ中には悲しい結果に終わる者もいるが、それぞれの夢のため冒険者たちはダンジョンを目指した。

これはそんな若き冒険者たちの物語。

序章（後書き）

作者は感想等を頂くと元気が湧くアン　ンマン的精神の持ち主です。たとえ顔が汚れても立ち上がれます（多分）。批評等は作者の餡です。

時々餡を補給して頂ければ幸いです。

意味不明の場合は、「俺はジャムお　さんじゃねえ」と三回叫んでください。

建物の構造によっては声が虚しく響きます。

（ 家族やご近所の方々のご迷惑にならないよう十分お気を付け下さい）

第一章(1) フィーロ

F i r o

「うははははっ！ 燃える燃える っ！」

爆発。また爆発。またまた爆発。爆発のオンパレード。砕け散る骸骨剣士たち。爆風とともに骨が舞う。

その中高笑いしながら闊歩する一人の女がいた。

俺の姉だ。

火の魔術の一つ、爆烈火。俗に言う爆発エクスプロージョンというやつだ。フィーロの姉は今それを使っている。骸骨剣士たちも襲ってきた当初はケタケタ笑っていたが、姉の暴虐さに「あれ、喧嘩売る相手間違ったかな？」といった感じでカタカタ震えている。それ程までに我が姉は恐るべき狂戦士だった。

姉といっても双子の姉で、誕生日は同じだ。所詮、顔も知らない母親の胎内からフィーロより数分早く生まれたただけだ。

名はシェリカ。姓はロレンツだがそれは後で便宜上適当に付けたものだとしてもいい。顔は俺は何も言わない。男ウケする顔であることはこの十五年間で確認済みだ。銀髪の長い髪は銀系のようで翡翠色の瞳は見るものを魅了する。背は低めの痩せ形で小動物のようだが性格は高飛車で最早猛獣だ。

フィーロは長年の付き合いからそう分析している。

魔術を使うあたりで察せられるかと思うが、シェリカは魔術士メイサラーだ。純攻撃型の魔術士ゆえ、補助系はまったく使えない。だから前にもいいという訳でもないが。

俺としては楽でいいから別にいいけどね。

フィーロたちが請けていた依頼は本当はもう少しメンバーを集めたかったのだが、自分の所属するクランのメンバーは誰も都合が付

かなかったためシエリカと二人で行ってきたのだ。その帰りの道中でまるでチンピラに絡まれるかのように骸骨剣士の団体に襲われた訳だが、結局相手を間違えたのは向こうの方だったというオチである。

つか骸骨剣士自体は死霊系の魔物の中でもクソ弱い部類だからこんなにも弩派手な演出はいらないんだけどね。馬鹿ほど派手を好むという話は本当だったか。

「どけどけどけ　　っ！　アハハハハハっ！」

ノリノリだ。というか半分トリップしてないか？　大丈夫かコイツ。まあ、大丈夫じゃないだろうな。

火の魔術を使うには恐怖を司る火の精霊の力が必要になる。火の精霊は概して扱いが難しいのだが、腐るほど有り余った魔力ゆえに火の精霊はシエリカの意志には逆らえない。力そのものの体現でもある要素魔術は魔術の基本にして奥義なのだ。

対するフィーロには魔力がない。多分フィーロが魔術を使ったら、逆に殺されるだろう。正確には『魂を喰われる』ことになる。精霊なんてそんなものだ。所詮力が全ての世界なのだ。

勝手な推測だが、コイツは顔知らぬ母親の胎内でフィーロから魔力を全て奪い取ったのではないだろうか。別に返せとは言わないけど、もつと有意義に使ってほしい。

骸骨剣士は逃げ道さえ見出だせず、壊滅するのにそれほど時間は必要なかった。

その岩を抉るほどの爆撃跡と、散らばった骨を見ると、魔王でも現われたかと思うくらいに凄惨さである。さすがの俺も鳥肌が立ったね。

身震いするフィーロに対してシエリカは満面の笑みで振り返った。「あー楽しかったあ！　凄かったでしょ？　あたし」

その輝くような笑顔は俺に一体どんな切り返しを求めているのか。無視すると機嫌が悪くなるのでフィーロは「確かに凄かったね」と答えた。

魔女か悪魔みたいだったよ、と付け足したかったが言えば次に木っ端微塵にされるのは俺だ。だから口には出すまい。

「見た？ アイツらの顔！ カタカタ震えてやんの！」

ドSかコイツ。

「フイーロ、ねえ、聞いてる？」

「聞いてるよ。つかもうすぐ学園着くんだし無茶するなよ。今回は二人だけなんだから」

「分かってるわよ」

ふん、とそっぽ向くシエリカ。本当に俺の姉か？ まあ、双子だし年は一緒だけどさ。

フイーロは溜め息を吐いて、シエリカの肩に手を置いて笑ってみせた。ちゃんと笑っているかは解らないが。

「もう少しで着くんだから急ごう。なんか奢ってやるから」

「……うん」

シエリカはそれほどウケが良くなかった事に対して不満なのか少し不機嫌そうな顔をする。渋々返事するシエリカを見て苦笑いする。顔がすっかり苦笑いを形作るのを感じる。苦笑いだけはしっかり出来る自分が情けない。

二人は学園を目指して再び歩き始めた。

十

ローズベル学園。

冒険者養成校の一つだ。

四年制で、入学条件は十二歳以上十九歳以下であること。もともと十代の冒険者を養成することが目的ゆえだ。とは言うものの平均的には十五、六歳での入学者が多いだろう。

正直、絶対に通わなくてはいけないわけではないため、フイーロとしては普通にどこかの冒険者団体に加盟するのも手だと思っていた。しかしシエリカがどうしても入りたと言ったから仕方なく入

ったのだ。

まず入学した学生は、学部を選択する。近接戦闘学部、中距離戦闘学部、遠距離戦闘学部、魔術戦闘学部、特殊戦闘学部の五つだ。

次に気が狂いそうになるほど　でもないが、それなりに多数ある学部を選択する。こればかりは説明してられない。例を挙げるなら、近接戦闘学部　略して近戦学部なら戦士学科ウォーリアや剣士学科セイバーといった感じた。学科はすなわち戦闘のなかの個々の仕事ジョブを表す。学科にあまりに沿わない戦闘スタイルは認められないが、多少の誤差は認められている。戦士学科の生徒が剣、斧、槍を使うといったものだ。

判別の難しい学科も多々あるが、そういうのは学園側の俺様ルールに則って決められている。

フィーロは近戦学部の剣士学科セイバーだ。俺は剣しか振れないし。ある意味天職だ。

さつき言ったようにシエリカは魔戦学部の魔術士学科ソーサラーだ。自分が言うのも身内鼻頂みたいなんだが、我が姉は天才魔術士だ。

まあ、それは置いといて。

学部、学科の登録を行う場所は学生課なのだが、学生課は他にもいろんなものを取り扱っている。

例えば依頼。

ローズベル学園の授業は入学生の二週間の基礎課程以外は校外活動ばかりだ。その活動の功績などに応じてポイントを稼ぐ。一定のラインを越えなければ落第だ。

依頼は重要なポイント源である。依頼のランクによってはそれだけで必要なポイントが手に入るものもある。危険も段上がりだが。

という訳で、二人は学生課に依頼成功の報告をしにきていた。報酬も大概は学生課で受け取る形になっている。どうあがいても報告するしかないのだ。

はつきり言って、気は進まない。何せ。

「ハイハイハイ」

成功報酬の五千テールですよ

っ

」

やたらとボルテージの高い受付嬢がいるのだ。入学した当時は焦ったが、正直今はもう慣れた。ただウザイだけだ。本当に消えてほしい。

因みにテールはこの学園外でも普通に使用されている共通貨幣である。五千テール貨幣の入った袋を渡される。

フィーロは何も言わず（受付嬢の顔も見ずに）報酬を受け取ってその場を去るべく踵を返す。消えてくれないなら自分がさっさと立ち去れば問題はない。

「ああんっ……！ フィーロ君たらストイックぅぅぅ」

何も言わないフィーロに対して何か思うことでもあったのだろうか、身体をくねらせる受付嬢。その姿を見て、フィーロはこう思った。

嗚呼、マジでぶっ飛ばしてえ、と。

十

報告を終えて、フィーロとシエリカは何をするか決めかねていた。夕飯までには時間はあるし、何かするにはそれほど時間はないというなんとも微妙な時間。

自分としては自分の寮の部屋でくつろぎたい気分ではある。つか眠りたい。疲れた。

しかしシエリカはやれ購買部に行きたいだの小腹が空いたただの文句を連発する。「面倒臭いが先ほど」なんか奢ってやる「宣言をした手前、無視するわけにもいくまい。というか無視できない。したら死ぬもの。」

「パフェ食べたい」

唐突にシエリカが言った。

時計を見る。懐中時計だ。いつ頃から持っているか忘れたが結構な付き合いだ。短針は四の一手前。三時四十五分を過ぎた頃だ。また微妙な時間だ。

「夕飯まで待てば？ 後少しで夕飯だし。奢るよ？」

「うーん……」

真剣に悩むシェリカ。

さっきまで高笑いして敵を屠っていた姿が想像できないくらいおとなしい。多分、お腹が減っているからだろう。どちらかというとお腹が減ったら暴れだしそうな奴なのに。

「……変な奴」思わず呟き内心ヤバイと冷や汗。

「？ 何か言った？」

「あ、いや、何も。で、パフェ食べるの？」軌道修正。

「食べたい」

「ハイハイ。んじゃ行くか」緊急回避の成功に胸を撫で下ろすフィーロ。

手の掛かる姉貴だ。だけど別に構いはしない。俺に直接攻撃がなければ、ね。

学園内の施設は学生寮で暮らす全生徒のために、かなり充実している。

フィーロとシェリカが向かっているカフェ グランチエ もその一つである。

カフェテリアは校内に四つある。その中でも グランチエ のパフェは最高に美味しいという。フィーロは甘いのは苦手だからよく知らないし興味もない。シェリカが甘党なのだ。

こうしてみると、顔以外は何も似ていない双子である。髪の色だってフィーロは金髪だ。なんつうか、大概の好みも逆だし。だからどうだという訳でもないが。

そんな下らないことを考えていたら、何時の間にもやら グランチエ に着いていた。若干メルヘンチックな外装。いかにも女の子が好きそうだなって言うのはフィーロの偏見だろうか。

扉を開けると、可愛い鈴の音。女の子のいらっしやいませの大合唱。たじろいでしまった。入っていいのだろうか。場違いでは

ないのだろうか。

学園には就労制度があつて、学生課で申請すれば、学園内の施設でアルバイトできる。一応、これもポイント源だ。面倒臭いからやつてないけど。

「いらつしゃいませっ！……つてアレっ？　ファイ、フィーロ君！？」

「あ、ユーリ……」

思わぬ人に会ってしまった。

艶のある茶色い髪。端正な顔立ちにピンク基調のウェイトレス姿の少女　ユーリ。

フィーロの仲間だ。

今日は用事があると言っていたが、まさかアルバイトだったとは。うむ、しかしこれは……。

フィーロはまじまじと眺めてしまっていた。なかなかどうして、かなり似合っていたのだ。

「そ、そんなに見つめられると……」

ユーリはスカートの裾を押さえてもじもじしている。顔も赤い。似合っているのに照れる必要はないように思えるのだが。まあ、じろじろ見すぎるのも失礼か。

「ああ、済まない。似合　」

つていたから、と言おうとしたが、横から迫り来る殺意の塊に気付き首を後ろに引く。それと同時に鼻先をフォークが掠めた。ある種の戦慄を覚える。

「ちっ」

あからさまな舌打ちを聞き、フォークが飛んできた方を見る。

そこには猫耳と尻尾を不機嫌そうに逆立てている少女。ユーリと同じ服を着ているが、若干こちらのスカートの方が短い。因みにその猫耳と尻尾は彼女の自前だ。

「あ、危ないじゃないかモニカ……当たったら死んじゃうよ？」

「じゃあ死ぬ。ユーリをいやらしい目で見るとケダモノは死ぬ」

「見てねーいたつ！ いたたつ！ ちよつ……！ いたつ！」

隣にいたシエリカが脛をげしげし蹴ってきた。何で俺が蹴られなくちゃいけないんだ。つか無言で蹴らないで。マジで怖いから。罵倒しながら蹴ってくれたほうがまだマシだから。

「ふ、二人とも喧嘩はダメですよ……」

半泣きのユーリ。何でお前が泣くんだよ。泣きたいのは俺の方さ。なんだって俺はチームメイトからこんな仕打ちを受けなくちゃいけないんだ。

クソ、なんで奢るなんて言ってしまったんだ。フィーロは姉に言った言葉を後悔していた。

「あたし、アイツら嫌いよ」

「嫌いつて……仲間じゃないか」

「あたしは認めてないわ」ふい、と顔を背けるシエリカ。

「……あ、そ」

スーパーガールズパフェなる特大級（値段も特大級）のパフェにパクつきながら、シエリカはチームワークという言葉をあっさり崩させるような一言を放った訳だ。

ユーリもモニカも俺の所属するクランのメンバーだ。つまり、ともに戦う仲間なのだ。

クランとは冒険者が組む徒党、つまりはチームのことである。学園もそれに倣ったのだ。

クランの結成条件は四人以上十二人以下が原則だ。学園外ならもつと大所帯のクランもあるのだが、学園内では一つのクランが台頭したり出来ないよう少人数にしている。ただし、同盟は認められて^{アライアンス}いる。他のクランとの相互補助は大きな依頼を行うにはたまに必要になるからだ。

別に必ずクランを作らなくてはいけないという校則はないため、ソコ、タッグ、トリオの冒険者もいなくはない。安全性を求めるならクランは作るに越したことはないが、フィーロの場合は安全な

ずのクラン内で殺されそうになる。

ぶっすーつとした顔のシェリカを見て、フィーロは溜め息を吐くしかなかった。

「……やれやれ、どうしたもんかな……」

「何か言った？」

「いや、何も」

ホント、どうしたものか。

誰か分かる奴はいないだろうか。多分ないだろうけどね。

本日何度目かも分からない溜め息を吐いた。

十

校庭のベンチの一つに座っているフィーロとシェリカ。フィーロは夕飯を食べたはずなのにげっそりしていた。

シェリカにパフェを奢って、ユーリやモニカも加えて全員に夕飯まで奢ったお陰でフィーロの今日貰った報酬は水泡と化し、拳げ句貯蓄にまで食らい付いた。

正直、今日は枕を涙で濡らすだろう。既に泣きそうだ。

アルバイトがもうすぐ終わるから、一緒に何処か行こうというユーリの提案を二方向からの圧力に怯えつつ了承し、待ってる間シェリカの愚痴を聞き。ユーリとモニカと合流してから購買部などをぶらついて。そして夕飯を全員分奢らされた訳だ。

これで泣かなかつたら相当なお人好しだろう。そんな奴がいるなら代わってほしい。

両手に花状態でやったーと喜ぶ精神状態でもなかったから、今日は得をした気分でもない。シェリカと話せばユーリが入り込んでくるし、ユーリと話せば二人に蹴られるし、モニカは俺に「死ぬ」としか言わない。

何処に楽しさがあるんだ。フィーロは呻いた。

「やってらんねえ……」

「何が？」

「何でもないよ」

ユーリとモニカは先に女子寮に帰った。シエリカはまだ帰らないらしい。その所為でフィーロも付き合わされている。とつとと帰れ。そして眠れ。

学園も日が暮れると若干不気味さを増す。噂では幽霊が出るとか。ダンジョンで飽きる程見てるのに今更怖がる奴はいるのだろうか。馬鹿馬鹿しいぜ。

「？ 何で震えてんの？」

「武者震いだよ」

「意味分らないけど」

分かる必要はない。

俺はびびっているわけではない。断じて違うぞ。武者震いだ。

十時までなら寮の外にいても大丈夫なため、未だ仲の良いクランやカップルが騒いでいる。煩いことこの上ないため、離れた場所にいるのだが。何でこんな寒いんだ。震えるじゃないか。

「なあ。そろそろ帰らない？」

「嫌よ」

即答だった。泣きそうだ。弟が呪われてもいいのかよ。

かといって逆らえば肉体的に殺される。仕方ないので暫くじっとしていた。

空を見上げる。綺麗な満月だ。二つの月は燦然と輝く。紅い月と黄色い月。かつて人々はそれに神威を見出し、「禍つ月と厳いかつ月」と呼んだ。相成す双子の月だ。フィーロにはどちらも綺麗に見えるし、勝手に禍禍しい月なんて呼ばれる紅い月はさぞや迷惑だろう。などと現実逃避していたら肩に感触がした。

シエリカの頭が乗っている。気付けば寝ていた。人様を付き合わせておいて先に寝るのか馬鹿姉。

つかもうここいたくないんですけど。帰りたいんですけど。

もう正直に言おう。

怖いです。

なまじ人がいないと余計に怖いです。泣きそうです。泣いていいですか。

規則正しい寝息が聞こえる。

他の女の子ならひゃっほう最高のシチュエーションだぜ。今すぐ脳内メモリにインプットだ！ となるのだが。馬鹿姉相手に恋愛感情は湧かない。基本だ。人としての。

「起きろよシェリカ」頬を軽く叩く。

ボディーブローが返ってきた。「ぐふっ」さすがに呻く。やっぱりコイツ起きてんじゃねえの？

そういえばシェリカは昔から俺を枕にする癖があったな。ことあるごとに持たれかかる。

その所為で何度も近所のおばさんから「あら〜今日も仲が良いわね〜」などとふざけた事を言われた。良くねーよクソババー。勘違いも大概にしる。

にしても俺はいつまでこうしてればいいんだろうか。どうせ文句言ったら殴られるんだろうな……。

やってられない。

もう一度空を見上げてみた。綺麗だ。

やはりフィーロは紅い月も綺麗だと思う。

肩で一瞬シェリカの頭が動くのを感じた。起きたかなと見てみたら、眠ったままだった。

まだ動けそうもない。何となく馬鹿姉の前髪を梳いて、フィーロは溜め息を吐いた。

俺は帰れるんだろうか。

> i 3 5 4 3 | 5 8 8 <

第一章(2) フィーロ

F i r o

本当に寝てしまった馬鹿姉を放置する訳にもいかず、フィーロは恥ずかしい思いをしながら女子寮まで運んで行った。同室の女子生徒 確かモランという名だったか に明け渡す。モランの苦笑いが当分頭を離れることはないだろう。

げんなりしているフィーロは自室に帰るべく男子寮に向かってフラフラしながら歩いて行った。

寮は正方形に区切られた広大な学園の西側にある。隣接しているとはいえ、玄関から玄関まではやや遠い。全寮制ゆえに規模は半端なものではない。

フィーロの部屋は三人部屋だ。

余程の理由が無いかぎり、二、三人部屋が当たり前だ。だがフィーロには変える条件は十二分に揃っているように感じる。

恐る恐る扉を開く。

「ガナア ツシュツ！ 今日こそ一緒にイイイイ！」

「止めろっ！ 離れるクソ！」

やっぱりやっていた。

短髪で切れ目の男が短剣を逆手に持って黒髪の男の至近距離に入り込んだ。黒髪の男は蒼色の波打つ太刀を振るう。切れ目の男がそれをかわし、間合いをとる。切れ目の男はベッドの上に片膝をつく形で着地。対する黒髪は床で太刀を構え腰を落としている。両者が膠着状態に陥る。

切れ目の男がレイジ、長髪の男がガナツシュと言う。

端的にコイツらの特徴を挙げるなら、『変態』と『シスコン』。それに限る。

レイジは生粋の両性愛主義者で、ダブルセイバー悉く生徒を襲おうとしている。

「知らないよ」

「さつさと殺すべきだ」

さらっと恐ろしいことを言う奴だ。同意見ではあるが。

ガナツシユは立ち上がり簡易キッチンで湯を沸かし始める。コーヒーでも煎れるのか。フィーロは「俺の分もな」と言った。溜め息が返ってきた。了承とろう。

もう一度席に着いたガナツシユは頼杖を突いて口を開いた。

「今回の依頼はどうだったんだ？ 確かアルハーレン近郊の魔物の討伐だと言ってたけど」

「ほとんどシエリカがやった。俺は……」

「どうせ後ろで見てたんだろ」

何故分かるんだ。

態度に出ていたのか、ガナツシユはフィーロを見てまたもや嘆息した。失礼だ。謝れシスコン。

アルハーレンは商業都市で、中規模ながらも利益を出している都市だ。最近は魔物の襲撃が多かったらしく、都市の自警団では対処できなかったため依頼をしたらしい。

魔物は獰猛かつ賢い事で有名な一角狼、ダイアウルフの群で、老いた群れの長が連携をとっていた。なるほどさすがに自警団には敵しかろう。

戦闘は圧倒的戦闘力を誇る魔術士シエリカの火の魔術、竜炎殲で燃やし尽くした。ダイアウルフの戦略はシエリカの暴力には勝てなかった。

フィーロはそれを黙ってみていただけだ。何せする事が無いのだから。

概ね話した後、ガナツシユは三度目の溜め息を吐いた。

「お前、もう少し真面目にやれよ。なんで冒険者になったんだ」

「さあ？」

興味ない。そもそもフィーロにとって冒険者になることはさして重要なことじゃない。強いて言うならシエリカのお守りのためだ。

ずばらな天才魔術士は放っておくと何かやらかしそうで恐ろしい。

「大体ガナツシユはどうなんだ。お前はなんで冒険者になるんだよ」
「ボクは妹のためだ」

ほらやっぱりシスコンだ。言い切りやがったもの。

ファンクラブまで出来るくらいのモテっぷりなくせに、中身がこれでは幻滅だ。

「なんだその顔は」

「別に？」

「……。まあいい。それより、明日の授業はサボるなよ」

「めんどくせー」

「馬鹿か。明日は考查だぞ」

学園というだけあって授業もあるのがローズベル学園だ。

考查とは個々のスキルを測るためのもので、生徒同士の勝ち抜き戦やチームで目的のダンジョンに行ったりと様々だ。

明日は学部別戦闘だったか。

「フイーロ。ボクは少なからずお前を認めてるんだ」

「そりやどうも」

「茶化すな。少しは真剣に」

カタカタと音がした。湯が沸いたらしい。ガナツシユは立ち上がり、カップにコーヒーを煎れる。

水色のカップをフイーロに渡す。

「インスタントかよ」

「嫌なら飲むな」

仕方なく啜る。インスタントらしい味だ。まあ、嫌いではない。

しかし、夜にコーヒーって……寝れなくなるぞ。

「とにかく、明日は頼むぞ」

「ハイハイ」

どうしてそこまで拘るのだろうか。ガナツシユの気持ちはよく解らない。解ろうとしていないだけか。

何にせよ暫らくは眠れそうにない。布団に転がれば答えは見つか

るだろうか。

「熱い……」

ヒリヒリする舌を出しながらそんなことを考えていた。
にしても、痩せ我慢はするもんじゃない。俺は猫舌なんだ。

十

翌朝。カフェインの覚醒効果も効かないほどの眠気に襲われた頃に眠ったフィーロは体調は万全とは言い難かった。

起き上がり体をほぐす。

剣を手に取り、縦に何度か振る。

別に今日が実技だから、ではない。単なる日課だ。フィーロは基本的に三日坊主だがこれだけは欠かしていない。

「ふう……」

だいたいが終了する頃には小腹が空いていた。「飯……食うか」
タオルで体を拭きつつ呷く。

ガナツシュは既に起きている。今は外で同じように剣でも振ってるんだろう。努力家なのだ、アイツは。

学生服に着替え、階下に行く。もう結構な人数が活動を始めていた。

「朝練は終わったのか？」

背後から声を掛けられた。振り向くとガナツシュだった。

「ああ。朝飯、食いに行こう」

「解った」

並んで食堂に向かう。

「あ、そういえばレイジ捨てっぱなしじゃないか？」

「誰だそれは」

「……………」

ガナツシュはなかなかにひどい奴である。まあ、俺もあの馬鹿を解放する気など毛頭ないが。自ら危険に飛び込む気にはなれない。

フィーロは即刻記憶から消去することにした。

学園には食堂は三つある。

普通の（あくまで自分基準）店は一つで、二つは特徴がある。弥都と呼ばれる独自の文化をもつ都市の郷土料理を出す店 天理 と、激辛料理しかない店 ムムーチョ だ。

天理は新鮮な魚料理等が人気で、それなりの売上のようだが、ムムーチョにいたっては味覚のおかしい奴らしか利用しないためあまり売上は芳しくないらしい。

最近下手物にも挑戦し始めたらしく、不人気の原因はそこにもあるとフィーロは判断している。

普通の（もちろん自分基準）店 ベルベット のある第一食堂に足を運ぶと既に盛況だった。

バイキング形式のベルベットは朝は三十分食べ放題がある。五百テールで食べ放題なのだ。学生にとっては『おいしい』店なのだ。

最早目の前は戦場である。生徒たちは押し退け押し退け立ち並ぶ食べ物如山ほどのせる。中にはその場で食らい付く者までいる。まさに地獄絵だ。

「ヤバイな」

「ああ。ヤバイ」

「どうする？ お盆に唾でも吐きかけるか？ みんな手が止まるぞ」
我ながら天才的な提案だ。

「馬鹿かお前。今のアイツらは鼻糞が交ざったとしても食らい付くぞ」しかし一蹴。

「……じゃあどうするよ？」

「……斬る」

退学になります。

ガナツシユも大概アホである。一言目には「斬る」と言うのは「いつの悪い癖だ。」

しかしながらフィーロ自身何かいいアイデアがあるかと言えば首

を横に振るしかない。はてさてどうしたものやら。

「おや、学年トップのガナツシユ君じゃないかい？」

背後からねちっこい声が聞こえた。ガナツシユは無茶苦茶嫌そうな顔だ。十中八九見当がついているからだろう。

振り向くと身なりのよい男と明らかに取り巻きと思われる男二名がいた。フィーロはもう一度前を向き、ガナツシユも前を向いた。無視を極め込むことにした。

「おやあ？ 学年トップのガナツシユ君は下の者には興味ない？ 随分余裕ですねえ」

いちいち絡んでくる奴だ。淋しいのか？ 友達少ないのか？

ガナツシユは溜め息を吐きながら振り返った。

「やあマルオ」

「マルスだっ！」唾を飛ばすマルスなる男。

マルス・サーレストン。

サーレストン流剣術の始祖アーネルド・サーレストンの血筋の者だ。

サーレストン流は多くの弟子もいるかなり大きい規模の流派で、始祖アーネルドも 五剣聖 という五人の剣の達人に数えられていた。現当主は五剣聖にはなれなかったが、それに匹敵する実力を持つらしい。

マルスはその武家の一族に生まれたのにも拘らず、学園で剣士としては学年首席の座をガナツシユに奪われたのだ。それが気に食わないのかやたらガナツシユに突っ掛かるのだ。

「随分と余裕じゃないか。さすが学年トップは違うね。トップ自ら下位剣士に指南かい？」

下位剣士とは俺のことか。フィーロは少しむっとした。けど文句は言わない。事実、フィーロは学年下位の座をほしのままにしている。

先ほどから学年トップを強調するマルス。ガナツシユを挑発しているのだ。ウザイことこの上ない。ガナツシユは挑発するマルスを

見て、「話は終わりかい？」と言った。やれやれ、全く長い話だねといった完全に見下した感じだ。

「ボクらはこれから朝食なんですね。もう話はしてられない。失礼するよ」

「な、な、な……」

憎憎しげに血走った目で睨み、声にならない怒気のコもった声を洩らすマルス。それを冷静な態度で一瞥し、直ぐに踵を返してガナツシユは歩き去る。フィーロは小走りで隣まで行った。するとガナツシユは止まって首だけ曲げて後ろを見る。

「ああ、そうそう。下位剣士フィーロをあまり見縊らない方がいいよ」
そう言ってまた進みだした。

フィーロはただ過大評価だな、と率直な感想を呟いた。ガナツシユにそれが聞こえたかは定かではないが。

というか当面の問題はマルスより朝飯だ。目の前の戦場に足を踏み入れるのは勇気がいる。

俺たちは無事朝食にありつけるのだろうか。
かなり不安になった。

十

ギリギリ朝食を摂ることに成功したフィーロとガナツシユは一度寮に戻り、身支度を整えた。

とはいっても歯を磨く程度だが。エチケツトは大事だろう。うん。

「行くぞフィーロ」

「ああ」

部屋を出る。一人足りない気がするが気のせいだろう。

あまり悠長に出来る時間でもないため、小走りで教室に向かう。

フィーロたちのクラスはB組だ。別にランク分けしてるわけではない。単なる組分けだ。

A～Hまである組。組を分けるのは基礎課程の授業の円滑化が一

番だったが、基礎課程の終了した今は『親睦を深めるため』がメインだろう。

因みにクランは組とは違うため、結成は他クラスの生徒と組んでも構わない。実際、ユーリとモニカはC組だ。オマケでレイジはE組だがこいつはどうでもいい。

フィーロとしてはシェリカと同じ組というのは何かの陰謀かと感じるが、今の組にそこまで不満がある訳でもない。

五分前に教室に入る。シェリカは既に着席していた。隣にモランがいる。面倒見のよい女の子なのか。気軽に女子寮に入れないフィーロの代わりに手の掛かる馬鹿姉の面倒を見てくれるモランには感謝だ。

ガナツシユは女子生徒に囲まれている。モテ男だからな。シスコのくせに。

フィーロはガナツシユを一瞥したあと、一人の女の子の座る席に近づいた。

「おはよう、クロア」

「……おはよ」

灰色よりの黒、いや黒よりの灰色といったほうがいいのか、少し曖昧な色の髪の少女。深いエメラルドグリーンの瞳と、赤子のように白い肌。何より目を引くのは尖った長い耳だ。

少女の名はクロア。亜人である。

この世界の人種は大きく分けて三種類である。

人間、獣人、そして亜人だ。

人間は最も多い種で、フィーロやシェリカ、ガナツシユはそれに該当する。獣人は見たとおり獣じみた人で、獣の耳やら尻尾を持つ。それ以外はあまり人間とは変わらない。種族によっては毛皮に包まれた者もいるが。知り合いに中ではモニカやモランが獣人の部類に入る。

昔、人間と獣人は戦争をしていた。文化や思想、何よりも容姿の違いからくる戦争だ。今から考えれば阿呆臭いが、その阿呆臭いこ

とで多くの命を失った。

その中で亜人は被支配側の種族だった。人間に似て非なる種族の亜人は人間や獣人の奴隷として扱われていたのだ。

亜人の派生は解らないが、人間と獣人の混血やいろんな説があった。しかしなんであれ彼らの立場が変わることはなかった。

戦争が終結したあとも、亜人の被支配は続いた。時には迫害され、蹂躪された。

ある時何人かの善良な者たちはその現状に憂いた。そして人種差別の撤廃を求める運動が始まった。『亜人解放運動』である。

最初こそ見向きもしなかったが、次第に熱心な演説が共感呼び大きな勢力となっていった。

そして二年後、亜人の権利を保障する法律が施行された。彼らは漸く解放されたのだ。

今現在は人種の垣根はほぼ消え去っている。しかし今だに差別をする人も存在する。差別や偏見は人の性だと諦めているが、自身は人種などさして重要視していない。

フィーロにとっては仲間であることが重要なのだ。

「……………どうしたの？」

「ん？ ああ、いや少し考え事してた。悪い……………その本面白いかな？」

「……………うん」

小さい声だが肯定した。面白いらしい。『Firro Watch ing Diary』か。訳すと『フィーロの観察日記』。ん？

フィーロ観察？ いやまてまて。おかしいぞ。何かがおかしいぞ。

「何で俺を観察してるんだ？」

「……………？」心底不思議そうな顔のクロア。不思議なのはこっちだ。何処から見てるんだ」

「窓から」

窓か。そっぴり最近カーテン閉め忘れてるな。うん。これからはぴっちり閉めよう。絶対に。そう決意した。

キーンコーンカーンコーン。

ありふれたチャイムの音が鳴り響く。同時に扉が勢いよく開かれ男が入ってきた。

「二秒以内に座れ」

開口一番に無茶な要求。

さすがに慣れたが、やはりムカつく。死ねばいい。

特別睨み付けたわけではない。ガン見していた訳でもない。なに男はフィーロの心を読んだかのように「なんだフィーロ・ロレンツ。文句があるなら言うがいい」と言った。

超絶ムカつく野郎だ。しかし我慢だ。何せアイツは担任だ。そう、担任なのだ。

ヴァイス（先生）。

有名な冒険者でもある。《剣狼》ヴァイスと言えば単独で竜族を撃破した猛者だ。平たく言えば化け物だ。彼の持つ剣、切り刻む王者の牙はかの『空白の時代』ホワイトエイジと呼ばれる時代の遺産だ。切れ味はそこらの刀剣の三倍はあるだろう。

まあ、そんな凄い奴が担任なのは非常に喜ばしいが、性格に問題がある。端的に言うくと愛想が無い。壊滅的なほどに笑顔が欠損している。ヴァイス（先生）の授業は生徒から影でこう呼ばれていたのだ。

極寒地獄の青空教室。

ヴァイスは基本的に屋外での実践演習を担当する。そして底冷えするほどの冷たい視線の前で行われる授業ゆえの名前だという。

ちなみに極寒地獄は本当にあるダンジョンで、普段の五倍着込まないと凍えて死ぬが、着込めば動けずに敵に捕捉され全滅させられかねないという冒険者に最も不人気なダンジョンだったりする。その嫌われている点も掛けているとすれば命名した奴は大したセンスだ。

「フィーロ・ロレンツ。言う事が無いなら失せるか座れ」

陰険野郎は座るより失せるほうを選択肢の始めに持ってきてやがっ

た。マジでぶっ飛ばしてやりたい。無理だけど。

逆らえるはずも無いのでおとなしく席に着く。せめてもの抵抗でスピードを遅くした。座るまでヴァイスの舌打ちが聞こえた。最悪な担任だ。エイトビートの舌打ちか。クソ。引っこ抜きたい。

ヴァイス（先生）が出席をとる。

計四十二名の名前を読み上げていく。途中フィーロの名を読み上げるときだけでも憎憎しそうだった。滅茶苦茶嫌われてないかな俺。

連絡事項は無かった。すぐに校庭に行け、とだけ言われる。具体的に時間まで言ってくれるのはいいが、ここから十秒ではさすがに無理だ。二階だぞ、ここ。

校庭に出たフィーロたちを待っていたのは、他クラスの生徒たち。全部で三百五十人足らずくらいか。

半分以上の人間がこちらを見る。敵視というか若干殺気めいたものを感じる。視線で人が殺せるなら既に俺は死んでいるだろう。フィーロは身震いした。

だが、別にフィーロが見られているわけじゃない。自分の両隣だ。近戦学部の生徒はガナツシュを、魔戦学部の生徒はシェリカを見ているのだ。

二人は各学部、学科内で首位の実力を誇る。天才剣士と天才魔術士。遙か高みにいるこの二人は一年生大半の目標なのだ。

「やあ、ガナツシュ君」

またマルスがやってきた。フィーロの方は見向きもしない。端から下位剣士に興味など無いようだ。

「何なのアイツ」シェリカが袖を引っ張る。

「学年二位の剣士だよ」

「気に食わないわ。フィーロの方が絶対強い」

その確信はどこからくるのやら。俺のレベル知ってるだろ。つか運悪く聞こえていた様で、マルスはこちらを睨んできた。俺は悪く

ないぞ。

「ふん。所詮下位の剣士ごときにこの僕が敗けるわけ無いだろう。まあ、指名するくらいは構わないが？」

マルスは鼻を鳴らす。

見下す態度だが誰も文句は言わない。それだけの力を持っているのだ。言いたいことがあるなら剣で勝つしかないのだ。シェリカだけは歯軋りしながら睨んでいたが。

「全員集まれ！」

ヴァイス（先生）が集合を叫んだ。そろそろと集まりだす。ルール等の説明をするのだろう。

シェリカは袖を掴んだままフィーロに向かって「行くわよ」と言っ
て歩きだした。すると引き摺られる体勢になるフィーロ。

引き摺られるがままにB組の列に並びに行くフィーロは内心でこ
う呟いた。

帰りたいなあ、と。

第一章(2) フィーロ(後書き)

両刀を本来の意味で捉えていた方は申し訳ありません。

いたく反省しています。ただいま画面の前で土下座しています。

更新は不定期かつ遅いですがお付き合いいただけると嬉しいです。

第一章(3) フィーロ

F i r o

結果は惨敗だった。

ローズベル学園には明確な順位は無いが、ランクは存在する。クラス分けにアルファベットを使っているためこれは“レベル”で表される。

レベルは1から5までである。

フィーロはレベル1だ。

確実に、自分の所属するクランで最下レベルだろう。俺は雑魚なのだ。

今回の学部別試験はレベルを決める考査でもあった。

ルールはレベルの同じか上の相手を指名し、差が三以上なら一回、二なら二回。一なら三回。同じなら五回勝つこと。そうすればレベルは上がる。

例えばレベル1がレベル5に一度勝てば(本来はあり得ないが)一気にレベル2に上がる。そして負けたレベル5は瞬く間にレベル4に降格する。例外として負けても下がらないのはレベル1同士の戦闘だけだ。そもそも下がりようがない。

とどのつまりこれは考査の名を借りたレベル争奪戦である。

因みに挑める回数は最高五回だ。無論戦わなくてもいいが、勝率が算出されないため成績に加算はされない。加えて勝負を挑まれた場合、拒否は出来ない。連続戦闘になる場合は時間をあける事は許されているが。たとえ拒んだとしても臆病者と謗られるだけだ。

フィーロは雑魚野郎で有名だったので、レベル1の奴らから寄って集って挑まれ、全敗。

体よくレベル1の生徒たちの踏み台になったわけだ。いくら何でも負けすぎだ。このままだと冗談抜きで退学になりかねない。

それにしても今日の惨敗でフィーロの弱さは他学年にも知れ渡っただろう。

生徒会カウンスルの役員が見学に来ていたのだ。多分有力な新人を探すためだろう。

他学年の区別の仕方は胸元の丸いバッジを見ることだ。一年生は銅あかがね。二年生で鉄くろがね。三年生で銀しろがね。四年生で黄金こがねのバッジを付けている。加えて生徒会の役員は星形のバッジも付けている。見紛う訳が無い。何にせよ生徒会にまでフィーロの弱さが伝わった以上、名実ともにフィーロは雑魚に認定された。

実のところフィーロ本人はそれほど苦でも無い。だが姉シェリカはひどく憤慨していた。何故お前が怒るんだよ、と思ったが口には出さなかった。

シェリカ曰く、「フィーロが本気を出さないから悪い」とのこと。フィーロは本気なのだが。人と戦うとどうにも勝てない。

溜め息が洩れる。

「災難ですね。調子悪かったですか？」

ユーリはフィーロの肩に手を当てながら尋ねた。ぽうつと肩を光が暖める。白く仄かに輝く光は治癒の光だ。その光に包まれながらフィーロは「どうだろう」と短く返した。ひどく曖昧な答えである。治癒士ヒーラーであるユーリは魔戦学部において戦闘力は無くとも、治癒魔術を使える優秀な治癒士だ。魔術より超能力に近い力である治癒魔術は使える者も限られる。その点でユーリは天才といっても差し支えないかもしれない。

肩の傷はみるみる癒えてゆく。何というか心が温まる感じだ。

「痛みは無いですか？」

「うん。ありがとう、ユーリ」目一杯の笑顔で返す。成功したかは解らないが。

「い、いえ……わたしは治癒士ですから」

顔を赤くして手をブンブン振るユーリを見て、可愛いなあ后感慨深くなる。

ユーリは学年でもトップクラスの可愛さを誇る。天然ではあるが、誰にでも優しく気の利く性格をしているため、男女問わず人気のある生徒だ。胸も大きい（あ、これは関係ないか）。

入学式から一週間、アプローチを仕掛けてくる男子生徒は数多く、上級生にもファンがいた。

そんな女の子に調査終了直後から直々の治癒を施されている訳で。「あの雑魚野郎……」「ふざけやがって」「マジ死ねよ」「つか代われ」

男子生徒の嫉妬と羨望と殺意の視線を一身に浴びるフィーロは冷や汗を掻いている。

一際恐ろしい死の光線デス・レイを放っていたのは他でもないモニカだった。つか怖すぎだ。ホントに射抜きそうな視線だ。もう既に手を握っている。

死ぬかもしれない。
直感でそう思った。

「マジム力つくわあのクソビッチ」

「女の子がそんな下品な言葉を使うな」

「だってム力つくもん」

もん、じゃねえよ。仲良くしろよ。一緒のクランだろうが。

調査終了後からやけに不機嫌なシェリカを宥める。昼飯時なのがさてどうするか。まずは目の前の我が儘な姉を何とかせねば。

シェリカはユーリが嫌いらしい（というか他の奴らも嫌っているが）。理由はよく解らないが、身体的劣等感か何かだろう。うん。きつとそうだ。僻みは良くないぞ。牛乳に相談だ。

やはり機嫌の悪いシェリカを宥めるには食い物だろう。昼飯も決められるし一石二鳥だ。

「何食べたい？」

「フィーロの手料理」即答だった。

「めんどくさいな……」

孤児院ではフイーロが食事当番だった。シェリカが作る料理は最早料理とは呼べない暗黒物質ダークマターとなるためだ。仕方ない。有害物質に昇天させられるくらいなら面倒臭くても料理を作ったほうがマシだ。しかし、料理か。久しぶりだ。

食堂での争奪生活に慣れて始めている身体は、確かに平和な食事を求めている。

たまにはいいか。

そんな気もしてきていた。

「簡単でいいか？」

「うん」

満面の笑みを返すシェリカを見て、コイツはコイツなりに俺を励まそうとしてくれていたのかなと思う。

ま、考えすぎだろうが。

十

料理が出来る場所は数に限りがある。

一つが最近出来たらしい多目的用の教室を借りよう生徒会に申請することだ。

因みに多目的室とはクラスやクランの仲間とワイワイ騒げる場所もあったほうがいだろう、という現生徒会長の提言により作られた娯楽スペースだ。使ったことはないがキッチン完備らしく、カラオケまで付いているらしい。まあ、カラオケは会長の趣味らしいが。そしてもう一つが食堂のキッチンを武力によって占拠することだ。因みに食堂の調理師は恐ろしく強いという噂なので非常に困難なのだという。古来学園が出来てから食堂占拠に成功したのは一例だけらしい。というかフイーロとしてはどうして普通に頼まないのか不思議でならない。

普通に考えれば前者を選択するが、部屋の貸し出し条件は五人以

上。まあ、そりやそうかと納得するフィーロ。広い教室を二人やら三人のために貸すには些か勿体無い。自分の部屋で騒げばいい。

他の奴も誘つてもう一度借りに来るかとシエリカに尋ねてみたが、嫌の一言で一蹴された。じゃあどうするんだと言ったら、シエリカは寮部屋を使えばいいと言ってきた。

……寮部屋か。それがあつたな。あまり承諾したくないが。

ただどここういう状態のシエリカに対して俺の反対意見が通る可能性は「明日世界が滅ぶって適当に言ったらホントに滅んでしまった」くらいの確率だ。宝くじで賞金当てるほうがよほど簡単だ。

もう承諾するしかないのだ。

フィーロは眉間を押さえた。

泣いてない。泣いてないからな。

「フィーロ君でなかなかおねーさん思いだよね〜」

料理中のフィーロの背中に向かってそんな言葉を投げかけるのはモランだ。

んなわけねー。フィーロは不機嫌そうに鍋を掻き回した。

自炊したいと言う一部の生徒の要請を受けて、各寮部屋には簡易キッチンが着いている。それを使えば料理は出来るのだ。まあ、フィーロとて同性なら抵抗感は無かった。それでもこれだけはあまり乗り気ではなかった。

かなり迷った。シエリカを男子寮に連れて行くのは気が引ける。

コイツだって女だし。多分フィーロの部屋にはレイジもいる。要注意人物だ。それにガナツシユもいる。文句ばかり垂れてくるのは目に見えている。落ち着いて食べないだろう。かといってこちらから女子寮に行くのもな。下手したら次の日あらぬ噂が飛びかねない。濡れ衣は御免だ。

やっぱり生徒会に多目的室を借りに行ったほうが良くないかと言つてみたが、果たしてシエリカはあっさり否決。清しいくらいの一蹴をしてくれた。泣いていい？

結果、男子寮みたいな負の巢窟に姉といえども女性を連れ込むのは不味いと紳士側シエントルサイドのフィーロが囁きかけたのでそれに同意。仕方なしに女子寮の、姉の部屋に料理を作りに行くこととなった。勿論廊下を歩く姿を奇異の目で見る女子に怯えながらだが。

堂々と闊歩するシエリカの後について歩くこと数分で彼女のいや、正確に言うと相部屋なのだが 部屋に辿り着いた。促されるままに部屋の扉を潜る。

そしてフィーロが姉の部屋に入ってまず一番最初に思ったことはきたねえ。

その一言だった。

モランと相部屋のシエリカだが、整理整頓のレベルは一目瞭然だ。最早境界線が出来上がっていた。綺麗なお部屋側と肥溜め側。ある種の戦慄を覚えるほどの違いだ。澄んだ空気と淀んだ空気が部屋の一定の位置で分断されているのだ。地獄と天国の図を明確に表したような状況を体現したその部屋にフィーロは感動すら覚えた。一種の芸術ではないだろうか。

こんな芸術俺は全く必要としていないのだが？

という訳で、まず行ったのは大規模な掃除だった。女として最低レベルとも言えるシエリカの整頓能力の無さにほとほと呆れながら肥溜めと戦争。

清掃が終了したのは丁度一時間後のことだった。

そして今現在、くたくたの状態で昼飯を作っている。

これでは普通に食堂に行くのと変わり無いのではないだろうか。鍋を掻き混ぜながらそんなことを思う。

「ごめんね」。いつも片付けてるんだけどすぐこうなるのよ」

モランのすまなさそうな声が後ろからする。フィーロは「いいよ。慣れてるから」としか言えなかった。

「何よ。あたしがまるで掃除できないみたいじゃない」

みたいではなくその通りなんです。まさか今まで自分を掃除できる女だとも思っていたのか？ 思い上がりも甚だしい。現実を

見る。

背後から聞こえるシェリカの言葉に突っ込みを入れる。決して声には出さないが。

しかしモランはいい女だとつくづく思う。俺なら確実に部屋を変えてもらえるよう申請する。フィーロは自然と嘆息した。

「お腹すいたー」

シェリカの不満の声が背後から届く。見なくても机に突っ伏して足をバタバタさせていることが解る。いやはや、誰の所為でこうなつたか考えてもらいたいものだ。

「もう直ぐ出来るよ」お前が邪魔しなけりやな。

「うー……」

唸るシェリカ。同時にモランのクスクスという笑い声が聞こえた。少し気恥ずかしくなる。何故かは解らないが。フィーロは口をへの字に曲げた。

知らず知らずのうちに鍋の掻き混ぜ方が荒っぽくなっていったのは気がつかなかつたけれど。

十

「ご馳走様。ありがとね」

「あんがと」

「ああ。まあ、美味しかったなら安心だ」

「また作りに来てよ」屈託無く笑うモラン。

裏表の無い笑みでそう言ってもらえとかなかに心地よかった。気が向いたらな、と答える。シェリカは不機嫌な目をしていた。何なんだコイツ。

こついう不機嫌なときは相手せずにさっさと帰るのが得策だ。

「……んじゃ、俺帰るわ。午後からフリーだしな」

今日はもう授業もないし、依頼等も請けていなかったはずだ。帰ってゆつくりしたい。出来るか解らないけど。

じゃ、と手を上げて部屋を出る。

そして思い出したようにもう一度戻った。

「……スマン。玄関まで一緒に来てください」

女子寮の廊下を一人で歩く勇気は俺には無い。

「仕方ないわね……」

後頭部をぼりぼり搔きながらシエリカが面倒臭そうに言う。止める。もっとおしとやかにしろ。おっさんくさい。

フィーロはそれでも藁にも縋る状態なので文句は言わず、「ありがとう」と礼を言った。俺ってなんて出来た人間なんだ。惚れ惚れするね。

シエリカを前に、後をついていく形でフィーロは廊下を歩く。数メートル進んで一度振り返った。モランはまだドアの前に立っていた。手を振る。向うも手を振って返してくれた。

振り返るとまた不機嫌な顔のシエリカがこちらを見ていた。ぶっす〜と言った感じだ。何なんだ一体さつきから。一人で変な顔選手権ですか？ それなら心配いらねえよ。お前ならぶつちぎりで首位独占間違いなしだ。そのままゴールに駆け込んじゃえ。

何か攻撃を仕掛けてくるかと思ったが、シエリカはそっぽ向くように前を向き再び歩き出した。ホント、何なんだろうね。

一貫して無言だったシエリカが口を開いたのは玄関に着いてからである。

「着いたわよ」

かなり素っ気ないが。

「ありがとな」お礼を述べ扉を潜る。「それなりに楽しかったよ」

「別に楽しませてなんかないわ」

「まあな。何にせよ掃除はしろよ」

「余計なお世話だわ」

いや、お世話も何もお前が心配なんじゃなくてお前の面倒を見ているモランが心配なんだ。そもそもお前はもう少し生活スキルを身に付けても文句は言われなと思う。寧ろ俺としては万々歳です。

当然、口には出さないの。「あ、そ」と言っておいた。

「じゃ、帰るわ」シエリカに背を向け男子寮向けて歩き出すフィー口。

「ま……待って！」

「？ 何？」突然の呼び止めに振り返る。

「あ……え、と……」

普段からずけずけと物を言うタイプの女にしては珍しい態度。しどろもどろというか、どぎまぎというか。取り敢えず、似合わない事もないような気もしなくも無い。……我ながらなんて回りくどい。

あーうー言いながら暫くして言いたいことが漸くまとまったのか、シエリカは口を開いた。

「えーと、ごちそうさま……」

「……おう」

それだけかいつ。待たせた割には六文字かい。

まあ、気持ちは受け取っておこう。シエリカがお礼を言うなど珍しい。そう思うと自然に笑みが零れた。フィー口は「そんじゃな」ともう一度言っつて再び男子寮を指した。

シエリカはもう止めてはこなかった。

数時間のことなのに、戦闘以上に疲れたフィー口はフラフラと男子寮の扉を開く。

目の前には仁王立ちしたガナツシユの姿があった。えらくご立腹の様子だ。

「ただいま」

「何処行っていたんだ？」

「あー、まあ、ちよいと……ね」

「ちよいと、女子寮に行っていた訳かい」
「ばれていた。」

「いや、シエリカに昼飯を作つてと言われてね」

「大体想像つく」

ならなんで怒ってるんだ。まさか昼飯俺と一緒にじゃなかったからか？ どんだけ寂しがりやなんだお前は。ハムスターか。

「ボクが怒っているのはそんな事じゃない」

「じゃあ、何」

「今日の考査だ」

ガナツシユの右腕が揺らいだ。

いきなり首が後ろにガクンとなった。引っ張られたのか。誰に？ ガナツシユだ。胸倉を掴まれたんだ。

目の前にガナツシユの怒った顔がある。ガナツシユの瞳にフィロの呆けた顔が映っている。間抜けな顔だ。冴えないキモメンとはこれを言うのか。

「何だ、あのザマは」怒気を孕んだ声。「お前は何故本気で戦わないんだ」

「本気さ」

「お前の！」胸倉を掴んだ手が一層きつくなった。「お前の力はこの程度じゃないだろう……！」

何でコイツはこんなに必死なんだ。俺のことじゃないか。俺は本気だ。いつも本気でやってるさ。手前勝手な物差しで俺を測るんじゃないよ。ぶっ飛ばすぞ。フィロはそう言いたかった。けど言わなかった。

言わなかったただけだ。

「まーまーお二人さん、ケンカはようないで。な？ ほら。あれやん。雨降って地固まる？ な。仲直り仲直り。そしてベッドへゴフア」

仲裁をしようとしたレイジにフィロとガナツシユは同時にパンチを叩き込んだ。カントラ地方の訛りが今は物凄く鬱陶しかった。

一生寝てるクソレイジ。

しかしレイジの介入で興が冷めたのか、ガナツシユは舌打ちをして部屋を出て行った。バン、という扉を勢いよく閉める音が耳を衝

いた。うるせー静かにしろという声が外から響いた。

「何なんだよ……」

フィーロはベッドに潜り込もうと毛布を反した。

「……よ」

右手を上げ、お邪魔してるぜみたいな軽いノリで挨拶するクロア。何故お前がここにいる。ここは男子寮だ。そしてそれは俺のベッドだ。お前は女子寮に帰れ。

「……最近、一人寝がさみしくて」

「ルームメイトに頼みなさい」

「……けち」

「ケチで結構」

「……悪魔」

「悪魔で結構」

「……童貞」

「うるさいよ!？」

っもー俺の周りの女こんなのはっかだよ！ 女の子が軽々しく童貞なんて言葉使うな！ せめてオブラートに包め！

クロアを抱きかかえる、というより肩に担ぐ。フィーロより二十センチ以上小さいクロアなら運ぶのは容易だ。

「……いゃん」

「いゃんじゃねえ」

ひどくウザイ。扉の外に放り投げる。

「帰りなさい」

「……部屋のすみでいいから」

「帰れ」

頼むから帰って。俺を寝かせて。ゆっくりさせて。疲れてんだよ。もう上と下の脛が共同戦線張ってるんだよ。既にこの同盟は覆らないの。だからもう降伏させてください。お願いします。

観念したのかクロアはとぼとぼ廊下を歩いていった。通りかかった何人かの男子は「うおっ女の子?」と動揺していた。だがクロア

は動じていなかった。俺にもあの勇氣ほしい。

ぴたりと途中で止まってクロアはこちらを見た。何だと思ったら、クロアは小さな声で呟いた。

「……………次はかならず」

そして立ち去っていった。

不吉な言葉残すんじゃないよ。

嘆息して扉を閉じる。ようやくと眠れるとベッドに戻りもう一度毛布を反す。

「うふん」

「眠れ」

迷い無く拳を振り下ろした。「ごふっ、げふっ、ちょ……………わかるかっ……………ぼふうっ、げはっ」右手をプルプルさせながら許しを請う馬鹿に鉄槌を下す。悉く死ぬボケナス野郎。

「ちよっ……………目え据わってる！ 据わってるで！ ヤバイって！

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」

部屋に転がった不燃ゴミを窓から投げ捨てる。

これで眠れる。ゆっくり眠れる。もう夕飯まで起きないぞ。

フィーロは毛布に潜り込んだ。

「……………くそ。イライラして眠れない」

どうしてくれんだガナツシュ。

お前なんか嫌いだバーカ。

言ってる自分が虚しくなった。

俺が一番嫌いなのは俺自身だ。ガナツシュより俺のほうがバカだ

よ。

フィーロは少し泣きたくなった。

第一章(4) カタハネ

Ganache

あークソ。

ムシャクシャする。

ガナツシユは不機嫌そうな顔をしながら中庭を歩いてた。というか、不機嫌そのものなのだが。

不機嫌な理由は言うまでもない。フィーロのことだ。

それにしたって実技考査のあのさまは何だ。舐めているのかと思つた。脳裏にボコボコにやられるフィーロの姿を思い出される。また苛々してきた。眉間に皺が寄るのを感じる。きつと狒犬のようになっていていることだろう。……いかん。気持ちを落ち着けなければ。ガナツシユは胸元からロケットを取り出して開けた。写真に写っているのは愛しい妹の姿。

ああ、イリア。イリア。イリア。ボクのイリア。なんて愛らしいんだ。ヤバい。ヤバ過ぎる。まさに至高の天使だ！ 女神だ！ そしてボクを惑わす蠱惑な小悪魔でもある！ 矛盾を超越したキミという存在は (中略) ああもうキミの笑顔だけで一週間は生きられる気がする。いや、一年だっていけるさ。イリア。この溢れんばかりの愛をキミに届けたい！ ああ、イリア。可憐に咲く一輪の花よ。今一瞬でもキミのそばにいられない愚兄を許しておくれ。

「……何やってんの？」

「はっ！」

声がした方向 右隣を見る。そこには愛する妹には劣るもの、それなりに美しい女がいた。銀髪に翡翠の瞳を持つ女だ。ガナツシユとしては女の性格を大体理解しているので、何も感じない。今となつては悪魔にしか見えない。

シエリカ・ロレンツ。

ガナツシユの所属するクランの所属の魔術士。生粋のブラコン女でもある。頭とち狂ってるのではないだろうか。ガナツシユは何時もそう思う。

「その目は何？」

「いや、なんでもないさ」

「てか、気持ち悪いんだけど。さっきから。くねくねとさ」

「ふっ。お前にはボクの愛の表現が解らないようだね。これは言わば芸術だよ。そう！ はち切れんばかりの愛の芸術なんだ！」

「……キシヨツ」吐き捨てるシエリカ。

「ふん。ブラコン女には解るまい」

「ぶっ……ち、違うわよ！」

そう言うシエリカの顔は赤い。

目は口ほどになんとやらと言うが、この女の場合は顔全体に大体表れる。解りやすい女だ。

ガナツシユはクスリと笑った。

それがシエリカの気に障ったらしい。キツと睨み付け、「笑うな！ シスコンのくせに！」とパンチを繰り出してきた。ガナツシユはそれをひらりと躲す。肉弾戦に劣る魔術士の鈍い拳がガナツシユに当たるはずがない。

シエリカは二、三発繰り出したが擦りもしないため、悔しさから齒軋りをした。ガナツシユはこの女が息を荒げながら憎々しげな表情をするのを見て、ああ、これが残念美人かと感慨深くなった。

男子には人気があるのだ。確かにシエリカは見てくれはいいし、何より魔術士学科、延いては魔戦学部で首席の実力を誇るのだ。引く手あまただろう。が、如何せん当の本人は双子の弟しか目に入っていない。

その弟とはいうと、実技考查全敗という醜態を曝している。いくらレベル1でもあそこまで弱いと笑いも起こらない。怒りしか湧かない。というか感動すら覚える。あれだけ焚き付けておいたのに。ガナツシユはまたまた苛々してきた。胸元の口ケットを指でそつと

撫でる。

あの時のほまぐれだったのか？ いや、そんなはずはない。まぐれであんなことが出来るなら、他の剣士はクズだ。立つ瀬がない。勿論、ガナツシュ自身も。だからこそガナツシュはフィーロをこのクランに誘ったのだ。

クラン《カタハネ》に。

『カタハネ』は昔イリアの好きだった絵本の題名だ。生れ付き翼が右片方しかない天使の少女が、左片方にしか翼を持たない悪魔の少年に出会い、恋をするというお話だった。なかなかへビーな内容の絵本だったが、一応最後はハッピーエンドだったはずだ。

その中の台詞に『一人じゃ飛べなくても、二人でなら飛べる』といったものがあつた。

それがクランという集団の意義に重なるように感じた。それ故にガナツシュはこの《カタハネ》の名をクランに付けた。のにこのクラン、他に類を見ないくらい仲が悪かったりする。

まあ、それは追々解決出来るだろう（多分）。それよりも今はフィーロだ。どうすればあの臆病な剣士は本気で戦えるのか。

誰かいい案を持っているやつはいないだろうか。ガナツシュは軽く顎を擦りながら、考え込んだ。数秒もしないうちにはっとして、いつの間にか下がっていた頭を上げる。

考えてみればすぐ近くにあるじゃないか。答えを持ってそうなやつが。フィーロが一番近い存在だ。知っただけでもおかしくない。いい案を持っているかどうかは微妙な線だが。

「シエリカ」

「何よ？」

「聞きたいことがあるんだけど、時間はあるか？」

「時間はあるけど、アンタには割きたくないわ」

「……………」

ハハハ解っていたさ。こういうやつだつてことくらい重々承知していたさ。抑える。抑えるんだガナツシュ。大丈夫。やれば出来る。

まずは深呼吸だ。

……よし、落ち着いた。

しかしどうするか。ご覧の通り、この女はフィーロ以外の男を毛嫌いしている（フィーロに近づく女も毛嫌いしているのだが）。不用意に近づけばお得意の魔術の炎に身を焼かれるだろう。そんな死に方はまっぴら御免だ。

ガナツシユは唸った。

「用がないならあたしは行くわ」

踵を返そうとするシェリカ。

いや、というか聞きたいことがあるって言っているじゃないか。それを一蹴したのはお前だろう。それを棚に上げて「用がないなら」などとよく言えるなアバズレ。

「ちよつと待てって。フィーロのことなんだが」

「は……？」シェリカはピクリと肩を震わせた。暫く思案する顔をした後、頬を掻きながら「まあ、話くらい聞いても吝かではないわ」と言った。

なんて面倒臭い女なんだろうか。フィーロが絡むとのつてくる。

その点では扱いやすい……のか？ まあ、解りやすくはあるな。ガナツシユは何だか馬鹿らしくなって嘆息した。

「んじゃ……ルーセントに行こうか」

「言つとくけど、アンタの奢りだからね」

図々しいやつめ。まあ、我慢だ。なんで我慢してるのかさっぱりだけ。

取り敢えずガナツシユは沸き起こる苛々を抑えて、シェリカとカフェテリアに向かった。

十

カフェ　ルーセント　は、少女趣味丸出しのグランチェと違いアンティークなカフェだ。

静かなところがウリらしい。確かに、落ち着いた雰囲気醸し出している。ガナツシユはこういう場所は好きだ。静寂は心を豊かにする。

しかしながら、世の中とは世知辛いものらしい。

ガナツシユとシエリカは学年トップクラスの冒険者だ。その二人が並んで店に入れば注目を受ける。今日の考査で他学年にもある程度広まったらしく、やけに視線を感じる。隣の馬鹿女は全く気にした様子はないが。図太い神経を持ったやつだ。自分も言えた立場でもないが。

席につき、ウェイターからメニューリストを渡される。開けようとしたらシエリカに引っかけられた。おい、なんで一つしか渡してくれなかったんだ。

シエリカは全て奢りだということに気をよくしたか、小指の先ほども遠慮せずに馬鹿高いチーズケーキと紅茶を頼んだ。これを横暴というのだろうか。ガナツシユは嘆息した。

所持金も怪しいので、ガナツシユはコーヒーで済ませる。意外にコーヒーも高いが。これで不味かったらぼったくりだ。

「ねえ、あれって……」

「……だよねえ？」

注文し終え、少し一息ついたら、何処からかひそひそ話が聞こえてきた。視線がこちらに向いている。十中八九ガナツシユたちのことだろう。

ガナツシユは別段ひそひそと噂されることに抵抗があるわけでもない。そもそもどうでもいいのだ。他人の目などガナツシユからすれば毛ほどの価値もない。

「……やっぱり付き合ってるのかなあ……?」「そりゃそうでしょう。ツートップなんだしさあ」「美男美女カップルかー。いーなー」「お似合いだよなー」

下らない話し声が耳に入る。反応はしない。右から左だ。暫くしてウェイターがコーヒーと紅茶、チーズケーキを持って来てテーブル

ルに置いた。カップを手にして、一口啜る。なかなか美味しい。値段に見合っている。

シエリカは無言でフォークでチーズケーキを一口大に切り、口に運んだ。それを飲み込んだ後、不意に口を開いた。

「アンタの恋人に間違われるなんて……最悪ね」

ぴきつときた。目元が引きつるのを肌で感じた。

「そのまま返すよ」平静を保ってそう応じる。

「つかアンタ、あたしに聞きたいことあるんじゃないの？ 早く言つてよ。アンタとこれ以上同じ空気吸うのやだし」

ぴきぴきつときた。口元も引きつっている。鏡で見なくても解る。ぶっ飛ばしてやるうかクソアマ。

握りこぶしを作ったが、寸でのところで自制する。いちいちこの馬鹿女の毒舌に振り回されていたら話が進まない。

「フイローはなんで本気で戦わないんだ」

「今日の考査のこと？」

「というか、普段から。アイツ、最初のアレ以来全く本気でやってないだろう」

「別にどうでもいいわ。フイローはフイローよ」

「だけど、アイツがあのままレベル1だとクランにも支障が出るんだぞ？」

「CL……ね。それこそどうでもいいわ」

「ボクはよくないんだよ」

クランレベル

CL。そのまま単純にクランのレベルのことで、これはメンバーのレベルの平均値とポイントなどの成績値によって決定する。このCLはクランという集団で活動する以上、ダンジョン探索や依頼に必要になる。

学園が指定したCL以上じゃないといけないダンジョンや依頼があるのだ。

カタハネはCL3。

成績値を入れたらCL4になりかけのCL3だ。一年生のみнок

ランならかなり優等生の部類だが、ガナツシユは目的のため、CL5を目指している。そのためにはフィーロをなんとかしてCL4までに上げたいのだ。

ガナツシユは初めてフィーロを見たとき、コイツはレベル4以上に違いないと思ったのだ。しかし蓋を開けてみればなんとレベル1。加えて雑魚中の雑魚にして、戦闘では前に出たがらない臆病者^{チキン}。

クランを組んだ以上仲間だし、ガナツシユの目的にクランは必須なのだ。解体は出来ない。抜けて上級生のクランに入る手もあるが、新入生が簡単に入れる訳がない。それにマスターの自分が抜けるなど前代未聞だ。周りを見渡して、他に有力そうな一年生がいる訳でもない。意外にも（もしくは皮肉にも）カタハネには秀才、天才が集まっていた。

魔戦学部首席の天才魔術士シエリカ。目立ちたがりだが急襲なら右に出るものがない盗賊の変態野郎^{レイジ}。天然で阿呆だが、丁寧かつ手早い施術を行える治癒士ユーリ。そのユーリにぞっこんの変態ながらも三叉槍^{トライデント}を巧みに操る槍術士モニカ。常にフィーロをストッキングしている命令一切無視だが正確無比な射手クロア。

これほどのメンバーが集まっているクランは他にない。寧ろ上級生の方が欲しがりそうなくらいの人材だ。ガナツシユはこのクランならいけると踏んだ。

そして、何故かそのメンバーの中心にいるのが周りから雑魚扱いされているフィーロなのだ。ある意味、ガナツシユではなくフィーロが集めたクランかもしれない。このカタハネは。

だからこそガナツシユはフィーロを脱退させるのではなく、彼のレベルを底上げしたいと思う。きつと彼を追い出せばこのクランは瞬く間に瓦解するだろうから。

「せめて……原因、とかないのか？」

「さあ……ね。知らないわ。あたしは別にフィーロが戦えなくてもいいわ。あたしがフィーロを守ればいいんだもの」

それは剣士としてどうなのだろうか。哀れ過ぎやしないか。とい

うか情けない。

魔術士に守ってもらおう剣士。洒落にならない。間抜けもいいところだ。まあ、確かに普段の戦闘では既にそうなっているが。

「どちらにせよ、ずっとレベル1止まりも不味いだろう。下手すれば進級に響く」

「……まあ、そうね。何かいいアイデアでもあるの？」

それを聞いてるんだが。

ガナツシユはそう言いたかったが、我慢した。話が拗れる。向うがキレて、話が振り出しに戻るのは嫌だ。面倒だし。ガナツシユは握りこぶしを必死に解いた。

「何かないか……」

そもそもフィーロが何故本気で剣を振るわないのか、それが解らなければどうしようもないのだが。顎を軽く擦りながら思索する。

「あゝらシエリカさんじゃないのですの？」

隣から聞き覚えのある声。その声にガナツシユの思考は一旦停止させられた。目線だけ向ける。五人。全員女だ。真ん中のやつが声の主か。ウェーブした薄い金色の髪が揺れている。この女も、妹には劣るがそこそこな麗人だ。

声をかけられたシエリカは鬱陶しそうな顔をした。

「……ちっ」

「なんですのその舌打ちはっ!？」

「やつほーモラン」声の主をガン無視。

「あ、うん。やつほー」

「きい~~~~っ! 無視するんじゃないですわ!」

「うっさいわね、リーチエ」

ベアトリーチエ・セルティレス。確かC組の剣士学科の少女だ。

リーチエは愛称だろう。シエリカと何度か口喧嘩しているところをよく見掛けているので覚えている。セルティレス……といえば武芸に長けた貴族の家系だったか。サーレストンのような剣の流派はな

いが、細剣の多彩な剣技は『胡蝶の舞』と呼ばれるのかなんとか。
左隣の獣人はモラン。小さな体に似合わず大斧を振るう同じクラ
スの少女だ。右隣が……ロリエだったか。童顔で下手したら十歳く
らいにも見える。あれで魔術士らしくなかなかの実力らしいが。
三人はトリオで組んでいるらしいが、後ろの二人は新入りだろう
か。

ガナツシユの視線に後ろの一人が気付いた。見る見るうちに顔が
赤くなる。明らかに狼狽している。

「何を狼狽えていますの？」

「あ、あ、あ、あの……」

止まりかけの自動人形みたいだ。それでも必死に意志を伝えよう
とする。漸く伝わったか、狼狽える少女の視線をベアトリーチェが
追った。ガナツシユと目が合う。まるで温度計が何かのようにベア
トリーチェの顔が赤く染まっていった。

「な……が、が、ガナツシユ様……？」

「様……？」

何で様付け？ そう尋ねようとしたが、口をパクパクさせるベア
トリーチェを見ていたら何も言えなかった。大丈夫かこの娘。とい
うか今まで気付いていなかったのか。

「な、何で……」

漸く声を絞りだし、顔を赤くしたり青くしたりして、最終的に赤
くしたベアトリーチェはキツとシエリカを睨み、掴み掛かった。

「……何で貴方がガナツシユ様と一緒にいますのっ！」

押し殺した声で何か言っているが、ガナツシユには聞こえなかつ
た。どうでもいいのでコーヒートを啜る。

「奢ってくれるっていうから」

何の話かは知らないが、好きで奢ってるわけじゃないぞ。

二人は何か言い争っているようなので、埒が明かないとモランの
方に向く。

「モラン、何か用だったのか？」

「え、あ、うん。リーちゃんがこれ見せに来たの」

モランが何かの紙を渡す。ガナツシユはそれを受け取りざっと目を通した。

「……クラン……コンテスト？」

「クラン同士戦ったりして、一番のクランを選ぶんだって」

「へえ。でもキミたちトリオじゃなかったか？　ということは後ろの二人は新入りか？」

「うん。リーちゃんがマスターのクラン創ったのよ。シエリカちゃんに負けたくないって」

「へー……」ある意味凄いいライバル視。執念さえ感じる。「何てクラン？」

「えっと、《アンセムスター》っていうんだけど」

「ふうん……いいんじゃないか？」

ガナツシユが素直な感想を言うと、モランは目を丸くした。意外なものを見るような、そんな目だ。

「どうした？」怪訝そうにたずねるガナツシユ。

「え、いや、ガナツシユ君、意外に優しいんだね？」

「疑問で聞かれてもね……ボクは素直な感想を言ったただけだ。しかしクランコンテストか……」

フィーロが本気で戦えるように出来るかもしれないな。まあ、実戦を何度かやれば原因も解るかもしれない。

勝手に決めると私刑にかけられるので、シエリカに一応聞いておこうと前を向き直ると、まだ言い争いをしていた。

「だーかーらー何で……！」

「だーもーうっさいわねっ！　何でもいいじゃないっ！」

言葉を挟む余地はないようだ。これは収束するまで待たなくてはいけないようだ。

にしても、ルーセントは静かなカフェのはずなのだが。こいつらのせいで台無しもいとこころだ。もう絶対にシエリカをここに連れてきたらいけないな。ガナツシユはそう思った。

依然として言い争いは終わりそうにない。
ガナツシユは溜め息を吐いた。

第一章(5) カタハネ

Ganache

「やだ」

馬鹿フィーロはそう言った。

考查の翌日、食堂で朝食を摂っていた時のことである。

昨日、シエリカと別れて自室に帰ったら、なんとこの馬鹿はぐっすり寝ていた。

打つ叩いて起こそうかと何度も思案したが、間抜けな寝顔を見ているとそれさえ馬鹿馬鹿しくなってきたので放っておくことにした。

多分、ガナツシユが部屋を出た後に眠ったはずだから三時くらいに眠ったと思われる。夕飯には起きるかと思っただが、一向に目を覚ます気配が無い。そしてそのまま結局翌朝まで起きなかった。

「ただけ自堕落なんだろうか。」

お陰でクランコンテストについての話を昨日の間に出来なかった。仕方ないので朝食の席でフィーロに言ったのだが、この馬鹿は話を聞くどころかガナツシユの「クランコンテストというものがあるのだが」という言葉の「も」を聞き終わらぬうちに即答した。

「お前な……最後まで聞けよ」

「面倒臭い」

なんてムカつく奴なんだろう。もうぶっ飛ばしていいだろうか。

シエリカもそうだが、フィーロもなかなか我が強い。姉弟揃って忌々しい性格だと思う。

そもそも、フィーロの意向など聞いているわけじゃない。

「あんな、もう登録してるんだよ。とっくに」

「えー……」

この世の終わりみたいな顔をするフィーロ。

「えーじゃない。ボクらがC4に上がるチャンスなんだぞ？」

「いや、そんなチャンスいらないし」

こいつは。どうしてこう駄目駄目なんだろう。冒険者以前に人として終わっている気がする。向上心の欠片もないのか。

前から解っていたことでもあるが、それでもこいつのやる気のなさは頭痛の種だ。

「だいたいさ」フィーロはコーヒーの注がれたカップを取り一口啜る。「俺たちは一年生だけのクランだぞ？ 易々と優勝できた先輩の立つ瀬がないだろ」

「クランコンテストには部門別の表彰があるらしい。ボクらは一年生の部で優勝することを目標としている。さすがに総合優勝は簡単ではないからな」

「あ、そ……」

興味なさげなフィーロ。

「何にせよ俺は出るしかないんだろ、そのクランコンテストとやらに」

「そうなる」

「……はあ」

フィーロは深い溜め息を洩らす。溜め息を吐きたいのはボクの方だ。ガナツシユはそう思った。

コーヒーを啜る。苦い。そういえば砂糖を入れ忘れた。席を立ち、カウンターまでステイックシュガーを取りに行く。

お目当てのものを手に取ったあと、もう少し何か食べようかと思つて陳列する盆を覗いたら、最初から何も載っていないかのような綺麗になっていた。全てのお盆が。……ソース類まで奪い合うのかこの学園の生徒たちは。そら恐ろしくなって身震いする。

取り敢えず、料理は諦めることにして席に向かった。

「……あの野郎……」

席に戻ると、既にもぬけの空だった。皿などは放置したまま、フィーロは先に帰ったようだ。テーブルの上に書き置きがされている。

曰く、『あとよろしく』。

眉間に皺が寄るのを感じる。かなりムカついているのが自分でも解った。

「クソ。後で絶対ぶっ飛ばしてやる」

大体、何でお前の皿まで片付けないといけないんだ。

ガナツシユは荒々しく席に座り、コーヒーに口を付けた。

「苦い……」

手に持った砂糖の存在ををすっかり忘れていた。

クソ。馬鹿ファイロめ。

> i3996—588 <

十

学園から南に約八キロほど進んだところに、蛮族の森という深い森がある。

「うらあああああああつ……!」

太刀を振り下ろす。

袈裟斬りに骨ごと肉を断たれた蛮人ガツソは血飛沫を撒き散らしながら後ろ向けに倒れた。怒りのせいか斬撃は荒々しく、お世辞にも綺麗な断面ではなかった。ガツソはまだ息があるようで、体をびくびくん痊孳させている。動く力は無いようだ。ガナツシユは近寄って喉に太刀を突き立てた。

G o p h u……という奇妙な声のあと、完全に沈黙する。

血振りをして、顔に飛び散ったガツソの血を拭う。

「G y o……!」

「……なつ!？」

左から突然別のガツソが襲い掛かってきた。隠れていたか。反撃は無理だ。構えは解いている。が、回避くらいなら出来る。しかし。

「動くんじゃないわよ」

突然の声。

背後からだ。

ガナツシユは反射的に振り向こうとした。その瞬間。

「烈Xo儕Ray穿雷瘡」

光。

目の前を右から左に光が走った。細く鋭い稲妻だ。

パン、という音が左から聞こえた。音源の方を見ると、頭の無いガツソが丁度どさりと倒れるのを視認した。遅蒔きながらガツソの首から夥おびただしい量の血が流れだす。

正直ぞつとした。

今のは間違いなく要素魔術だ。怒りを司りし雷の精霊を使役する雷の魔術。おそらくは穿雷瘡だろう。雷の魔術の中では下位だが、ガツソの頭を粉碎するくらいの威力は持っている。ガツソの頭を粉碎できるということは、ガナツシユの頭も粉碎できるということだ。

その稲妻がすぐ目の前を通り過ぎたのだ。もう一步でも踏み出していればあのガツソの運命を辿ったのはガナツシユだろう。そう思うと余計に血の気が引いた。同時に怒りも沸く。

ガナツシユは犯人を睨み付けて怒鳴った。

「仲間ボクを殺す気かシエリカ！」

しかし、どこ吹く風といった感じの犯人シエリカは面倒臭そうに「だから動くなつていったじゃないの」と言った。

ふてぶてしいにも程というものがある。仲間に殺されて堪るか。

そんなもの、末代までの恥だ。朝といい、今といい、この馬鹿姉弟は……。

ガナツシユは顔をしかめた。

「もう敵はおらんで」

上空からレイジが降り立つ。木を伝って索敵をしてもらっていたのだ。レイジは変態だが仕事はしっかりする。

ガナツシユは怒りをなんとか押さえて、「ああ、解った。ありがとう」と返した。しかし、目が怒りを抑え切れていなかったようで、レイジは「お、おお」と曖昧に返事した。

ガナツシユたちは、朝のSHR終了後、授業は取らずに依頼を請けに行った。クランコンテストまであと一週間弱ある。訓練がてらに依頼を請け負おうという訳だ。学生課の掲示板に並ぶ依頼から選んだのはこの蛮族の森でのとある魔物の討伐だった。

炎の鬣。

誰が付けた名前かは知らないが、蛮族の森最大級の巨熊だ。蛮族の森は名前の割に隊商キャラバンなどの近道になっている。普段は最深部にしかないはずの炎の鬣が、最近隊商の移動経路に出没し襲うため、討伐依頼を請けた。

そして炎の鬣を探す途中でガツソの団体に遭遇し、戦闘になったのだ。

ガツソは体長が平均百四十センチと小柄。灰色の肌を持ち、目は円ら。鼻は削ぎ落としたように平らで、顔の真ん中に二つだけ小さな穴が空いている。口は大きく、鋸状のこぎりの黄ばんだ歯がびっしり並んでいる。二足歩行で、両手を扱うあたりは人のようだが、あまり人とは思いたくない。愛嬌のある顔をしていると言えなくもないが。いわゆる、キモカワイイ的な。

知性は高いらしく、独自の言語を用い意志疎通が可能らしい。昔、粹狂な奴が彼らの言語を必死に覚えていたとか。挨拶をしたらお返しに八つ裂きにされたそうだが。

蛮人というくらいあって、なかなか凶暴だが、勝てない相手ではない。向こうは八体、こちらは七人だし、ユーリが戦えないとしても六人。数では押されていても戦力的には負けはしない。楽勝の相手だ。

だというのに。

「お前は……何サボっているんだ！」

今日のガナツシユの苛々の根源であるフィーロ。この馬鹿は一切の戦闘に参加せずに、傍観の姿勢を貫いていた。その所為で、ガナツシユが二体、シェリカが三体、モニカ、クロア、レイジが一体ずつになった。フィーロの分をシェリカが負担したわけだ。というかガナツシユは不覚にも殺されかけまでした。

しかしフィーロは反省する様子はない。

「いやいや、サボってないさ。俺はユーリの護衛をしてたんだよ」

「後ろにつつ立って何が護衛だっ！」

「あれは俺のベストポジションなんだよ。ベストなベスト」

駄目だ、こいつ。早く何とかしないと。

威張るように胸を張るフィーロを見て、ガナツシユはそう思った。

十

「……………っていうかさ、炎の鬩って確か最深部にしかいないんじゃないの？」

「あ、わたしもそう聞いてます」

「……………ちっ」

「えっ……………!？」

シェリカの言葉に反応したユーリは、可哀相に、睨まれた挙げ句舌打ちで返された。気圧されて、半泣きになるユーリ。可哀相ではあるが、自業自得だとも思う。

モニカがユーリの肩を抱き、よしよしと頭を撫でた。モニカは凄く嬉しそうだ。至福の時といった感じの表情をしている。

何故、こいつらはこんなにも緊張感が欠けているのか。ガナツシユには到底理解できない。したくもない。

馬鹿フィーロは欠伸をしているし、クロアはそのフィーロに寄り添っている。レイジだけだ。索敵とくをしているのは。さすがただの変態ではないだけあるか。が、結局変態には変わりはない。つくづく思うが残念な奴だ。レイジは敵はいない、と首を横に振って隊列に

戻った。

ガナツシユはシェリカの先ほどの問いに答えた。

「まあ、炎の鬣は変異種だし、生態型も解らないからな。隊商のルートに降り立っても何ら不思議でも……って聞いているのか？」

返事が無い。後ろを向く。

「アンタ何フイ一口にくつついてんのよ！」

「……許可されました」

「してねえ」

「離れなさいよ！」

「……やです」

シェリカはクロアと揉めていた。多分、フイ一口に寄り添っているのが気に食わないのだろう。ブラコンゆえの独占欲か。救いがたいな。

というか。

「全然聞いてへんな」レイジが言った。

「……そうだな。別に慣れたから構わないさ。それよりな、お前なりの慰めなのかは知らんが尻を撫でるのを止める。斬るぞ」

「ん？ おおう。えらいすまん。つい条件反射で」

レイジはぱつと手を放す。引き際は妙にいい。いや、悪いときもあるのだが。何というか、本能で生きている感じた。

「……変な奴だ」

ガナツシユはそう呟いた。

蛮族の森に入ってから二時間経ったが、未だに炎の鬣は見当たらない。ガセだったのか。

というより、敵自体が見当たらない。先ほどのガツソとの戦闘以外は敵に遭遇さえしていない。あまりこの森に来たことはないが、これは異常なのではないだろうか。

顎を擦り、思索する。

仮説は幾つかあるが、一番しっくりくるのは……。

「……………」

ああ、でもその前に。

「煩いんだよお前ら！」

後ろを怒鳴り付ける。

さつきより悪化していた。勿論、シエリカとクロアの争いだ。さつきと終わると思っていた自分が浅はかだった。泣き止んだユーリまで参戦したのだ。

言い争いというよりは乱戦という状況だった。ここダンジョンなんだがな。何で集中出来ないのかな。ガナツシユは嘆息した。煩くて考え事が出来ない。

フィーロが両手を万歳、あるいは降参のポーズをして、眉を八の字にして言った。

「いや、俺だつて黙ってほしいんだけどね」

「なら黙らせるよ……」ガナツシユはうなだれる。

「コイツが死ねば丸く収まるのだわ」

憤怒の形相でモニカが槍をフィーロに突き付けた。

「ちよつ……モニカ！ ヤバイヤバイってヤバイっ！ 刺さってる

刺さってるって！」

「あーっ！ アンタ何やってんのよ！」

「モニカちゃんダメですよ！ フィーロ君痛がってますよう！」

「……………放して」

「おい、馬鹿シエリカ！ 止める！ 一旦放せ！ ユーリもっ！

おいっ って……………」

アレ？

そう思ったときにはもう遅かった。足場が消えた。いや、違うな。傾斜面になっているようだ。いや、冷静になっている場合でもない。「のわあああああああああああああ………！」

疫病神だ。

こいつら絶対疫病神だ。

痛む頭を押さえて、ガナツシユは体を起こした。大した怪我が無かったのは奇跡か。

「大丈夫かいな？」

一人だけ無事だったレイジが降りてきた。手を差し出してくる。

「丁度レイジを見上げる形になっているので勾配が目に入った。結構な高さだ。まさか蛮族の森がこんなに山みたいな構造だったとはこの音は……川か。本格的に山なのかもしれないな。」

レイジの手を掴み、起き上がる。

「すまない。大丈夫だ。多分……。皆は？」

「大丈夫そうや。とんだ災難やで、いやマジで」

「ああ、全くだ。ダンジョンのと真ん中で揉めやがって。クソ。頭が痛い」こんこんと自分の頭を軽く小突いた。

「いやいや、ちゃうがな。それもあるけどな。アレやアレ」

「アレ？」

レイジの指差す方を見た。

顎が外れなかったのは、たまたまだろう。それくらい大口開けて呆然とした。

「……炎の鬣」

「タイミング最悪じゃないか。」

グルルルル、と喉を鳴らすそいつは、鬣たてがみを持った巨大な熊だった。体長は五メートルくらいか。屈強な身体の典型的な巨熊だ。長い腕と鋭利な爪は確実に敵を砕くだろう。

「つてて……つて……何アレでつか！」シエリカが起き上がった。

「お、大きいですね」

「掴まってユーリ」

「ありがとうモニカちゃん」

ユーリもモニカに引つ張られて起き上がる。クロアも起き上がった。全員、現状に驚きはしているものの、誰も焦りはしていない。

これがカタハネの強みだろうか。もう少し緊張感は欲しいが。

とはいえ一向に起き上がらない奴も中にはいた。というか一人しかない。

「おい、起きろフィーロ」

「……………」

返事をしない。まさか気絶しているのか？ こいつが？ それこそあり得ない。

ガナツシユはうつ伏せになっているフィーロの背中を踏み付けた。「ぐえ」

「よし、大丈夫そうだな。起きろよフィーロ。敵だ」

「……………」

しかし返事をしない。何を考えているんだこいつは。すぐ傍に敵がいるんだが。

「起きろ」

「……………」

「起・き・ろ」三回踏み付けた。

「がっ、ぐっ、げっ……………」

それでも頑として起きようしないフィーロ。これは何だ。死にたいという意味表示か。奴に踏まれてミンチになりたいのか。

「お前、いい加減に」

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

轟く雄叫び。地面が揺れた。これが蛮族の森最凶の巨熊、炎の鬣か。化け物め。

フィーロが起き上がった。かなり不機嫌そうな顔をしている。

「あーもうクソ。せっかく死んだフリしてたのに…………ガナツシユが邪魔するから」

バレバレだ。その死んだフリ。超無意味だ。何でこいつはこう熱意のベクトルが常人と違うのか。馬鹿かこいつ。いや、解ってたことだが。ただ、解っていても、フィーロの馬鹿さ加減には頭が痛くなる。

「ていうか、めっちゃ気い立ってるわね」モニカが三叉槍トライデントを構えながら言った。

「逃げ場は無いしな。やるしかない。依頼でもあることだし」

ガナツシユは太刀を引き抜いた。腰の位置で構える。先ほど聞いた川の音が本物なら、ここはガナツシユにとってはかなりいい場所かもしれない。腰を落としながらそう考える。

「オレはどうすんねん？」

「何時も通りだ」

「はいよ」

同時にレイジの姿がブレた。残像か。カタハネ内では最速の男だ。瞬きをする瞬間にはもうレイジは消えていた。まあ、奴は奴なりに戦うだろう。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……！！

肌がびりびりくるほどの咆哮。まさに狂熊きょうゆうだ。鬣たてがみが炎のように揺れている。その名前は伊達じゃない。間違いなく奴は炎の鬣だ。

「行くぞ……！！」

仲間より、自分に言い聞かせるようにガナツシユは叫び、一気に地面を蹴った。

ボクが仕留める。貴様は手を出すな……！
一気に地面を蹴った。

グオオオオオオオオオオオオオオオオ……！！

ガナツシユの突撃に呼応するように炎の鬣は雄叫びを上げる。右腕を振り上げた。強力な打撃ブロを繰り出すつもりか。

太刀を迎撃出来る態勢に構え直しながら駆ける。

奴の射程に入った瞬間、奴の右腕が振り下ろされてきた。こちらから見れば左斜め下に目がけて振り下ろされる巨大な腕かいな。恐怖しそ
うになる自分を無理矢理押さえ込む。

「う……らああああっ！」

右斜め下から左斜め上に。つまり奴の右腕の強打を相殺する形で振り上げた。

ガアンツ！

激しい衝撃が腕を伝う。ガナツシユのダツシユによる相乗効果によつて、先ほどのように後ろに下がることはなかった。寧ろ奴の方がよるけるだろう一撃だった。

しかし奴はよるけるどころか、弾かれた反動を利用して左腕を横薙ぎに振ってきた。あまりに予想外な行動だったため、ガナツシユは反応に遅れた。

「な……！！畜生め。」

グオオオオオオオオオオオオオオオウ！

勝利を確信したかのような咆哮。悔しいが、その通りだ。奴の腕かいなをガナツシユはどうすることも出来ない。目だけが奴の腕を捉える。まずい。避けられない。ボクはあれに身を粉々にされ、肉片と化するだろう。

そして奴の左腕が迫り。

「がっ……！！？」

誰かに服を引っ張られる。体が後ろに放り投げられた。無様に尻餅を突いて転がる。

それと同時に。

バクツ　　という鈍い音が耳に届いた。「ぐぼわっ……！」という聞き覚えのある声とともに。

先ほど落ちてきた急勾配の一ヶ所で爆発音が起こる。火炎の爆発ではなく、何かがぶつかつたような破壊音だ。

「くっ……ファイロ！」

直ぐに起き上がり、ガナツシユは自分の身代わりになつた仲間ファイロの名を叫んだ。まさか、あいつに限って死ぬことはないと思うが……。直撃ならさすがにまずいかもされない。

「よくもファイロを！　万死に値するわっ！」

シエリカの怒鳴り声。あの馬鹿女は炎の鬘を挟んでガナツシユと大体反対側にいた。というか何故最前線に出る？　お前魔術士だろう。下がれ。マジで。それとも馬鹿か？　馬鹿なのか？

いや、そんなこと言っている場合じゃない。クソが。どちらに行けばいい。ファイロは心配だ。あいつはかなり丈夫な奴だから無事だとは思うが、万が一ということもある。しかしシエリカも心配だ。魔術士は概して純粋な戦闘力に劣る。シエリカもその例に漏れない。むしろ身体能力は高くないのだ。あの女は。それをものともせず、最前線で戦う馬鹿シエリカには　本人は気付いているのかは知らないが　何時も近場に援護役がいる。攻性魔術士とはいえ援護系の学科を護衛ならともかくも、援護するなどおかしな話だが。

一瞬迷つたが、シエリカの方の心配は杞憂で終わった。モニカが援護に回ってくれている。たまたまだろうが。……喧嘩にならなければいいが。

ガナツシユは取り敢えず未だ土煙の立ちこめる激突地点に向かつて走つた。背後で詠唱が聞こえる。「滅獄 a s t 竜炎殲」轟音が鳴り響く。竜炎殲。火炎放射の魔術だつたか。

次にモニカの怒声も聞こえた。アタシを殺すつもり！？　またやつたのかあの馬鹿女。馬鹿女の反論まで聞こえる。うるさいわ！　あたしは今集中してんの邪魔すんな！　……結局喧嘩になるのか。もう好きにしろと思う。

あいつらはまあいい。暫く放っておいてもそうそう死ぬ奴らでもない。レイジが必要に応じてカバーするだろう。それよりも今はフイーロだ。

土煙が晴れ、フイーロの姿を視認する。

「大丈夫か？」

「ひ……引つ張つてくれ……」

フイーロは大の字になって埋まっていた。あまりに間抜けなので力が抜ける。何やってるんだこいつは。とはいえフイーロはガナツシユの代わりに吹っ飛ばされたのだ。感謝こそすれ文句を言うのはお門違いか。ガナツシユはフイーロを引つ張りだした。

見たところ外傷はない。ぶつかる寸前に後方に飛んで衝撃を和らげたか。あれだけ鈍い音がしたわりに頬に切り傷が出来ただけだ。

フイーロは口に土が幾らか入ったのかぺっぺつと唾を吐き、袖で口を拭った。

「うげーまじい……。いやあ……危なかったな、お前」

「……悪い」

「うん、まあ、あれだな。もう俺半年分くらい働いたんじゃない？」

「それはない」

「フイーロ君っ！」

フイーロと馬鹿馬鹿しい応酬をしていると、ユーリとクロアが駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか！？ 怪我は……あっ！ 頬が切れてますっ！」

「あ、いや、それくらいなら」

「怪我を甘く見ないでくださいっ！ 早く座って！」

「う……あ、はい……」

凄い剣幕のユーリ。フイーロは完全に萎縮している。治療士は確かに博愛精神のある奴が多いが、ユーリの場合は絶対に違う気がする。天然泣き虫女がここまで必死になるとは、^げ実に恋とは恐ろしいものだ。

ついでにそれを見て黙っていないのはクロアだ。対抗意識の闘気^{オーラ}

がゆらゆらと燃えている。何を思ったか、座ったファイロにしがみ付いた。

「な……何やってるんですか!？」

驚きを顔にするユーリ。確かにボクも驚いた。

「……………舐めれば……………治る」

そう言つて舌を出し、ファイロの頬にそれを近付ける。

「ぎゃああああっ! 止める放せ放して助けてぎゃああああああああああああっ!」

バタバタと藻掻くファイロ。しかし予想以上の力で押さえられているようで、どうすることも出来ないようだ。それとも嫌がついているようで実は万更でもないとか。ガナツシュとしてはどうでもいい。離れてください　っ!」

ユーリが負けじとクロアの襟首を引っ張る。クロアもそれに対抗する。妙な絵面である。戦闘中だというのになんだこの緊張感の無いアットホームな光景は。

ガナツシュはなんだか悲しくなってきた。このクラン、本当にこのままでいいのだろうか。そんなわけ無い。大いに問題ありだ。だけどそれは後あとでいい。よくないが。

クロアの首根っこをむんずと掴み、引き摺り降ろす。「……………あ
クロアが恨めしそうな目で睨んでくるが、無視だ。

「起きろよファイロ」

「俺……今、綺麗な川が見えたよ……………」

「アホなこと言ってる場合か。モニカとシェリカが抑えている。さつさと行くぞ」

「もう俺動きたくねえ」

「甘えるな」

「……………解つたよ。でもさ、アイツを殺すのは止めよう。殺さないほうがいい」

「何だと?」

「だから止めといたほうがいいって。つか俺は殺したくない」

「それこそ甘えるな、だ」

臆病にも箔が付いている。そんなもの付けるだけ無駄だが。こいつはなんで剣士としての自覚がないのか。

ガナツシユは腹が立ったが揉めている時ではない。太刀を再び構えて交戦中の炎の鬣に目を向けた。

奴は強い。戦ってよく解った。多分、蛮族の森のガツソどもが見当たらなかったのは避難しているからなのだろう。先ほど戦った一団は巡回役か何かか、まあ、そんなところだろう。あの戦闘力ならガツソが畏怖するのも頷ける。

何にせよ、もう油断はしない。制限はなしだ。

片手で刀身に触れた。

そして目を瞑り、念じる。

力を貸せ、ユーカリスティア。腹が減ったろう。ボクの魂を存分に喰らえ。貴様への供物は奴の血肉だ。さあ、ユーカリスティア。聖餐の刻だ。奴に断末魔の叫びを奏でさせろ。

刀身が煌めく。

ガナツシユの要求に答えた蒼く波打つ太刀は、刀身をより蒼く輝かせた。

「ガナツシユ……お前……それまさか……」

「ボクはお前のような臆病者じゃない。戦いが嫌ならそこで見ていろ」

「おい……俺はそんなんで言ったんじゃ」

「附Meer哀du刀随水霊」

ガナツシユはフィードの言葉を最後まで聞かずに詠唱した。

かつてこの太刀を持っていた人が言っていた。呪文とはすなわち精霊と人とを繋ぐ言語のようなものだ。だから、呪文はただなぞるのではなく、語り掛けるように唱えるのだ、と。

瞬く間に太刀に何かが収束する。その“何か”は水だ。水が渦を巻き、波打ちながら太刀の刀身に集まり、ある一つのものを形作る。水の刃。

刀身を包み込むように、一回り大きい水の刃を形成していた。
「行くぞ、ユーカリスティア」
その言葉に呼応するかのように、刀身に波紋が広がる。
ガナツシユは駆け出した。

F i r o

あの分からず屋め。

人の話を最後まで聞けよ。

俺は何も怖いから逃げようという意味で言ったんじゃない。いや、少しはそれもあるけど。

それにしても無理をする奴だ。あんなもの使っていたら命が幾つあっても足りないぞ。

「あの……ファイロ君。ガナツシユ君のあれって……」

「ユーカリスティア。魔剣……ってやつかな」

何時もどこかで見たことあるとは思っていた。そうだ。確か酔

狂なお宝収集家の書いた本で見たんだ。まだ小さかったから

臆気だけだ。

ユーカリスティア
聖体の秘蹟。

アーティファクト
神具の一種だ。

神具は簡単に言えばヴァイス（先生）のもつ切り刻む王者の牙の

ような武具のことだ。

『ホワイトエイジ空白の時代』に生きた古代の人々が作った、言うなれば神器。

詰まる所、大きな力を秘めた、世界にほんの少ししかない武具なのだ。

ガナツシユがどのような経緯であのユーカリスティアを手に入れたのかは知らないが、あの武器は滅茶苦茶危険な武器である。元々、魔剣の類は危険性の高いものが多いが、ユーカリスティアはその中でも特筆している。

おそらく、ガナツシュが魔剣士である所以はあの太刀にあるだろう。

あの太刀は、魔術が使えるのだ。

聞こえは確かに凄くいい。魔術とは才能によるところが大きい。だから（フィーロのように）魔術使えない奴には、たまに羨ましく思うこともある。

しかし、要素魔術とは精霊を役とする魔術。魔力という絶対的力によって精霊は術者に服従する。いや、違うか。魔力を餌とするのだ。精霊は魔術士の魔力を喰らうことで、対価として力を貸すのだ。ならば魔力を持たぬ者が魔術を使えばどうなるか。

簡単だ。対価をとられる。すなわち、魂だ。

ユーカリスティアは、使用者の魂を喰って、水の精霊を役とするのだ。だから魔力を持たないフィーロのような存在でも魔術を使えるようになるのだ。あくまでユーカリスティアを媒介に魔術を使うため、純粋な攻性の要素魔術ではなくて、精霊の力を武具などに附加する附属魔術のようになるが。

加えて、ユーカリスティアにはもう一つ恐ろしい特性がある。

あれは一切有情の血肉を喰らうことで力を増す。使えば使うほど強くなるのだ、あの太刀は。強くなるだけなら未だしも、同時に魂を喰らう量も増える。つまり使いすぎれば使用者の魂を一度に喰らいきってしまうかもしれない、魔剣中の魔剣だ。

ガナツシュがユーカリスティアの力を使い続ければ、何時かユーカリスティアの要求する魂の量がガナツシュの魂を越えるだろう。それはつまり、肉体のみを残して“ガナツシュ”という存在がこの世から消え去るということだ。

「何で……」

ガナツシュはどうしてそこまでするのだろうか。アイツはユーカリスティアなどなくても一流の剣士としての素質はある。実際、学部首席の実力を持っている。なのに何故。

「……いや」

追及はすまい。何時か自分から語ってくれる時が来るだろう。多分。

カタハネは他人を詮索したりはしない。それはクランとしての規則ルであり、フィーロ自身のポリシーでもある。

だけど、ガナツシユがもし死のうとしているなら、フィーロたちはガナツシユを止めるだろう。

アイツは俺たちの仲間なんだから。

「つか……」フィーロは腹の辺りに触れる。「これやっぱまずいのか……？ 滅茶苦茶痛い」

G a n a c h e

「せあああああああつ……！」

太刀を振るう。

炎の鬣とは距離およそ十メートル。こんなところで振っても太刀は擦りもしない。百も承知だ。ガナツシユは太刀自体を当てようなどとは思っていない。

刀身から纏っていた水の刃が放たれた。

水の刃が衝撃波のように弓なりになって一直線に飛んでゆく。水の刃が炎の鬣に迫った。奴はそれに対し、身体を屈ませて回避する。だが避けきれずに背中を斬り裂いた。深くはないが、浅くもない。ダメージはあまりないだろう。

少し違和感を覚えた。

何故あのような態勢で避けたのか。明らかに避けきれないのは目に見えている。炎の鬣は決して頭は悪くない。むしろ賢熊けんゆうだと思う。それがどうした。

ボクの目的は奴を抹殺することだ。ボクは、依頼は確実にこなす。「ぬううあああああああつ……！」ガナツシユはもう一度水の刃を放った。

水の刃は炎の鬣の腹に迫った。これは避けまい。ガナツシユは先ほどのお返しだと口元を歪めた。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ………！！

炎の鬣は雄叫びを上げて、驚くべき行動をとった。

パン。

弾けた。

何をした奴は。

解っている。解ってはいるが信じられなかった。ガナツシユの表情が一瞬凍った。

炎の鬣は自慢の腕かいなを横から振るい、水の刃の側面を叩いた。相殺したのだ。一体どれほどの威力で叩いたんだ奴は。水の精霊の力が凝縮された刃だぞ。生半可な力じゃ逆に腕が罅はぜるぞ。

いや、確かに罅はせている。奴の右腕は爪が折れ、毛が赤黒く染まっていた。

腕一本を犠牲にして刃が身体に届くのを阻んだのか、奴は。

「とんだ化け物だな」

そうでなくては面白くない。

ガナツシユは不敵に笑った。

そうか。ボクは楽しいのか。依頼だとか関係なしに、あの化け物と戦うのが楽しくてしょうがないのか。

ならばとことんやり合ってやろう。ガナツシユは太刀を握り直した。

「ユーカーリスティア。久方ぶりの意気のいい獲物だぞ。存分に味わえ………！」

Monica

「Chaaaaaaaarge………！」

愛用の三叉槍トライデント、ストームブリンガアの切っ先を前方に突き出し、

ヘルキャット
アバズレ魔女め。地獄に堕ちる。

モニカはシエリカが嫌いだ。たまたまこの馬鹿女の近くにいた所為で、護衛する羽目になった。クランの仲間だから。最悪だ。どうせならユーリの護衛をしたかった。

ユーリ。

ああ、ユーリ。

あの可愛い仕草や表情をすべてアタシに向けてくれればいいのに。儂くて、健気で、時に強いあの娘。アタシはあの娘を守りたい。あの娘はアタシを救ってくれたのだから。アタシはユーリの全てを受け入れられる。

なのに。

なのにユーリはあの馬鹿女の弟にご執心だ。ムカつく。アタシの方がユーリを愛しているのに。ぶっ殺したい。存在の痕跡すら消し去りたい。

だけどそんなことをすればユーリは悲しむ。でもアタシはあの馬鹿を消し去りたい。

どうしてアタシは男として生まれなかったんだろう。そうすればきっとユーリはアタシを見てくれたはずなのに。

これも全部あの馬鹿の所為だ。

フイロ。

フイロ・ロレンツ。

アンタの毒牙からユーリを救い出してみせる。

「ぼーっとするなモニカ！ う……………らあっ！」

頭上を青い何かが飛んでいく。パアンという音とともに今度は赤い水が降り注いだ。

「くっ……………また相殺するか……………！ やるじゃないか！」

いつもより嬉々としているが、これはガナツシユの声か。

学部首席、近接戦闘なら学年最強とも言われる剣士。ただの剣士ではない。魔術を使う剣士 魔剣士だ。

世にも珍しい神具ユーカリスティアの水刃を炎の鬘は己の腕で相

殺したのか。馬鹿力とかいうレベルじゃない気がする。まあ、さすがに無傷ではないようで、腕からは血が漏れている。この赤いのは炎の鬣の血が混ざった水なのだろう。

「遅いよ馬鹿！　フィー口は無事なんでしょうね！」馬鹿女が叫んだ。

「目立った外傷はない。頬の切り傷だけだ」

「切り傷！？　許さない……許さないわよ熊公野郎！」

切り傷程度でなんでキレル。というか切り傷だけか。死ねばよかったのに。モニカは憎々しげに呟いた。

「ぶっ殺してやるわ！」

馬鹿女が腰から短剣を抜いた。武器ではないだろう。触媒か。カタリスト見たところ水晶製の短剣だ。

どんなに強い魔術士も、強力な魔術には触媒を使う。水晶は精霊の好物で、魔力をご飯とするなら香の物みたいなものだ。

「Tu靈緑棘刺森Foret鋸焔……」

長い詠唱。モニカは人並み程度しか魔術については知らないが、基本的に詠唱の長さには比例して魔術は強大なものとなる。

同時にその間、馬鹿女は無防備になる。モニカはこの馬鹿女が呪文を完成させるまで、炎の鬣から守らなくてはならない。

グオオオオオオオオオオオオオオオン！

炎の鬣は馬鹿ではないようだ。馬鹿女が何かしようとしていることに気が付いた。左腕を振り上げる。

はつきり言つて、あれを弾き返すなど出来るわけない。かといって下がれば馬鹿女がぺしゃんこだ。別にモニカとしては構わないが、馬鹿女が死ぬとアタシの計画が狂う。

「りやあああああああああ……！」

腹に力を込めて、叫ぶ。槍の先を若干下に向けて構える。すくい上げるようにして突き上げる。槍をぶつ刺せば奴の腕も止まるはずだ。

「チエストオ

ッ……！」

振り下ろされた。

土煙が充満する。

「クソ……レイジ！ 見えるか！」

「わ、解らへん。スマン……オレの所為で……」

「後悔はあとだ！ 今はシェリカが……」

そこまで言っただけでガナツシユは目を見開いた。そして背後を見て、もう一度向き直った。モニカも目を凝らす。土煙が晴れてきた。人影が見える。

「まさか」

背後を見た。背後にはユーリたちがいるはずだ。うん。いる。やっぱり可愛い。ユーリ最高。無口女もいる。一応。だけどあの馬鹿はいない。どこに。いや、解っている。

あれだ。

土煙が晴れた。

現れたのは、炎の鬘かいなの腕を右手で支え、左を馬鹿女の腰に回す馬鹿の姿。

フィード・ロレンツだ。

第一章（7） カタハネ

Ganache

「フィーロ……」

頬を赤く染め、シエリカが弟の名を呟いた。凄くいとおしそうな声だ。気持ち悪い。まあ、見た目はまさにお姫様を助ける王子様といったところか。姉弟なんだが。こちらまで駆け寄ってきたクロアはそれを見て口惜しそうに睨み付けている。ユーリも複雑な表情をしている。いや、というか仲間の命は二の次なのだろうか、こいつらは。

「……大丈夫か？ まあ、見た感じ大丈夫そうだけどさ。つか、ちよい離れてな」

フィーロはそう言ってシエリカの腰に回していた手を放した。シエリカは少々残念そうだったが、渋々頷いてフィーロから離れた。小さな声で「……よし」「ほっ……」などという声が聞こえた。ホントこいつらは……。

周囲に対しては呆れつつも、ガナツシュはその光景には驚嘆していた。半ば、鳥肌さえ立っていたかもしれない。

そうだ。あの力。あの力だ。炎の蠶の巨大な腕かいなから繰り出されるその一撃を容易く受け止めたその力。比類なき剛力。あれこそが、ガナツシュがフィーロをカタハネに勧誘した理由なのだ。

炎の蠶も予想外だったか、目を見開いているように感じた。

グオオオオオオオオオオオオオオ……。

「いいぜデカブツ。カ比ベといこうじゃないか」

フィーロは不敵に笑った。いつもの情けない表情ではなく、あれはそう、紛れもない剣士の瞳だ。

ガナツシュはぞくつとした。恐怖か。否、違う。これは期待だ。

さあ、見せてみるフィーロ。お前の力を。さあ

「あ、やつは無理」
ぶち。

「……………は？」

ぶち？ いや、ちよっ……………いやいや。ちよっと待て。ウエイ。ウエイ。ウエイト。え？ 今ぶちっていった？ 潰れた？ 潰れたのか？ というか。

「はああああああああああああつ！？」

なんだ今の！ ガツカリだ！ 凄くガツカリだ！ 滅茶苦茶いい感じだったよな！？ あつさり負けるのかそこで！ 一秒も保つてないぞ！ というか始まる前にやられた。有り得ない。馬鹿だ。ガツカリ馬鹿だ……………！

「は、早すぎやろ……………」レイジも動揺を隠せずにいる。

「よっしや、そのまま死ぬ」

モニカはガツツポーズをした。……………おい。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！

高らかに「ざまあみる」という咆哮を上げる炎の鬣。それに最初に反応したのはシェリカだった。

「っ……………この熊公め！ ぶっ殺してやるわ！」

ぶちギレているらしいシェリカは触媒カタリストを取り出した。赤い宝石を詰めこまれたペンダントだ。あれは血晶石サンクレシユか。竜の血が凝固して出来る非常に珍しい触媒で、主に雷の精霊が好む。水晶クリスタルなどほとんどの精霊が好む触媒もあれば、このような一つの精霊に対してのみ使われる触媒も存在する。そういうものは概してより強力な要素魔術を行使することを可能にする。

シェリカはペンダントを手に握り締め、詠唱を始めようと口を開いた。

「壟蓄 may」

「やめるシェリカ！」

「……………っ！」

叫んだのはフィー口だった。あまりに突然だったため、シェリカ

の詠唱は中断させられた。

何時の間にやら立ち上がっていたフイーロがシェリカの下に駆け寄る。左腕で器用に担ぎ上げた。「あ、やつ、ちよっ……ファイ、フイーロ……っ!?」と先程よりも顔を赤くさせるシェリカを余所にフイーロはガナツシュたちの下まで来た。

「逃げるぞ!」

「なっ……逃げるだと!? 馬鹿かお前は! 今倒さずしていつ倒すんだ!」

信じられん。この期に及んでまだそんなことを……!

「これはボクらの依頼でもあるんだぞ! それを」

グアオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ……!

目は見えなくても聴覚やら嗅覚は健在なようだ。こちらに目がけて駆けてくる炎の鬣。血の糸を無数に引きながら走る様は熊というより鬼といえよう。

「クソがっ……!」

ユーカリスティアを構える。

「見えない状態でこれが避けれるか、化け物ツ!」

これで止めた。

一步、二歩と前に踏み込んだ。

「ガナツシュやめろ! そいつは」

「喰らえ」

一閃。

一文字を描き水の刃は一直線に奔る。

そして炎の鬣の身体を、

「やめろ　　っ!」

両断した。

S h e r i c k a

そう何度も聞くものじゃない。フィーロの必死な声なんて。シェリカは肩に担がれながらそう思った。

シェリカがフィーロのあんな声を聞いたのはこれを入れても二回だけだ。ずっと一緒にいた自分でさえその程度の回数しか聞いたことはない。

血の雨が降り注いだ。

巨大ゆえに血の量も半端ないようだ。変態ガナツシユの一撃で身体を両断された炎の鬣の最期は、赤い噴水だった。

「なんで……」

震えているのはフィーロか。シェリカにもそれが伝わってくる。

泣いているの？ なら下ろして。あたしなら貴方の涙を拭えるから。重力を感じた。下ろされたようだ。フィーロの方を見る。顔はまだ熱い。名残惜しくもある。知らない。どうでもいい。フィーロの方が重要だ。

しかし涙を拭くことは叶わなかった。フィーロはガナツシユに詰め寄っていたのだ。怒っている。どうしてだろう。フィーロは怒っている。

「何故殺す必要があったんだガナツシユ！」

「依頼だからだ」

「依頼？ 利己主義の商人の依頼がなんだ？ そんな下らないことで殺すのか、二つの命を！」

「何？」

「クウン……」

鳴き声。鳴き声だ。どこから。あそこだ。二つに分断された炎の鬣のところからだ。

下半身のところから這い出たのは、小さな とはいっても一メートルはあるが 熊だった。多少毛色が違うが、炎の鬣の子どもだろうか。少し鬣が生えている。多分そうだろう。

「わ〜可愛いです〜」

空気を読まない（というか読めない）天然女は即刻消えろと思う。

「子ども……？」

「どこにあんなにいたんや……」

「炎の鬘は有袋類だ」ファイロが口を開いた。「子は母親の袋内で育てられる。あれは生後一カ月くらいだ」

「それって……」

「あれは子を守るために戦っていたに過ぎない。炎の鬘は出産期から子が育つまで河川付近に巣を移すんだ」

ファイロはそう言った。

「だったら何故始めに……」

「言ったじゃないか。吹っ飛ばされたあとに。聞かなかったのはガナツシュだ」

「……だとしても……ってどこに行くファイロ」

ファイロはガナツシュの言葉を聞かずに子どものもとまで歩いていった。何をするつもりなんだろうか。疑問に思ったシェリカはファイロのあとを追った。炎の鬘の死骸の下でぴたりと歩みを止めたファイロ。シェリカが漸く辿り着いたその瞬間。

「許せ」

「え……」

しゃっ、と黒光りする何か走った。剣。ファイロの使う直剣。

その刀身だ。

赤い液体が剣の残線に沿って舞い、びちゃびちゃと地面に舞った。

「ごろん、と転がるものがあつた。首だ。熊の首。斬つたのだ。今。ファイロが。子熊の首を。剣で。何故。なんで？」

「ファイロ……どうして……」

「……親が死んだ以上、子はもう生きられない。なら……いつそ苦しむことなく殺してやったほうがいい……」

「でも」

「たとえ放っておいてもガツソの餌食になるだけだ」振り返ったファイロの視線の先はガナツシュだ。「ガナツシュ。お前なら解るだ

る？ ガツソが、敵がほとんどいなかったわけくらい」

ガナツシユは視線を逸らさなかった。「ああ」そう短く返した。なんか二人だけで通じ合うのは癪だ。代われ変態ガナツシユ。通じ合わせろ。そしてお前は死ぬ。

「帰ろう」シエリカがガナツシユを睨み付けていると、ファイロが薄く笑いながら肩を叩いた。いつものように優しい叩き方。なのにいつもとは違う。言葉では説明できないが、なんとなく、こう、きゅんとする。抱き締めたい。

が、今はダメだ。邪魔が多い。特にあの天然女は曲者だ。無口女はそれほど害はないが（いやあるけど）、天然女はあのあたしにはない武器を使ってファイロを誘惑しようとしている。あれは危険だ。SSSランクの危険さだ。なんとかしなければ。

加えてあの猫耳娘までも味方に付けている。厄介だ。あれはあれでファイロを狙っている。過度なスキンシップをとってくる雌豹だ。なんでファイロはこんなにモテるのか。いやまあ、あたしとしては鼻が高いのだけれど。それでもやっぱり気に食わない。ファイロはあたしのものだ。何人たりとも触れさせてなるものか。

ちら、とファイロの方を見た。

「……あれ？」

いない。どこに行ったのだろうか。さっきまで隣にいたはずなのに。天然女が叫んでいる。「ファイロ君!？」とか。馴々しく呼ぶな。

とはいいつつも、天然女の視線の先を辿る。シエリカの足元だ。自分も追う。

いた。いたけれど。

「ファイロ!」

ファイロは倒れていた。

十

どうやら骨が折れていたらしい。

なんとか学園に戻ったシェリカたちはまずフィーロを保健室に連れていった。帰りに治療をしようとしたが、ガッツが現れ始めた所為で天然女の施術が出来なかったのだ。変態ガナツシュ曰く、炎の鬣が死んだことで、避難していたガッツが活動を再開したらしい。どうでもいい。

変態ガナツシュは戦うしか能がないくせに、既に息絶え絶えだったのもあって、戦闘をシェリカと猫耳娘。フィーロを運ぶのを不本意だがレイジがやった。あとで殺さなくては。取り敢えず、腕を落とそう。背負っていたから背中も焼かなくては。

保健室のベッドに横たわるフィーロを見つめる。自分と同じ顔。昔は鏡を見ているようだった。違うのは中身を除けば髪と瞳の色。シェリカは銀髪と翡翠色の瞳。フィーロは金髪に花緑青エメラルドグリーンの瞳を持つ。シェリカはフィーロの瞳の色が好きだ。何でかは解らないけれど好きなのだ。多分、シェリカがフィーロを好きになったのと同じだろう。

「フィーロ……」

左手をそつと握る。冷たい。フィーロの手はいつだって冷たい。

冷え症なのだろうか。何にせよ、夏には気持ち良くていい。

握ったその手に頬を近付けようとした。

「お熱いわねー」

ぱつと手を放した。ちよつぱり後悔する。

後ろを振り向くと、白衣を着た妙齢の女がいた。保健医のアメリカ・ミュナスだ。いつもにも増してぱつぱつんの服を着ている。目に毒だ。猛毒。劇毒。致死毒だ。そしてムカつく胸だ。西瓜スイカでも詰めているのだろうか。

アメリカがこちらに歩み寄る。にじり寄る感じがまたいやらしい。

「あんたら姉弟なのにねえ。何？ 禁断の愛ってやつ？」

「愛に禁断もクソもないわ」

「乙女は強しねー」

「フィーロが起きるじゃない。静かにしてくれない？」

「ハイハイ」肩を竦めるアメリカに反省の色は見えない。「ま、弟クンも大変ねー。変な娘ばっかし好かれちゃって」

「煩いわ。燃やすわよ」

「あん、怖い。冗談よ？ 本当に。嘘じゃないわ。やめてその目怖いから」

信用ならない女だ。クスクス笑うアメリカは胸元のポケットからタバコを取り出した。

「吸う？」

「吸わないわ」本当に保健医なのかこの女。

「ふ　　っ、至福の時いゝゝゝ」

白い煙が立ち籠める。甘ったるい匂いがした。臭くはないが、不快ではある。

「外で吸って」

「ん？ えつちなことでもしたいの？」

「ぶっ殺すわよ？」

「冗談よ」

そう言っただけアメリカは床にタバコを捨て、踏んで火を消した。ますます保健医が怪しい。

「にしても凄いわね、この弟クン」椅子を引っ張ってきて座る。背もたれを前にして、馬乗りをする形で座った。というかパンツ見える。黒のレースだ。本当に毒だ。「あばら骨が数本逝ってだし、右腕なんか砕けてたわ。何したらこんなことになるのかしらね？」

「巨大生物のパンチを片手で受けとめたらよ」

「どんな状況よそれ」

アメリカはクスクスと笑う。学内では知らぬところのない、治癒士の中でも最高峰の技能を持つこの保健医は、噂では男癖が悪いらしい。この妖艶ともいえる笑い方に引かれるのか、男というものはまあ、フィーロは大丈夫だろう。きつと。うん。

どこかから不意にオルゴールの音色が流れた。言っちゃ難だが、アメリカには似合わないメルヘンチックな音だ。一体どこで鳴って

いるのだろうか。

「あら、もう四時？ ちょっと用事あるからあとよろしく」

無責任な保健医は颯爽と保健室を出た。オルゴールの音色は時計のものだったか。どうだっていいけど。

「あ、そうそう」「いきなり扉から顔だけひょっこり出す。「わたしがないからって、えっちなことするなよー？ まー、ちょっとなら許すけど」

「早く行け」

シエリカが睨み付けると、アメリカはそれを躲すように「バァーイ」と手をひらひらさせて出ていった。

あの変態保健医。

いつかぶっ飛ばしてやる。

そう心に誓った。

F i r o

身体中が痛い。

つかズキズキする。

プラス重たい。動けねえ。何これ金縛り？

にしても、あークソ。結局殺しちゃった。あの子熊。だって殺すしかないし。放っておいても死ぬ可能性は高いけど、生き残る場合だってある。生き残ったらどうなるだろうか。十中八九見境無く人を襲うだろうな。

炎の鬣けんゆうといえば、賢熊けんゆうとしても有名だ。数こそ多くないが、頭の良さと驚異の膂力が奴を最強足らしめている。

多分、あの子熊は絶対覚えてるだろう。俺の顔。俺たちの顔。奴らは想像以上に賢い。

俺は結局復讐されるのが怖くて子熊に手を掛けたに過ぎない。苦しんで死ぬならいっそ楽に殺してやったほうがいい？ 大した欺瞞

だ。よくもまあいいけしやあしやあと口から出任せ言えるぜ全く。ただのチキン野郎だぜホント。

「っーか、うるせー。」

耳鳴りするんだけど。

起きたほうがいいのか？　つか寝てんのか、俺。多分寝てんだよな。うん。多分そうだ。

目を開ける。そうだ。よっしや、光だ。もうちょい。あと少し。ファイト俺。負けるな俺。あー……あれ、なんか暗い。振り出し？　振り出しなのこれマジで？　めんどくせー。だーもー一気に開けちまえ！

「……………はっ！」

「……………」

「……………」

「……………よ」

「あ、ああ。うん。……………よ？」

何故に疑問系になったんだ。

つか顔近い！

クロアだった。滅茶苦茶至近距離にクロアの顔があった。鼻と鼻の距離が大体五センチくらい。まさしく目と鼻の先。

「いてーんだけど」

「……………どこが」

全身に決まってんだろ。

「何で舌出してんのさ」

「……………痛いところ、舐める」

「遠慮するわ。マジで。つかどけ。すぐどけ」

「……………照れてる？」照れてねえ。

「いいからどきなさいよ！」

クロアが誰かに引つ張られた。首絞まってたように見えるけど、何でポーカーフェイスでいられるんだ。気管ないのか？　クロアは、どうでもいいけど。

というかここどこだ。

見た感じは保健室か。ベッドにいるあたり、途中でぶっ倒れたのか。なんつーか、意地張らないですぐに治してもらえばよかったかな。

「目覚めはどうだ」

ガナツシュが右端の壁に持たれながら言ってきた。

「わるし」

「そうか」

「……で、俺はどれくらい寝てたんだ？」

「丸一日だ。あばら骨三本に右腕の複雑骨折の痛みで気絶したらしい。アメリカ保健医が一時間で治してくれたぞ」

「あ、そ」

アメリカ先生レベルなら骨が粉々になっていたとしても、一時間以内で再生させるなど容易だ。ユーリはまだその域には達していないが、才能はある。アメリカ先生自身がそう言ったことがあるのだ。というか、何故俺が一番ボロボロなんだろう。右腕が複雑骨折して……。まあ、治ったからいいけど。

「だーから許可してないっての！」

「……許可されました」

「してないのっ！」

騒がしいと思えばシェリカとクロアがまた喧嘩をしていた。さっきクロアを引っ張ったのはシェリカだったか。何でアイツはもっと周りと仲良く出来ないかな。

「……あ、そっいやユーリとモニカは？」

「夕飯だ。レイジは……知らん。また誰かを追い掛けるんだろう。変態だしな」

お前もな、とは言わないでおこう。

「そか。んじゃお前は夕飯まだなんだな？」

「ああ」頷くガナツシュ。

「そいじゃ、行くか夕飯。ベルベットだろ？ どうせ」

「その前にちよつと付き合え」

「あ？ いいけど……」

顎を杓るようにして言うガナツシユ。何だろうか。行けば解るか。少し身体は痛むが、怪我は完治しているようだ。身体を起こし、歩き始めたガナツシユのあとを追った。

「？ どこ行くの、ファイロ？」

「ガナツシユが付き合えって。飯、まだなんだよな？ すぐ行くからベルベットで席取つといてくれないか？」

「別にいい……けど」

しゅんとなるシエリカ。何だコイツ。と、いきなりぐーつとシエリカのお腹が鳴った。見る見るうちに顔が赤くなる。湯気でも出そうなくらいだ。つか腹減ってるのか。なら尚更早く行ってこい。

ぶつ、とクロアの吹き出す声が聞こえた。キツと睨み付け、「笑うな！」とシエリカは取っ組み合いを始めた。だから、早く行けよ食堂。

いちいち相手してもらえない。ガナツシユを追い掛けないと。ファイロは溜め息を吐きながら保健室をあとにした。

ガナツシユに付いて暫く歩いた。付いた場所は第二食堂の天理に近い校庭だった。噴水があつて、ライトアップされている。デートスポットっぽい場所だ。ガナツシユとデートね。吐き気がするや。

ガナツシユが振り向いた。それに促されるようにファイロ立ち止まった。距離は五メートル。言わば、近くて遠い距離。

「……で、何だ？」

「……ボクは……お前がよく解らない」

「は？」

唐突に何を言いだすんだ。いやいや、俺もお前が解んねえ。

「お前は何故炎の鬘を殺すのを止めようとした？ 治癒士ユリのような博愛精神か。それとも子熊への同情か？」

「それは……」

「だとしたら何故あも容易く子を殺した？ 偽善にしてはお前のは不安定すぎる」

「俺は……」

「だから、ボクにはお前が解らない。……ただ、あの時耳を貸さなかったのは悪かった。……それだけだ」

夕飯を済ませよう。ガナツシユはそう言っただけだ。ファイー口は立ち尽くした。角を曲がり、ガナツシユの姿が消えても尚、ファイー口は歩きださなかった。

噴水の音が鳴り響く中、ファイー口の脳裏にガナツシユの言葉が反芻した。

「不安定……か」

自嘲の笑みが零れるのを感じた。

違う。違うよガナツシユ。

俺は偽善者でも何でもない。

チキン野郎だ。

恨まれるのが嫌なだけだ。戦って、誰かから恨まれるのが。復讐されるのが。

臆病者なんだよ、俺は。

ファイー口はそう心の中で呟いた。

段々、食欲が失せるのを感じた。

これだ。

これがあれば。

「これで……これで僕は……」

見ている。

すぐに僕は貴様を越えるぞ。

彼は口元を歪ませた。

F i r o

クランには色んな特典がある。

たとえば、依頼において報酬が優遇されたり、ポイントを何パーセントか上乘せしてもらったりと沢山ある。

その中で、クラン用の部屋を与えてもらえるという特典があるのクランレベルだ。CL3以上のクランにのみ割り当てられる。スタジオ部室と呼ばれており、それらを集合させた部室棟がある。

カタハネはCL3なので、条件を満たしている。故にフィーロたちには部室を与えられているのだが、場所が悪かった。

「ガンガンガンガン煩いですよっ！」

「アンタはキーキー煩いけどね？」

「何ですって！？　そもそも、あなたが壁をガンガン蹴るから悪いのですわ！」

「ガンガンなんて蹴ってないわ。バンバンよ」

「大して違いませんわっ！」

う……うるせー。

金切り声っつーか超音波？　むしろ怪音波？　何にせよ頭が痛くなる。

シエリカとベアトリーチェの言い争いは、周りに及ぼす。被害が尋常じゃない。割れそうだ。頭が。パーンて。あ、それは破裂か。何でもいいけど。つか誰かあれ止めてくれ。

不運にも、カタハネの部屋の隣はベアトリーチエの（急造）クラ
ン《アンセムスター》だった。そう、不運なのだ。

いつも仲の悪いシエリカとベアトリーチエ。どちらかといえれば
アトリーチエがシエリカに突っ掛かる感じではあるが。何にせよ張
り合いばかりしている。多分、ベアトリーチエがシエリカに突っ掛
かる理由としては、彼女が『TWGDF』に属しているからだろう。
TWGDF。

正式名称、ガナツシユ様の優美なお姿をそつと見守る会。

ありたい言いには言え、ファンクラブというやつだ。

ベアトリーチエはガナツシユのファンなのだ。カタハネは今でこ
そまだマシだが、発足当初はヤバかった。ガナツシユに群がる女子
の加盟希望者が上級生を含めて三桁代を越えかけた。そのカタハネ
にシエリカが入ったのだ。すんなりと。ベアトリーチエとしては面
白くないだろう。

それからというものの、会うたびに喧嘩する。口喧嘩くらいなら構
われないと思っていた時もあつたが、とんでもない。奴らの怪音波は
人の鼓膜を破壊する。危険だ。

「あなたのようながさつな女がガナツシユ様の隣にいただけで許せ
ませんわ！」

「はあ？ 何で変態が出てくんのよ。馬鹿？」

「馬鹿ですって！？ 大体ガナツシユ様を変態呼ばわりなど……！」

あーも神様お願い俺はどうなつてもいいからこの馬鹿どもの声帯
を消してください。神隠しにでも遭えよマジで。

「ガナツシユ……こいつら何とかしてくれよ……」

「 嗚呼、可愛いイリア。ボクのイリア。愛しいイリア。これほ
どまでにボクを焦がれさす存在は全世界を探そうともキミだけだ……
…！ 実際の最果てからでもボクはキミを迎えに行くことを誓うよ。
そう、極限の愛とともに……！」

駄目だ。

コイツはもう駄目だ。手遅れだ。

重度の変態シスコン野郎め。周りの騒音も介しないとは。一種のトランス状態じゃねーの。そこはかたなく気持ち悪い。

「あ、あの、フィーロ君、お茶煎れましたよ？」

ユーリが湯呑みをフィーロの前に置いた。綺麗な茶髪を後ろでまとめ、何故かグランチェのコスチュームで身を固めていた。何か悪いものに影響されたのだろうか。

「ああ……ありがとう」

でもこの状況でお茶っておかしくね？ まあ、ユーリだしな。別にいいけど。

湯呑みを手に取ろうとした。そして消えた。

「……………」

いつの間にか、モニカがフィーロの前にあつたと思われる湯呑みを口にしていた。恐るべき早さで掠め取ったようだ。「ああ……これがユーリの煎れたお茶……」と恍惚とした表情で飲んでいる。気持ち悪いというか、薄ら寒い。鳥肌立つてきた。

「耐えらんねえ……………」

こんな魔の巣窟に留まるから悪いのだ。外に出てしまえば問題ない。召集をかけられてこの仕打ち。笑えない。泣けてきた。泣いていいかな。

フィーロは座席を立ち上がり、外に出た。皆、各々の世界に没頭していたため、見向きもしなかった。

ただ、クロアとだけは目が合った。「……………」彼女は何も言わなかった。

不気味だった。

「あ、フィーロ君」

外に出ると、廊下の端に二人の少女がいた。犬っぽい耳の少女と、十歳かそこらに見えるロリ少女だ。犬耳少女がこちらに気付き、フィーロの名を呼んだ。

「モランと……ロリエだったか」

「こんにちは」

「逃げてきたの？」

「ご明察。……何で喧嘩ばかりするかな……」

「喧嘩するほど仲がいいんだよ。きつと」にこりと笑うモランは天使だ。

「なら周りに迷惑にならない場所でやれよな……」力ない笑いを漏らすフィーロ。

「リーちゃんはガナツシユ君のファンだしね。仕方ないんだよ」

「かつこいいもんね」

「シスコンだけどな……」

イリアとやらがどんな娘なのかフィーロは知らない。(色んな意味で)怖くて奴が肌身離さず持つているロケットを覗いたことはない。ただ、あのガナツシユの妹だからさぞや美少女だろう。それでも狂喜乱舞するほどのな。兄が。肉親が。自分に当てはめて想像してみた。シエリカの写真を舐め回すように愛でる俺。キシヨい。嫌悪しかない。つかあり得ない。

「どうかしたの？」

「んお？ 何が？」

「すつごいしかめっ面」

顔に出ているらしい。フィーロは顔をうにうにと揉んだ。少しだけ頬が赤くなる。

「何でもないさ。気にするな」

「ねーねーそういえばさ」いきなりロリエが切り出した。「フィー

ロ君は彼女さんとかいるの？」

「は？ 彼女？ いや、いないけど」モテねーし。

「ホントに？」

「いないって」

「そうなんだ」。ふうん。へー。じゃあさじゃあさ、好きな人とかは？」

しつこいなコイツ。

「いないけど」

「えーホント〜？」

「ホント」つーかマジうぜっ！

「ロリエ。あんまり質問攻めしちゃダメだよ」

「だって〜」

「だってじゃないよ。ダメなものはダメなの。迷惑でしょ？」

「う〜〜〜」

むくれっ面をするロリエ。一部（勿論、男子）ではこういうキャラに需要があるらしいがフィーロには到底理解できない。モランとロリエのやり取りはもはや姉妹のそれだった。見てて馬鹿馬鹿しくなる。

暫くして、二人は言い合いを始めた。……ここもか。そう思い、溜め息が漏れる。見た感じ、言い争いとまではいっていない。ま、戯れ合いみたいなものだろう。何にしても、いづらい。

フィーロは二人を一瞥して、その場を離れた。

十

そもそも、部室に行ったのは習慣でも何でもなく、ガナツシユに召集されたからだ。多分、二日後に迫った克蘭コンテストについての話だろう。

しかし、約一名がいつまで経っても来ない。待たされるのが好きではないシエリカは苛々を壁にぶつけた。それが隣の部室に響き、向こうを怒らせた。で、相手が不幸にもベアトリーチェだったわけだ。

ガナツシユは時間の有効活用とかいつてトリップして、喧嘩も収拾つかなくなつて。ユーリは残念な娘だから、全く状況など理解していないし、モニカに救援など頼めるはずもない。

結果としてフィーロは部室棟を離れ、現在は錬金術士学科の実験室アルケミストのある学園の南東区を歩いていた。たまに実験室から爆発音がすラ

る以外は静かな場所だ。ゆっくりできるだろう。多分。

「つーか、あの変態はどこをほつつき回ってるんだ……?」

考えてみれば元凶はガナツシュだが、発端はあの変態だ。あれが早く来ていればこのような悲劇は起こらなかったはずだ。

まあ、あとで殺そう。

そう誓いを込めて握りこぶしを作った。

その時、ドン、と誰かの方がぶつかつた。転けたりはしなかったが、少しよろめく。踏み留まって、ぶつかつた相手を見る。黒いフードを目深に被つた人だった。体格は華奢とまではいかないが、細い。それでも女性的ではない。多分男だろう。

「……てて。悪い」

「ちっ……」

黒フードの彼(?)は舌打ちをして走り去っていった。何なんだ。気分悪いな。

すぐに角を曲がり姿が見えなくなった。急いでるのはかは知らないが、人としてのマナーくらい守れてんだ。

腹立たしさを紛らわせるように小石を蹴った。一直線に飛び上がる。ごっん。「あだっ!」人に当たった。

「わ、悪い。大丈夫か?」

急いで駆け寄る。これじゃ黒フードのことどやかく言えないな。そう思った。

が、

「いっでー……」

「……何か……心配して損したな」

「何だよ!」額を少し腫らしながら、ツツコミを入れる。「石ぶつけておいてそりゃないだろっ! 絶対腫れたぞコレ!」

「ああ、腫れてるな。滅茶苦茶かっこいいぜ」親指を立てる。

「え、マジ!?」

「マジマジ」

「じゃあオレってばモテモテ!? モテモテかな!」

「そりゃないな」

「意味がねえ　　っ！」

頭を抱える。リアクションの大きい奴だな。見ててかなり笑える。バカっぽくて。

数分後、漸く平常心を取り戻したか、のた打つのをやめる。

「にしても、久しぶりじゃんフィーロ」

「そうだな。暫く見てなかったな、そういえば」

「あれ？　もしかしてオレのこと忘れてた？　忘れちゃってた？」

「若干」

「ぬお

っ」

頭を再び抱える。いい加減、飽きた。煩いし。フィーロは頭をぶん殴った。「あだっ」おとなしくなった。涙目かつ上目遣いでうーと唸りながら見てくる。小動物的という言葉はコイツのためにあるのだなとフィーロは感じた。

実際、小動物みたいだ。

まあ、犬、だな。

犬耳に、ふさふさの尻尾を振る姿はまさしく犬だ。

名をルツという。

モランの幼なじみで、獣人だ。性格は、真面目なモランと正反対の馬鹿。もう馬鹿と書いてルツと読んでもいい。それくらい馬鹿だ。馬鹿は近戦学部の戦士学科ウォーリアで、盾持ち片手剣と手斧ハンドアックスを使うオーソドックスなタイプの戦士だ。レベル1で、フィーロと同じような立ち位置にいる。フィーロと違うのは半ばマスコット扱いされていることくらいか。

まあ、レベルが同じなのもあってか仲はいい。たまにこうやって弄って遊ぶ。

突然何か思い出したように、馬鹿ルツが切り出した。

「あ、そうそう。聞いたぜ？　お前クランコンテスト出るんだろ？」

「ああ、まあな。どこで聞いたんだ、そんなもん」

「女子が噂してた。ガナツシユが出るから」

「なるほど……」迷惑な奴だな。

「頑張れよー。オレ応援してんだからさ」

「しなくていいけどな……」ぶつちゃけ出たくねーし。

「ガナツシユはつかモテて悔しくねーのかよ！ オレだつてガナツ

シユくらい強けりやシェリカさんに……くお　　っ

「悶えてんじゃねー。つか、お前まだ夢から覚めてないの？」

「夢じゃねえ！ オレは本気なんだよ！」

「……あ、そ」

馬鹿はシェリカが好きらしい。まあ、見てくれはいいからな。入学一週間後に行われた『第一回目美少女ランキング』のアンケートで、シェリカは一年生の中で五指に入ることが解った。フィーロは勿論、違う女の子に投じた。その旨をぼろつと口走った日には、フィーロはシェリカに四十八のサブミッション技を食らわされた。血塗られた悲しい思い出。

それはさて置いても、フィーロは馬鹿の気持ちがよく解らなかつた。解りたくもないが。別に、シェリカのことには嫌いじゃないし、むしろ好きだと思う。姉だし。たった一人の肉親だ。血を分けた姉弟だ。嫌いになる理由はない。それでも、シェリカに対して恋愛感情を持つ理由が解らない。それは弟ゆえか、それともシェリカの性格を知っているからか。

「まあ、人それぞれだしな……」

「ん？　なんか言つた？」

「いや。まあ、なんだ。頑張れ」

「おう！」

ガッツポーズする馬鹿。モランが可哀相だと思つた。何となく、だが。

何故か溜め息が漏れた。

「ハア、ハア、ハア、ハア……」

「……………」
違う。これは俺の溜め息じゃない。

尻に嫌な感触がした。

撫で回してきた。頬摺りまでし始めた。太股も弄り始めた。

「やっぱええわ〜。こう固さがなあ。ええわ〜。ベストやわ〜。まあ、個人的にはもうちょい柔らかさが欲しくもあるんやけど……………」

「……………」
プチン。

頭の大事な線が切れたような感覚がした。右足を後ろに勢い良く上げる。ごす、とどこかに当たった。どこでもいい。「べふつ」と対象が呻いた。そのまま左を軸に回転させ、右足を横薙ぎに蹴り飛ばした。「ぎゅふえっ」顔面を捉えた。吹っ飛ぶ。追撃を掛けた。横臥状態の対象の腹を踏む。「ぐえっ」くぐもった呻き声。無視だ。次にマウントポジションをとった。そして殴った。タコ殴りにした。「ちよっ……………ごめっ……………謝ります！ ホンマ謝るから許して……………ぎやああああああああああああああああああ……………！！」
対象の沈黙を確認し、誓いを果たしたことへのガッツポーズを決めた。

十

沈黙した変態レイジの首根っこを掴んで引き摺る。向かった先は部室棟。カタハネの部室だ。

階段を上がり、廊下を渡り、戸の前まで行き着く。ノブに手を掛け、開けた。

「ん……………？ フィーロか。どこに行っていたんだ。勝手に出ていくな」

ガナツシュは開口一番そんなことを言った。ぶっ飛ばしてやろうかと思った。お前らがトリップしてたから俺は出ていったんだよ。人の所為にすんな。フィーロは不機嫌な顔をした。

「……まあ、戻って来たから問題ないが。それと、後ろのそれは何だ？」

「不燃ゴミだ」

「そうか」

「フイーロっ！ どこに行ってたのよ!？」

シエリカが飛びつかんばかりにこちらに駆け寄ってきた。もうベアトリーチェとの喧嘩は終わったらしい。いつまでもやってもらってはこちらも迷惑なのでそれはそれで万々歳だ。

取り敢えず、頭をぽんぽんと軽く叩いてやった。意外そうな表情をしつつも、シエリカはこそばゆそうに首を竦めた。

「避難してたんだよ。騒がしかったからさ。悪かったね、何も言わなくて」

「別に……怒ってないけどさ……」

シエリカにしては珍しいほそほそとした喋り方だった。

「そう」

なら俺に被害はないと考えていいんだな？ なら一安心だ。

「で、ガナツシユ。召集かけたのはお前だろ。変態不燃ゴミ、ちゃんと回収してきたんだから本題入れよ」

「ああ、そうだな。……じゃ、席についてくれ」

部室には長い折りたたみ式のテーブルが二つ置かれている。それを囲むようにして座る。ユーリは備え付けのキッチン（これも生徒会長の計らい）でござござやっている。多分お茶の用意でもしているんだろっ。

フイーロは適当に、入り口から向かって左のテーブル側の一番手前に座った。

隣にシエリカが座る。物凄い速さだった。一瞬びびった。

シエリカの向かい側にモニカが腰掛けた。不燃ゴミは端っこに捨ててある。ガナツシユは立ったままだ。もう一人は……？

膝の上に重力を感じた。ついでに柔らかさも。こう、人肌の温度も感じた。

「……………」

「……………」

「……………何故、俺の膝に座るんだ？ 席は三箇所も空いてるんだが？」

「……………特等席」

「意味不明」

「……………うれしい？」

「……………意味……………不明」

ど、動揺しちまったじゃねーか！ いや確かにちよつと嬉しかったり？ するけどさ！ そりゃさ、男だもの。クロアはまあ、ロリエよりの幼児体型ではあるがしかし！ 女の子だ！ 男としてはうわーいといった状況シチュエーションでもあるけれども！

「どこ座ってんのよ！」

今は不味い！ 今じゃなくても不味いけれども！

「……………フィーロは……………よろこんでる」

「そうなの！？」

「滅相ありませんっ！」「こっちに振るな！」

「……………心臓はばくばく」

余計なこと言っつな！ 違っ。違っぞ。命の危機に対して心臓がばくばくなんだ。決してやましいことは考えていない！ 断じて！

「フィーロっ！」

「だから違っつて！」意思の疎通って難しい！ 「あーもーっーかどけ！ 早く！」クロアを降ろした。ちよつと名残お……………いや、清々したさ！ 勿論さ！

「お前らいい加減にしろ！ クロアは早く座れ！」

ガナツシュが業を煮やして叫んだ。もっと早く助けてくれても良かったのではないだろうか。

クロアも一応観念したようで、席に座った。フィーロの正面に。

すげえ見てる。シエリカはそのクロアを睨みつけていた。威嚇する猫に見えた。

「あ、粗茶です」

拍子抜けするような声でユーリが盆に載せた湯飲みを順番に置いていった。その姿を恍惚とした表情でモニカが見つめている。道理で騒がしくても何も言っただけでこなかったわけだ。大方、ユーリの姿を見るのに忙しかったのだろう。

しかしユーリは優しい娘だと思う。

不燃ゴミにの分までお茶を用意していたのだから。モニカが奪っていったけど。

「……落ち着くまでにどれだけ時間を掛けるんだ……まあ、いい。始めるぞ」

ガナツシュが言った。

ホワイトボードには『克蘭コンテスト直前作戦会議』と書かれていた。というか、どこから盗んできた、そのホワイトボード。前はなかったぞ。

「まず、克蘭コンテストは二日後にまで迫っているわけだが、このコンテストにはいくつか審査のポイントになる部分がある。“戦力”“協力性”“作戦”“応用力”“技能”“格好よさ”の六つだ」

「へえ……」

格好よさって何だよ。必要だろそんなもん。

「“協力性”は捨てる」

同感だ。俺たちにチームワークはない。

「“作戦”はあつてないようなものだ」

いつも『力押し』だからね。

「“戦力”“応用力”“技能”は個々の水準は高い。問題は……」
何故こっちを見る。

「“格好よさ”は必然的に、フィーロにかかってくるだろう」
「何で」

「残り三つをお前が満たすのが条件だからだ」
なるほど。

「フイーロは立ってるだけで格好いいわ」

「わ、わたしもそう思います〜」

「ちっ……」

「えっ……」

涙目になるユーリ。何故学習しないのだろう。

ガナツシユが咳払いした。

「取り敢えず、一年生の部門で優勝すれば、CL4への昇華はほぼ確実だ。今回は風紀委員直属モルキーバのクランも参戦すると聞く。総合優勝は難しい」

「《ピースメーカー》ね」モニカが呟いた。

「そうだ。あれはトップレベルの実力を持つ。学園外のクランに匹敵する実力を持つ者もいる。総合優勝は砂漠の中から一粒のダイヤを探すようなものだ。……だが、それ以外、他の部門ならば優勝は狙える」

ガナツシユは全員を見回した。目が合う。何か、意志の込められた視線だった。

「カタハネは、強い」

やるぞ。

そう言った。

フイーロは、そのガナツシユの言葉を聞いて。

やだなあ。

そう思った。

第一章(9) 引かれ者

F i r o

フィーロは北校舎とベルベットを繋ぐ廊下を歩いてきた。北校舎は主に一年生の教室で占められている。ローズベル学園は東西南北に校舎を持つゆえ、丁度学年別に校舎が分けられている。

特に用事はない。時間は十時で食事の時間でもない。授業は面倒臭いから受けていない。ただあてもなく散歩しているだけだ。

というか、そわそわするのだ。焦っているのか、苛立っているのか。何にせよ、気分はよくない。正直、憂鬱だった。

理由は簡単だ。フィーロにもよく解っている。

クランコンテストが明日に迫ったのだ。

最悪だ。気が滅入る。もう時が止まればいい。そうだ、止めちまえ。頑張れば止めれるはずだ。

……いや、時なんて止めれるかつーの。無理だし。不可能だし。

大層な魔術士でも今だに時間は超越出来ない。時間の超越の頂点

不死属性インモータルティは誰もが追い求め、手に入れられないものだ。フィーロが時を止めれたら、今頃魔術士はどうなっていることやら。

なんか余計憂鬱になった。

フィーロはうなだれた。

「フンフンフンフンフン　フンフンフンフンフンフン」

何か聞こえてきた。顔を上げた。鼻歌だ。女の子の声である。向かいからだ。丁度、廊下をフィーロと反対方向に渡ってくる女の子が目映った。

あれは……ユーリか。一人とは珍しい。鼻歌混じりに歩いているということは何かいなことでもあったのだろうか。

「フーか、このリズムは。」

「フンフンフンフンフン　背中で語れ涙へへイ」

「『語　！涙！』!?」

「フッフ……あつファイ、ファイ口君っ……!?」

顔を赤く染めさせるユーリ。確かにその鼻歌は恥ずかしい。よくそんなマニアックというか、渋いというか熱いというか……とにかく女の子の歌う歌じゃないだろ。ちょっとびびったぞ。

「き、奇遇ですね？　こんなところで会うなんて……」

「ん、まあ、そうだな。ユーリは授業受けてないのか？」

「治癒士学科の授業は今日は無いんです。その、アメリカ先生がブルーな日なんだそうで……」

「ブルー……ねえ……」

深く突っ込むと痛い目に遭いそうなので、それ以上聞くのは止めることにした。

「でもさ、治癒士の先生他にもいたよな？　菊乃先生だっけ？」

菊乃先生は弥都　正確には、鸞明国出身だ。らんめいこく東端に位置する国で、独自の文化を持つ。第二食堂　天理　はまさにこの国の郷土料理を堪能出来る場所だ。そんなことはどうでもいいが。

何にせよ、治癒士学科の授業を行う教師は一人じゃないはずだが。菊乃先生は三、四年生担当ですから。治癒士学科の教師はこのお二方しかいないんです」

「へえ」

治癒士は厳密には、魔術士とは違う存在だ。オペレーター施術は、精霊の力を使うものではなく、不可視の力で細胞の修復などを行う技術だ。

魔術とは言われているが、ファイロに言わせれば治癒魔術とは超能力のようなものだ。

だから使える者も限られてくる。多分、魔術士より少ないかもしれない。それを思えば治癒士の教員が二人もいるのはかなり恵まれたことなのかもしれない。

「大変だな、治癒士って」

「そうでもありませんよ？　傷付いた人を助けられる力を授かったのは、きつと幸運なことですから」

そう言って微笑むユーリは、いつもの天然娘ではなく、治癒士の表情だったような気がした。

「……そっか。いやまあ、それはいいんだけどさ。鼻歌なんか歌っていいことでもあったのか？」

「え？ えっと……そのう……」

「いやまあ言いにくいことなら別に構わないよ」

「け……」

「け？」

「ケーキ無料券を貰ったんです……グランチエの
「なるほど」

女の子ってというのは無条件で甘いものが好きだというのをシエリから何度か聞かされた。甘いものが苦手なフィーロには一生理解できそうにない理屈だ。が、ユーリも女の子だ。甘いものが好きなんだろう。鼻歌を歌うほどに。だからって『語！ 涙！』はないと思うが。

一応、これで疑問は解決した。散歩を再開すべく「じゃあ、また」と言ってフィーロはその場を立ち去ろうとした。

「あ、あのっ……！」

しかしユーリに呼び止められた。前にもこんなことがあったようになかったような。まあいいや。

「ん？」それを無視出来るほど薄情な人間にはなれないフィーロは振り返った。「どうかしたか？」

「え、と……その……に」

「スマン。全然聞こえないんだが」

「はっ……す、すみません……。えと……い、一緒にどうですか……？」

「何が……？」

「ぐ、グランチエにケーキを食べに……行きませんか？」

「ああ……」

甘いものは苦手なんだけどな。

「いいけど……」
断れない俺は甘いよな。

十

「……バイト先のケーキをタダ食いつてどうよ？」

グランチェのオーナー、エリック・モンテディオが言った。エリックはグランチェ唯一の男性である。菓子職人^{パティシエ}というやつだ。特戦学部^{フラッター}の扇術士学科でありながら、菓子職人。クランも率いているらしい。

因みに、美男子。

曰く、男の敵。フィードとしても同感ではある。が、どうでもいい。こちらら既にガナツシュというモテモテ野郎がいるからね。今更イケメンの一人や二人。

「でも先輩のケーキ美味しいですから」はにかんだ表情でユーリが言う。

「おだてても何も出ねーぞ？」

確かに惚れ惚れするような爽やかスマイルだ。女の子ならイチコロだろう。フィードには出来ない芸当だ。

三年生のエリックは既にガナツシュに匹敵するファンを持つ。グランチェの就労希望者は、この人がオーナーになってから五倍に増えたとか何とか。お陰でエリックが気に入った女の子が採用されるシステムになっている。ユーリとモニカはエリックの目に適ったというわけだ。こういうところはやっぱり男だなと思う。

グランチェの女の子が皆可愛いと評判なのは、一重にこの男のお陰であって、売上げが上向きどころか八十九度くらいの傾きで上がっているのもこの男のお陰である。ついでに従業員や客層まで男子が淘汰されたのもこの男のお陰、というかこの男が原因だ。

「フーかさ、お前、ユーリの彼氏かなんか？」

「はい？」

エリックがこちらに話を振ってきた。

「いや、違いますけど」

「えっ……」

ユーリがショックを受けたような表情になった。何故に？

「違うのか？ てつきりそうだと思っただがな」

「俺じゃあユーリに釣り合いませんよ」言っけて悲しくなる。

「そうか？ 女みてーにきれいな顔してるし悪くねーよ。……お前、剣士だろ？」

「ええ、まあ」

「だったらベストコンビじゃねーかよ。俺は扇術士だからな。バリ戦闘は不向きなんだよな」

嘘つけ。扇術士学科最強のくせに。エリックの鉄扇から繰り出される鎌鼬かまいたちは、金属を飴のように裂く。有名だ。

「……つか、仕事はいいんですか？」

話を逸らすフィーロ。

「ちよいと休憩だ。大体、急がなくても客なんかまだ来ねーよ。お前らみたいな物好き以外は」

客に対してその物言いはどうかと思うが、実際、客はフィーロとユーリだけだ。時間帯が昼前ということもあるだろう。ブランチの頃合いだが、生憎朝食は済ませてある。フィーロはケーキを頼まずに、コーヒーだけ注文していた。

コーヒーを一口啜る。グランチェのコーヒーはどっちかというところ甘い。ルーセントは苦めなので、実を言えばフィーロはルーセントの方が好きだったりする。オーナーの前でそんなこと、口が裂けても言えないが。

「ああそうだ。お前らも出るんだろ。克蘭コンテスト」

「ええ……」

「覇気がねーなオイ。いいけどよ。カタハネ、だったか？ フィー

ロ・ロレンツ」

「なんで俺の名前を……？」

「有名だからな。ある意味で
何となく想像ついた。」

カタハネは有名だ。一年生だけのクランは珍しくないが、学部首席が二人もいるクランも珍しい。他のメンバーも逸材揃いだ。その中にぽつんとレベル1のへっぽこ剣士がいるのだから、そりゃ有名にもなる。明らかに場違いだ。

「俺は雑魚ですからね」

「ん。俺はそうは見えねーけど？ あのカタハネにいるってことは、レベル1でもそれだけの価値があるってことだろ」

「どうですかね」

「フィーロ君は強いんですよ」

「ほれ見ろ」

「……………」

ユーリの空言はフィーロを少し沈んだ気持ちにさせた。強くなどない。フィーロがカタハネにいる理由はただ一つ、シェリカのオマケ。それだけだ。

俺は姉とは違う。

劣等感は少しある。だが事実だ。覆らないものに固執するまでもない。だから諦めている。

それでもカタハネのメンバーはフィーロを過大評価する。もはや嫌がらせとしか思えない。

エリックは何も言わないフィーロを見て、肩を竦め、困った感じの笑みを漏らした。そしてちら、と壁時計を見た。

「…………と、やべえもうそろそろ焼けんな…………んじゃ俺は作業に戻っから」

「ええ。俺らはそろそろお暇します」

「そっか。じゃあな」

「ごちそうさまでした」

ユーリが言ったので、フィーロは会釈に留める。

「行こうか」

「はい」

フィーロとユーリは店を出るべくドアの方に歩きだした。

「おーそうだ、フィーロ」

エリックが呼び止めた。どうやらフィーロはよく人に呼び止められる体質らしい。

「何ですか？」

「また来いよ。ほら、^{グランチエ}男子禁制みたいなノリになってるだろ？ ちよっと息苦しくてよ」

「はあ」つまり話し相手が欲しいということか。女の子に囲まれてご満悦というわけではないようだ。「構いませんよ」「どうせシエリカに引き摺られて何度か来る羽目になるのだ。

「ありがとよ」

にっと笑うエリックはやっぱり魅力的だった。

「では、また。ご馳走様でした」もう一度会釈する。

エリックはおう、と返して厨房に戻っていった。それを見届けて、フィーロたちはグランチェをあとにした。

店の外に出たあと、ユーリが口を開いた。

「気さくな人ですよね」

「そうだな。あれで美形だからな、そりやモテるだろうね」

「フィ、フィーロ君も格好いいですよ……？」

「そりやどうも。世辞でも嬉しいよ」

フィーロはユーリに微笑んだ。なんとも力ない笑いだ。意外にダメーシだったのかな。苦笑が漏れそうになったが、呑み込んだ。

「お世辞じゃ……ないんだけどな……」

ユーリが何か呟いたような気がしたが、フィーロの耳には届かなかった。

十

北校舎三階、一年C組前廊下にて。

ギリギリギリギリ……。

フィーロは首を締め上げられていた。モニカに。

さすが獣人だ。右手だけで首を鷲掴みにし、フィーロを数センチ浮かせている。膂力が違う。つーか、苦し……！

「さて、どう料理してくれようかしら？」

口元は笑っている。だが目は笑っていない。全く。つか怒ってる。怒りに燃えてる。

「料理つて……モニカさん料理人にでもなられるんですか？」

「そうね。ブッチャー肉屋ならアタシにもなれるかもしれないわ」

「そうですね。なれるよモニカならさ。だからそろそろ放さない？ 俺死んじやうよ？」

「構わないのだから」

ヤバい目がマジだ。

「モ、モニカちゃん！ フィーロ君が死んじやいます！」ユーリが止めに入る。

「ユーリ！ この男はユーリをたぶかそうとしたのよっ」

「ち、違いますよう……」

「アンタどう落とし前付ける気！？」

ユーリの否定を完全に無視し、右手に力が込められる。「ぐ……ぐるし……」それ以上はヤバい。マジで死ぬ。右腕を二、三回叩いてギブアップを宣言した。

「どうにかいいなさいよ！ ええ？」

聞いちゃいねえ。

大体、首絞められてまともに喋れるわけねーだろ。

つーかそろそろヤバい。意識が。あ、俺死ぬ？ 死んじやう？

「鳴 Fai 雉煤輦 h a i e 鳴動雷」

バチつと目の前で弾けた。「つつ……！？」モニカが顔をしかめて、フィーロを放した。尻餅を突いた。少し咳き込む。喉を軽く押さえ、声のした方に視線を向ける。

「フィーロに触るんじやないわよ」

「シエ、シエリカ……?」

シエリカが立っていた。つか、授業はどうしたんだろう。今日一応受けるって言ってたような、言ってなかったような。

モニカがきつと睨み付けた。

「アンタ人に魔術ぶつ放すって何考えてんの!? 常識はずれにも程つてもものがあるのだわ!」

人の首締め上げてた奴がよく言うぜ。

「知らないわ。常識なんて。フィーロを傷付けるような奴は死ねばいいのよ。大体、フィーロは何も悪くないわ。悪いのはその爆乳女よ」

「えっ……ば、爆乳……」

「ユーリをそんな呼び方するんじゃない! 美乳にしておきなさいっ!」

それもどうかと思う。

「そもそも、フィーロがそんな爆乳女に興味を示すはずがないじゃない」勝手に決め付けない。俺だって胸の大きい女の子は好きさ。

「どう考えてもその爆乳女がフィーロを籠絡しようとしたに決まってるわ」

「籠絡なんて……わたし……」

「ユーリを泣かすんじゃないわよ! ぶっ殺すわよ!」

「やってみなさいよ」

「お望みなら……!」

モニカがシエリカに飛び掛かった。「っ……」右手がシエリカに迫った。まさか本当に飛び掛かってくるとは思っていなかったのか、シエリカは思わず目を瞑る。

それに対してフィーロの動きは迅速だった。

シエリカとモニカの間に立ち入り、モニカの右手を掴んだ。バシッと景気のいい音がした。ちよつと痛い。

「なっ……」

「フィーロ……」

「つつつ……。モニカ……。シエリカの口が悪いのは許してやってくれ。あと、俺はユーリに何もしてないから……。な？」

「つつ……。！ ふんっ」

「やああってモニカは拳を退いた。そしてフィーロを忌々しげに一瞥してから、去っていった。シエリカが背後でべーっ舌を出していたのに気付いて、軽く小突いた。」

「ご、ごめんなさい……。フィーロ君。わたしの所為で……」

ユーリが近付いてきてそう言った。少し目に涙が浮かんでいる。

確かにシエリカの悪口は過ぎたが、泣くほどかと思った。まあ、ユーリは気が小さいし、女の子だ。悪口を言われると傷付くだろう。

「別にユーリは悪くないさ。モニカのところに行ってやってよ」

「は、はい……」 ユーリはフィーロにお辞儀をしてモニカのあとを追っていった。まあ、何とかなるだろう。

モニカはユーリのが好きだと思う。見てれば解る。嗜好なんて皆人それぞれだ。多少頭大丈夫かコイツと思ったりするが、口出すことではない（レイジ以外だが）。が、何でああモニカが自分を目の敵にするのかは解らない。ガナツシュとかがユーリに近付いても特に何もしないのに、何故俺だけ。フィーロの永遠の謎だ。それでも、クランの仲間として、もう少し仲良くはなりたいたい。

無理な気がするけど。

自然に溜め息が漏れた。

「……。ありがと、フィーロ」シエリカが呟いた。

「何が」

「助けてくれて」

「ああ……」

シエリカは毒舌と魔術は一流だが体は弱い。モニカと取っ組み合って勝てるわけがないのだ。だから助けただけである。キャットフアイトなら好きにやっつてると思うが、一方的に殴られるのは見ていて気分はよくない。それが姉なら尚更だ。

「っーかお前が突っ掛かるからこうなるんだろ？ もう少しお淑や

かに出来ないか？」

「フィーロはそっちの方が好きなの？」

「は？」

そんなことを言われて、フィーロは少し考えてしまった。お淑やかに振る舞うシェリカ。いや、絵図的には大丈夫だが、本来のシェリカを知る身としては。

「……………似合わない……………かな」

自分で言って自分で否定してたら世話ない。

「でしょう？」

「そうだな」

笑いが漏れた。

久しぶりに笑っているという実感が湧いた。そうか。俺は笑えるんだな。なんか少し嬉しかった。

「それより、あの爆乳女とどこで何をしていたかじっくり聞かせてもらおうよ」

「爆乳って……………ユーリとは」

「モルキーパー風紀委員です！ どこですか。喧嘩があつた場所とは」

「げっ……………」

「やば……………逃げるわよ、フィーロ！」

「お、おう」

フィーロはシェリカに手を握られて走りだした。すぐに追い越して引つ張る形になったが、手は放さなかった。

「あつ！ ま、待ちなさい！」

待てと言われて待つ奴がいるわけないだろ。フィーロとシェリカは廊下を駆けた。

第一章(10) 開会式

F i r o

「あ……………」

「情けない声だすな」

ガナツシュに小突かれた。

「いや、だつてさ……………」

「だつてじゃない」

そして一蹴された。

同時にワーっという歓声が上がった。フィーロは気だるそうに前の特設ステージを見た。

『レディースタンドジェントルメン 紳士淑女の皆さん！ ようこそお越しくださいましたあ！』

「そりや学園行事だから全員参加だろうに……………」

「黙ってる」

『わたくし、生徒会長のリリーナ・メルティノーズです！ リリち

やんって呼んでね 』

リリちゃん！

むっさい歓声。気持ちわりい。何がリリちゃんだ。阿呆かコイツら。

リリーナ・メルティノーズは学園で初めて三年生にして生徒会長に選ばれた初めての女性生徒会長だ。初めて尽くしだ。伝統的に四年生が選ばれていたところに台風の如く現れたリリーナは、その美貌とうか愛らしさで圧倒的支持を集めた。特に、男子陣の。

性格もいいらしく、女性陣の支持率も高い。もはや学園のアイドル的存在である。

その生徒会長は現在何故かメイド服を着て、マイク片手にきゅぴきゅぴしている。男子陣には絶景か。俺はどうでもいい。そんな気分じゃない。

『さあー始まりました、クランコンテスト！ 今年もいつちばん素敵なクランを決めちゃおー！』

うお

っ！

高らかに上げられるむっさい腕の数々。壮観だね。見てて吐き気がするや。

クランコンテスト。

遂に始まってしまった地獄の祭典。いつそのこと寮部屋で引き籠もってしまいたかった。結局ガナッシュに引き摺られるわけなのだが。

『今年も多数のクランが応募してくれましたあ！ みんな、ありがとうー！』

W o ! F u u u u u u u u u u ! P i i i i i i P i i i i i i i i i i ! L . O . V . E . リ . リ . ちゃん ! F u u u u u u u u u u !

「なあ、ガナッシュ……俺、もう帰っていいかな……」
「堪える」

これに耐えて何かいいことあのかよ。つかガナッシュも辛そうじゃね？ 何で耐えてんだよ。もう帰っても問題なくね？ フィー口は頭が痛くなった。

リリーナがルールなどを説明していく。歓声が煩過ぎてほとんど聞こえないが。まあ、ルールはガナッシュがよく知っているだろう。かなり舐め回すようにルールブックを読んでいることだろう。結構楽しみにしてたからな、クランコンテスト。

「いや〜絶景やな」

レイジが話し掛けてきた。

「ああ。見ると泣けてくるな」

「ちゃうがな。リリちゃんやリリちゃん。べっぴんさんやでホンマに。特にあの胸がええな。小ぶりやけどこう整っててさぞ揉み応ゲブア」

「寝てる」

「御愁傷様……」

ガナツシユのキドニーブローで沈んだレイジに手を合わせるフィ
ー口。悪いのはレイジだが、悼むくらいはしてやろう。

依然として歓声に包まれながら（フリー）トークを続けるリリー
ナを横目に、フィー口はガナツシユに話し掛けた。気になることが
あったのだ。

「……なあ、ガナツシユ。思ったんだが、部門ってよ、学年別に分
けるの無理じゃないか？」

クランは学年で統制されていない。バラバラでもいいのだ。カタ
ハネはたまたま一年生ばかりになっただけであって、四年生の中に
一人ぼつんと一年生がいたって構わないのだ。そんな状態で学年別
などどうやって決めるんだ。

「ああ、学年別部門はMVPみたいなものなんだよ」

「MVP……？」

「最終選考に残った上位チームの中から三名選ぶんだ。活躍した生
徒を。学年別で。それが学年別部門だ」

「部門って言うのか……それは。いや、別にいいけどさ。それじゃ、
お前……」

「そう。ボクらで一位から三位までを独占するんだよ。そうすれば
カタハネは一年生の中で最強だろう？」

ああ、もうこの馬鹿死んじゃえ。

にっつと笑うガナツシユを見て、真剣に願った。

十

部門は全部で六つある。

チームワーク部門、タクティクス部門、キャパシティ部門、ユニ
ーク部門、学年別部門そして 総合部門。

全て名前の通りだ。チームワークが一番協力性の高かったクラン
を。タクティクスは戦略性の高かったクランを。キャパシティは個

々の能力が総合的に見て高かったクランを。ユニークは一番格好よ
かったり、可愛らしかったり、面白かったり、とにかく、一番印象
に残った独自性の高いクランを選ぶ。

学年別においては、クランの表彰ではなく、クランコンテストで
の最優秀者上位三名を選出する。

それら全てを踏まえてどれもが平均的に高いクランが総合部門で
選ばれる。

全ての部門で優勝出来るクランは滅多にない。そんなクランは学
園外にある世界規模のクラン　たとえば《象牙の血盟》クラン・オフ・アイボリーや、《H
& B》ヘン・ター・バーくらいだ。

大体のクランは一つの部門に的を絞って入賞を狙う。自分たちの
クランの特徴を最大限に生かすのだ。

ガナツシユは学年別部門を念頭に置いているが、曰くファイロ次
第ではキャパシティ部門も狙えると言ってきた。つまり、本気でや
れと言っているのだ。迷惑な話である。

『今回はわたしのクラン《ラブリーブレイク》も参加するから、み
んな、頑張つてね　っ！』

Woo!

「やっと終わった……」

ファイロはぐったりした。始まる前からダメージだ。この精神的
ダメージを狙ってこんな馬鹿げたことをやっているとしたら、リリ
ーナ・メルティノーズは大した策士だ。っーか愛の逃避行ラブリーブレイク行って……
クランに付ける名前じゃないだろ。ネーミングセンスが絶妙ってい
うかぶっ飛んでる。

「生徒会長のクランまで参加か……今年が激戦だな」
ガナツシユが呟いた。

確かにそうかもしれない。

リリーナは一見馬鹿な娘に見えるが、レベル5。加えて、彼女は
本物の魔剣士だ。ガナツシユを偽者と言うわけではないが、あれは

はあくまで神具ユーカリスティアの力によって魔術を行使する。しかしリリーナは違う。彼女は本物の魔術士にして、細剣レイピアの使い手だ。それらの実力もまた彼女を生徒会長足らしめているのだろう。確か、エリックのクランも出るはずだ。名前は知らないが。「こりゃ本当に激戦だ……」
フィーロもまた、呟いた。

G a n a c h e

クランコンテストは上位十二チームを選出する。今回の登録数は百二十。およそ四分の三のクランが参加していることになる。この中から上位十二チームを選ぶのだ。確立にして十分の一。限りなく難しい戦いになることは必須だった。クランコンテストといっても中身は武と武の衝突だ。戦闘によって判定されていく。

最初は二十のブロックに分けてのリーグ戦だ。アピール戦といってもいいだろう。

十試合を行い、ブロック一位のチームを決める。今はその抽選会だ。

『はMブロックの三番でしたあ！ 次は』
長い。百二十もチームがあるのだ。最初から決めておけと思うが一応不正が起らないための配慮のようだ。

『次はクラン《カタハネ》！ 一年生のクランだあ！ リーダーのガナツシュ君、どうぞ！』

ようやっと呼ばれたと壇上に上がる。キャーっという悲鳴が上がった。女子の黄色い歓声。自分がそれなりに人気があるのは重々承知している。愛するイリア一筋のガナツシュにとっては何の意味もなさないが。

『いや、人気だねっ！ ファンクラブまであるんだって？』

マイクを向けてくる。ボクはクジを引きに来たわけで、インタビュ―を受けに来たわけではないのだが。頬に押し付けんばかりにマイクを向けてくる生徒会長。うざいことこの上ない。面倒なので「らしいですね」とだけ答えた。

かなり素っ気なく言ったのだが、いや〜んクール！ などとはしやぐ生徒会長。この人は常時頭がエキセントリックでクラッシュしているらしい。

色々声が聞こえてくるが、ガナツシユは無視してクジを引いた。番号はE-1。つまり、Eブロックの一番目だ。

『出ました！ カタハネはEブロックの一番！ 頑張ってくださいね では次は 』

次々人が上ってくる。じっとしていたら邪魔だろう。ガナツシユはステージを降りていった。

「Eブロックかよ」

降りてすぐフィーロが言った。

「嫌なのか？」

「いや、なあ。まさかのいきなりだからな……」

「何が」

「ほーっほっほっほっ！ シェリカさん！ 今日こそ決着の時ですわ！」

「フィーロ。頑張ろうね」

「ん？ おっ」

「きい〜〜〜っ！ 無視するんじゃないですわっ！」

ベアトリーチェだった。なるほど、Eブロックの四番目がアンセムスターだ。一年生クラン同士、いきなりの対決だ。ベアトリーチェはシェリカを目の敵にしているし、彼女からすればこれが決勝ていつても過言ではないのかもしれない。

「あ、ガナツシユ君」

犬耳の少女が近付いてきた。いつもの学生服ではなく、明るいベ

「ジユなどを基調とした防具を付けている。機能性は定かではないが、ファッション性はある。メーカーは……Castyか。女性用の服飾を手懸けるブランドだ。」

「モランか。いきなり当たったな」

「そうだね。お手柔らかにお願いね？」

「こちらこそ」

ふふつと笑うモラン。イリア以外の女性に興味はないが、モランは落ち着く女性だと思う。母性的とでもいうべきか。とにかく、いい女だと思った。

「何であなたはいつもいつも！」

「知らないわよ！ 煩いわね！」

「あーもう喧嘩するなよ……」

言い合うシエリカとベアトリーチェ。その間に入ってなんとか止めようとするフィード。見ていて何となく笑えた。モランと顔を見合わせ、二人で笑った。やはり、いい女だ。イリアには劣るが。

十

Eブロックの内分けは次のようになった。

一番、カタハネ。

二番、ドリームファクトリー夢工場。

三番、リトルリップ。

四番、アンセムスター。

五番、マッドボーズ。

この中で、リーグ戦を行う。勝ち点と、ブロック審査員の審査点の合計点数で順位が決定される。勝てばいいというわけではないのだ。負けていいわけでもないが。

「つかこれどこで戦うんだよ」

フィードが尋ねてきた。確かに疑問には思うだろうが、それを問うということはつまり、フィードはルールブックを全く読んでいな

いということだ。それをどやかく言つつもりはないが。時間の無駄だし。

「ん、戦闘はフィールドを用意される。魔術士学科の先生がいるからな」

化け物級の。

その言葉は呑み込んだ。

「はいっ、全てのクランの抽選が終わりました！では、魔術士学科のイネス先生、よろしくお願いします！」

生徒会長がそう言うと、ステージに人が現れた。

いきなり、だ。

まるで最初からいたような顔で、突如出現した。

イネス・ラトクリフ。

魔術士学科の教師。

《クロムウエル》の元幹部だった女だ。

クロムウエルは象牙の血盟やH&Bといった巨大クランの一つだ。だが、この二つとは違う点がある。

クロムウエルは魔術士だけのクランだ。創始者アルフレッド・クロムウエルの『万物を統べるは魔術なり』という理念のもと結成されたクラン。別名、ウォーロックガードン魔術士協会。またはディアボリックアーク魔性の方舟。

冒険者の組む徒党とは違うクランだ。キル下組合とでも呼んだほうが確かかもしれない。だが、彼らは確かにダンジョンを探索し、その功績を数多残している。故に彼らは確かにクランなのだ。

イネスはそのクロムウエルの上位にいた人だ。艶やかで、全てを凍えさせるような空色の髪に、絶対零度を思わせる青い瞳。群青の魔術士の外套を羽織ったその姿はまさに魔術士。

だが、ガナツシュにはそんなことはどうでもよかった。

青い魔術士を見つめた。

あれが。

「……大羅天を……知る女……」

小さな、自分にしか聞こえない声で呟いた。本意ではなかったの

縦四メートル横二メートルの弩デカイ扉が鎮座していた。運動場に。しかも、二十枚。ブロックの数と同じだ。

「どこに繋がってんだろ」

誰に言うつもりでもないが、口からそんな言葉が零れた。

「仮想空間よ」それにシエリカが答えた。「イネスの作り上げた仮想空間。二十も同時に創るなんてあり得ないわ」

「ふうん」

イネス先生を呼び捨てにしていることについては何も言わないでおこう。

「区切る範囲にもよるけど、それでも二十の空間を維持するなんて並みの魔術士じゃ無理なもの」

「シエリカは出来ないのか？」

「……………」

「出来ないのか」

「あ、あたしは細々とした作業は嫌いなもの！」

出来ないなら素直にそう言えばいいのと思う。

なんでもフィールドはランダムで中身が変わるらしい。中身を制作するのは何も無い空間を創るより難しいのだという。これを数日間維持する力を持つのは世界を探してもそう多くはないらしい。

イネス先生は確かクロムウエルから来たはずだ。よくあんなところから引き抜けたと思う。まあ、確かにクロムウエルなら優秀過ぎる魔術士も沢山いるだろう。イネス先生はその一人というわけだ。

クール美人のイネス先生。極寒野郎のヴァイス（先生）よりは尊敬出来る人だ。

フィーロたちがEと書かれた扉に向かうと、既に他のクランは揃っていた。気合い十分なようだ。ありがた迷惑である。

「遅いですわよ！」

ベアトリーチェがそう叫んだ。シエリカが反発しそうな雰囲気だったので、「我慢しなよ」と釘をさす。シエリカはうーと唸りなが

らも我慢した。何となく頭を撫でてやった。

「すまないな。遅れて」

ガナツシユが代表して謝る。開始までは時間があるし、謝る必要はないのだが。最後に来たのは確かだし、待たせた感じもあるので一応謝るに越したことはないか。フィーロはガナツシユを見てそう思った。

「い、いえ……ガナツシユ様はお気になさらないで下さい……」

ベアトリーチェもガナツシユ様に謝れたので、逆に恐縮している。すぐに後ろを向いて、「ああ……ガナツシユ様に謝らせてしまった……わたくしはなんてことを……」と呟いている。そっとしておう。

しかし、ガナツシユの人気は凄い。このままなら来年生徒会長に立候補しても勝てるんじゃないだろうか、あのリリーナに。まあ、でも男子票は入らないだろうから厳しいか。副会長ならいけるかもしれないな。副会長と書記は生徒会長が選ぶから選挙ないけど。

「みんなーっ！ 時間だよーっ！ 全員集こーうー！」

何言ってるんだアイツ。

やっぱり勝てるわ。ガナツシユ生徒会長になれるってこれ。

「じゃあ、一回戦の対戦チームは……一番と二番だね！ みんな、れつつらごーっ」

気が抜ける。わざとか。わざとやってるのか。だとしたら悪女だな。策士通り越して悪女だ。

フィーロはうなだれた。

「しゃんとしろ」

ガナツシユに小突かれたが。

「よう、一年坊主。夢工場のクレジオだ」

フィーロとガナツシユの下に、男が近付いてきた。クレジオと名乗る男は胸に銀のバッジをしている。三年生か。クレジオからは自身というか、こちらを舐めている感じがした。

「お前らがカタハネね……。ま、楽しませてくれよ？」

明らかに舐め切っている。

エリックとは違い、ムカつく野郎だ。フィーロはあくまでレベル1だし、何も言わなかったが、ガナツシュが前に進み出た。

「ご期待に添えられるよう頑張りますよ……工場長」

「な……っ！」

「ぶっ……くく……」

「行こう、フィーロ」

「おう……ぶっ……工場長……くく……」

ガナツシュのセンスがドつばにハマったフィーロは腹を抱えてガナツシュについていった。わなわなと肩を震えさせるクレジオの真つ赤な顔はかなり笑えた。

はつきり言って、そんな名前を克蘭に付けるからだろう。

笑いは止まりそうになかった。

第一章（11） 一回戦

F i r o

扉を潜ると、不思議なことに、森の中にいた。鬱蒼とした密林だ。^{ゲイト} 霧囿気は蛮族の森に似てなくもない。

「フィルシーフォレストだな」

ガナツシユが呟いた。

「フィルシーフォレスト？」

「汚れた森だ。ランダムでフィールドの中身が変わるってあつたら。燃え盛る山、極寒の荒野、腐敗した草原、血みどろの雪原、虚像の城、泣き叫ぶ館、そして汚れた森だ」

「嫌がらせだろそれ。まともなもんが一つもないじゃねーか」

「なんせイネスだもの」

シエリカが溜め息混じりに言う。イネス先生ってばそんなに陰険な方でしたか。俺の期待って裏切られてばっか。もう泣いちゃおうかな。

「この森まるでアンタみたいなのだわ」

モニカがフィーロの後ろの通りぎわにそんなことを言ってきた。

あれ、おかしいな。目に塵でも入ったかな。ちよつと霞んできたや。

『では、第一回戦は10カウント後に始める』

どこからともなく聞こえてくる声。これはヴァイス（先生）の声だ。リリーナは選手だから、バトンタッチしたのだろう。だからつヴァイス（先生）はやめてほしかった。テンション下がるから。

『十……九……八……七……』

カウントダウンが始まった。相変わらず気だるそうに言いやがる。各々が武器を構える。

『六……五……四……三……』

フィーロも 不本意だが 剣を抜いた。黒光りする実用一辺

倒の直剣。シェリカの入学祝の剣。武器にはあまりこだわりはないが、今では馴染んでいる……と思う。

『……………始め!』

「行くぞ……………」

ガナツシュが叫んだ。

戦闘のルールはいたってシンプルだ。制限時間は五十分。フィールドに入ると、ランダムで攻撃側と防衛側が決められる。今回フィールドたちは攻撃側だ。

攻撃側はフィールドの防衛側の持つ旗フラッグと呼ばれるものを破壊する。それが勝利条件だ。防衛側はその旗を時間内に守り切れれば勝ちだ。

ちなみに防衛側は逃げるだけでなく、攻撃側に攻撃することも可能なのだが、少し細かいルールがある。これは一応攻撃側、防衛側の両方に適用されるルールだ。

一つはマスターが戦闘不能に陥った場合。クラン内のマスターが戦闘不能に陥ったその時点でそのクランは敗北が決定する。カタハネのマスターはガナツシュ。おいそれと負ける奴ではないが、万が一ガナツシュが負けた場合はそこで試合終了だ。反対にフィールドたちが工場長をぶつ倒せば、カタハネが勝ちだ。

だからガナツシュさえ無事ならフィールドたちはいくらでも欠けていい　というわけでもない。

もう一つのルール。

クラン体系の維持。

クランの最低人数は四人だ。それ以下になるとそこで試合終了となる。つまり、フィールドたちの中で四人欠けた時点で敗北なのだ。クランコンテストゆえの変則的なルールである。

カタハネの戦い方でポイントとなるのはシェリカとユーリだ。

シェリカは魔術士としては天才だが体力的には人並み以下だ。だからもし詠唱時に攻撃されれば一瞬で負ける。シェリカは高速詠唱が得意だが、それでも上級の要素魔術になると時間は掛かる。フィ

「一口たちはその間シェリカを守らなくてはならないのだがこの馬鹿は前線に出るから困るのだ。」

「ユーリは治癒士だ。唯一傷の回復を行える。万が一倒れても、ユーリの施術で回復できたならそのまま戦闘に復帰できる。治癒士はある意味クランコンテストの一つの要だ。しかしユーリは戦闘力を持たない。故に彼女を護衛するのは必須となる。」

「つまり戦闘では必然的にシェリカとユーリに護衛をそれぞれ回さなくてはならない。近戦学部は全員で二人。中戦学部も二人だ。レイジは性質上、援護が主体。遠戦学部のクロアは完全援護。となる」と最前線に出るのは一人とシェリカの護衛役一人。

安全なのは 後列支援のユーリの護衛。

「ガナツシュ！ 俺はユーリの護衛にまわる！ あとは頼んだ！」

「阿呆かア つ！」

「ユーカリスティアを横薙ぎに振るうガナツシュ。フィーロはしゃがんで避けたが、髪を掠め、二、三本舞った。」

「あ、危ないだろ！ 何するんだ！」

「黙れ！ 何がユーリの護衛だ！ 護衛もまともにしないで！」

「お前は前線だ馬鹿！」

「前線みたいな危ない場所行けるわけねーだろ！」

「じゃあなんでお前は剣士なんだよっ！」

「喧嘩してる場合やないで！ 敵や！ 距離百五十！」

「無駄に目と耳のいいレイジが言うのだ、間違いはない。変態でも盗賊学科としては才気溢れる男だ。」

「くっ………全員戦闘態勢だ！ モニカはユーリにつけ！ フィーロとボクは前線だ！ シェリカの護衛はボクがやる！ クロアは好きに射て！」

「護衛はフィーロにしてちょうだい！」

「我が儘言つな馬鹿シェリカ！」

「……っ！ アカン！ 魔術や！ 全員伏せいっ！」

「フィーロはそれを聞く前に、咄嗟にシェリカの方に飛んで、抱き

抱えて伏せた。途中、「きゃっ」という声が聞こえた気がしたが無視だ。

伏せる寸前、目の端で光る何か走っていた。電撃や炎の光ではなく、宝石が光で反射するような……これは、氷？ 地面に顔面がぶつかる寸前にフィーロは氷のようなものを見た。

「ぶえっ……」そして顔面が地面に埋もれた。

S h e r i c k a

フィーロにまた抱き抱えられてしまった。ここ最近幸せの連続だ。このまま行けるとこまで行ってしまえるのではないだろうか。

フィーロは勢い余って顔面から飛び込んでしまったようだ。大丈夫だろうか。怪我していたらどうしよう。

「ぶはっ……っ……大丈夫かシェリカ？」

「へ？ あ、うん」

大丈夫と聞きたいのはシェリカのほうだ。なのに起き上がったフィーロは自分よりあたしを心配してくれた。こういうさり気ない優しさがあるからフィーロは好きだ。

「クソ、魔術士がいたのか……！」ガナツシュが憎々しそうに言って立ち上がった。「……レイジ！」

「アカンわ。逃げられてもうた……」

「クソっ」

「スマンな」

「いや、お前の所為じゃない」

防衛側は何もむきになって敵を倒す必要はない。奇襲と逃亡を繰り返すのも一手だろう。そうやって相手を疲弊させ、時間切れを待つのだ。相手は三年生と二年生のクラン。なかなか戦い慣れしている。

でも、あの魔術は大した魔術ではない。

「ガナツシユ、落ち着けよ。大した魔術じゃない。シェリカの方が何倍も上だろ」

フィーロがそう言った。一瞬、抱き付きそうになってしまった。それくらい嬉しかったのだ。

「解っている……」

「さっきの魔術、多分水の要素魔術だよな。氷の矢かなんか……」

「多分、呀霽槍よ」

フィーロの言葉ですぐに思い至った。さすがあたしだ。天才。

「呀霽槍……氷……水の精霊……待て、水が近いのか……？ レイジ」

「んー……、微かやけど水の流れる音がするな。川でもあるんちゃうか？」

「そうか……なら、いい」

ガナツシユが微かに笑った。不気味だ。気持ち悪い。すぐに思案顔になる。

「レイジは索敵を頼む」

「あいよっ」

変態の姿が掻き消えた。シェリカの目では捉えられない。馬鹿速かった。一瞬残って見えたのは残像だろうか。

ふと、気になることがあった。

「ねえ」

「ん？」

「フィーロは今の見える？」

「今のって、レイジのか？ ……まあ、全部はさすがに無理だけど、飛び上がるところ辺りまでは」

「ふうん」

これがフィーロとシェリカの差だ。フィーロはいつも自分に劣等感を持っているようだ。はつきり言って、シェリカだってフィーロに劣等感を持っている。今でこそマシだが、昔は体が弱くて頻繁に風邪を引いていた。面倒と言いつつも看病をしてくれたのはいつ

もフィーロだった。いい思い出だ。

少し体も丈夫になって、シェリカは大体の相手には勝てる自信があった。魔術士として、負けるわけがないと。それでも唯一勝てないと感じたのはフィーロだけなのだ。何せ

「シェリカ」

「な、何？」

「いや、ぼーっとしてたから。大丈夫か？」

「だ、大丈夫よ」

「そうか。ならいいんだ」

フィーロはそう言って立ち上がった。離れてしまったことに少し寂しさを感じた。何だろうか、この虚無感。心に穴が開くような。待って。行かないで。そばにいて。手を、伸ばした。手は、フィーロのズボンの裾を掴んだ。

「ど、どうした……？」

「え、あ、ごめん。何でもないわ……」

本当に、どうかしている。昔のことを思い出したからだろうか。

「そ、そうか。怪我してるならユーリに診てもらえよ？」

「あ、怪我されてるんですか？」

「ちっ……」

「えっ……」

忌々しい爆乳女が近付いてきたが、舌打ちで追い払った。お前は猫耳変態女といちゃついてればいい。

「……フィーロ」

「クロアか。あと何分？」

「……三十五分」

「スタートから十五分か。索敵がみそだな。どうすんだ、ガナツシユ」

「こちらにはレイジがいる。あれは変態だが仕事はする」

「ま、何にせよ魔術で奇襲されたならお返しは大体決まってるけどな。いけるか、シェリカ？」

フィーロは口元を少し吊り上げながら、シェリカに言った。シェリカはフィーロの言いたいことがよく解った。だからシェリカも不敵に笑って、

「当然よ」

そう言った。

F i r o

ああ、なんつーか、面倒臭い。ぶつちやけ、帰りたい。

だけど、やっぱり工場長ぶつ飛ばしてから帰ったほうがなんぼか気持ちいいだろう。ということ、三ヶ月分くらいは働こう。

どうせ工場長のとこの魔術士はあの程度だ。本気だろうが本気じやなかるうが、フィーロは大体見たら魔術士の實力は解る。何年もシェリカのムラのある魔術を見続けているのだ。あの魔術士は、弱い。フィーロが勝てなくても、ガナツシュなら余裕だろう。なら大丈夫だ。

フィーロに出来ることは少ない。というか、ない。仕方ないから探す。見つけた仕事をやればいい。

「見つけたで！ 距離は五百や！ ちょいと遠いで！ 進路は北東や」

レイジが戻ってきた。五百か。近くて遠い。北東か。離れていることになる。じっとしていれば距離は開く一方だ。一キロ以上離れたら少しまずい。

「近付いている間に同じ手を食う可能性もあるな」

「んー……じゃあシェリカだけ連れていったらいいんじゃないの？ 護衛と」

「……そうだな。一番それが手っ取り早い……が、失敗したらまずいぞ」

「このあたしが失敗するわけないでしょ？」

「……………自信過剰」クロアがぼそりと呟いた。

「なんですって!」

「まあまあ。……………で、どうする?」

ガナツシユに問う。なんだかんだでマスターだ。最終決定権はガナツシユにある。コイツが判断をミスしたら、多分皆愚痴ったりするだろうが、詰^なったりはしない。ガナツシユが決めたことに従ったのは自分たちだからだ。

フィーロはガナツシユを見た。迷っている様子には見えない。もう決まっているのだろう。

「フィーロ、シエリカを連れて奇襲を。レイジは案内しろ。…………ボクたちは下から陽動だ」

「解った。…………じゃ、これ三ヶ月分の働きってことで」

「しばくぞ」

与えられた仕事は楽だ。シエリカを連れていく。ヤバくなったら逃げる。移動とシエリカを運ぶの前に前払い一ヶ月、後払い二カ月だ。失敗しても一ヶ月分の働きだ。少なくとも一ヶ月は後列支援だ。

「あの……………というかどうして旗を無視されてるのですか? そつちのほづが目的では……………」

「アンタ、本当に馬鹿ね」ユーリの問いにシエリカは鼻で笑った。

「クランまるまるぶつ潰したほづが早いからに決まってるじゃない」
「ぶつっ……………」

「ユーリ、気にしなくていいのだわ。あれは野蛮な女なの」
モニカがユーリの肩に手を添えた。

「誰が野蛮よ!」

「アンタ以外にいないのだわ」

「ぶつ潰す!」

「やめるシエリカ」

「むぐっ……………」

フィーロは魔術を唱えようとしたシエリカの口を右手で塞ぎ、左腕で羽交い絞めにして制止させた。右手は噛まれないようにすぐに

放す。

「……っ、どこ触ってるのよファイロ！」

放すと同時にシェリカが叫んだ。凄^レい剣幕だ。どことなく顔が赤い。

「え？ 何が？」

ファイロは素で聞き返した。それが間違いだった。シェリカが喚く。

「ファイロのエッチ！ スケベ！」

「はあああっ！？」

「腕！」

「腕？」

自分の左腕を眺めた。丁度、シェリカの胸の辺りに通っている。

……胸？

漸く理解したファイロはぱっと手を放した。む、確かにちよつとした膨らみがあつた気がしなくもない。多分、正解なんだろう。唸りながらこちらを睨んでいる。

「わ、悪い」

「……エッチ」

「……」

ジト目のシェリカ。いや、つか事故じゃないか。そもそも、突っ掛かるうとしたお前が悪いのに。何だこれイジメか。無性に腹が立つて、つい、口走ってしまった。過去最大級のミスだ。

「……大した胸もないくせに」

「なっ……なんですってっ！？」

シェリカの目が燃えた。いや全身が燃えている。そんな感じの怒りの闘^{オーラ}気が揺れている。ヤバイ。ミスった。これは死ぬ。

「ファイロ……」

じりじりと近づくシェリカ。悪魔かなんかに見えた。

「ご、ごめん冗談マジ冗談！ 俺はシェリカくらいのほうが好きだつてー！」

「え……」

「胸は小さいほうが最高オー！」
やけくそだった。

死に物狂いで自分が何を言ったか今一つ理解していなかったが、シエリカの動きは止まった。成功か？ 下を向いている。肩が震えているように見えた。失敗だろうか。

「シエリカ……？」

「な、なにっ!？」

「いや、何だ……顔赤いぞ」

「な、何でもないわよ!」

「でも」

「お前らは早く行けええっ!」

スパンと頭を叩かれた。ガナツシュだ。後頭部がひりひりする。

右手で押さえた。「……痛いじゃないか」

「黙れ! いつまでやってるんだ! 時間が惜しいだろ! 痴話喧嘩はあとでやれっ!」

まったく。短気は損気だぞ。

まあ、確かにあとでいい。というか、今後の安全のために忘れ去りたいのは事実だ。

フィーロに出来る仕事は少ない。与えられた仕事くらいはしよう。

「シエリカ。行こうか」右手を差し出した。

「……うん」

急にしおらしくなったが、シエリカはフィーロの右手に掴まった。引き寄せて、抱き上げる。いわゆる、お姫さま抱っこと呼ばれるやつだ。背負うよりはまだ楽だ。手は不自由になるが。

「……っし。変態^{レイシ}、頼む」

「変態ゆーな。守備範囲が広いだけやオレは」

やけに広いな。守備範囲。

「何にせよ、変態だ。……じゃ、ガナツシュ、行ってくる」

「早く行け」

クロア、ユーリ、モニカを順番に見回した。クロアは静かな闘気オーラが揺らめいていた。なんか怒ってるっぽい。ユーリは自分の胸を押さえて「小さくなれ小さくなれ小さくなれ」と呟っていた。……大丈夫だろうか。モニカは……ガッツポーズしていた。本当によく解らない。カタハネは変な奴ばっかりだ。つか、誰も激励の言葉をくれない。チームワークのなさが見て取れるよ全く。

「じゃ、行くで」レイジが促す。

「解った。いつでもいい」

「あいよ。ついて来いや」

レイジが飛び上がった。

「シエリカ、舌嚙むなよ」

フィーロも飛び上がった。「ひゃあっ」という声が聞こえた気がしたが、無視した。

十

レイジは慣れた感じで木々の太い枝を伝っていく。フィーロはそれに追隨する形になっていた。レイジが本気を出せば置いていくことも可能だろう。今はそういう場合ではないので、減速してくれている。それでもレイジは速かった。

ついでに言うと、レイジの伝う枝ばかり追えない。人が乗れば枝に負荷がかかる。レイジー人なら問題ないが、フィーロはシエリカを抱えているため百キロほどある。レイジは六十ちよつとだろうか、枝には結構な負荷がかかっているだろう。だから、レイジが若干細めの枝を通った場合は、フィーロはコースを変えなくてはならないのだ。フィーロはそれが面倒臭かった。

「しっかし……フィーロとシエリカが痴話喧嘩してる合間に結構進みよったで！」

「悪かったよ！」

「別にええけどな！」

レイジはそう言ったきりあとは何も言わず、黙々と木々を伝っていった。フィーロがついて来ているか確かめたのかもしれない。「……フィーロ」くいくいと袖が引つ張られた。視線だけ下を向ける。

「何だ？」

「お、重くない？ あたし」

「今更だ。見たら解るだろ？」

「そ、そう」

「変なこと言ってるな。舌嚙むぞ」

「うん」

「フィーロ！ 左や！」

レイジが叫んだ。自分でもよく反応できたと思う。着地した枝を蹴り、後退する。目の前を黒光りする何かが通り過ぎ、木に刺さった。

細身の刀子のようなものだ。クナイか。盗賊学科や忍者学科シノビみたいな輩が使う。暗器というよりは投剣か。

「大したスピードだ。人を抱えているとは思えないね」

左から声がした。だがフィーロはそちらを向かなかった。姿の見えない敵の声にいちいち反応したら馬鹿を見る。

「しかも意外に冷静だ。レベル1とは思えない」

今度は右から聞こえた。移動しているのか、それともそういう仕掛けなのか。何にせよ、鬱陶しい。

首もとがムズ痒くなった。フィーロは飛び上がる。「ちっ……」

クナイが足を掠めた。タイミングがずれたか。こちらにはシェリカがいるのだ。自分の体重だけで考えてはいけなかった。もう一段上の枝に乗る。折れそうだ。木は上に行くほど枝は細くなる。すぐにレイジの近くの枝に降り立った。

「ヤバいな。暗殺士学科アサシンやで多分」

レイジがそう言うなら本当にヤバいのだろう。

「ま、学科なんかどうでもいいや。大体、向こうが俺たちに気付く

算段があるから奇襲なんて出来たんだろうな。予想はしてたさ」

「ほな、オレが行こか」

「当然。……じゃ、頼むわ」

「お礼はベッドの上でええで」

「黙れ」

あの姿の見えない刺客さんはレイジに任せよう。フィーロの仕事は戦闘ではない。

「レイジ、敵は」

「変更はないで。ここから北東、距離は……二百と五十つとこや相も変わらず目のいい野郎だ。

「了解。シエリカ、準備よろしく」

「解ってるわ」

シエリカの自信満々で威風堂々な物言いに、苦笑する。大した自信だ。だけど、それに値する力は持っている。シエリカは天才なのだ。

フィーロはシエリカを抱えたまま、目的地まで駆けた。

Reiji

大体は予想していた。

奇襲を開始いきなりかけるとなると、斥候が必要だ。自分と同じような。気配も多少感じていた。レイジは大体、相手の気配で学科が解る。盗賊には盗賊の、暗殺士には暗殺士の、忍者には忍者の気配がある。気配、では少し語弊があるか。雰囲気と言うべきかもしれない。

その勘にも似たものは、未だ見えざる敵を暗殺士学科と判断した。暗殺士は厄介だ。盗賊は基本的にマルチな能力だが、暗殺士は名前の通り、暗殺の一点に特化している。奴らは影だ。忍者は暗殺より斥候で彼らもまた影のようだが、暗殺士は違う。地を這うような

疾風のような影を忍者と例えるならば、奴らは光を呑み込むような影だ。

リムーバー。

レイジは暗殺士をアサシンとは呼ばず、リムーバーと呼んでいた。それは尊敬などではなく、悪意を込めて。奴らは障害を排除する者だ。

「君が盗賊学科の……名前は忘れたや。奇襲をかけるつもりだったのかな？」

「だとしたら何や」

「浅はかだね」クスリと笑った気がした。「僕はもう三度目なんだよ、クランコンテスト。君たちの考えなんて、大体読めてる」

「……さいか」

粘っこい声を聞きながら、レイジは、

小さい。

そう思った。

結構強いのかもかもしれないと思っていたが、大したことはなさそうだ。レイジはそのように結論づけた。

「おっさん、シヨボいなあ」

だから思ったままのことを口にする。

「何？」

「二、三年ならどれくらい強いかと思ったけど、大したことあらへんで」

「そついう減らず口は……」

バシユツという音と同時に、四方八方からクナイが飛んできた。予測していたことだ。焦りはない。レイジは飛び上がって回避した。

「勝ってから言おうか一年生っ！」

目の前に敵は現れた。茶髪の切れ目の男だ。レイジとは違い、あまり鋭くない。いやらしい感じた。だから暗殺士は嫌いなのだ。夕イブじゃない。それだけで殺すに値する。

口はにやりと笑っている。勝利を確信した笑みだ。手には短剣。

刃渡りは三十センチ。それを逆手で握っている。暗殺士特有の恍惚とした表情で、その刃を振り下ろした。

本当に、馬鹿である。

「なっ……」

敵の短剣は空を切った。

焦っただろう。男が切ったのは、レイジの残像だ。

「ゆーたやる」男の耳元で囁きかけた。背後から。「おっさん、弱いつて」

トン、と首を叩いた。軽い感じで。実際はかなりの衝撃があるはずだが。

「かつ……」

予想外の攻撃で気を失った男。だが相手は曲がりなりにも暗殺士。油断はしてはいけない。止めはさす。自由落下を始めようとする男の背中を一気に蹴りつけ、下に叩きつけた。仮にも暗殺士だし、死ぬことはないだろうが、あばらの一本や二本は逝っただろう。レイジは蹴った反動で飛び上がり、木の枝に着地した。

土煙が立ち込める下を見て、呟いた。

「オレは最速の男やで。アンタごときに捕まりまへんわ」

そう言って、北東を見た。もう男に興味はない。先行した仲間の下に行かなくては。

「久々に飛ばそ」

レイジがぼそつと呟いた次の瞬間には、その姿はそこにはなかった。

第一章（12） 一回戦

Ganache

ガナツシユたちは駆けていた。ファイルシューフォレスト汚れた森の中を。他に生物はいない。さすがにそこまでは生成できなかったのか、それとも面倒臭かったからか。イネス・ラトクリフの考えは解らない。解りたくもない。

レイジが差していた方角は北東。移動経路は解らないが、とにかくにも北東に向かい続けねばなんとかなるのだが。

「……もう少し速く走れないのか!？」

首だけ振り返る。後ろにはモニカとユーリ、そしてクロアが走っている。ユーリは既に肩で息をしている。シエリカに次いで体力がないのがユーリだ。

「す……すい……すいません……」

「ユーリはこれが限界なのだわ!」

偉そうに言うな。因みに叫んだモニカは息は切れていない。戦闘要員だから当然ではある。いつそのことモニカに担がせて運ぶのも一手だが、仮に奇襲を受けたら対処できない。ユーリには頑張ってもらおうしかないのだ。

その後ろをクロアが無表情で走っていた。疲れているのか疲れていないのか、表情からは今一つ解らない。身長が低い所為で、こちらのスピードに追い付いていない。ユーリのスピードと大差ない。

……やる気がないだけかもしれない。

にしても、これは陽動以前の問題だな。前途多難だ。溜め息が漏れそうになったその時だった。

ズン。

鈍い音が聞こえた。近い。北東からだ。まさか。

「はあ、はあ……も、モニカちゃん……はあ、はあ……今の音……」

「解らないのだから。取り敢えず何かがあったのは間違いないだろうけど……」

「急ぐぞ！」

音源に辿り着いたガナツシユたちは息を呑んだ。

「これは……」

「……相手」

「……肋骨が折れてます。気は失ってますが、息は……あります」
無理矢理息を整えたユーリが黒尽の男に手のひらをかざして言った。治癒士の診察だ。エクスプローション敵対クランにする必要はないが、ユーリはこ
ういう性格だ。仕方がない。

「……暗殺士学科」

クロアが呟いた。

暗殺士学科。コイツがか。やられているということは、こちらの誰かが倒したということだ。魔術による外傷は見当たらない。フィードかレイジだ。多分、レイジだろう。フィードはシェリカを運んでいる。レイジにシェリカを預けるとは思えない。むしろあの馬鹿はレイジに行けと言うはずだ。

レイジの戦闘能力は重々承知していたが、ガナツシユの想像以上かもしれない。見たところ相手は三年生だ。しかも、学科で一、二位を争うスピード系の暗殺士学科だ。三年生ともなれば経験値も高いし、技術力もあるはず。しかしこの男には外傷がほとんどない。骨が折れているくらいだ。戦闘の痕跡が少なすぎるのだ。おそらくは、それほど時間がかかっていない。

レイジ。

本当にただの変態ではないらしい。もうこの場にはいない。もう向かったのだろう。自分たちも、早く追い付かなくては。

「ユーリ、そろそろ行くぞ」

「え……でも」

「よく見る」

「……あ、か、身体が……！ 消えていきます！ ど、どこに……！？」

薄く透けるように消えていった男を見て、ユーリが慌てた。

「落ち着け。戦闘不能者が戦線復帰出来るのは倒れてから三分以内だ。いつまでも回復可能にしたらキリがないからな」

「……そうなんですか」

安堵の表情を漏らすユーリ。この女は敵味方というものを区別しないのか。短所とも長所ともとれるが、今はもう少しカタハネの治療士としての自覚を持ってほしい。

どちらにせよ、急がなければ。ガナツシユは前を向いた。そして何かを見た。

「あれは……」

S h e r i c k a

フィーロにお姫さま抱っこをされてから十分が経った。あまりに心地よくて、眠りそうになってしまった。「あれか……」というフィーロの言葉が耳に入らなかつたら、本当に寝ていたかもしれない木の枝の上から眺める。視線の先には克蘭《ドリームファクトリー夢工場》の姿。ふざけた克蘭名だ。距離は五十。目と鼻の先だ。

「高位の要素魔術なら一発だろうけど、奇襲は無理だよな」

「そうね」

確か敵は全員で八人。一人は変態が倒しているだろうから、あと七人。四人削れば勝ちだ。シェリカの頭に旗のことは既になかった。

「……つかちよっと待て。どう見ても二人しかいないんだけど」

「二人？」

「八人だよな相手。一人はレイジがやっただろうし、七人だろ？」

五人も足りない」

「おかしいわね」

あの変態はこのことに気付いていたのだろうか。変態は目がいい。無駄な能力だが、斥候としては役立つている。

「旗もない。つーことはあれだな。罠だ。あれは」

「騙されたってこと？」

「多分。……ん？」フィーロが目を凝らした。すぐに表情が変わる。「っ……………！ ヤバい！」

首ががくつとなりかけた。いきなりフィーロが飛び上がったのだ。「ぐっ……………」そんな呻き声を上げるフィーロ。バランスを崩し、下に落ちる。シエリカは胃が縮むような感覚に陥った。ずん、と地面に着地したフィーロはシエリカを降ろした。膝を突くフィーロ。その顔は苦痛に歪んでいた。

「ど、どうしたの!？」

「矢が刺さった……………めっちゃ痛い」

「矢!？」

見ると足に矢が刺さっていた。黒いズボンなので目立ちにくいだが、赤黒い何かがじわじわと広がっている。何かは血だ。誰が射った。さっきの奴らだ。距離は五十はあったはず。それを射めいたのか。真っ直ぐ。シエリカたちを狙って。

「下がれシエリカ……………来るぞ」

フィーロがそう言った瞬間、

「ヒイ

ハア

ッ!

上空から影が飛び込んできた。

速い。

そいつは両手に似たような片刃の妙に振り返った短剣を振りかざし、シエリカたちに飛び掛かってきた。

ぶおん、という何かを振る音がした。黒い何かが目の前を走る。

フィーロが剣を振るったのだ。ほぼ真上に。丁度、飛び込んできた敵に向かって。

「おおっとおっ!」

敵はあろうことか空中で身体を独楽のように回転させた。腕を真

っ直ぐ伸ばしている。短剣の刃が外向きになる形だ。ガチンという金属の衝突音とともに敵はシェリカたちの左側に飛んで着地した。

「へえ〜……やるでなくいい？」

敵は見たところ三年生だ。身体にフィットするタイプの黒いボデイスーツの襟元に銀色のバッジが見えた。相手はニヤニヤしながら笑っている。

「おっほっ　！　そっくりさん！　もしかして双子カナ？　女の子の方意外にタイプ」

妙にテンションが高い。不快だ。物凄く不快だ。

フィーロが矢を抜いた。血が一瞬勢い良く吹き出す。少し顔を歪めた。敵はニヤニヤしたままだ。フィーロが立ち直るのを待っているのだろう。気に食わない。燃やしてやる。シェリカは詠唱に入ろうとした。

しかし。

「　ふやあっ!?!?」

フィーロに引き寄せられる。何を、そう言いたかったが、ガチンという金属音が邪魔をした。

背後には無表情の男がいた。ニヤニヤ顔の男と似たようなボディスーツを付けているが、腰には矢筒と弓を掛けて、手には短剣を持つていた。

「モロ奇襲食らったのは俺たちだったってわけね……」

フィーロは面白くないといった表情で呟いた。つまり、読まれていたということか。

「しょうゆーこと〜　万一負けてもオレら二人だしねえ〜。五人も向かえばあちらさんもたじたじだろ〜？」

「……降参するなら傷は付けない」

「もすぐもう一人来るだろうしねえ〜？　魔術士がかえて三対一はきついつしょ〜？」

もう一人とはさっきの奴か。変態が負けたとでもいうのだろうか。だとしたらまずい。フィーロはシェリカを守りながら戦わなくては

ならないのだ。相手がシエリカに詠唱をさせる時間を与えるとは思えない。絶体絶命だ。

シエリカはフィーロを見た。不安になっているのか。らしくない。自分はこのなに弱かったのだろうか。違う。弱気になってしまっていただけだ。多分、フィーロがそばにいるから。

「……三ヶ月分は働くって言ったからなあ……」頬を掻きながらフィーロはそう言った。面倒臭そうな表情ではあったが、目だけはそうじゃなかった。「やるしかないだろ……!!」

掻き消えた。速い。一気にシエリカが気付いたときにはフィーロはニヤケ男に突きを放っていた。しかしニヤケ男は難なくそれをジャンプで躲す。フィーロは追撃をするでもなく、物凄い速さでシエリカのもとに戻ってきた。シエリカの右側すれすれに剣を振り下ろす。少し怖かった。

ざつという音がした。無表情男が片膝を突いている。今、シエリカは狙われたのか。フィーロはそれを防ぐために斬り掛かったのだ。「一對多ってあんまりたくないんだけど……シエリカ、魔術の準備は頼むぞ」

「え、あ、うん」

フィーロにそう言われて、シエリカは頷く。急いで触媒を取り出した。アクバタの樹蜜と銀の指環。長い詠唱はフィーロの邪魔になる。なら、短い詠唱かつ強力な魔術。近場に一番いる精霊は二つ。その中で思いつくのはこれしかない。問題は、詠唱のタイミングだ。フィーロは駆け出した。無表情男の方だ。横薙ぎに振るう。無表情男はそれを飛んで回避した。

「こっちもいるぜっ……!! ヒャ

ハア

ッ!

ニヤケ男がシエリカに迫った。空中だ。短剣を目の前でクロスさせている。シエリカは魔術を唱えようとした。だが無理だ。間に合わない。

「動くなシエリカっ……!!」

背後でフィーロが叫んだ。身体がぴたりと止まる。ただ硬直しただけだ。同時にシェリカの真上を黒い影が真っ直ぐに走っていった。「ノウツ！ ヤベエツ！」

またもや空中で身体を回転させ、今度は右側に飛んだ。真っすぐ走った黒い影は、剣だった。シェリカの向かいの木の幹に突き刺さる。

駄目だ遠いし高い。取りにいけない。

「……勝負あつたな」

無表情男は驚きの滞空を見せながら、短剣から弓矢に武器を持ちかえた。矢を番えた。弦を引き、放つ。それは一直線にシェリカに向かった。思わず目を瞑った。

矢は、いつまで経ってもシェリカに刺さらなかった。目を開ける。矢は目の前で止まっていた。手が、フィーロの手が矢の真ん中を掴んでいた。

「……フィーロ」

「まだまだまだあ

ッ！」

態勢を低くし、真っ直ぐロケットのように突っ込んでくるニヤケ男。フィーロは持っていた矢をダーツのように投げた。

「甘いいいっ！」

右手の短剣で難なく払う。もう武器はない。詠唱も出来ない。間に合わない。フィーロがシェリカを庇うように前に出た。あとニメートル。ニヤケ男が飛んだ。フィーロ目がけて。刃が迫る。

そして、

「フィーロ……！」

G a n a c h e

何だこの状況は。

氷。氷の槍。それがまるで雨霰のようにガナツシュたちに迫った。

太刀を立てて、体幹をなんとか守る。ユーカリスティアの刀身はそれなりに広い。が、盾にはならない。いくつかは身体を掠めた。

「逆に奇襲されるとは……！」

不覚。こちらにも相手を舐めていた。曲がりなりにも二、三年生。

先輩だ。学年が上ということは、単に年上というわけではない。経験も上だということだ。

弾丸のような氷の槍。先ほどのと同じ呀霰槍だろうが、威力と弾数が違う。

確実にガナツシユは圧されていた。

だが下がりはしない。ガナツシユはカタハネのマスターだ。倒れた時点でカタハネは敗北する。仮に下がれば後ろで伏せている三人がやられる。万が一、フィーロかシェリカが敗北していたら、後ろの三人がやられた時点でそれも負けになる。

「ぐっ……！」

頬を掠めた。じんと痛みが走る。だからなんだ。耐えてみせる。まだ止まない。まだか。まだか。早く止め。

ガナツシユは念じ続けた。

氷の槍がガナツシユの右太股を貫いた。「ぐあ……！」呻き声が漏れた。歯を食い縛る。この程度で倒れられるか。

「ガナツシユ君……！」

ユーリが叫んだ。

「馬鹿！ 伏せている……！」

「でも……！」

「ユーリ危ないっ！」

「きゃあっ」

ユーリに迫ろうとした氷の槍をモニカが三叉槍トライデントで叩いた。砕け散る。細かい氷が舞った。こんな状況じゃなかったら綺麗だと思つたらうが。

「ガナツシユ、このままだとヤバイのかわ！」

「解っている！」

だが策がないのだ。とにもかくにもこの攻撃が止まないかぎりは何も出来ない。にしてもいい加減、止まないかこの攻撃。いくら何でも長すぎる。

近場に川があるのは解っている。ガナツシュにとって水気が近くにあるのはラッキーだ。水の精霊が、水辺に一番多く存在するというのもあるが、もう一つ。要素魔術はイメージが必要になる。それは精霊の力を行使する上でかなり重要だ。本物の魔術士は詠唱時にある特殊な精神統一「コンセントレーション」を無意識下で行っている。それがイメージだ。竜炎殲ならば火炎放射のような燃え盛る炎。穿雷瘡なら電光石火の稲妻を。それは精霊に魔力を与え、対価として働かせるうえでの指しめたいなものだ。これを交信「チャネリング」と呼ぶ。

因みにガナツシュには交信は出来ない。だからこそ水の精霊がイメージしやすい環境下で戦うのが望ましいのだ。蛮族の森であそこをいい場所と思っただのもそれが理由だ。

「せめて詠唱の時間さえあれば……！」

「時間？ 時間があればいいのね？」

モニカが言った。立ち上がっている。手には三叉槍。ストームプリンガー。鍛冶士クリフトの運ぶ者シリーズの一本。

「無口女。アンタも手伝うのよ」

「………わかった」

「何を……」

「アタシたちか時間を稼ぐのかわ。ガナツシュはその間になんとかしなさい」

「………できなかつたら………つぶす」

何をだとは聞かないでおく。

彼女たちはやると言った。信じるしかない。

「………解った。一分………いや三十秒だ」

「解ったのかわ」「………了解」

依然として氷の槍は放たれ続けている。止むことは無さそうだ。

「Set………」

モニカがガナツシユの背後で槍を構えた。左半身を前に出し、腰を落とした態勢で、右手を頭より高く揚げ、槍の先が下を向く形。

「Go……!!」

モニカが前に出た。構えの形から右手で槍を大きく旋回させた。何度もぶんぶん回す。バキバキバキと氷の槍が蹴散らされた。

ガナツシユは一瞬啞然としてしまった。そのガナツシユの真横を細い何かが飛んでいく。

矢だ。

クロアの矢が恐ろしい正確さでモニカの落とし損ねた氷の槍を相殺した。

「ガナツシユ！」

モニカが叫ぶ。

はっとした。ぼーっとしている場合じゃない。彼女たちが稼いでくれた時間を無駄には出来ない。ボクはボクに出来ることをやる。太刀を見つめ、念じた。

晚餐だ。ユーカリスティア。

「附Mer哀du刀随水霊」

水が生まれる。波打つ。波紋を広げる。鏡のようにガナツシユを写し出した。聖体の秘蹟。ユーカリスティア。血と肉の晚餐会の始まりだ。

「おおおおおおおおおおおおおおお……!!」

> i 4 6 2 1 — 5 8 8 <

S h e r i c k a

フイーロを刻もうとした刃は、その寸前で止まった。正確に言えば止められた。

変態に。

対の小刀を両手に持って、フイーロとニヤケ男の間に入った変態

は、ニヤケ男の刃を止めた。

瞬きをした刹那の合間に現われた変態。さすがのニヤケ男もニヤケを止めた。

「フツ！」

押し返した変態。ニヤケ男は飛び下がった。反対側に、無表情男が降り立つ。

「間一髪やったなフィーロ。さあ、感謝のキスを浴びせてく」

「黙レイジ」

「なんでーなっ！ 助けたんやしお礼の一つくれたってええやん！ てか黙レイジって何！？」

「あーあーうっせーな。ありがとさん」

「心が籠もってないわっ！ まあええ……ほい。武器は大事にせえや」

変態はフィーロに剣を渡した。先ほど投げた剣だ。何時の間に回収したのか。剣を受け取ったフィーロは、剣を構えた。

「……たく。俺を戦力で考えるんじゃないよ……」溜め息を吐いた。

「じゃあないやん」

「ま、そうだけどさ……シエリカ」

フィーロがシエリカを見た。何が言いたいのか、シエリカにはよく解った。だから頷く。フィーロも頷き返した。

「つか……カルーニを倒したのかよ……あーり得ねー」

「……油断するなよトーマ」

「わっかってらあ。おい、一年坊主。本気でいくからな？」

ニヤケ男はそう言うと、走りだした。ほぼ同時に無表情男も走りだす。挟まれている。フィーロと変態はシエリカを守る形で立った。これが意味することは一つだ。

触媒を握る。フィーロと変態は既に走りだしている。迎え撃つためだ。シエリカはその間に魔術を完成させなくてはいけない。アクバタの樹蜜は土の精霊の好物。銀の指環は水の精霊。混合魔術。あまり得意ではないが、なんとかなるはずだ。

マイガツ！ ガツデム！ サック！ シット！ などと叫びながら頭を抱えながら苦悶するフィーロ。悪いものでも食べたのだろうか。

「おいフィーロ……」呆れた感じの苦笑を漏らしながら、レイジが言った。「お前ジブン……ルールブックちゃんと読んだか……？」

「……あ？ ルール？」

「やっぱ読んでないか……あのな、オレらのこの身体は化身アバターなん

や」

「痘痕あはた……？」

「なんか違う気がするで……」

オホン、とレイジが似合わない咳払いをした。

「あのな、よう考えてみ？ 刃引きもしてへん武器で生徒同士戦わすか？ 普通。あり得へんやろ？ 危険やん」

「ん……まあ、そうだな」

「やろ？ だからな、いやオレも詳しい理論は知らんねんけどな、仮想空間に仮想の精神体みたいなもんを作り出してそれで戦ってるんや。オレらは。オーケイ？」

「オーケイ。多分」

「ん。せやからな、ぶち殺しても問題はないんや。一応ある程度抑えられてるらしいけど、痛覚はあるから惨こむたらしいのは倫理的に止めたほうがいいって暗黙の了解があるみたいやけどな」

「へえ……なるほど」解ったか解ってないのかぱつとしない表情でフィーロは頷いた。「じゃあつまり、これシェリカの今のは退学沙汰にはならないんだな？」

「せや」

「よ……よかつたあ……」

心底安心した表情になった。可愛い。……って、そうじゃなくて。いや可愛いけど。その前にフィーロはあたしが人殺しをしたと思っていたということ？ なんかちょっと失礼だ。心配してくれたんだろうけど。だって魔術をぶっ放せってアイコンタクトを送ってきた

のはフィーロだ。自分はそれに応えただけなのに。

ぷうつと頬を膨らませるシェリカ。

「……何、頬を膨らませてるんだ？」

フィーロがシェリカのほうを見て言った。

「……だって」

「だって？」

「なんでもないっ」

「な、何だよ……」

シェリカは顔を背けた。言えるわけがない。誉めてくれないから、なんて。恥ずかしい。

でも、言ったら誉めてくれたのではないだろうか。すごかったなって。いつものように。フィーロは優しいから。

そんなことを考えていた所為で、シェリカの顔は知らぬ間に紅潮していた。「熱か……？」とフィーロがおでこに手を当てた。余計に顔が赤くなってしまった。「な、なんでもないわっ」シェリカは手を払い除けた。

ちよつと、後悔した。

「……というか、こんな悠長にしててええんか……？」
レイジの眩きはシェリカの耳には届かなかった。

G a n a c h e

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお……！」

ガナツシユの放ったのは、あの時の水の刃ではなかった。
波。

大きな波が氷の槍ごと巻き込みながら前方を地を這うように進んだ。

グロスヴァーゲ
大波。

ユーカリスティアで使える力の一つだ。水刃ではすべての呀雹槍

を叩き落とせない。範囲技としてはこれしかなかった。

威力は申し分なかったようだ。相手方の攻撃が途絶えた。氷槍の嵐が止んだことで視界が晴れた。見えた。五人だ。表情は解らないが、焦っているはずだ。まだ終わりではない。畳み掛ける。

「クロア……！」

「……………距離百……………後退開始」

「了解……………！」

クロアの目は、レイジよりいい。鷹ホークアイの目。彼女のような射手を人はそう呼ぶ。クロアにはその名に相応しい視力を持つ。指示は無視するが。

実際、相手は後退を始めた。詠唱の時間を稼ぐつもりだろう。甘い。

「食らえ……………！」

地面に刃を突き立てた。

相手の距離感は掴めていない。百三十もあれば十分だろう。

「蛟つ……………！」

ぶわつと噴水のように水の柱が立ち昇った。

否。

あれは柱ではない。それは唸り、うねり、雄叫びを上げて形作られた。

竜。

水で出来た竜だ。

蛟みずぢという。

蛟とは大蛇。つまりは竜。しかしながら竜ではない。古くは『水つ霊』と呼ばれた。水つ霊。つまりは水の精霊。蛟とはすなわち水の精霊である。ユーカリステアの練り上げた魔術の傑作といえる。グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……………！

蛟は唸りをあげて突き進む。狙うは工場長一味。五人は浮き足立っている。ガナツシユはまだ追い討ちを掛けた。

刃を抜き、前方に突き出す。

「逝け」

波打つ刃が纏っていた水が収束する。先端に大きな球体を作った。間髪入れずに、弾けるようにして水が唸りながら真つ直ぐ伸びた。蛟を放ったのだ。もう一体。

つがいおるち
番大蛇。

二体の蛟を相手にぶつける技。

もともと蛟は独創ではない。だが、この技は独創だ。言わば応用。ガナツシュにこの太刀を託した男が考えた技を応用したのだ。実を言えば、前からこれは考え付いていた。だが蛟は扱いが難しい。生き物を操るのと同じだ。擬似的な身体を水の精霊に与えて操る。ただ水刃や大波を作り出すのとはわけが違う。

一体を操るだけでも大変な集中力がある。気を抜けば自分が喰われてしまう。そんな状態の上にもう一体追加するのだ。魂が根こそぎ奪われるような感覚に陥った。気を失いそうになる。それほどまでにユーカリスティアがガナツシュに要求しているのだろう。寄越せ。貴様の魂を。喰わせろ、と。

ガナツシュは自分の太刀を睨み付けた。

ああ、くれてやる。幾らでも喰え。ただし貴様は盲従しろ。餌が欲しければボクに従え……！

「あああああああああああああああああ……！」

ガナツシュは叫んでいた。自分ではまったく気付いていなかった。グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！
ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！

二体の大蛇がぶつかり、交ざり、渦巻く柱を作り 弾けた。
辺り一面に、大粒の雨が降った。薄く虹が架かった気がした。

第一章（13） 付かぬ間の休息

F i r o

びしょ濡れになった。

つか何だったんだあれは。

いきなり蛇みたいなもんが一匹現われて、天高く吼えながら舞い上がった。すぐに轟音がしてもう一匹現れて、渦巻きながら昇って弾けて、この有様。

びしょ濡れだ。

やたら広範囲に雨が降った。びつちよびつちよだ。

多分、いや十中八九奴だ。ガナツシュだ。アイツの仕業だ。間違いない。水の蛇なんてびつくりだが、あんな芸当ができるのはガナツシュくらいだ。

「うえ〜……」 フィーロと同じく水を被ったシェリカが呻く。

「大丈夫か？」

「うん……」

『Eブロック旗フラッグの破壊を確認。試合終了。転送開始』

ヴァイス（先生）の抑揚のない声が響き渡った。そして身体が透明になり始める。消えてゆく。少々ぞつとしなくもない。フィーロは目を瞑った。

浮遊感。

酔いそうなあまり心地よいとは言えない浮遊感に襲われた。一刹那くらいの間のことだったので、どうってことはないのだが。

フィーロが目を開けると、目の前は運動場だった。扉は閉まっている。ご丁寧に試合終了後は外に吐き出してくれるらしい。服も濡れていない。足の傷も痛みどころか傷跡さえなかった。

周りを見ると、他の仲間も戻ってきていた。離れた場所に、工場

長たちもいた。やや青ざめた表情をしていた。「あり得ねえ……何だよ……あれ……」ぶつぶつと呟いている。そっとしておいたほうがいいみたいだ。取り敢えず、ガナツシュたちの元に向かった。「なんかしんどそうだな」

「……大丈夫だ」

青い顔して言われても説得力はない。どうせ神具を使い過ぎたんだろう。死んだらどうするつもりなんだ、コイツは。

「ねえ、あたしたち結局どうやって勝ったの？」

「おお、オレも気になるわそれ」

「ちっ……」

「何でやねん……」

「旗の破壊及びクランの全滅ですね」

違う方向から声がした。皆が振り向く。プラチナブロンドの髪を後ろで纏めた美形の男が目映る。にっこりと微笑んだ顔からは、内面を推し量ることは出来ない。見た感じだけで言えば、好青年。だけどフィードはこの男がいけ好かなかった。

キール・マスケイン。

魔術士学科の教師。主に一年生と二年生の担当をしている。

優秀な魔術士らしいが、噂では女癖が悪いらしい。生徒に何人か手をつけているという噂だ。気に食わない。

「クラン《カタハネ》。第一試合は勝ち星。素晴らしいですね。感動しました」

気に食わない。奴の視線の先はただ一人。シエリカだ。狙ってやがる。俺の姉を。俺の目の前で。マジで気に食わない。

「まさかあんな力押しで勝つとは。思いもありませんでしたよ。ええ。魔術士を二人使い呀霰槍の連射で畳み掛けるといふ、相手の作戦ごと呑み込むごり押し勝ち。奇襲を掛けられたところからの立ち直りは実に素晴らしかったですよ、ガナツシュ君」

「……どうも」

ガナツシュが短く返事した。しんどそうだ。怪我ならばユーリが

治せるが、コイツのは内面からくるものだ。休ませるしかない。

それにしても、相手に魔術士が二人もいたのか。盲点だった。ガナツシユがこうまで疲弊する羽目になったのは、それが原因か。何にせよ、勝ったから結果オーライではあるが。

「キール先生は何故ここに？」シエリカが聞いた。

キールはにこやかに微笑んだ。そしてシエリカに近付き隣に立って、肩に手を添えた。「それは私がEブロックの審査員だからだよ」

「……………」

気に食わない。

フィードは知らず知らずの内に、手を握り締めていた。

十

ブーツというブザー音のあと、『全ブロックの一回戦終了。十分に二回戦を開始する』というヴァイス（先生）の声が響いた。リリーナくらいまでやれとは言わないが、もう少しボルテージを上げたらどうなんだろうか。

次々に他の組たちが現われ、喜び合うものたち、悲嘆に暮れるものたち、無表情のものたち、仕方ないと微笑むものたちが目に映った。そして、二回戦に臨むものたちは皆、緊張や弛緩など各々の心境を如実に表していた。次は三番と四番だ。Eブロックはリトルリツプとアンセムスター。

「おーほっほっほっ！ 見ていなさい、シエリカさん！ わたくしたちの力、思い知らせてあげますわっ！」

「フィード、喉乾いたわ」

「ん？ どっかにあるんじゃないの、給水場」

「きい　　っ！ 毎度毎度無視するんじゃないですわっ！」

「フィード、付いて来て」

「いや、別にいいけど」

「きい

っ！！」

ベアトリーチエは顔を真っ赤にして憤怒していた。言っちゃ悪いが猿みたいだ。お淑やかにしてれば貴族の令嬢なんだし、美少女なんだがね。いや、ベアトリーチエの場合は美女か。実際綺麗だし、細剣がよく映える外装だ。つかオーダーメイドじゃね？ その装備。地団駄を踏むベアトリーチエを無視して給水場を指すシエリカ。フィーロはベアトリーチエを一瞥して、隣にいたモランを見た。聖母みたいな表情でベアトリーチエを見守っている。モランがフィーロの視線に気付いた。妙に恥ずかしくなったが、何か言わねばと思う。が、いざ言うのも小っ恥ずかしい。フィーロは無言で頑張れよと握り拳を突き出した。モランも微笑みながら拳を突き返した。フィーロはそれを見て、微笑み返した。

ぐいっつと耳が引っ張られた。

「いつづあ……！ いーだだだだだだだだっ！ やめろシエリカ！ 取れる取れるマジで取れる……！」

フィーロは引き摺られて行った。真剣に耳が取れるかと思った。一体何を怒ってるんだか。

給水場は本部横にあった。本部といってもテントを建てただけの代物だが。

ヒリヒリする耳を押さえながら、本部を見た。

テントの下には長机が敷かれ、さらにマイクなどの器材が置かれている。ヴァイス（先生）と他数名の教員が座っていた。暇なのか、カップ片手に話し合っている。克蘭コンテストは教員にはつまらないものらしい。

にしても、何故かヴァイス（先生）がこっちを見ている。居心地が悪い。言いたいことがあるなら言えよな。フィーロは即刻立ち去りたかった。

「ようフィーロ。何をそわそわしてんだ？」

居心地悪くてそわそわしていると、背後から声を掛けられた。振

り返ると、エリックがいた。「ども」と返す。

「いや、よかったぜ、試合。ちらと見てたんだがな」

「ありがとうございます」

「まあ、でも、もうちょい本気でやってもよかったんじゃないの？」

エリックは口元を吊り上げた。

「本気ですよ」淡々と返す。

「そうかい。別にいいけどな。……と、いけね。俺次だからよ。行くわ」

「頑張ってください」

「おうよ」

エリックはそう言って去って行った。何というか、風のような人だ。いや、雲か。自由って感じがする。フィーロは、エリックの引力のようなものを感じていた。一種のカリスマなのだ。あの人は。

「フィーロ。今の人ってエリック・モンテディオ？」

水を飲み終えたシエリカがフィーロの元に来た。

「ん。そうだけど」

「へえ……いつ知り合ったの？」

「つい最近だけど。つか昨日だな。ユーリに誘われてグランチエに行っただだだだっ……！」

フィーロが言い終わらないうちに、シエリカがフィーロの耳を引っ張る。さつきと同じ場所だ。洒落にならんくらい痛い。

「痛い！ 痛いつてシエリカ！ さすがにヤバイ！ 反対側にしてせめて！ ガチで取れる！ あ、プチつていった！ プチつて！

あああああああああああ……！！」

十

「ガナツシュ。もう大丈夫か？」

「……お前が大丈夫か？」

「ハハハ、クソいてえ」

「ファイロの右の耳は赤く、通常の二倍くらいに腫れていた。痛いというか、熱い。まあ、あれだ。耳たぶデカイと福があるらしいし結果オーライ……なわけねーし。痛いだけだし。引っ張れる時点で福ないし。」

「ファイロ君……耳、大丈夫ですか？ よければ治しますが」

「ああ、いや。放つといたら治るって。多分」

「そうなのだよ。こんな野獣に治療などいらなのだよ。むしろ煮えたぎった湯で雑菌消毒すべきなのだよ」

「煮えたぎった湯に入ったら死ぬだよ」

「だから雑菌消毒なのだよ」

「あ、俺そのものが雑菌？」

あつはつはつはつ泣いていい？

「モニカのブラックジョーク（だと思いたい）に屈しそうになるファイロ。なんとか堪えた。」

『二回戦、同じく10カウント後に始める。……十……九……八……』

「ヴァイス（先生）のカウントダウンが始まった。扉に目を向ける。巨大な扉は、いつしか大型モニターのようになっていた。上と下の両端に生徒の顔が写ったパネルがある。下にベアトリーチェをめ一とするアンセムスターのメンバーが写っている。これは今試合中のクランなのだろう。とすると上はリトルリップか。七対五。数ではアンセムスターが不利だが、頑張っしてほしい。」

真ん中には実際の内部の映像が映し出されている。これは……城？ ガナツシュが言ってたな確か。虚像の城だったか。一見して何が虚像かはよく解らないが。右上の端にある長方形の枠の中に、緑の線がカクカクと描かれ、赤色と黄色の点が忙しなく動いている。赤色がリトルリップで黄色がアンセムスターか。

「これで内情が解るわけか。よくできているな」

ガナツシュの言葉に内心で同意した。ただ、これはファイロたちは不利ではないのかと思った。一番と二番の戦闘を見られるという

ことは、三番以降は少なくともカタハネと夢工場の実力が解つているのだ。三番、四番は今やっているからいいとして、次の一番と五番の戦いはこちらは五番　つまりマッドボーズの力を知らないまま戦わなくてはならない。結構状況としてはキツイ。まあ、どうせ力押しでなんとかするんだろうが。

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ………！

違うブロックの扉の前で歓声が上がった。フィーロが視線を向けると、かなりの人数が見ている。克蘭コンテストに登録していない生徒はともかく、違うブロックの克蘭の奴らまで見ていないか？

「凄い歓声やな」

「Kブロックだな。行ってみよう。フィーロも行くぞ」

「やだよ」

拒否したのに、ガナツシュに襟を掴まれ、結局引き摺られた。

Kブロックの試合中の克蘭は、《シリーズビリー》と《ランプ・オブ・シュガー》。ふざけた克蘭の名前だ。“愚か者”と“砂糖の塊”だと？　こんな訳の解ら　……いや待て。あれ、パネルに写ってる奴、見覚えあるぞ。つかさつき見たぞ。

「……エリック？」

G a n a c h e

馬鹿な。

試合終了後、思ったことはそれだった。

Kブロック二回戦。

シリーズビリー対ランプ・オブ・シュガー。

十人对四人。

勝ったのは、ランプ・オブ・シュガー。内容としてはシリーズビリーのマスターを倒して試合終了。経過時間　十五分。

馬鹿な。

未だ信じられない。四人だぞ。十人もいるクランをたつた四人で、しかも十五分で殲滅したのか。彼ら、ランプ・オブ・シユガーは。エリック・モンテディオ。三年生だ。噂ではグランチエの菓子職人^{シエ}。扇術士学科のエースだ。エリック率いるランプ・オブ・シユガーはたつたの四人。屈強な身体を持つ獣人の槍術士学科三年生バルド。魔術士学科四年生のルミア^{クレイモア}。大剣を担いだ剣士学科四年生スウエン。全員が猛者（レベル5）だ。

だとしても、シリービリーにだってレベル5はいる。三年生と四年生が三人ずつ、二年生と一年生が二人ずつのクランだ。一年生は使い物にならなかったとしても、数的には圧倒的に有利。それを一瞬で掃討したのだ。

強い。

強すぎる。

^{ランプ・オブ・シユガー}砂糖の塊などというふざけた名前からは想像出来ない強さだ。

化け物か、奴らは。

そして、勝ち上がれば自分たちは戦わなくてはいけなくなるのだ。その化け物と。ガナツシユは戦慄を覚えた。

「つ……強すぎやろ……」

こればかりはレイジと同意見だ。ガナツシユは無言で頷く。勝てるか、あれに。多分、全てのポテンシャルがカタハネを上回っている。あれが、^{クランレベル}CL5の実力。あれを倒せたなら、ボクは大羅天に近づく。勝てるか、ではない。勝つのだ。

ガナツシユは固く決意した。

「そんな……嘘なのだわ……あれは……」

その後ろで青ざめた表情でモニターを見ていたモニカの呟きは、歓声に吞まれ、誰にも届かなかった。

勿論、ガナツシユにも。

凄く凄いと噂には聞いていたが、あそこまでとは思わなかった。エリック。バルド。ルミア。スウェン。名前は全員有名だ。バルドは確か、ナインエルド獣王帝国出身。槍術士学科だし、多分モニカの大先輩って奴だろう。一年生で生徒会カウンシルの役員に推薦されたが、一秒で断った孤高の戦士だ。ルミアはシェリカと似た天才的魔術士らしい。ついでに美人だ。スウェンは……よくは知らない。ただ、噂では六百六十六号目まである地獄カ岳ヘリッシュマウンテンの三百八十六号目まで昇った唯一の学生だとか。要するに頭がイカれてる。

そんな強者ばかりのクランの戦闘を見たあとに、Eブロックの試合を見ると「お遊戯……？」とでも言いたくなかった。まあ、頑張ってるんだし何も言わないが。

「……ランプ・オブ・シユガーの試合を見てきたのか？」
無表情な男から話し掛けられた。

「ん……？ アンタは……夢工場の……」

「クスカだ」

「スカ？」

「違う」

「冗談ですよ。何です？」

「いや、うちのマスターが最初に無礼を働いたからな。謝っておく。すまない」

「いや……別にいいですけど」

「カタハネは強い。さすがだ。完敗だった」

「そうですか」

強いのはガナツシユやシェリカであって、フィーロではない。何故俺に言う？ そう思った。

「……一つだけ聞きたい」

「俺にですか？」

「そうだ。……お前は何故、あの時剣を一瞬止めようとした」

「あの時……？」
「……無意識か。手を抜いたならぶっ飛ばしてやろうと考えていたが……無意識なら……仕方ないわけでもないが。まあ、何か原因があるのだろう」
無表情な男、クスカの言う言葉はよく解らなかった。あの時つていつだ。剣を止めようとした？ 俺が？ 憶えがない。三ヶ月分は働くと言ったから、フィーロは本気でやった。手は抜いていなかったはずだが。

……ない！ フィーロは悪くないの！ だから……

「……っ！？」

何だ今の。シエリカの声だった気がする。俺は今何を思い出そうとした？ ……駄目だ。もう思い出せない。そもそも、思い出していいのだろうか。何だか、自分自身で嫌がっているように感じる。「どうした？」

「……いえ」どうかしている。疲れているのか。

「……まあ、深く考えるな。いつか何とかなるだろう。太刀筋はよかった」

「あー……ありがとうございます」

「次、頑張れよ。マッドボーズは四年生だけのクランだ。経験値は高いぞ」

「そう、ですか。情報ありがとうございます」

「……ああ。じゃあな」

「クスカさんも頑張ってください。まだ終わりじゃないですし」
「無論だ」

そう言ったクスカは少し笑ったように見えた。しかし次の瞬間には無表情に戻っていた。気のせいだったのかもしれない。

試合が終わった。

次々にフィールドから離脱する生徒たち。全員が運動場に帰還したら、また同じような光景になった。Eブロックは、アンセムスタ―は奇しくも勝利を収めた。リトルリップが強いといっているわけではないが、急造クランが勝つとは思ってもよらなかつた。意外にベアトリーチェにはリーダーの資質があるようだ。意外ってほどでもない……のか？ どうだっていいけれど。

「おーほっほっほっ！ どうですシエリカさん！ 思い知りましたか、わたくしたちの実力を！」

「モランおめでとぅ」

「うん、ありがとう」

「聞きなさいよっ！ もうそのパターンは飽き飽きしましたわっ！」

「いや、アンタが飽きようが飽きまいが関係ないし」

「むきい~~~~っ！」

「あ、新パターン？」

「違いますわっ！」

「ハイハイストップストップ。シエリカ、次なんだから喧嘩するなよ。さ、行こう」

面倒だが制止する。結局、寮以外でシエリカの手綱を握るのはフリークの役目である。

「解ってるわよフリーク。……じゃ、モラン。行ってくるわ」

「頑張つてね。フリーク君も」

モランが微笑んだ。元気が湧くね。やっぱり最高だわモラン。ルツには勿体ない。

「ああ あいだだだだだだだだだだだだだだだだ……！」

「ほらフリーク。次でしょう？ 早く行かないと」

「解ってる！ 重々承知しておりますっ！ だから引つ張るなっ！ 千切れる千切れる千切れるううううううっ……！」

フリークに二百のダメージ。

脳内にそんなモノローグが流れた気がした。

「……大丈夫か？」

「泣きたい」

「さつきより腫れてんなあ。チューしたら治るんちゃう？ オレがやったるか？」

「……殺すぞ」ぼそつと呟く。

「えらいすんません……」

Eブロック前でフィーロは馬鹿を言った愚かな変態レイジを視線で黙らせた。何がチューだ。悪化するっつーの。

「……で、クロア。なんだその顔」

「……ちゅー」

「いや大いに結構」だから悪化するって。

「あ、じゃあわたしが……」

「いやだからいいって」俺を殺したいの、ユーリ？

「ならあたしがやるわ」

「いや、お前が元凶だから」

「何よ！」

「逆ギレ!？」

「遊んでないで行くぞ」

ガナツシュに戒められ、一応おとなしくなる。一応。

Eブロックの扉を潜る。視界が一瞬白まんて、目を瞑った。目を開けると、

「……城？」

古い城に目に映った。

ファントムキャッスル

「虚像の城か。二回戦と同じ空間になるとはな」

「虚像……つか普通にあるけど」

「あるけどないから虚像なんだよ」

ガナツシュが意味深に言った。

「言葉遊びは嫌いだよ。率直に言ってくれ」

「要するに……まあ、実際見たほうが早い。ボクだって初めてなんだ」

「あ、そ」まあ、何でもいい。耳が痛いからさっさと終わらせたい。そして冷やしたい。「……なあ、それよりこれ、どうすんだよ」

フィーロが親指で差す。皆の視線が集中した。そこには、ふわふわと浮かぶ球体に、ぴよこつと三角旗の生えた物体。

これが旗だ。

カタハネは今回は防衛側に選ばれてしまった。フィーロが言いたいのは、誰がこれを運ぶのかということだ。シェリカの護衛にユーリの護衛。加えて旗の護衛まで付けたら戦える奴がいなくなる。常に力押しゆえに防衛はカタハネには不向きなのだ。

「ふむ……旗はユーリに頼もうと思う」

「わたしですか……？」

「ああ。頼むよ。……で護衛をクロアに頼みたい」

「……いや」

「頼む」

「……」

沈黙は了承とガナツシユは捉えた。次に話を進める。

「モニカは引き気味で攻守両方を頼みたい。向こうは、マッドボイス魔術士はいないが遠戦学部が三人いる。厄介だ。だからレイジも今回は攻撃的に行ってもらおう」

「あいよ」

「……」

「モニカ？」

「え？ な、何かしら？」

「いや、モニカには攻守両方を頼みたいと言ったんだが。聞いてなかったか？」

「き、聞いていたのかわ。任せなさい」

「……そう。ならいいんだが。……まずはボクとレイジは最優先で射手を叩く。フィーロはシェリカの護衛をしながら、旗とユーリを

守れ」

「俺、何気にきつくね？」

「気のせいだ」絶対嘘だ。

「あたしは好きにやればいいのね？」

「ああ。……態勢はこれで行く。あとは、相手次第だ」

『三回戦。10カウント後に開始する』

ヴァイス（先生）の音が響いた。

「……防衛側は」ガナツシュが口を開いた。「防衛側はどうしても受け身になる。仕方ない。だけど、僕らの強味は攻撃性だ。いつも通りやれば問題はない」

『十……九……八……七……』

カウントダウンが始まる。よくもまあこんな機械的な声が出せるものだ。どうでもいいけど。

何にせよ、ガナツシュが言いたいのはつまりぶっ潰せということだ。攻めが好きな猪克蘭だから、無理に守りに入ったらやられるだけ。ならばカタハネはカタハネらしく、克蘭のマスターを狩ればいい。そういうことだろう。

なんか、やな予感するなあ……。

フィーロはそう思ったが、具体的に何が起こるかなんて解らない。気のせいだろうと頭かぶりを振った。

第一章(14) 二回戦

F i r o

ファイロたちが敵 すなわちマッドボーイズに遭遇したのは開始から十分を過ぎた辺りだった。というか、虚像の城の外に転送されたファイロたちが、城内に入って二分後くらいだった。既に最初からいたとさえ思われる。間髪入れずとはこのことだ。

全部で六層ある虚像の城の第一層。何もない、ジャンクが山積みにされた空間だった。一応、入り口を入れてすぐの広間なのだが、壁や階段、置物などが壊れてガラクタのように山積みにっている。何も無いというか、何もかもが壊されている。もはや廃墟だ。四方に扉や、通路がみられる。そのうちの正面の通路前に、三人の男が立っていた。

挨拶は予告なしの一斉射撃。まさかの連発式自動弓銃リヒートイニングボウガン。しかも三人分だ。数は相当なものだ。

連発式自動弓銃は、最近錬金術士学科と鍛冶士学科が共同で造り出した弩いしゆみだ。専用の金属製の矢がぎっしり詰まった弾倉マガジンをセットしたら、あとは安全装置を外してぶっ放すだけというお手軽便利な武器だ。

何にせよ、お手軽便利かどうか知らないが、ファイロたちからすればそんなものが三つある時点で甚だ迷惑である。

迷惑ですと行って止めてくれるなら向うは端から射っていない。というわけで矢が雨霰のようにこちらに降り注ぐ。「とにかく隠れる……！」ガナツシュが叫んだ。一番近くにいたシエリカをジャンクの陰に押し込み、自分も隠れようとした。

「ひゃああああつ!？」

ユーリの悲鳴。

振り返って見ると、ユーリが独り孤立している。今の奇襲で隊列

が狂ったのだろう。そもそも、クロアはあくまで援護だ。護衛となると些ちかか荷にがが重いだろう。これはガナツシユのミスだ。フィーロは眉ひそを顰めた。

それにしてもおかしい。こんなとき、我先に行かんと真っ先に動くはずの奴が未だに行動を起こさない。しかも位置的には一番近くににいるのだ。彼女が動けば問題はないのに、

「モニカ……！」

放心状態だった。いや、放心というよりは、完全に驚いて身体が硬直している感じだ。モニカは一応ユーリの危機は認知している。

咄嗟に身体が動かない。普段なら“珍しい”で済ませられるが、今はそんな場合じゃない。駄目だ。今はモニカはあてに出来ない。仕方がない。俺が行くしかない。「フィーロ!?」というシエリカの声が背中から聞こえた。が、振り向かなかった。

「クソ……！ ユーリ！」

彼女は旗を抱えているのだ。あれがやられたらカタハネは負けだ。開始いきなり旗を破壊されて負けなど笑えない。敵の一人が照準を合わせた。フィーロはユーリに向かって走る。

間に合え……！

飛んだ。抱き抱える。背中を矢が掠めた。けれど掠めたただけだ。

致命傷ではない。ちりつと痛む程度だ。ギリギリセーフ。転がり込むようにして、ジャンクの陰に入り 落ちた。

「え？」

落ちた？

フィーロとユーリは、床があつたはずの場所を擦り抜けた。スラッといった感じで。っーかなんだこれ。あり得なくね？ そういえば前にもあつたねこんなこと。

「ぬあああああああああああああ……！」

「ひゃあああああああああああ……！」

二人の叫びが重なった。

「本当にすいませんでした……」

「いや、まあ、ユーリのせいじゃないさ。別にいいって。俺にも落ち度はあるんだし……」

「はい……」

うなだれるユーリの頭を軽く三度ほど叩く。ユーリはくすぐったそうに首を竦めた。何ていうか、妹みたいだ。一つ年上なんだけどさ。まあ、シエリカも姉というよりは妹みたいだしね。

「にしても……」フィードは上を見上げた。「虚像ね。笑えねえ」なんとなく理解できた。というか、この身で体験したのだから大體解った。虚像の城。城が虚像なのではない。中が虚像なのだ。おそらく、だが。

つまりは床やら壁があるように見えて、実は何も無い。そんな嫌がらせみたいなフィールドなのだろう。周りを見渡してみる。暗い。地下なのは間違いない。ユーリの抱えている旗は無事だし、二人ともゲームオーバーになっていない辺り、フィールド圏内。フィールド圏内ということは、上への道が必ずあるはずだ。敵方が地下の存在を知っているのかどうかは知らないが、暫らくは安全だと思っ。ゆっくり目指せばいいだろう。安心は出来ないが。

「あの、フィード君」

「何？」

「背中、怪我されてるので……治療を」

「ああ、ありがとう」

フィードはユーリに背を向けるようにして座り直した。背中に手が触れられる。少しひんやりとした、柔らかな女の子の手だ。ぽうっと暖かくなる。オペレーティング 施術だ。こちらから背中の様子は伺えないが、傷が癒えているのだろう。それほど痛くはなかったし、ひどい傷でもなかったから治療がいるわけではなかったが、ユーリの厚意としてとっておこう。

「終わりました」

「ありがとう」

浅い傷だったのと、ユーリの腕前のお陰でももの二分ほどで治療が終わる。フィーロはユーリに礼を言ってお立ち上がった。手を差し出し、ユーリを引っ張り起こす。

「……つかしどうするかな……」

フィーロは頭を掻いた。薄暗い地下。見ると、箱型の部屋のように。結構広い。縦×横が大体七メートルくらいか。高さは解らないが、まあ、落ちても死なない高さなのはこの身で実証済みだ。そして登れないことも。壁の真ん中に穴が見えた。二方向。向かい合う形だ。通路か。やはりフィールドで間違いないようだ。

敵が現われぬ以上、じっとここで待つのもありだが、得体の知れない場所でのほんとは出来るほど達観していない。少なくとも、上への道くらいは把握しておきたい。だが、ここは虚像の城だ。地下だから安心できるなどという甘い考えは出来ない。油断すれば、さっきのように落ちるかもしれない。それに、この下があるとは限らないのだ。

「慎重に行くしかないな」

「そうですね」

「じゃ、行くか」

「はい」

そう言っつて、二メートルほど歩いて止まった。ユーリも止まる。

「どうしたんですか？」そう聞いてくるユーリにフィーロは笑顔で返した。

「そもそも、どっち行けばいいんだろ？」

G a n a c h e

「放して！」

「馬鹿言うな！ 今は逃げるぞ！」

ガナツシユはシェリカを羽交い締めにしていた。理由は簡単だ。フィーロとユーリが落ちた。そのあとを追おうとしているわけだ。

虚像の城の罫は解っていたはずだが、この目で見て漸く実感が湧いた。なるほど、こういう仕組みか。多分、もうあそこはただの床になっっているだろう。不規則に、ランダム虚像と実像が入れ替わる。しかも不定期に。それがこのフィールドのルールだ。もうあとは追えない。汚れた森の方が断然マシだった。鬱蒼として汚らしいだけなのだから。あとただっ広い。それでも、仲間とはぐれるようなことにはならなかった。

「はーなーせーっ！」

「この馬鹿女……！」

「いいーやあーっ！ 変態いいっ！」

「黙ってる！」

引き摺りながら退却する。が、馬鹿シェリカが叫ぶから居場所がすぐばれる。矢がポンポン飛んでくる。まあ、実際はポンポンどころかズダダダダツといった感じだが。

「フツーに逃げれてないでこれ！」レイジが叫ぶ。

「解っている！ だがあのボウガンは厄介だ！ あれを何とかしないといけない！」

「何とかって!?!」

「遮蔽物の多い場所を目指す！ 内部の資料は目を通してある！」

第三層だ！」

「三層!? 上がってどうすんのよ！ フィーロを助けるのが先でしょう！ フィーロは独りぼっちだと寂しくて死んじゃうのよ！」

「あいつはハムスターか！ ユーリがいるだろう！ 心配はいらない！」

「それが一番心配なの むぐっ!?!」

ブラコン女め。

ガナツシユはシェリカの口を塞いだ。いい加減、煩い。黙っても

らわないと場所がばれる。頭を使えと思う。というか、感情的になり過ぎなのだ。大体、寂しいのはフィードではなくて、馬鹿シェリカのほうだろう。

「むっむっ！」

じたばたと暴れるシェリカを何とか押さえつつ、三層を目指して急ぐ。だけど焦ってはいけない。床、壁、天井、いつどれが虚像と なっているか解らない。判別する方法はあるが、時間が掛かる。取り敢えず、走りながらは無理だ。

これは賭けだ。自分の踏んだ床が本物か否か。壁が、天井が、本物か否か。賭けなのだ。

通路を走り、ガナツシュは自分自身を賭けて勝負する。

そして、賭けには勝った。

F i r o

懐中時計を開く。残り十五分。大分時間が経った。いい加減疲れたが、敵が出てきていないだけマシか。

思えば、レイジ曰く、この身体は自分自身の本当の身体ではないらしいが、懐中時計まで再現するとはおかしな話だ。これまで精神体とやらなのだろうか。武器や衣服に関しても、同じことが言える。なんとなく、仕組みを知りたいとフィードは思った。

ま、そんなのは後でいいんだけど。

懐中時計を畳んで仕舞う。

再び前を向く。暗い道。広くも狭くもない。あまり剣を振り回せない。ま、いちいち振り回さなくていいのなら越したことはないけれど。

「そういえばさ、こういふフィールドって、地図みたいなものなかつたのかな？」

フィーロは口を開いた。質問内容は今更である。

「地図……ですか？」

「うん」

「あるにはありますよ？ ルールブックに載っているんです。わたしは見てないですけど……わたし、方向音痴なんで……えへへ」

照れた顔で、聞いていないことまで教えてくれるユーリ。そっか、方向音痴なんだ。フィーロは眉間に皺が寄るのを感じ、少し揉む。

しかしまいった。ルールブックに載っていたのか。読んでないしね。そんなの。

ともかく、これで完全に勘でしか道が捜し出せないわけだ。まったく……ふざけんと言いたい。

約二十分前、ユーリはこう言った。「きつとあっちです」と。指を差して、超自信満々に。そんな自信たっぷりな物言いをされたら、信じてしまうのは道理だろう。んで、信じた結果、行き止まりに行き着いた回数 十六回。

いやもう薄々気付いてた。コイツ当て推量で言ってるな、うん。気付いてたさ。

「……ユーリ」

「はい？」

「お前さ、道、どうやって選んでる……？」

「え？ 勘ですけど」

「そっか……。ユーリ、一ついいことを教えてやろう」

「何ですか？」

「お前のな、お前の勘な……全部ハズレてる……」

「……え、えへへ」

「俺、全く誉めてないからね？」

「すみません……」

しゅんとうなだれるユーリ。うなだれたいのはフィーロのほうである。何分も付き合わされてるんだよ、俺。精神的にキツイよ。行き止まりのオンパレードは。

「ま、いいけどさ……」

敵が現われていないのだから結果オーライだ。

取り敢えず、時間切れになればフィーロたちの勝ちなのだ。敵の気配に注意していれば、問題はない。

唯一、今一番考えなくてはいけないのは、闇雲に歩いて完全に迷ってしまったこの状況をどう打開するかだ。

フィーロは溜め息を吐いた。「さっさと終わらないかな……」
そんなことを呟いた。自分たちが地下を彷徨っている間、上の階層で何が起きていたかも知らずに。

G a n a c h e

フィーロが道に迷いまくっている間、ガナツシユは第三層の広間に出ていた。一層と同じように、障害物が多い部屋だ。

「来ると思ったよ」

「……………」

「あのボウガンの連射攻撃を掻い潜りながら戦えるような場所は、地図上には二つ。ここと、一番上の層だ」

ガナツシユは目の前の男を凝視した。量産型の既製品レディメイドではなく、特注品オーダーメイドの軽量系の防具に身を包み腰に剣が吊されている。剣士、もしくは戦士学科だろう。短く切った髪に、整った顔立ちの男。胸元には黄金色のバッジ。四年生だ。

「あれだけ執拗な追撃を受けて、最上層まで行くとは思えない。高い確立でこの場所に来る」

「狙いは……ボクたちということですか」

「いや、少し違うよ。計算外もあった。旗持ちがまさか落ちるなんて思わなかったしね。地下にまわしてもよかったけれど、意外に広いんだよ、地下って。迷路だからね。……だから、君たちを狙うことに決めた」

ざつという地面を踏みしめる音が四方八方からした。

十一人。

前の男を併せて、十二人。

クランの構成条件で、限界値に設定されている人数だ。ガナツシ

ユは思った。多い。

手が汗ばむのを感じた。

「全員でね」

男は笑った。

ガナツシユは、汗ばんだ手を握り締めた。

畜生め。

心の中で悪態を吐いた。

相手ではなく、自分自身に。

十

躲す。躲して、反撃。受けとめられる。背後から殺気。躲す。躲して、反撃。受けとめられる……。こんなやり取りが何度続けたか。残り時間は解らない。取り敢えず、早く終われ。呪詛か何かのように心の中でそう呟きながら、ガナツシユは太刀を振るつた。障害物があるから弓矢が使いにくい。そう考えていたが、彼らの戦い方はそれを上手く利用したものだった。

障害物の多いところでは、近接戦闘で畳み掛け、ボウガンの射程内に追い込もうとする。出てきたところをボウガンで狙う。なんとも合理的で腹の立つ作戦だ。

おまけに数が多い。十二人だ。五対十二。雑魚ならともかく、全員が四年生。不利なんてレベルじゃない。絶体絶命だ。

「オラオラオラどうした一年！」

「……くっ」

ガナツシユはやけに血の気の荒い男の大槌を回避する。そして刃を回避の勢いを利用して振る。

「惜しいネエ」

金属音とともにそんな声がする。飄々とした雰囲気猫目の男の刀がガナツシユの太刀を受けとめた。「ちっ……」舌打ちをした。右から圧力を感じた。さっきの血の気の荒い男の大槌だ。横薙ぎに振られる。ガナツシユは太刀を引き、大槌を躲す。大槌は障害物を破壊した。

あれに当たったら。

ガナツシユは戦慄を覚えた。だが、すぐに引き戻される。頬を何かが掠めた。痛みが走る。矢だ。まずい。

ボウガンの金属矢が無数に飛んでくる。ガナツシユは着地と同時に障害物に飛び込んだ。

「貰ったあ！」

嬉々と叫ぶ声。目の前で剣を振りかぶる男の姿。

「っ！」

「チエストオオツ！」

「げぶっ!？」

その男は真横に吹っ飛んだ。レイジが蹴りを食らわせたのだ。その際にガナツシユは立ち上がった。

「済まない」

「ええで」

短く言葉を交す。

ガナツシユは太刀を再び構えた。

本当に厄介な敵だ。魔術士はいないが、その代わり遠戦学部が三人いる。残りの九人は近戦学部ばかりだ。レイジにシエリカの護衛を任せているが、若干荷が重い。こんなとき、フィーロがいたら。なんでアイツはこう、肝心なときにいない。

クロアはひよひよいすばしっこく動き回っている。小動物みただ。戦う気はないらしいが、やられる気もないらしい。複雑な心境である。まあ、クロアはまだいい。問題はモニカだ。一応、応戦はしているし、見た目は問題ないように見えるが、明らかに注意が

散漫している。焦っているのか。苛ついているのか。何にしても、戦闘中にその精神状態はまずい。

「時間さえあれば……」

そうすればコイツが使える。ユーカリスティア。この神具の力を情けない。

神具に頼らなければ自分はこのなにも脆いのか。時間さえあればと言って。本当にそればかりだ。イリア。ボクはなんて弱いんだろう。ボクはあの人のようにはなれないのかもしれない。だけど。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおつ……!!」

太刀を振るう。縦横無尽に振るう。立ち止まるものか。諦めればボクは一生このままだ。ボクは誰だ？ ガナツシュ・ルフエーヴルだ。レベル5、近戦学部首席の魔剣士だ。

雑兵ごときが……

「邪魔するなアアアアツ！」

「ぐおつ……!?!」

血の気の荒い男の懐に入る。相手は大槌。至近距離は分が悪い。こちらの勝ちだ。

「ガアアアツ！」

袈裟斬りに太刀をたたき込む。右肩から左腰まで一気に斬り裂いた。

まず一人。

散々舐めてくれたマッドボーイズの皆さんに、目にもの見せてやるう。浮き足立った彼らを見て、ガナツシュは口元が歪んでいるのが気が付いた。どうやら、ボクは逆境の方が燃えるらしい。「おおおおおおおつ……っ!」昂ぶってきた感情を剥き出しにして、ガナツシュは目の前の敵に飛び掛った。

ない。

ないぞ。

出口が……ない。

新手的イジメかな？ 出られる気がしないんだけど。地下じゃねーよこれ確実に地下牢だよ。ホント。泣いていいかな。泣いたら迷子のアナウンスやってくれるかなマジで。

「見つかりませんね〜」

誰のせいだと思ってるんだろうね、この娘。のほほんとしてくれるけど十中八九君のせいだからね？

「そうだね」なんとか抑えるフィーロ。こういうところは暴君シエリカのお陰で耐性があつたりする。「いい加減、敵の一人や二人出てきてもいい頃合いだっというのに気配すらないしな」

溜め息が漏れた。溜め息一回につき幸せが一つ失うらしい。フィーロは多分その『幸せ』とやらはもう来ないだろうなと思った。また溜め息を吐いた。

「溜め息を吐くと幸せが逃げちゃいますよ？」

ふふふ、と笑いながら言うユーリ。いや、だから誰のせいだと思っっているんだい。完全にユーリが道を間違えまくったせいだよ。

「そうだね……」

抑えるっっていうか、抑えるほどの怒りさえ生まれなくらい脱力していた。恐ろしい女だ。ユーリ。

フィーロがユーリを見てみると、その視線に気付いた。顔を赤く染めるユーリ。

「そんなに見つめられると……」

……照れる要因なんてあつた？

本当に脱力系だ。フィーロは溜め息を吐きそうになって、堪えた。自分に非があるようには思えないが、色々と拗こじれると面倒なので悪いと短く謝る。

残り時間を見ようと懐中時計を手に持って、暫くして仕舞う。も

うどうでもいい。時間より出口だ。暗所恐怖症になるかもしれない。もともと暗いのは嫌いだけだね。怖いし。幽霊とか。

多分、今幽霊的な何かが見われたら、フィーロはユーリを放って逃げ出す自信がある。それくらい嫌いだ。自然に歩くスピードが速くなっていくフィーロ。

「あ、ま、待つてくだ……うひゃあっ!？」

ユーリが突然悲鳴を上げた。フィーロの体がびくつと跳ねる。ぴたりと体が硬直して立ち止まった。ちよ、やめて。いきなり何？俺を恐がらせて楽しいの？ ねえ。

フィーロが錆びたブリキ人形のようにギギギときこちなく振り返ると、

「……………ぎ」

ユーリの身体が、

「ぎゃあああああああああああああ……!」
半分壁に埋もれていた。

第一章(15) 二回戦

J U L I E

「ぎゃあああああああああああああああああ……!!」

「うひゃあああああああああああああああ……!!」

ユーリはフィーロの叫び声に驚き、同じように叫んだ。二人の叫び声の不協和音を奏でた。地下に響き渡り、こだま 飮する。

「ぎいやあああああああああああああ……!!」
連鎖する。

「ひゃあああああああああああああ……!!」
また連鎖する。

「ぐひゃあああああああああ……げほっげほっ……」

「にゃあああああああ……って……だ、大丈夫ですか!?!」

フィーロが叫びすぎて咽むせた。慌ててユーリはフィーロのもとに駆け寄った。

これがいけなかった。

ユーリは滑ってたまたま虚像になっていた壁に埋もれていたのだ。フィーロの目から見たらユーリが壁からずっぽり出てきたように見えたわけだ。ユーリには解っていないのだが。

「いやあああああああ……」

悲鳴を上げるフィーロ。涙目で、乙女のようにへたりこんでいるフィーロは、その顔のせいもあって本当に乙女だった。

「フィ、フィーロ君……」

頭の緩いユーリはそんなフィーロを見て、まさか自分がびびられているとも知らずに思った。

か、
か、

かわいい。

ときめいてしまった。胸がキュンとなった。ユーリはフィーロに抱きつきたい衝動に駆られた。小心者のユーリにそんなことは出来るはずがないのだが。

ユーリにとつて、フィーロはおそらく特別な存在だ。まだ知り合つて二カ月ほどだというのに、ユーリの頭のなかではフィーロは『運命の人』と決定づけられている。もともと、恋愛沙汰には疎かつたユーリが、ある出来事でフィーロに一目惚れをしたのが発端なわけだが。

そんなフィーロの新たな一面を知ることが出来たユーリは天にも昇る気持ちだ。

「大丈夫ですか……？」

ユーリはフィーロに近付いた。なんでこんなにもドキドキするんだろう。これが恋つていうものなのかな。

「……あつ、ああ……大丈夫……うん大丈夫……大丈夫……」

大丈夫を三回も言うフィーロ。三回大丈夫ならきつと大丈夫だ。頭の螺旋がゆるゆるなユーリはそう結論づけた。安堵の表情を漏らす。

「いきなり悲鳴をあげるからびっくりしました」

「あ、うん……ごめん」

少し頬を赤らめてしゅんとするフィーロ。照れてるのかな。かわいかった。ほわーっとする。頭の線がふにゃふにゃのユーリは頬を緩めた。

「どうした……？」

「い、いえ。何でもないですよ？」

「……何故に疑問？」

危ない危ない。何が危ないかよく解らなかつたけれど危なかつた。……まあいいや。よいしょ……」フィーロが起き上がる。お尻を数回叩いて、辺りを見回した。「んー……」と唸る。

「どうしました？」

「避けんだわりに敵の気配がないからさ」

「あ、今の叫び声は敵の気配を探るためだったんですか？」

「え……あ、ああそうさうんそうだよまちがいないね」

頭を縦にぶんぶん振るフィーロ。かわいいなあ、と脳がプリンなユーリはそんなフィーロを見て頬を緩めた。「あの壁……虚像だったんだな……チクシヨ」フィーロが何か呟いたが、ユーリには届かなかった。ただ首を傾げてフィーロを見ていた。

オホン、とフィーロが咳払いする。

「あー取り敢えず、時間切れまで出口を探るか。あれだし」

「そうですね」

あれってなんだろう。ユーリにはさっぱり解らなかったが、とにかく出口を探すことは了解した。

「行こうか」

フィーロが歩きだす。ユーリはそのあとを付いていった。

ふと、考える。

……あれ？

今思えば、わたし、フィーロ君と二人きり？

これは……もしや、デート？

デート……フィーロ君と……デート……告白！？

精神的に緩いユーリの曲解。

ユーリは“告白”という言葉に「はわわわわっ」と慌てた。フィーロが訝しんだ表情で見る。「どうした……？」と聞いてくる。ユーリはあたふたした。「な、何でもないですうーっ！」

何故かキレた感じになった。

「……何故にキレル？」

フィーロの表情は余計訝しんだものになった。

しかしフィーロはすぐに前を向いて歩きだす。よかった。ばれなかった。

でも……恋人かあ。

告白をすっ飛ばしていた。既に、ユーリの中で『告白に失敗する』

という可能性は考慮に入っていなかった。

もし、フィーロ君が恋人なら……へへへ……

「……………笑ってる……………」

身震いしてフィーロが呟いた言葉は、ユーリに届いていない。ユーリは勝手に妄想の世界でフルエンジョイしていた。

Reiji

「シャアッ！」

「のわっ……………!？」

剣士学科とみられる男の大剣の一閃。レイジは飛んで回避する。結構意表を突かれたので、ちよつと危なかった。

「ほいさっ！」

回避した動きに連動させ、蹴りを食らわせる。相手は顔の左側面を蹴り飛ばされ、真横に吹っ飛んだ。あれで気絶してくれたらいいのだが。

「ぬううううああああああああああああ……………！」

雄叫びにも近いガナツシュの叫び声が響く。ズガン、と敵の刀ごと斬った。これで三人目だ。ユーカリスティアは神具としても有能だが、普通の武器としてもかなりの業物だ。そもそも、この時代に存在しない鉱物で出来ている。並の鉄刀なら飴のように切り裂く。というか、叩き折る。

ガナツシュは魔剣士の魔の部分が注目されている節がある。仕方ないことだ。魔剣士はガナツシュを含め、学校に生徒会長ともう一人のたった三人しかいないのだ。希少価値の高い存在といえる。

それでも、彼は剣士だ。伊達に近戦学部で首席の座を手に入れない。

「らあああああつ……………！」

「くうっ……………！」

敵を圧倒する彼はまさしく黒い猛獣。蒼い刀身の太刀はどこまでも澄んでいて、冷たく死の光を放つ。絶対零度を思わせる男だが、どこか熱い。情……そうだな。彼は情に熱い。だからこそレイジはカタハネを選んだ。

「惚れるわ〜」

呟き声は誰にも届かない。

別にもともと独り言だが。

レイジは周りを見渡す。シェリカの護衛が仕事だ。意外に、ガナツシユのお陰で注意は外れているからラツキーだ。とはいっても、完全に無視なわけでもない。護衛は必ず必要だ。

風を切る音が聞こえる。

抜き身の短剣で払う。金属性の矢が回転しながら明後日の方角に飛んでいった。

そうだった。射手がいるのだ。めんどくさい。だけど大した射手でもない。クロアを大に見習え。そんなボウガン使わなくても彼女は、

「あがつ！？ がつがつがつがががががががががが……！？」

十五連射出来る。

射手の一人がぶつ倒れた。あれはひどい。針のむしろだ。可哀相になってきた。まあ、当然の結果だとは思っ。

マッドボーイズ。

クラシレベル
CL3。

十二人という大所帯というのもあるが、四年生でCL3と、一年生でCL3じゃわけが違う。さすがに経験は多いであろうから、戦略面では劣るかもしれないが、力では負けない。所詮その程度の敵だ。

ガナツシユは考えを読まれてしまった所為で必要以上にパニックに陥っていたようだが、冷静になって考えてみればいい。

四年生が一年生相手に策を弄する時点で雑魚やる。

今のノリノリのガナツシユならそう苦労する相手じゃない。この

分だともうすぐで片が付くだろう。自分は自分の仕事をすれば問題はない。

レイジは振り返った。

「烈X〇儕Ray穿雷瘡」

いきなりだった。幾本もの稲妻が走った。レイジの周りを。何本も、何本も。それは敵の射手に集中し、

「あばばばばばばばばばばばばばばばば……!？」

感電させた。

あつという間に退場させる。

レイジはそれを見て、

「あ……あぶなあー……」

冷や汗を掻いた。蛮族の森でのガナツシユの気持ちがあつた。これは怖い。恐怖だ。心臓に悪い。しかも、ガナツシユの時と違って、一本じゃない。五十本は軽くあつた。あれでも手加減しているのだろう。上級の魔術士はまるで幾千もの糸のように稲妻を走らせることができる。が、手加減していても、危ないことに変わりはない。

「くっ……魔術士が厄介だ！潰せっ！」

誰かが叫ぶ。

今頃気付いてどうする。手遅れだ。あまりにも馬鹿馬鹿しい。もういつそ哀れだ。

要するに、どいつもこいつも、カタハネを舐め過ぎだったのだ。所詮一年生クランだと。高々七人だと。上級生の自分たちが負けるわけがないと。

だから、

「附Meer哀du刀随水霊」

彼らは負けるのだ。

背後から聞こえる勝利の呪文に、レイジは薄く笑った。

さすがにこれはあれだ。

始めの分岐点で道を間違えたに違いない。

いい加減、上に昇るための階段だのなんだのがあってもいいだろう。一向に見つからないってどういうこと？

「出られませんね」

「そうだな」

お前のせいだつってんだろーがチキショーめ。

いや言っていないけどさ。仮にも女の子だし。そんな暴言吐いたりはしないけどさ。

まあ、連れがユーリでよかったこともある。あんな情けない叫び声を上げたのを、他の奴に聞かれたら何をされるか。考えただけでも身の毛がよだつ。本当にユーリでよかった。つかユーリが天然でよかった。俺の名誉が守られた。いや、別にびびっちゃったとかそんなんじゃないから。コンタクト落としちゃったからびびくりしただけだしね。焦るだろ？ うん。焦るんだよ。焦るつつつとけ。俺は裸眼だけど。

「えへへ……」

にしても、さっきからにやつき過ぎだ。なんか怖い。

「何笑ってんだ……？」

「ふえっ？ わ、笑ってましたか、わたし？」

「うん」気味が悪いくらい。

「え……えへへ」

……。

もうヤダこの娘。

確かに可愛いし、胸もでかい（あ、これは関係ないか）。天然と
いうか緩い性格だから、男子からしたらまさに『萌え』を体现した

存在だろう。フィーロの目からしてもユーリは可愛いと思う。

ただなあ。

変な娘なんだよ。

慣れたけどさ。一応。カタハネにまともな奴なんていないし。諦めてるからね。

特に意味もなかったが、フィーロが振り返ると、ユーリは今度は切羽詰まった顔をしていた。表情変化が忙しない奴だな。これは追及したほうがいいのか。なんとなく放っておくと不味い気がする。フィーロは口を開いた。

「あかさ」「あのっ」

同時にユーリまで口を開いた。

「何?」「な、何ですか?」

そしてベタ。

「先にどうぞ」「お、お先にどうぞ」

ベッタベタだった。

いやいや、安いラブコメじゃないんだから……。フィーロは苦笑した。

「で、何?」

「え……と……そのっ……」

途端にどきまぎし始める。顔も真っ赤になっている。文章くらいちゃんと作ってから話せよと思うものの、そう急かす必要もないので、フィーロは黙って待った。

「えと……わたし……」

もじもじしながら上目遣いで口を開くユーリ。フィーロはそれを見て、うっ、とたじろいだ。こう、胸キュン（死語）した。

つか……あれ?

なんだこの雰囲気。ふわふわしてるんだけど。なんだこれ。なんでこんな薄暗い地下で背景桃色?

「わたし……フィ、フィーロ君が……フィーロ君のことが……」

フィーロは固唾を呑んだ。

「……す」

『Eブロック三回戦、攻撃側のメンバーが三人になったため試合終了。これより転送を開始する』

「……」

「……」

「……で、俺が……何？」

「な……何でもないです」

「そうか……」

ちよつと、残念に思う自分がいた。阿呆か俺は。非モテが夢を見たら痛い目を見るぞ。そもそもその夢が痛いんだから。ああ、やだよだ。少しでも期待する自分に反吐が出る。俺みたいなチキン野郎を好きになる女の子なんて存在しないって。言ってる悲しくなるなま、事実だし。

妙な沈黙を破るようにフィーロは口を開いた。「……勝ったみたいだな」

そもそも、沈黙に耐え兼ねただけだが。

「そう、ですね」

「ああ……」

会話のキャッチボールはフィーロのミスパスで終わった。取り敢えず、この気まずい空気をどうすればいいんだろうな。

今ほどさっさと転送してくれと思う瞬間はない。フィーロは長い息を吐きだした。

十

「フィーロ！」

フィールド

虚像の城から出ると、シエリカが駆け寄ってきた。

「怪我はない!？」

「いや、仕組みに考えてないだろ。怪我は」

「変なことされてない!？ あの爆乳女に!」

「いや、されてないけど。寧ろ逆じゃね？ 普通」

「まさか……したの!？」

シエリカは凄まじい剣幕で押し寄せてきた。何がまさかだ。

「してねえ」

溜め息混じりに言う。

「ホントに?」

「本当に」

「ホントのホントに?」

「本当の本当に」何なんだコイツは。

「ホントに……してないのね?」

「何をするっていうんだよ」

面倒臭い奴だな。モニタリングされてるのに下手なこと出来るわけないだろうに。そもそも、俺は紳士だ。

「ならいいわ」

そう言っただけで安堵の息を漏らすシエリカをフィーロは複雑な心境で見つめた。俺はそんなに野獣にみえるのだろうか。勘弁してほしい。まあ、取り敢えずシエリカの疑念は晴らすことが出来た。フィーロは溜め息を吐いて、仲間たちのもとに向かった。地面に座り込んだ黒髪の男を見据える。

「……で、結局ごり押し勝ちか? えらくお疲れだが」

「黙れ……」

「どうせまた神具ユークリスティアを使ったんだろ。一日に何度も使いやがって。…

…死ぬぞ?」

「……余計なお世話だ」

ガナツシユは明らかに疲弊している。どうやって勝ったかは一目瞭然だ。一日に連続で神具を使用するということの危険さをガナツシユは解っているのだろうか。

「そういえば、フィーロはどこ彷徨ってたんや?」

レイジが口を挟んできた。

「ん。地下」

「えらい時間掛かってるやん。出られへんかったんか？」

「ああ。ユーリが道を間違えまくったからな」

「すいません……」

「謝る必要などないのだから。ユーリは悪くないの。悪いのはこの害悪細菌よ。あなた、ユーリに妙な真似してないでしょうね？」

「するか」吐き捨てるように言う。お前もかモニカ。「大体、あの時お前が動かなかったからだろう。ブーツとして。調子悪いのか？」

「……煩いのだから……別に、何でもないのでわ」

次は失敗しない。そう言っただけ顔を背けるモニカ。反省はしているらしい。戦いの最中に気を散らすなど、戦士にあるまじき行為だ。

武人のモニカが何の理由もなしにやるとは思えない。少なくともフイーロには。モニカにも思うところはあろうのだから。

暫しの沈黙が流れた。

「とにかく、これで二連勝だ。今日はこれで終わりだから、全員しつかり休め」

ようようそれを破るようにガナツシュが全員を見回して言った。

フイーロはそれに対して茶化した。「一番休まなくちゃいけない奴が言っつなよ」

「煩い」

ふん、と鼻であしらって立ち上がったガナツシュは、そのままどこかへ歩いていった。多分、給水場だろう。フイーロはクスクス笑った。

残った仲間たちに、散歩でもしてくと嘯いてフイーロも運動場を離れた。

二回戦は言うほど戦闘に参加していたわけではないが、精神的に疲れたフイーロは、取り敢えず適当に座れる場所がないか探した。迷った結果、校庭のベンチに座ってゆっくりすることにした。ほとんどの生徒は食堂か、試合を見るのに熱中しているらしく、人が全くいなかった。これならゆっくり出来るだろう。

「あー……しんど……」

フハアー、と今日一番の長い息を吐き出しながら、フィーロは空を見上げた。雲一つない晴天。コンテストが始まって三時間。いい加減、疲れた。色々。もう試合はないということが救いか。

リーグ戦は十試合。試合順は連続試合にならないように組まれている。一日五試合で分けるのは、疲れてパフォーマンスに支障がないように、とのらしい。公平に全クランー日二試合ずつになっている。

因みに今は昼食休憩だ。次に二番と三番。最後に四番と五番。相手の試合を見てもいいが、フィーロとしては帰って寝たい。

「あ……」

ベンチでぐでーっとしていると、笑い声が聞こえた。クスクスという含み笑い。フィーロは首をもたげて声の方を何気なく見据えた。笑い声の主を見てフィーロは驚いた。

「ふふっ……ごめんね。見てて面白かったから」

「リリーナ……先輩」

声の主はリリーナだった。泣く子も黙る生徒会長が何故ここに。何を言っただいいかも解らず、フィーロはただ呆然とした。ややあつてリリーナが困ったような表情をした。

「先輩、いらぬよ？ 使われ慣れてないんだよね」

「……そうですか」

「そこさ」リリーナがフィーロを指差す。「わたしの特等席なんだ」正確にはフィーロを指差したわけではないらしい。ベンチか。つか何だ特等席つて。まあ、いいけどさ。「……すいません、退きます」

「あ、いいよ。隣空けてくれればいいし」

立ち上がるうとしたフィーロを制するようにリリーナは言った。そう言われれば、逆に退きにくい。フィーロは素直に横にずれた。

「ありがとねー」隣にリリーナが腰掛けた。「んー風が気持ちいいねー」とにこやかな笑顔をこちらに振りまいてくる。俺にどう返せ

と言っんだ。

「そうですね」

結局、淡々と返した。いきなり過ぎて愛想よくなんか出来ねえよ。
「むむっ？ もしかしてストイック？」

「いや、違います。対応に困ってるだけです」

「えっ、わたしって絡みづらい？」少しシヨックを受けたような表情をするリリーナ。何だか子どものような人だ。フィーロはそう思った。

「そういうわけでは……ただ、生徒会長と相席っていうのに緊張してるだけです。シャイなんです」

「そっかー。気にしないでいいよ？ 別に生徒会長が特別なわけじゃないし。キミ、名前は？」

「フィーロ・ロレンツです」

「フィーロ君かぁ。いい名前だねっ」

向日葵のような笑顔でリリーナは言った。自分の名前をいい名前だと思ったことはないが、リリーナが言うならいい名前なのかもしれない。そう思わせるだけのオーラみたいなものが彼女にはあった。

「あ、そうだ」リリーナは何かを思いついたような声を上げた。「ねえフィーロ君。お昼食べた？」

「まだですけど」

「じゃあ、一緒に食べない？」

「は？」

何言ってるんだろうかこの人は。男子の憧れにして高嶺の花の美人生徒会長リリーナ・メルティノーズからのお昼の誘いだと？ 罨かこれは。いわゆるドツキリというやつか。俺に夢を見させて叩き落とす系の嫌がらせか。

「だめ……？」

その上目遣いは反則だ。「いいですけど……」

押し流される俺はただの優柔不断か。自嘲の笑みが零れそうになった。寸でのところで押し込んだ。立ち上がる。リリーナがどこに

行くのかと聞いてきた。

「昼食、買わないとないんで。少し購買部まで行ってきますね」
そう返した。

食欲はあまりないが、パンくらいは買っておこう。

購買部に足を向け、フィーロはドッキリではないことを祈った。

第一章（16） 食べてばかり

F i r o

購買部でサンドイッチなどを購入したフィーロは、リリーナの待つベンチに向かった。何というか、複雑な心境だ。まさかリリーナから昼食に誘われるなど思ってもみなかった。花も恥じらうほどの美貌の持ち主だぞ。高嶺の花とかそんなレベルじゃない。

やっぱドツキリか。

嗚呼、マジでドツキリな気がしてきた。帰ろうかな。むしろ、戻ってももういないかもね。騙されてるかもね。

疑心暗鬼状態のフィーロは重い足取りでベンチに向かった。

しかしながら、予想とは裏腹に、

「もー遅いよー。ちゃんと待っててあげたんだから、感謝してよ？」
リリーナは頬を膨らませながらも、フィーロを待っていた。周りに人影はない。気配もない。視線もない。これはドツキリではないのか。いや、油断はしてはいけない。慎重にいこう。

「すいませんでした」

下手な言い訳をするより、さっさと謝ったほうが得策だと頭を下げる。

「ん。よろしい。さ、座りなよ」

「失礼します」

そう言っただけでフィーロはリリーナの隣に腰掛けた。勿論、露骨にはないが、間は空けている。リリーナの膝の上に小包が乗っていた。弁当か。

「もー堅いなあ。フレンドリーにいこうよフレンドリーにっ！ ねっ。リリーちゃんって呼んでみようっ！」

にぱーと笑うリリーナ。わざとか。わざとやってるのか。じわじわと洗脳していく作戦か。俺をどうするつもりだ生徒会長。因みに

絶対呼ばん。呼ばんぞっ……！！

リリーナは止めと言わんばかりにこちらに寄ってきた。フィードも平常心を保ってきたが、これはマズイ。色んな意味でマズイ。

「近くないですか……？」

「んー？ 何か言ったあ？」

はい、わざと決定。

フィードは弁当の包みを開けているリリーナを見て、そう結論付けた。溜め息が漏れる。

もうどうにでもなれ。

開き直った。

「じゃーん！ 手作り〜」

「美味しそうですね」

「食べたい？」

「結構です」

「まあまあ、そう言わずにおーっどーぞっ！ あ〜ん」

俺、結構ですって言ったよな。断ったよな。本当にこの人は一体何なんだろう。

真剣に考えてしまった。

「あ〜ん」

「……」

「あ〜ん」

「……」

「あ〜ん」

「……あーん」

押し流された。

「どっ？」

「美味しいです」

「へへん」

「……」

帰りてえ。

フィーロは切に思った。こんなところを誰かに見られれば、フィーロに次の日はない。雰囲気からして、一応ドッキリではないらしい。あくまで多分、だが。すると疑問が生まれる。

「……せんぱ……リリーナさんは、何で俺を昼食に？」

「うん？ いや、一人で食べるなんて淋しいじゃん？」

「他にも食べる人はいるじゃないですか？ 何も初対面の奴を誘うなんて……」

卑屈な台詞だ。馬鹿か俺は。

「迷惑だった……？」

しゅんとした表情でそんなことを聞いてくる。反則だ。取り敢えずその上目遣いは反則だ。「そういうわけじゃないです」そう答えるしかない。リリーナはよかった、と微笑んだ。そして、お箸を置いて、遠くを眺めた。サンドイッチに噛り付きながら、フィーロはそのリリーナの横顔を眺めた。

「わたし、生徒会長になってから敬遠されててねー」リリーナはおもむろに話し始めた。「友達も少ないんだー。で、昼とか、淋しいからここで食べるの」

ここから見える桜の木が綺麗なんだー。今は緑だけだね。

リリーナはそう言ってお箸を再び持って、弁当を食べ始めた。ご飯を頬張りながら、フィーロを見てくる。

「だからフィーロ君が座ってるの見て、嬉しくてさ。お、友達発見っ！ て、声を掛けたの」

「そうですか」

リリーナの言っていることは大体解った。

敬遠か。

アイドル崇拜とはそういうものだ。アイドルとは崇められるからアイドルである。誰かの隣に立ったアイドルはもはやアイドルではない。ただの女の子だ。学園の男子生徒は、リリーナをアイドルとして見ている。だから余計、普段は敬遠してしまうのかもしれない。

皮肉なものだ。フィーロは苦笑した。

リリーナ自身も気を遣っているのかもしれない。男子生徒の大半にちやほやされているがゆえに、女子生徒の嫉妬や反感を買わないように、適度な距離を保ったり。全部フィーロの推測に過ぎないが、そう思うと、生徒会長も大変だと思った。

同時に、親近感みたいなものも感じた。まあ、勝手に感じたただけだから、口には出さない。フィーロはリリーナの弁当を頼張るのを見て、微笑んだ。栗鼠^{リス}みたいだ。

「？ わたしの顔、なんか付いてる？」

「いえ、鼻にご飯つぶが付いているだけです」

「付いてるんじゃないっ。……あれ、ない。付いてないっ？ ウソ吐いたなあ！？」

「ええ」

フィーロはクスクス笑った。リリーナは頬を膨らませて、ポカポカとフィーロの頭を叩いた。なんとなく、こういうところが我が儘な自分の姉に似ているように感じた。そう思うと、まあ、こうやって付き合うのも悪くはないと思った。ドッキリじゃなかったら、の話だが。

うーうー唸りながら、ポカポカと頭を叩いてくるリリーナを余所に、フィーロは空を見上げた。無駄に快晴。もう夏だ。暑いくらいだ。

「あー……人がいなくてよかった……」

本心からそう思った。

十

リリーナと他愛ない話をして、昼食を終えたフィーロは、寮部屋に帰った。

「遅かったな」

椅子に座ってコーヒを啜っていたガナッシュが言った。「ああ」

曖昧な返事で返した。リリーナのことは伏せておいたほうがいいよ
うな気がした。ガナツシユがそういう奴だとは思っていないが、も
し広まれば、フィーロの明日の命はない。

「昼飯はどうした？」

「パンで済ませた。ガナツシユは？」

「食欲がないものでね」

「なくても食えよ。すり減った魂の回復は睡眠と食事でしか無理だ
ぞ。疲れを癒す。一番大事だ」

「……だからコーヒーを飲んでいる」

「眠れなくなるだろうが。アホかお前」

「フィーロには言われたくないな」

フツとガナツシユは笑った。弱々しい笑みだ。明日の戦闘は神具
は使わないほうがいいかもしれない。本格的に衰弱し始めたら、回
復が困難になる。魂は肝臓みたいなものだ。個人差はあるが、約三
分の一程度残っていればまだ回復できるが、それ以下だと立つこと
もままならない。

魂は人という器を動かす大事なものだ。死体をいくら治癒士が綺
麗に治療しても生き返らないのは魂に因るところだ。一般的にはそ
う信じられている。それはつまり、魂を確保し、肉体に戻すことが
出来たら、人は生き返ることが出来るかもしれないということなの
だが。

それが素晴らしいと思う人がいるかもしれない。フィーロだって、
もし仲間が死んで、生き返らせることが出来るなら、多分、生き返
ってほしいと願う。本人が望まなくても。フィーロは願うだろう。

「……ただ、それは本当に素晴らしいことなのだろうか。」

「……口？ フィーロ？ どうした？」

「あ？」

「あ？ じゃない。大丈夫か。目が泳いでいたぞ」

「あー、悪い。考え事してた」

「……お前も疲れてるんじゃないのか？」

「多分な」

「コーヒー飲むか？」

「疲れた相手を寝かせないとは……とんだドSだな、お前」
「いないよ。」

フィーロはそう言って、コップに水道水を注いだ。八分くらい溜まったところで栓を閉め、水を飲んだ。生ぬるい水が身体を流れていくのを感じた。「……ぬるっ」そう言ってコップを置いた。

「……じゃ、夕飯まで寝るわ」

「ああ」

「お前も休めよ、ガナツシュ」

「解っているぞ」

「おやすみ」

「おやすみ」

まだ日は高い。

早いお休み。

ベッドに寝転がったフィーロは、目を閉じた。すぐに微睡んだ。

Unknown

あともう少しだ。

準備は整った。

順調に行けば、僕は。

何にせよ、まずはリーグ戦を勝ち上がらなければ。クランが負けたら意味がない。勝ち上がって、最終選考まで行けば僕の勝ちだ。

全てが僕にひれ伏す。

さあ。

皆が僕の力に恐れ、敬い、ひれ伏す時が来た。

黒い本を開く。

これは我が栄光への一歩。

つててくれる？」

「どうして？」

「着替えたいから」

「解った」

シェリカは素直に部屋から出ていった。フィーロはクローゼットから、アンダーシャツを適当に見繕う。黒のタートルネックのシャツを着て、何か羽織るか迷ったが、暑いからやめた。

そういえばガナツシユと変態が見当たらない。どこに行ったのだろう。どうでもいいが。

部屋を出ると、壁にもたれるシェリカの姿があった。「お待たせ」そう言うと、シェリカは「行くわよ」と言って歩きだした。あとをついていく。

外はすでに茜色に染まっていた。快晴だったため、夕焼けもかなり綺麗に見えた。

「どこ行くんだ？」

「今日は天理に行きましょう」

第二食堂の天理。鸞明国の郷土料理を楽しめる店だ。ベルベツトと違うのは、やたら高いことか。

鸞式　いわゆる鸞明国式の木造建築の天理は全席個室。宴会場まである。学園内では校舎を抜けば一、二位を争う広さだ。入学から二ヶ月といくらかが経ったが、未だ天理に足を運んだことはない。………どうい風風の吹き回しだよ？」

当然気になつて聞いた。

「まあ、気分よ」

気分屋らしい台詞が返ってきた。フィーロは呆れたが、嫌ではなかった。「……ハイハイ」お供しますよ、我が儘姫。フィーロは苦笑してシェリカのあとをついていった。

「何よ？」

笑っているのがばれて、シェリカはむっとした表情になった。フィーロはそれがおかしくて、

「別に？」
しれつとして流した。

天理に着くと、アルバイトらしき仲居の女の子たちが着物姿で出迎えてくれた。「何名様でしょうか？」

「二名で」

「かしこまりました」

そう言っただけで仲居がフィーロたちを案内した。滑らかに歩く仲居を見て、あーこれはシェリカには無理だなと実感した。

天理のアルバイトの審査は多分学園内では一番難しい。鷺明国出身の娘たちでもなかなか合格出来ないくらいだ。それでも希望者があとを絶たないのは、一重に、伝説があるからだろう。

曰く、天理で就労できたら、男にモテる。

そんな阿呆臭い伝説があるのだ。なんでも、大和撫子になれるとか。鷺明国ではお淑やかで美しい女性を大和撫子と呼ぶらしい。まあ、女の子なら憧れるのかもしれない。逆に男なら確実に食らい付いているだろう。

フィーロはシェリカが仲居をやっている姿を想像してみた。

「……クツ……クク」

「どうしたの？」

「何でもない」

途中で「やってられるか　っ！」と暴れだすシェリカが容易に想像できてしまい、思わず笑ってしまった。訝しんだシェリカに誤魔化すように微笑んだ。

「まあ……いいけど……」

納得は出来ないみたいだが、追及は諦めたらしい。シェリカは前を向いて、仲居のあとをついていった。フィーロはシェリカに聞こえぬように、安堵の息を漏らした。

部屋の中は座敷だった。

真ん中に低いテーブルが置いてあり、木製の背もたれの付いた脚のない椅子がある。敷かれた座布団はかなり柔らかそうだ。

「フィーロとシェリカは向かい合うようにして座った。」 お料理はどうぞいますか？」仲居がそう尋ねてくる。

「フィーロは何食べたい？」

「いや……特に要望はないんだが……」いきなり決められてるんだし。

「じゃあ、魚料理でいいかしら」

「ああ」何だっという。

「かしこまりました」

一礼して仲居が下がった。襖が閉じられる。沈黙の帳が降りた。今からでもベルベットに行っただろうがよいのではないだろうか。

フィーロはいいよのない息苦しさを感じた。

「あ……シェリカってさ」いい加減、沈黙に耐え兼ねたフィーロが口を開いた。「天理てんりによく来るのか？」

なんとなく慣れた感じを見受けたため、感じた疑問を投げ掛ける。シェリカは首を横に振って答えた。「ううん。モランと一緒に

来たことがあるだけ。これで二度目よ」

「そうか」

「今日は……その、祝勝会みたいな感じにしたかったの」

シェリカは少々歯切れ悪くそう言った。いや、別に顔を赤らめて言うことか、それは。風邪か？もしかして。

「つか祝勝会って……二人だけじゃん」

「二人でやりたかったのっ！ 悪いっ？」

何故にキれる。「別に悪いとは言っていないぞ……？」

実に女心っていうものは解りにくい。双子だからってあの姉の考えはなかなか読めないものだ。解るときもあるが。

「ふんっ」

ぷいと顔を背けるシェリカ。どこに機嫌を損ねるポイントがあったのか。フィーロには解らなかった。ま、料理が来たら機嫌も治る

だろ。そういう奴だ。我が姉は。

湯飲みを手に取り、お茶を啜る。

「あつっ……」

いやだから。

俺は猫舌なんだって。

十

程なくして料理が運ばれてきた。食膳には、色とりどりの料理が載っている。刺身と天麩羅か。鸞明国万歳だな。天麩羅は鸞明国発祥じゃないけど。

箸をとる。

意外に、鸞明国の文化は様々な都市に広まっている。箸はいい例だ。他にも広まっているらしいが、フィーロはそこまで博識ではないのでよくは知らない。図書室に行けば解るかもしれないが。

「いただきます」「いただきますーす」

フィーロとシェリカが同時に合掌し、食前の挨拶をした。鸞明国には一応、食べる順番など作法があるらしいが、二人はそんなことは全く気にせずに食べ始めた。艶やかな白米の盛られた茶碗を手に取り、フィーロは一口頬張る。ベルベツトは白米もあるが、ピラフやチキンライスが大半を占める。つかベルベツトの白米はあまり美味しくないのだ。それでも完食するのだが。どんだけ腹が減ってるんだという話である。

「美味し〜」

我が儘姫は機嫌がよくなったようだ。さすが天理。ありがとう。

姫の怒りを治めてくれて。

しかしながら、安寧はそう簡単には訪れなかった。ふと気が付いたようにシェリカが口を開いた。

「そういえばさ。フィーロはお昼はどこに行ってたの？ お昼誘おうと思ったらいなかったけど」

「え？」今それを聞きますか？ 言えるわけがない。生徒会長とお昼ご飯食べてましたなんて。「あー……購買部に行った」

嘘は吐いていない。核心を言っていないだけだ。お昼に誘おうとしていたシェリカを放っていた時点で、彼女の導火線に火を点けているのだ。何故かシェリカはフィーロが飯の誘いを断るとキレる。

そんなシェリカにことを素直に話せば即刻ドカンだ。木っ端微塵だ。「じゃあ、外で食べたってこと？ 一人で？」

「ああ。まあ、疲れてたからさ」

「それって、あたしと一緒だと疲れるってこと？」

よく解ったな。その通りだ。滅茶苦茶疲れるんだよ。気付くの遅いよ馬鹿シェリカ。「……そういう意味じゃないさ」口では嘘を吐いた。とんだチキン野郎だ。

「まあ、悪かったよ」

「……別にいいわよ……」

いいと言いつつも、釈然としないといった表情のシェリカ。これは追求される前に話題を変えたほうがいいな。

何かいい話題はないか。フィーロは脳をフル稼働させて思索した。ぱっと思いつかない。あー……モテないわけだよなあ。無性に悲しくなる。が、悲嘆している場合じゃない。何でもいから死に物狂いで探せ。話題を。「知っているかシェリカ」

「何を？」

「シェリカの好きなテニスの波 球百八式ってさ……MAXスピードがマツハ720なんだってさ。川 先輩平行に640メートル吹っ飛ばらしいよ」

「別にあたし……テニスは好きじゃないけど……」

「あ、そうだった？」

「ていうか……それが何……？」

「いや、特に意味はない」

「そ……」

「ああ」

「……」
「……」

気まづくなつた。

話題を変えろという当初の目的は達成したはずなのに、フィーロは素直に喜べなかつた。かなり滑ったことに、恥ずかしくて死になつた。

「なんか……ごめん」

「いいわよ、フィーロ」

そう言つたシェリカは慈愛に満ちた女神に見えた。

暫く二人は無言で箸を動かした。その間のことは、フィーロは何も覚えていない。

第一章（17） 愛ゆえに

Ganache

「……じゃ、夕飯まで寝るわ」

「ああ」

「お前も休めよ、ガナツシュ」

「解っているさ」

「おやすみ」

「おやすみ」

フィーロがベッドに横たわった。すぐに寝息が聞こえ始める。寝付きのよさはコイツの数少ない取り柄かもしれない。ガナツシュは薄く笑った。

「……ふう………」

椅子に深く座り直した。カップの中のコーヒーはもう一口分しかなかった。さっさと飲み干してしまう。

「さて……と」

一旦座り直し、胸の内ポケットから紙を取り出した。ピンクの花の模様が四つ、角にあしらわれた封筒だった。真ん中に、今にも蝶のように舞い上がりそうなほど可愛らしく、かつ繊細で美しく、それでいて艶美な文字で『お兄ちゃんへ』と書かれている。お兄ちゃん。ああ……っ！ お兄ちゃん……なんと甘美な響き。今にもキミの声が聞こえてきそうだよイリア。これこそが最上の安らぎ。至高にして至福の一時だ。ああ。漸く届いたキミからの手紙。ボクがキミへの愛を籠めて毎週書いてきた手紙に対して、初めて返事。キミのボクへの愛の結晶だ。永久保存しなければ。もはや世界の宝にも認定されるだろう……！

さあ、キミの溢れんばかりの愛の言葉を聞かせておくれっ………！ガナツシュは手紙を一気に、しかし焦らず丁寧に開けた。封筒と

同じ花柄の便箋を取り出して、開いた。

十

拝啓

お兄ちゃんにはいよいよご健勝のこととお喜び申し上げます。私の方は相変わらず元気に暮らしております。こちらとしては、お兄ちゃんがいないから元気なのだとは解釈しております。

さて、お手紙の件なのですが、はっきり申し上げさせて頂きます。ウザイです。

毎週毎週、何通も送られても困ります。ウザイです。死んでください。半分くらいは読まずに焼却させて頂きました。どうせ、書いていることは同じでしょう？ シスコンも大概にしてください。気色悪いですから。

折角、ローズベル学園に通っているのだから、誰か可愛い彼女でもさっさと作ってください。私のために。お兄ちゃんは顔は格好いいのですから、すぐに出来るはずです。今すぐに作ってください。さもなければ死んでください。

ただ、たまたま開いたお手紙の一つに、気になるものを発見しました。内容は……秘密ですが。私も、これを見て、最近ではローズベル学園に行きたいと思っています。来年から通おうかと考えていますので、願書などを送ってください。手紙より有意義ですから。

それでは、乱文のお詫びをもって締め括らせてもらいます。

イリア・ルフェーヴル

敬具

追伸、ガウスお祖父様が神具の使いすぎには注意しなさいと仰っていました。私としては、ガンガン使ってください。

十

手紙を閉じた。

ガナツシユはゆっくりと手紙を畳み、封筒に入れた。テーブルの上^上に置く。

「フツ……」前髪をさらつと払った。「とんだはにかみ屋さんだね、イリア」

ガナツシユは動じていなかった。むしろ、深読みしていた。そして陶酔し始める。

「イリア。嗚呼、イリア。まさかツンデレまで身に付けるとは……

！ 心配しなくてもちゃんと手紙は送り続けるよ！ 嗚呼、イリア。イリア。ボクのイリア。キミはボクの心を鷲掴みにして放さない。

キミという存在はもはや“美しい”などという単純な言葉では言い表わせない。そう、言うなれば女神。神なんだ。キミは。ボク

の神だ。至高の女神だ。全てを慈しむために存在する女神。それがキミだ。嗚呼、イリア。その全てをボクに向けてくれ。ただそれだ

けでボクは生きていける。ああ勿論さ。ボクはキミに嘘は吐かない。必ずだ。だから信じていてほしい。そして、来年にはこの胸いつぱ

いの愛を籠めてキミに百万本の薔薇を送ろう！ 花言葉は『清纯な

愛』……！ そう、まさしく愛！ ^{ラブ}愛！ ^{マイスライトハート}私の愛する人……！」

両手を広げて、天を仰ぐ。

二、三分ほど目を閉じて、ガナツシユは暫しその甘美な余韻に浸った。目蓋の裏には、愛しいイリアの笑顔が映っている。そう、彼女はボクの心の中にいる。たとえ今のように離れ離れになっているとしても、心は繋がっている。何故なら、そう、ボクたちは相思相愛だからだ。愛し、愛されるボクとイリアの絆の糸はたとえこのユーカーリスティアをもつてしても断ち切ることはままならない。ボク

り、呪われた武器の解呪作業もやってくれる。とはいっても、鑑定は目の利く盗賊学科やらがやってくれるし、解呪についても祈禱^{シヤ}士学科や退魔^{エクソシスト}士学科などが格安でやってくれるから、生徒はあまり利用しない。

買い物に関しても、武器は多少値が張っても物持ちのいい武器が一番だという理由で鍛冶士学科や錬金術士学科、機工^{エンジニア}技術士などのハンドメイドを買う。

そういうのもあって、購買部は学生にとっては『日用品売場』という位置付けにされているのが実情だ。

しかしながら、今のガナツシユにはどうでもいいことだ。「便箋便箋便箋便箋愛便箋イリア便箋イリア便箋愛便箋イリア便箋便箋便箋便箋……」と呪文のようにブツブツと呟きながら、ガナツシユは購買部^{ラッシュ}に急行した。

「……らっしやいヨ」

気だるそうな声で挨拶したのは、購買部の切り盛りを担当している、ルウ・リヤンメイ。少し浅黒い肌に、赤い中華服がよく映える。蜂蜜色の髪をお団子にした女。見た目は小ぢんまりした 丁度、クロアみたいな体型だが、臨時で盗賊学科などの授業もやるらしい。常時キセルを携帯しているのも特徴かもしれない。

ガナツシユが思うことは、彼女の接客スキルは最低辺にいる気がする。まあ、ルウの接客など今は全く関係がないので、目的を手早く済ませる。

文具コーナーに行き、便箋を探す。が、

「……………」
ない。

一つもない。いや、一応、茶封筒はあるが……こんな送れるかアアア！ ボクを舐めるなよ？ イリアへの手紙は全てイリアの好きな花柄やうさぎさん柄だぞ！ 茶封筒なぞ送れるか！

すぐにカウンターに向かう。「ルウ！」

「ああ？ 呼び捨てしてんじゃねーヨ。殺すヨ？ 刻むヨロシ？」
眉を顰めて凄むルウ。全然怖くない。ガナツシユはルウの言葉を完全に無視してまくし立てた。

「便箋がないぞっ！ 購買部から品揃えをとつたら一体何が残るんだ！？」

「黙れボケ」キセルに口を付ける。ふーっと白い煙を吐き出した。

「つーか、昨日で便箋は売り切れネ。残念。来週まで待つヨロシ」

「それじゃ遅いんだ！」

妹が、イリアがボクの手紙を待っているんだ！ 切望しているんだ！

「なんとかならないのか！」

「いや、誰かにもらえばいいネ？ そもそも茶封筒じゃダメカ？」

「駄目に決まっているだろう！」

馬鹿かこの女は。茶封筒でいいなら最初からそれを買っていい

「クツ……！」 視界が一瞬だがブレた。ガナツシユは思わず片膝をつく。

「だ、大丈夫ネ？」

「ああ大丈夫だ……」

神具を二度も使い、魂をすり減らした状態で叫んだり喚いたりしたせいで、疲れが如実に表れ始めていた。夏だというのに肌寒い。だが、生命がなんぞ。イリアのためなら生命など惜しくない。フハハ八所詮血塗られた道よ……。

ゆっくり起き上がり、ガナツシユは深呼吸をした。

「……便箋がないなら仕方がない。ルウの言うとおり、誰かから貰うでしょう」

「そ。……つーか何でそんなもん要るヨ？」

「使命なんだ。……命を賭けた……戦いなんだ」

「ワケわかんないネ」

「解る必要はないさ」ガナツシユは胸に手をあてた。「……そう、ボクとイリアの愛と絆の旋律を読み取ることは何人たりとも出来は

しない。それはまるで暗号のように複雑で、それでいて美しい、絵画のような存在なのだ。この芸術とも言える一つの作品を解するには、たとえ一流の画家をしても不可能なのさ」

「……………」ルウは、そのベラベラと語るガナツシユを見て、深い溜め息を吐いた。「……………アンタたまに超絶気持ち悪いネ」

ルウの目は、もう可哀相な人間を見つめる哀れみの目だった。ガナツシユはしかし、全く動じていない。

「じゃあ、ボクは行くよ。真実の愛を証明するために……………！」

勢いよく駆け出すガナツシユ。その後ろ姿を、ルウは遠い目で見つめた。

「……………妹も大変ネ……………あんな変態兄貴がいたら……………」

キセルを逆さにして、トン、と軽く叩きつける。中の草が出て来た。ルウは気だるそうに、宙を舞う煙を眺めた。煙は、ルウの呆れた心境を代弁しているかのように揺れていた。

十

闇雲に探しても意味がない。確実に持っついそうな奴にあたらないければ。そう思い至ったガナツシユは、便箋を持っついそうな奴を考え始めた。

フィード……………は寝ている。レイジにそんなものは期待してはいけない。シエリカはがさつだから手紙なんて言葉自体知らないだろう。クロア……………は持っついたとしてもくれそうにない。ユーリとモニカなら持っついいるかもしれない。

「この二人にあたるか……………」

取り敢えず、今の時間は女子寮だろう。ガナツシユは急遽、女子寮に足を向けた。

「アンタ頭おかしいのかわ」

モニカは開口一番そんな暴言をガナツシユに向けて吐いた。

「おかしくなどない！ 頼む、便箋をくれ！」

「不純な動機が見え隠れしているのだわ。……駄目よ。これはユーリに書くために買った便箋なのだわ」

「お前も不純な動機が見え隠れしてるぞ！」

そもそも、何で同じ部屋のユーリに手紙を書く必要があるのだ。

口で伝えればそれでいいと思うのだが。

「違うのだわ。アタシの愛はシスコンみたいにイカれた愛じゃないのだわ」

「ボクのイリアへの愛を馬鹿にするな！ 同性愛よりよっぽどマシだ！」

「同性愛なんて一括りにする時点で愚かなのだわ。この愛は黄昏の空に漂う悠久の翼のごとき永遠的かつ優美で全てを包み込む包括的な愛なのだわ。そこらへんの変態と一緒にされるなんて心外なのだわ」

十分変態だとガナツシユは思ったが、口には出さなかった。言ったら絶対くれないから。

「……とにかく、一枚でい」

「嫌よ」即答だった。考慮の余地さえないようだ。悪魔がこの女。

その猫耳は実は悪魔の角か。

「モニカちゃん……」後ろからユーリがやってきた。「そんな意地悪しないで」

困ったような顔でそう言うユーリ。モニカにとってはかなり効いたらしい。うっ、と後退りをした。

「ガナツシユ君、困ってるんだから助けてあげないと……困ったときはお互い様、です」

にこりと笑ってそう言うユーリは、ガナツシユには女神か何かに見えた。もう、なんとというか、後光が差していた。

「……」

逡巡していたモニカだが、やはりユーリのお願いには適わらないらしい。「……解ったのだわ」部屋に戻り、机の引き出しから便箋を

持ってきた。

「持っていきなさい、このごうつくばり。変質者。サノバビッチ」
「何故そこまで言われなさいといけないんだ……？」

吐き捨てるように失礼極まりない台詞を言うモニカに対し、ガナツシユは納得いかない表情をした。あまり反論すると返せと言われそうだったので、止めた。ありがたく受け取る。

花柄の便箋だった。

嫌味で変な柄にしないところは可愛いものだと思うのだが。如何せんこの女は素直じゃない。というか、カタハネの女はユーリ以外は性格がひん曲がっている。どうしようもない。

「まあ、ありがとう。助かった」

「受け取ったなら早く帰るのだわ」
ほらな。

十

目を覚ますと真っ白な天井が目映った。薬品の微かな匂いが鼻をくすぐる。体に上手く力が入らなかった。なんとか声だけは振り絞ってみる。

「……………ここは……？」

「お。起きた？」

すぐ横で声がした。視線だけ向けるとアメリカ保健医だった。要するに、ここは保健室なのだろう。

「……………なんで」

「そりゃこつちが聞きたいわ」

シガレットを取出し、口に啣くわえた。何故、この学園の先生は煙草の類が好きなのだろう。

紫煙を吐き出すアメリカ保健医。

「あんた、ぶつ倒れてたらしいわよ？ 校庭で」

「校庭……」

ああ、なるほど。

要するに、疲れがピークに達して倒れたのだろう。神具を使った影響か。フィーロの忠告を無視した当然の結果だが、ガナツシユは後悔していない。イリアへの愛は己の死よりも価値ある存在だ。

「……誰が運んでくれたんです？」

「ん。あの娘」

アメリカ保健医が指差した先を目で追う。フィーロの金髪より少しだけ薄い、白金色の髪の少女が隣のベッドで寝ていた。

ベアトリーチェだった。

「スゴい心配してたわよ」

「そうですか」

「お礼くらいしなさいよ」

「解ってますよ」

ガナツシユは余計なお世話だと思いつつも、一応素直に返事しておいた。

ベッドから降りる。まだふらつくが、大丈夫だろう。ガナツシユはベアトリーチェのベッドの横まで歩いた。

気持ち良さそうに眠っている。小さな口を“o”の形にしている。癖だろうか。まあ、どうでもいい。起こすべきか否か。これだけ気持ち良さそうだと、起こすのも憚られる。

まあ、今日お礼しないといけないわけでもない。また後日しても構わないだろう。

それにしても、黙っていればベアトリーチェもかなりの美人らしい。普段があればだから、この姿は少しばかり新鮮だった。

「おやおや、惚れたか？」

ニヤニヤしながらそんな妄言を吐くアメリカ保健医。「まさかガナツシユは澄ました顔でそう返した。つまらないなー、と漏らすアメリカ保健医を無視する。

さてはてどうするか。

このまま帰ってしまうのは、なんとなく悪い気がする。起きるの

を待つてもいいが、女性の寝顔を見過ぎるのもあまり紳士的とは言えない。

ガナツシユが思索していると、

「……にゃ」

猫のような声を出して、ベアトリーチェが起きた。どうやら杞憂だったようだ。

「みゃ……あ……にゅ……」

謎な言語を発するベアトリーチェ。目覚めはあまりいいとはいえないらしい。

「おはよう」ガナツシユは笑顔でそう言った。

「え……な……ガ……ガナツシユ……様？」

徐々に状況が把握できてきたらしい。見る見るうちに、ベアトリーチェの顔が赤く染まった。耳まで赤い。

「ど、どどどどどうして……」

「キミが運んでくれたんだろう？ 倒れているボクを。ありがとう。感謝するよ」

「そそそそんなの……えと……ど、どう致しまして……」

ぷしゅー、といった感じで脱力してゆくベアトリーチェ。見ていて面白い。

「今度何かお礼をしたいんだけど、どうかな？」

「おおおお礼ですかっ!？」

「迷惑かい？」

「そそそそんなわけありませんわ! こ、このベアトリーチェ・セルティレス、謹んでお受けいたしますわ!」

「……そう。よかった。で、どうする？」

「持ち帰ってたべちゃいなさいよ」

「黙れエロ保健医」

「もも、持ち帰りっ……」

「いやいや、しないしない」

ガナツシユは手を振って否定する。そこまで見境無くないし、ガ

ナツシユにはイリアが全てだ。他の異性などに興味はない。まあ、イリアに対して肉欲を持つなどはしないのだが。そう。イリアに向けるべきは愛なのだ。その他の感情など不要。愛が全てだ！

「ガナツシユ様……？」

「はっ！ すまない。大いなる愛の扉を越えかけてしまった」

「意味が解んないわよ」

エロ保健医には解るわけがない。一つ一つ事細かに、細部まで、みっちり説明しても構わないが、イリアへの愛は自分だけが知っていれば問題はない。

シガレットを啣え、煙を吹かせるアメリカ保健医を一瞥して、ベアトリーチェに向き直った。

「じゃあ、また後日お礼するよ。……そうだな、取り敢えず寮前まで送るよ」

アメリカ保健医に礼を言ったのち、保健室を後にしたガナツシユとベアトリーチェは寮に向かって歩いていて。

何か話したほうがいいのだろうかと思っただが、ベアトリーチェが下を向いているのでどうにも声をかけづらい。まあ、お喋りが好きなのわけではないので気にしないのだけれど。

暫く無言で歩いていると、

「あ、あの」

ベアトリーチェが恐縮した感じで口を開いた。

「なんだい？」

「ガナツシユ様は……どうして倒れてらしたんです？」

「ああ……多分、というか十中八九神具の使いすぎだろうね」

「神具……神具！？ ガナツシユ様は神具をお持ちなんですか！？」
アティファクト

「知らなかったかい？ ユカリスティア 聖体の秘蹟。聞いたことある？」

「幼少の頃、お祖父様に聞いたことがありますわ……確か、使用者の魂と生き物の血肉を食らい強くなる魔剣だと」

「ボクが魔剣士である所以でもある」

「でもそんな危険なもの……どうして……」

「願いがあんだ。大事な……願い。それを叶えるために、ボクは力が必要だった。それだけだよ。……他にもっと強力な力があれば、ボクは迷わずそれを選ぶ。ユーカリスティアを持つのは、一つの手段なんだ」

「そう……なんですよ……」

「ああ」

ガナツシユは嘘を吐いた。

これに固執していると思われなくなかったのだ。安いプライドだ。自嘲の笑みが零れた。

仮に、これより強力な力があつたとしたらガナツシユはどうするか。簡単だ。喰わせればいい。ユーカリスティアは食欲旺盛だ。喰えば喰うだけ強くなる。だからガナツシユはそうするだろう。

全ては願いのため。ボクは強くならなくてはならない。たとえそれが浅ましき行為だったとしても。

言葉が途切れたまま、女子寮の前に到着した。ベアトリーチェは複雑そうな顔をしている。

「着いたよ」

「ええ……」

「それじゃあ、また明日」

「あの！」

踵を返そうとしたガナツシユに声が掛けられる。無視するわけにもいかず、振り向く。「……なに？」

ベアトリーチェは少し考え込むような仕草をしたが、顔を上げ、ガナツシユを見据えた。

「え、と……わたくしからは何も言えません……神具についても、ガナツシユ様の“願い”についても……」

それはそうだ。他人にどやかく言われたくはない。そもそも、言われたとしてもガナツシユは意に介さないだろう。

「わたくしが言いたいのは……その……お身体には気を付けてくだ

さいね」

虚を衝かれたガナツシユは、目を丸くしてベアトリーチエを見た。顔を紅潮させている目の前の少女の言ったことが意外だったのだ。身体には気を付ける。

フィーロたちのように神具を使うな、使い過ぎるなどは言わず、身体だけは大事にしろと言ったのだ。それがガナツシユには意外だった。少なくともユーカリスティアの存在を知る者が、普通であればそんなことを言うはずがないのだから。

ガナツシユは意外に思うのと同時に、嬉しかった。

自分の願いを後押ししてもらえた気がした。彼女の本意は解らないが、ガナツシユはそう感じたのだ。

「ありがとう」

だから自然にそんな言葉が口から出たのは至極普通であったのかもしれない。

ベアトリーチエは顔を真っ赤に染めて、「どどどどついたしましつー！」と叫んだ。何故叫ぶ？

「じゃ、お暇させてもらうよ」

今度こそ踵を返す。しかし呼び止められたわけでもないのに立ち止まった。今度はガナツシユから振り向いた。

「そうそう、明日はよろしく」

「へ？ え、あ、勿論ですわ。こちらこそ、よろしくお願いします、ですわ」

ベアトリーチエはにこりと笑った。不覚にも一瞬、ほんの一瞬だけ、ガナツシユは見惚れてしまった。

それを隠すようにベアトリーチエに背を向け、右手を軽く挙げた。男子寮に向かって、歩きだす。

上を見上げると、夕暮れの美しい茜色の空。夕飯時だ。

「……さて、フィーロでも誘ってベルベットにでも行くこうか」
それからでも、手紙を書くのは遅くないだろう。

因みにガナツシユが部屋に戻ったら、フイーロはいなかった。結局、ベルベットには一人で行った。

第一章（18） 女難な男

F i r o

翌朝。

克蘭コンテスト二日目。

今日はリーグ戦の残りの五試合と、次の日の抽選会だ。タイムテーブルを信じるなら、試合の開始時間は一日目と同時刻。昨日とは違い長い抽選がないため、召集は小一時間ほどずらされていた。

よってフィーロは気持ち良く寝坊しようと考えていたのだが、
「起きろ馬鹿」

ガス、と殴られ強制的に意識を夢の世界から現実へと引き戻させられた。犯人は言うまでもなくガナツシュだ。けったクソ悪い。寝かせるよ。せめてもの反抗心で、もう一度毛布を被った。

「起・き・ろ」

「ぐっ、ぐっ、でっ」

痛い。

何も三度も殴らなくてもいいじゃないか。悪魔かコイツ。

これ以上の抵抗は自分の寿命を縮めるだけだ。フィーロはそのそと起き上がり、寝呆け眼を擦った。「……んだよ、もうちょい寝かせるよ……」文句を垂れ流す。

「馬鹿。寝起きで体が動くわけないだろ。少し運動するから手伝え、フィーロ」

「わーん、シスコンがいぢめるー」

「本気で殺してやろうか」

目がマジだった。シスコンというとダメらしい。シスコンのくせに。

「……解ったよ」

観念したフィーロは、しびしびベッドから降りた。首を回し、身

体を伸ばして解す。ポキポキと景気のいい音が鳴った。体が少し軽くなるのを感じる。

「んじゃ行くか」

立て掛けてあった片手剣を手に取り、部屋を後にした。

校庭で剣戟の音が響き渡っていた。言うまでもなくフィーロとガナツシュである。

袈裟斬りに放たれたガナツシュの斬撃をバックステップで回避する。しかし追撃され、返す力で真横に一閃。すかさず片手剣を立てて防御した。金属のぶつかり合う乾いた音が響き、剣は空中へ放り出される。さらに追い打ちを掛けるように縦の重たい一撃が放たれる。態勢が崩された状態でそれを回避しようとしたが、失敗。敢えなく後向きに転ぶ。

尻餅をついたところで、喉元に太刀の切っ先が突き付けられた。まさに勝負ありの状況。ザン、という音が背後からした。ちらと後方の地面に綺麗に突き刺さった剣を一瞥し、視線を戻したフィーロは苦笑いをしてガナツシュを見上げた。

「……降参」

そう言うと、太刀が引かれた。ガナツシュは不機嫌そうな顔でフィーロを見下ろす。

「……もう少し本気でやれ」

「本気だって。……大体、首席とビリが釣り合うわけないだろ」

物は考えて言えよ、キミ。

「お前は……はあ」

諦めた表情を漏らしながら太刀を鞘に収める。フィーロも立ち上がり、剣を取りに向かう。突き立てられたそれを引っ込抜き、付着した砂を振って払いチン、と音をたてて鞘に収める。

ついでに、お尻も軽く叩いておく。同時にぐー、とお腹が鳴った。フィーロは懐中時計を取り出し時間を確かめた。もう朝食時である。

「腹減つたなあ。ガナツシユ、朝飯行こう」
「……………そうだな」
それほど激しく動いたわけではないのに、ガナツシユは疲れ切つた顔をしていた。

十

一旦部屋に戻り、シャワーを浴びることにした。ガナツシユに先に使うか聞いたが、それほど汗を掻いたわけじゃないからいい、と断られた。こういうところは無頓着な奴である。それでもモテるから恨めしい。

フィーロは上の服を脱いでベッドの上に放つた。ズボンに手を掛けたところではたとその手を止めた。視線を感じる。まさか、変態か。フィーロはバスルームの扉を蹴り開けた。

しかし、あまりに予想外のものが目に入った。フィーロの体反応硬直した。

「な……………何でいるんだっ!？」

お湯の張られていないバスタブの中に、大きなタオルを巻いただけのクロアがいた。処女雪のように白く極め細やかな肌が覗く。あらゆる種の趣味を持つ者ならば絶景だったかもしれない。

「……………デリへ」

「それ以上は言うな! 俺はそんなもの頼んでいない! そしてお前には羞恥心がないのか!？」

「……………ソーププレイならできる」

「いや、意味解んねーから! ツーか出ていきなさい!」

「……………わかった」

クロアはバスタブから出ると、そのままバスルームから出ようとした。

「服を着ろオオオッ!」

「……………もってきてない」

「嘘オオオツ!?!」

コイツこの格好でここまで来たのか!? 痴女だ! 痴女がここに
いる……!」

……つか、落ち着け、俺。まずは深呼吸だ。すー……はぁー……
すー……、

「どうしたんだ、フィーロ?」

「ぶおっふおっ!?!」

あっさり取り乱した。

ガナツシユは、半裸のクロアとフィーロに視線を何度か行き来させた。そして妙に納得顔をした。うんうん、と頷いた。ああ、ガナツシユ。お前は物分かりのいい奴だ。初めて心から感謝するよ。

「ほどほどにな」

よ過ぎる! 理解力が大気圏突破してる! その微笑が腹立つ!

「深読みしてんじゃねーよ!」

「いや、お前上半身裸だしさ。クロアも半裸だし」

「……いやん」いやん、じゃない。

「俺シャワー浴びるって言ったよな!?!」

「ソーププレイか? マニアックだな」

「何で朝からソーププレイ? するわけねーだろ! つーか話噛み合
ってねーんだよ!」

「解っている。冗談だ」

不敵に笑うガナツシユ。ぶっ殺してやりたい。その澄まし顔を苦痛に歪ませたい。切にそう思った。その念を籠めて、フィーロは目一杯ガナツシユを睨んだ。

「……で、クロア」フィーロの睨みは完璧にスルーされた。泣き
なくなった。「お前、いつからここに? ボクらが出ていったときは
鍵をしたはずなんだが」

「……ピッキング」

「そうか」

いやいや。そうか、じゃないだろう。それは犯罪だ。誰かその

お馬鹿に教えてやってくれ。つかクロアって変態レイジより変態かつ盗賊らしいのな。学科変更したらいいのに。変態学科。

「それで、服は？」

「……………そこに」指差した先はフィーロの椅子の上だった。「フィーロの服と絡めてある」

「何故に!？」

「……………うれしい？」

「悲しいわっ!」

その行動の意味が解らない。この十五年間の人生で初めてフィーロは宇宙人を見た。というか一応服はあったんだな。まあ、当然か。何を考えているんだ、俺は。

「……………ま、服があるならいいや……………さっさと着て帰れ」
げんなりしながらフィーロは扉を指差す。

「……………更衣、見たいの？」

「見たくねーよ!」
嘔吐きました。

そりゃ、男の子ですから。いくらクロアが幼児体型だったとしても、やっぱり女の子だし。思春期の身としては少しは気になりますけれど。

でも理性のほうが上回ってます。俺は紳士です。見ませんよ。ええ。勿論です。だから、

「ここで着るなアアア!」

「……………え、そんな」頬を微かに赤らめるクロア。「……………はずかしい」

「何でだよ!」

「……………野外プレイは……………まだちょっと……………」

「いや……………だから……………深読みしてんじゃねえええ!」
男子寮にフィーロの叫びが轟いた。

クロアをバスルームに突っ込み、服を着させたあと即行で部屋から放り出した。さすがにクロアも部屋に戻っただろう。多分。はっきり言つてあれ以上は勘弁してもらわないと、体力が保たない。既にフィーロは体力というか氣力を四分の三は奪われていた。くたくたである。

「外で待つてるぞ」

ガナツシユがそう言ってきたので、ふと時間を見ると、食堂はもう混みだす時間帯だった。シャワーを浴びることは叶わないようだ。しかも叫んだせいで、暑い。少し汗を掻いた。最悪である。

「……デオドラント使うか」

タオルで体を拭き、デオドラントスプレーを使った。あまり好きではないのだが、仕方がない。白い霧が煙たいので、顔をしかめながら掛ける。

スプレー缶をベッドに放る。整理は戻ってからでいいだろう。フィーロはクローゼットの引き出しを開けた。綺麗に畳まれたシャツが陳列している。

一応、ローズベル学園には制服はあることにはあるのだが、必ずしも着なくてはならないわけではない。着用義務があるのは式典の時くらいだろう。そもそも、探索にブレザーなんか着ていく奴は馬鹿である。まあ、学園の制服はOMOというブランドが一手に引き受けていて、防刃や対衝撃素材を使っているから全く使えないわけではないのだが。

それでも学園の制服を律儀に着ている奴はフィーロの知り合いではクロアとモランくらいだ。他は生徒会役員と風紀委員か。

というわけで、フィーロは適当に掴み取ったから薄手の黒いアンダーシャツと、白いカラーシャツを着て、部屋から出た。

ガナツシユは扉のすぐ横で壁に持たれ掛かっていた。

「早かったな。シャワーはしなかったのか？」

「そんな余裕あるか？」

「ないな」

「んじゃ行こう」

フィーロとガナツシュは歩きだした。

予想通りだ。

第一食堂ベルベツトは既に混雑していた。さっさと取りに行かないと、ソースさえ取れない。食いつばくれるだろう。いい加減、アホみたいに高い食堂とバカみたいに辛い食堂を造る前に、学園側ももう一つくらいまともな食堂を作ってもらいたい。

カフェはあるのに、料理店規模の施設はないローズベル学園。今、格安で美味しい店を展開すれば儲かるんじゃないだろうか。フィーロはそんなことを考えた。もつとも、やるかどうかと聞かれれば首を横に振るが。だって面倒臭い。

「何やつてる、早く行くぞ」

下らない考え事をしていたら、立ち止まっていたらしい。ガナツシュに呼び掛けられた。「あ、ああ。すまない」フィーロは小走りで駆け寄った。

もみくちゃになっている人混みの中に向かおうとしたら、シエリカとモランの姿が目に入った。向こうも気付いたらしく、フィーロと目が合う。何が嬉しいのか、シエリカの顔が笑顔になった。その表情を保ったまま、彼女はこちらに向かってきた。

「おはようフィー」

「おつ、フィーロ君おはよーっ」

背後から誰かに肩を叩かれた。びっくりして振り返ると、向日葵のようなスマイルを振り撒く生徒会長リリーナの姿があった。

「お、おはようございます」

「かったいなあー。もつとフランクリーにいこうよっ」

「はあ……」

朝から元気な人だ。遠目に見ているなら面白いが、相手をするとなると疲れる。特に、既に体力を使い果たしかけのフィーロには辛

いものがあつた。

「何だフィーロ。お前、生徒会長と知り合いだったのか？」

ガナツシユが尋ねてきた。ありのままを話すのも面倒臭いと、お茶を濁した感じに返す。

「昨日、ちよつとな……」

「フィーロ……」背後から冷気を感じた。視線がチクチク刺さる。

もはや針だ。氷の針が底冷えする空気の中でフィーロを突き刺しまくっていた。「昨日ちよつと……なに？」

薇せふいが切れかけた人形のようにゆっくり後ろを見ると、にっこり笑ったシェリカがいた。目は笑っていない。翡翠色の瞳は明らかな冷気を帯びていた。

「ちよつと……なあに？」

再度問い掛けてくるシェリカ。滅茶苦茶怖い。般若が見えた。

「う……いや……その……」

後退りしながらフィーロはなんとか言い訳を考えた。だが、貧相な語彙は上手い言葉を吐き出してはくれなかった。歯切れ悪い声を漏らす。

というか、自分は何故言い訳を考えているんだろう。本能的にヤバイと感じただけだ。だけど、何でヤバイのだろう。その時点で言い訳など浮かんでくるはずもないのだ。

「昨日一緒に昼食べたんだよねー？」

そんなことを言うリリーナはその空気に気付いていないのか、それとも気付いていてわざとやっているのか。後者だとしたら、この人は近年稀に見る悪女だと思う。

「お昼……それ、本当なのフィーロ？」

「……うん」

ああ、ようやっと解った。俺は昨日嘘を吐いていたことに言い訳しようとしていたんだ。いや、厳密には嘘じゃなくて隠し事なんだが。

もうどうせ違つとは言えない。ならさっさと告白してしまえとフ

イーロは開き直った。気分は下降気味だが。

「そう……」

シエリカは俯いた。ゆらりとオーラのモノが揺らめいた。殺気とか、覇気とかそういう類のモノだと直感すると同時に、フィーロは死を覚悟した。少なくとも骨の二、三本は折られるかもしれない。シエリカが顔を上げた。フィーロは頭を抱え、思わず目を閉じた。完全防御態勢だった。なんとも情けない格好である。

フィーロはどっからでも掛かってこいと言わんばかりの後ろ向きなファイティングポーズでじっとしたが、シエリカからの攻撃は来なかった。目を開けると、シエリカは睨んでいた。悲鳴が出そうになったが、堪えた。

もう一つ言えばシエリカはフィーロを睨んでいなかった。その隣、リリーナを睨んでいた。フィーロはそれでも怖かった。余波だけで震えるさせるシエリカは鬼神の化身かもしれない。

「シエリカちゃん。そろそろ食べないと遅れるよ?」

救いの女神よろしくモランがシエリカに料理の乗った盆を二つ持ちながら言ってきた。まさかこの娘、シエリカの方まで取ってきたのか。どこまで優しいんだ。

「モラン……ごめん。あたしやることできたから」

「え?」

「それ、取ってもらって悪いけど、処分しといて」

それは失礼じゃないか? 厚意を無下にするなんて。鬼か、お前は。

しかしながら身勝手な姉は、気にするふうもなくフィーロたちの横を通り過ぎていった。

「……フィーロは……渡さないんだから……」

通り間際にシエリカが何かを呟いていたが、フィーロには聞こえなかった。ただ、リリーナは目を見開いてシエリカの後ろ姿を見つめていた。

「シエリカちゃん……こんなので……」

取り残されたモランが悲しそうな顔をしていた。そりゃそうだ。せつかくシェリカの好物ばかり集めてくれるのに（というか、モランは何故シェリカの好物をこつも熟知しているのだろう）。

「モラン……」

フィーロは礼儀方面が出来ない姉に代わって謝っておこうとした。モランは尚も手に持った二つの盆に目を落としている。

「こんなの……全部食べるなんて無理だよ……太っちゃおうよ……」

この娘は本当にいい娘だとフィーロは思った。

十

フィーロはモランに五百テール渡し、二つの盆のうち一つを貰うことにした。もう陳列した料理はすべて他の生徒の原の中だったのだ。モランはホツとした表情で快く明け渡ししてくれた。

ガナツシュと言えば、あれは当の昔に自分の料理だけ取って席に座ってこちらを傍観していた。アイツはもう少しモランを見習ったほうがいい。もしくは死ぬ。

リリーナは飲み物を取りに来ていただけらしく、シェリカが去ったあとにオレンジジュース（果汁100%）をコップに注いでから、友人のもとに帰っていった。

ガナツシュの座っている席に向かうと、一年生の女子生徒たちに囲まれていた。「合席……駄目ですか？」どうやら彼女らは合席したいらしい。

「いや……連れがいるんだ」ガナツシュはこちらに視線を送ってきた。フィーロはこれは復讐の刻だとほくそ笑んだ。

「モラン。ガナツシュの席は混んでるから別の場所行こう」

「……なっ！」

「うん、いいよ」

「待てフィーロ！」

「悪いな、ガナツシユ。俺たちは別の場所で食うから。えー……他の場所は……と」

「待て！ おい！」

「あ、あそこ空いてるよ？」

「お、じゃあ行くか」

「無視かあああつ！」

「ざまあみる。」

「クソ……」

「いいじゃないか。女の子に囲まれてさ」

「相手するのが面倒だろう」

「はっはっはっ死ねば？」

フィーロとガナツシユは食事のあとモランと別れたのち、そんな軽口を叩きながら自室に向かった。克蘭コンテストの準備のためだ。

今日は三回戦と四回戦。カタハネは初っぱな 第一試合だ。相手は《リトルリップ》。確かアンセムスターと同じタイプの克蘭だったはずだ。要するに女性だけの克蘭だということだ。

「ガナツシユ。リトルリップの情報って知ってるか？」

部屋に着いたフィーロは、腰に剣帯を巻きながら聞いた。

「さあ。よく知らない。C.L克蘭レベルは確か3だ。まあ、勝てるだろう」
「ふうん」

「お前から聞いてきたのに何だそれは」

「いや、慢心はどうだろうと思っただけ」

「慢心じゃない。事実だ。アンセムスターにも負ける克蘭だ。そう強くはない」

「アンセムスターは弱くないぞ？」

「確かに個々のスキルは高い。が、あれは元々トリオだったんだ。

あの三人の連携を止めれば問題はない。急造克蘭の連携など所詮その程度だ」

「俺たちは急造じゃないのに連携は最悪だぞ？」

「……それはそれ。あれはあれ、だ」

「……」

逃げやがった。

ガナツシユはまともに見えるがシスコンだし、意外に考えが浅い。どちらかといえば馬鹿だ。まあ、剣士という存在自体頭を使わない奴が多いから仕方ないっちゃ仕方ないのだが。

「……どっちにしろ、油断だけは禁物だな」

「今日は案外まともなことを言うな、お前」

「俺はいつもまともだ」

少なくとも、お前よりは。フィーロはその言葉は飲み込んでおくことにした。

「まあ、どうせ最後はみんな同じなんだ。適当にやろうぜ。後衛は俺に任せろ」

「いや、お前は前衛だ」

「嫌だつ！ 昨日さんざん働いたんだから解放してくれ！ 前は怖いんだよ！」

「だから何で剣士やってるんだ！ さっさと行くぞ！」

ガナツシユは逃げようとしたフィーロの首根っこを捕まえ、引き摺った。そのまま部屋を出た。

「やめろ！ 放せ！ 嫌だあああつ……！」

フィーロの絶叫が男子寮の廊下に笄した。

G a n a c h e

運動場には昨日と同じような光景が広がっていた。またガナツシユたちはあの扉の向こうで戦うのだ。既に多くのクランが集まり、士気を高めていた。

そんな中でガナツシユは深い溜め息を吐いた。

全く。喚く馬鹿を引き摺って連れてきたのはいいが、この馬鹿は悄気て三角座りをしていた。

「何で泣いてるんや……？」

「放っておけ」

「いや、ここはオレが慰めて」

がし、とクロアがレイジの肩を掴んだ。その目には殺気が零れていた。「………ころす」ポツリと漏らす。

「………えらいすんません」

「それにしても……シエリカさん遅いですね」

ユーリが言った。確かに遅い。フィーロ曰く、やることができたとか言っていたらしい。それにしてもはやけに遅い。

「どうせアホなことやってるのだけ」

モニカのその意見はなんとなく的を得ているような気がした。シエリカの“やること”など、大概是碌でもないものだ。

「誰がアホですって？」

噂をすればなんとやら、だ。後ろからシエリカのムスっとした声がした。というか、遅れたことには何も言わないのかこの女は。一言くらいは言っておくべきだとガナツシュは振り返った。

「な………」

絶句した。

他の者も皆啞然としている。違うクランの奴も同じような表情だった。

ついに頭までぶつ壊れたのか（まあ、もともとぶつ壊れているが）、シエリカは驚くべき格好をしていた。

黒いワンピースに白いエプロン。ヘッドドレスを頭に付けたその姿は紛れもなくメイド。

何故そのような格好をしているのかは知らないが、取り敢えずコイツは致命的に馬鹿だということだけはガナツシュにも解った。まず戦闘にメイド服で臨む奴は馬鹿以外に呼びようがない。特殊加工されているならまだしも、あれはただのメイド服だ。もはや阿呆だ。

我に返った馬鹿な男子数人（変態レイジを含む）はシエリカのメイド服姿に「ヒヤッホウウウ！」と拳を高く上げ叫んでいた。全然我に返れていない。早く戻ってこい、変態^{レイジ}。

「シエリカ、なんだその格好は」

「メイド服よ」

そんなことは解っている。見たら解る。ボクを馬鹿にしているのか？

「そうじゃなくて……ボクが聞きたいのは、何でそんなものを着ているのか、だ」

「兵器よ」

訳が解らん。ちゃんとした言葉を話せ。メイド服は兵器にはならないぞ。お荷物にはなるが。

「メイド服研究会から借りてきたの」

「何だよそれは……」

「サークルよ」

「……………」

一体何なんだろう、この学園は。無駄が多すぎるような気がする。というか、隙だらけだ。

「うおっ！？ 何だその格好」

立ち直ったらしいフィーロが今頃そんな声を上げる。シエリカがフィーロの姿を視認し、ぱーっと表情が明るくなった。それを見てガナツシユは理解した。

ああ、またフィーロ絡みか。大体予想はしてたがな。

「どう？ 似合う？」

またとち狂った思考がシエリカをあのような奇行に駆り立てているのだから。シエリカはフィーロの前で一度ターンしてみせる。

周りの男子どもは「ヒヤッハッ！」と叫んでいた。もう帰れ。むしろ逝け。

フィーロと言えば、心底どうでもよさそうな感じで「ああ、うん、似合ってるんじゃない？」と吐かしてした。

それでもシエリカの恋する乙女補正によりフィーロがべた褒めしてくれたと認識したらしい。嬉々として次々と質問をしていた。やれ生徒会長のメイド服姿とどっちがいいだの、生徒会長と比べてどっちが可愛らしいかだの何だの。何故生徒会長と比べているのかは謎だが。

馬鹿姉弟のやりとりに長い息を漏らして、もう見ていられないと目を離れた。ふと、ガナツシユはあることに気が付いた。

「……ん？ なあモニカ」
「ああ？」

殺人犯みたいな目付きで睨んできた。思わずたじろいだ。

「あー……ユーリと……あとクロアは何処に行った？ 召集まで五分前だぞ？」

「………つたのよ」

「………は？」

「着替えに行ったのよ！」

「何に………」

「この状況ならメイド服以外にあり得ないのだわ、このうすらとんかち！ 変態！ 馬鹿！ おたんこなす！」

「何故そこまで言われなといけなんだ………」

要するに、シエリカに感化されて負けじと対抗せんとしているわけか。何というか、浅ましい。

モニカとしても複雑なものだろう。モニカはユーリを好いているが、そのユーリはフィーロを好いている。ユーリを幸せにしたいが、それは彼女の恋を応援することになる。だがモニカはフィーロが憎いだろう。たまに殺意が籠もっているあたり、放っておくと本気で殺しかねない。だけどフィーロを傷付ければユーリとの友情も失うだろう。

報われない想いほど残酷なものはない。それはシエリカにも言えるかもしれないが。まあ、何にしてもフィーロ次第だろう。

『各クランのマスターは人数確認をしたのち本部に伝えに来い』

考え事をしていたら、ヴァイス先生の声が響いた。

しかしまずい。

二人足りない。まだ戻ってきていない。他のクランは次々に本部に向かっている。マイペースなクランはうちだけだ。

そのマイペースな奴らを見回す。馬鹿姉弟は未だに問答を繰り返しているし、レイジはシェリカのメイド服姿を（どこから取り出したかは知らないが）撮影機で撮りまくっていた。フィーロに気付かれ撮影機ごと顔を踏まれたが。モニカは歯軋りをしてフィーロを睨み付けていた。もはやその目は猛獣のそれだった。

「……取り敢えず、早く戻ってこい。色んな意味で……」

ガナツシュは空を見上げて、誰に言うでもなく呟いた。

第一章（19） 底冷えの三回戦

Ganache

カタハネが揃ったのは召集の時間から十五分後だった。大幅すぎる遅刻。これで失格にならなかつたのは一重に先生たちの恩情だろう。さすがに苦い顔をされたが。

兎角、ガナツシユたちは一応二日目の今日も参加出来るわけだ。

取り敢えず、原因となつた馬鹿ども 言わずもがなシエリカを筆頭にしたユーリ、クロアの『好き好きフィー口団』を一喝しておいた。シエリカは「なんであたしが……」とぶつくさ呟いていたが、あれが発端である以上責任はある。それにしてもクロアはともかくもユーリを怒る羽目になるとは思いもよらなかつた。お陰でモニカから鋭すぎる眼光を浴びせられることとなつた。

今は本部を離れ、昨日と同じ扉前ゲートに他のクランと集まっている。

その中に一ヶ所だけぽっかり空間が出来ているのだが、

「メイド服でガナツシユ様の気を引こうなんて手段が姑息なのですわっ！」

「だーから、違つわよ！ 何度も言わせないでよ！ なんであたしがあんな変態野郎を好きにならないといけないのよっ！」

「ガナツシユ様を変態呼ばわりなど……！ 今日こそ許しませんわ、このアバズヘルキャットレ魔女！ あとでギタギタにしてさしあげますわっ！」

「別にアンタに許されたくなんてないわ！ そっちこそボコボコにしてヒーヒー鳴かせてあげるわ！」

「何ですって！」

「何よ！」

「あーストップストップ。やーめーれー」

案の定というか何というか、シエリカとベアトリーチエが掴み合つて（程度の低い）言い争いをしていった。フィー口はそれを止めに

入っているが、効果は期待できそうにない。

ありふれた光景ではあるのだが、ほぼ全生徒の集まっている場でやられるのは恥ずかしい。タイムテーブルをずらしたというのも相まって、周りの視線が痛々しい。

ガナツシユは溜め息を吐いた。

「大きな溜め息だね」そう微笑みながらモランが近付いてきた。「幸せが逃げちゃうよ?」

「……そうだな。それにしてもあいつらもう少し自重出来ないのか?」

「仲良しでいいんじゃないかな」

「いいか……あれ」未だ掴み合う二人のじゃじゃ馬娘を遠い目で見つめた。「何にせよ、歯止めはあるんじゃないか……?」

「うーん……それもそうだね」

モランの苦笑いを見て、ガナツシユも釣られて同じように苦笑を漏らした。お互いに面倒な仲間を持っている。少し親近感が湧いた瞬間だった。

『どこぞの馬鹿クランが遅れたため、時間を二十分繰り上げて進行する。五分後に三回戦を始めるからそれまでに該当するクランは扉を潜れ』

ようやっと二人の唾み合いが終わると同時に、ヴァイス先生の声が響き渡った。馬鹿クランがカタハネだということは誰もが知っているわけで、余計に痛い視線が集中した。

さつさと逃れたいし、早く扉を潜ってしまいたかったが、ガナツシユには一つだけ確認しなければならないことがあった。

「お前たち……本当にその服装で行くつもりなんだな?」

視線の先はメイド服を着込んだ馬鹿娘約三名。各々違った型のメイド服を着てはいたが、共通するのは、それは戦闘用の服装ではないということだ。

百歩譲ってユーリはまだなんとかなる。が、シエリカは魔道装束

じゃないと、触媒カタリストを入れる場所がない。クローアも前線ではないが、それでも防御性のある服装をしたほうが安全だ。

それだというのに、

「問題ないわ」

「……………いい」

「大丈夫です」

こういう時だけ息の合う奴らだ。何が問題ないだ。カバーするほうの身になれ。

とはいえ、今更グチグチ言ってももう遅いことだ。着替える時間もない。面倒ではあるが腹を括るしかないわけだ。

いつそのこと罰ばちでも当たれと子どもじみたことを内心で思いつつ、ガナツシュは扉の中へと足を向けた。

十

扉を抜けてまず最初に思ったことは、

「さ、寒い！ というか痛い！」

シエリカのそう叫ぶ声にいささかの納得は出来る。確かに、この場所ではそれに尽きる。寒い。氷点下はいつていないが、多分五度以下は間違いない。

ガナツシュは辺りを見回した。一面が紅の世界。しかしその感触は紛れもなく雪だ。おそらくは“血みどろの雪原”だろう。寒さの原因はこれだ。

「ざ…………ざつぶう…………ガナツシュ、オレと一緒に暖めぶふあ」

クソ寒い中で震えながらも阿呆なことを口走っている馬鹿を沈める。赤い雪に埋もれたそれにガナツシュは一瞥も与えなかった。

「つか、何だこり」

フィー口はしゃがみこんで、足元の赤い雪の感触を手で確かめていた。

「血みどろの雪原だな」

「あーなるほどねー。真っ赤な雪だもんな。色は暑苦しいのに痛いくらい寒いつて、何この矛盾」

「嫌がらせだろっ」

「なんでアンタたち平気なのよ……うつつ……さ、寒いよフィーロ
お……」

歯をガチガチ鳴らしながら、シエリカが身を縮めていた。唇は既に青い。

自業自得である。メイド服などという薄っぺらな装飾用の服装で来るからだ。戦闘用ならばある程度の断熱機能があるのに。早くも罰が当たったか。ざまあみろ。

「うつつ……寒いっ……」

体を縮こまらせて、震える。段々気の毒にさえ思えてきた。助けはしないが。いい薬だし。

「んな薄着するからだろ？ ……ほら」

しかしながらそんなシエリカを見兼ねたフィーロは、羽織っていた外套を脱いでシエリカを包くるんだ。

「夏だったから薄手だけど、それは我慢してくれよ」

「うん……ありがと……」

えへへ、と笑うシエリカ。正直気持ち悪い。フィーロも怪訝そうな面持ちでシエリカを見つめた。

「どうした……？」

「えへへ、あつたかい……」

「……そ」

心底幸せそうな表情を顔にしている。考えていることは多分、メイド服着ててよかった、とかそのあたりだろう。浅ましいというか、ある種逞しい奴である。

「あの……フィーロ君……」ユーリがフィーロの袖を引っ張る。「わたしも……寒いです」

下心全開の発言である。

対するフィーロは困った顔で、頬を掻いた。「うん……まあ、頑

張れ」

「そんな……！」

この世の終わりと言わんばかりの絶望に打ち拉がれた表情のユーリ。目が既に半泣きだった。当然だと思っただが。

「いや、これ以上脱いだら俺確実に風邪ひくから」

苦笑いでフィードは答えた。

実際、既に朝食のときの格好になっている。つまり二枚しか着ていないのだ。見ているだけで寒々しい。鎧とも言えない軽量で薄型の防具を付けてはいるものの、それで寒さが凌げるわけでもない。もともとフィードは防具を使用しない。戦闘用の加工された外套を羽織る程度だ。シェリカに貸したそのことだが。

「そう……ですよね。ごめんなさい」

悄然とうなだれるユーリ。気の毒だとは思っただが何度でも言うが自業自得だ。

「大丈夫よユーリ。アタシが暖めてあげるのだわ」

モニカは後ろからユーリを抱き締めた。暖めるという口実で自分の欲求を満たしているとしか思えない。決して口には出さないが。

「だ、大丈夫だよモニカちゃん……」

「風邪は引いてからじゃ遅いのだわ。さあ、全てをアタシに委ねて……」

まさに変態の台詞である。

「ちよっと！ フィードから離れなさいよ！」

「……………いや」

今度はシェリカとクロアが争い始めた。一部始終を見ていたわけではないが、大方フィードに抱き付いて離れないクロアを引き剥がそうとしているのだろう。見なくても解る馬鹿の習性みたいなものだ。

どうだっといういが、いい加減試合前だというのを理解したらどうだろう。リラックスなら大いに結構だが、関心を向けないのはかなりまずいと思わないのか。

恋は人を盲目にするという言葉を考えて人間が偉大に思えた瞬間だった。案外、同じような光景を目の当たりにしたのかもしれない。そう思うと、尊敬に加え同情心まで生まれた。

『 始め』

ヴァイス先生の開始の合図を聞いても、事態は納まっていなかった。むしろ悪化していた。

「こいつらは……」

眉間に狛犬の如き皺しわが寄るのを感じる。

血みどろの雪原は障害物の少ない場所だ。今回はカタハネが攻撃側となったわけだが、この場所では攻防はあまり関係ないだろう。おそらく向こうはこちらを全滅させるつもりで向かってくる。

見渡すかぎり障害物がなく清々しい空間のと真ん中で遊んでいる。こいつらは、自らの行為が自殺行為だということになんで気付けないのか。馬鹿だからか。

ガナツシユは太刀を引き抜き、平たい部分で全員の頭をしばいた。痛いじゃないっ！」反抗する馬鹿シエリカ。

「黙れ」ガナツシユはあっさり一蹴した。「もうとくに試合は始まっているんだ。切り替える」

ガナツシユの説教に対し、言い返せる立場でもないシエリカはふん、と顔を背けた。

「解ってるわ、そんなこと。いちいち煩いわね。おつむが小さいんじゃないの？」

「お前だけには言われたくない」

怒られて不貞腐れているシエリカのほうが小さい。本当に自分のことは棚に上げる女だ。

「まー焦んなくても向こうから来るだろ。こんなけ見渡しよかったら」

能天気なフィーロが口を挟む。

「絶対に来るとは限らない。向こうは逃げれば勝ちなんだ」

「そりゃそうだけどね」

「何でもいいからさっさと行くわよ、のろま」

このクソ馬鹿シェリカ……！ 一体どの口がのろまと言うか。ボクがのろまならお前はナメクジ以下だ。這って進め畜生め。

込み上げる怒りを地面に埋もれたふりをして女性陣のスカートの中を覗いていた変態^{レイジ}を踏むことでぶつけた。「ぐえぶしつ……！」奇声を漏らしながら沈んだ変態をドリブルしながら進みだす。

「あの……レイジ君死んじやいますよ？」

「大丈夫なのよユーリ。これは変態なのだわ。いわゆる鬼畜系のB Lなのよ」

「断じて違うぞ」

完全な同性愛者の奴にだけは絶対に言われたくない。大体、ボクの崇高なる愛は全てイリアへと向かっているのだ。変態に向けるものなど破壊衝動だけで十分だ。

「へ、変態……鬼畜……び、B L……」

なんてことだ。ユーリが本気にしている。ガナツシュは止めに変^レ態^{イシ}を踏ん付けた。

「あれがツンデレ特有の“照れ隠し”なのだわ」

モニカアアアアツ！

味方じゃなかったら真つ先にぶっ潰してやるところだ。味方でもム力つく。本気でぶっ飛ばしたい。握った拳が震えた。必死で抑える。今は試合だ。

「……………きも」

地味にそのクロアの眩きが一番心を抉った。

もう何だか色々嫌になってきた。

十

色はともかくも雪原フィールドだけあってただっ広い。障害物の少ない代わりにかなり広く区切ったらしい。傍迷惑な話だ。

広い上に寒いわけでガナツシユや復活した変態レイジはともかく、メイド服着用中の三人と装備を整えていても、構造上肩などが露出しているモニカにはつらいかもしれない。フィーロは平気なのかよく解らん。見たところ平気そうだが。それよりもフィーロの外套を半ば奪ったシェリカが寒がっているほうが解らない。

「大丈夫か？」

一度全員を見回して確認してみる。

「見りゃ解るでしょ……」

青い唇でそう呟くように返したシェリカ。即答する元気があるならまだ大丈夫だろう。

しかし、これ以上は集中力が低下しそうだな。奇襲を受けたら溜まりもなさそうだ。

「あ、見つけた！ お姉ちゃん、お姉ちゃん、見つけたよー」

その線は杞憂で終わった。

なんともだしぬけだった。

数少ない障害物の一つである氷山の角から女の子がひょっこり出てきたかと思えば、出てきた方を向いて仲間を呼んだのだ。

危機的状况なはずなのに緊張感が皆無だ。奇襲かと掴んだ太刀を思わず放すほどだ。

そもそも、彼女は斥候ではないのか。いいのだろうか、あからさまに仲間の位置を教える。いや、だが畏という可能性も……

「あら、本当ね〜」

マジだったらしい。

角からおっとりした女性が現れた。杖を持っている。魔戦学部で間違いはないだろう。最初の女の子の姉、だろうか。確かに髪の色が同じだ。ベビーピンクだ。染めているのかそれとも地毛か。どうでもいい。

「え、マジ？ いたの？ キャ〜！ 本物だ！ 本物だよ！」

「うわあ〜本物だ〜」

次々と角から現われる。姿を隠す気もないらしい。

「寒い中で歩き続けて正解だったねー」

「そうだねー」

会話になんとなく違和感を感じる。緊張感が欠片もない。学園の昼休みのような感じだ。

七人全員が現われると、おっとりした女性が前に出た。ガナツシユは身構えた。女性は物入れに手を突っ込んだ。物入れ……魔道装束か。やはり魔術士。触媒を取り出すつもりなのだろう。させるものか。

ガナツシユは太刀を引き抜き、走りだした。後ろの六人ののほほんとした会話で油断させて魔術を放つ気だ、あの女は。事実、仲間はずれにしている。ボクがやるしかない。

走りざまに太刀を下段で引き摺るように構える。

「うおおおおおおおおおおおおお……!!」

女が何かを引き出した。平たく白い何かと、黒い棒。だが遅い。魔術を使う時間はもうない。ボクの太刀のほうが確実に早い。

太刀を下からすくい上げようと力を込めた。

「あの、」

触媒の前に突き出す。まさか、もう魔術を撃てるのか!? いや、ハッターだ。詠唱なしで魔術の行使は出来まい。ボクの勝ちだ……!

「サインくださいませんか?」

「おおぶっ……」

ずっこけた。

そのまま女の横をズザザ、と雪を掻き上げながら一メートルほど突き進んだ。顔面から。

「だ、大丈夫ですか?」

「……大丈夫です」

ガナツシユは差し出された手を掴んで起き上がった。付いた赤い雪を払った。女が物入れから今度はハンカチを取り出して、ガナツシユの顔を拭いた。

「まあ、こんなに真っ赤になって……」

「あ、ずるいよお姉ちゃん！」

「そっだよ！」

「抜け駆けだー」

背後からブーイング。女は「そんなんじゃないありませんよ」とやり返していた。何なんだ、これは。というか、

「……サイン？」

「え？ あ、そうです。あの、ガナツシユさん。サインを頂けませんか？ あと握手も」

「……何故？」

「ファンなんです」

「………は？」

F i r o

この状況は何だろう。

目の前のリトルリップのマスターさんはいきなり「ファンです」とか言いだしてきて。挙げ句はサインまでお願いしているあたりマジでファンみたいだけどさ。

ガナツシユも完全に相手のペースに吞まれている。たじたじだ。まあ、多分奇襲だと思って斬り掛かっていったんだろう。差し出されたのが色紙とマッキー（黒・極太）だからね。ずっとこけもするだろうさ。

にしてもファンクラブか。十中八九TWGDFなんだろうけどさ。まさか試合中にサインをねだるなど誰が予想出来ようか。

「ねえ……あれ、何なの？」

「あー……要するにガナツシユのファンなんだよ、彼女らは」

「頭おかしいんじゃないの……ふあつくしゅん！ うー……」

「そんなこと言うなよ。……ほら」

ハンカチを渡してやる。シェリカはそれを受け取ると、ちーんと

鼻をかんだ。本当に女かお前は。憤りみたいなものはないのか。

「返さなくてもいいからな」

「プレゼントってこと？」

「まあ、そつだよ」

単に鼻水付きのハンカチ返されたくないからだけどき。本人は嬉しそつだから口には出すまい。きっと殺される。

「あの……フィーロ君。わたしには……」

「え？ いや……ないけど」

「そんな……！」

さつきからなんだこの娘。俺の持ち物を搾取したいのか？ 何が目的なんだ。行動が意味不明なんだが。

「あーキミ」

そんなユーリを苦笑しつつ見ていたら、一人の女の子が近付いてきた。全体的にショートだが、揉み上げだけ長い。それなりに端正な顔立ちだった。

こちらに近付いてきているということは自分に用があるのだろう。

フィーロは「何でしょう」と返した。

「ごめんねー。うちの馬鹿たちがさ」

「はあ……」

「あ、わたしはシオンね。よろしく。先に言っとくけどキミんとこの黒髪君のファンじゃないから」

「ちゅーことはオレか！」

「そんなわけあるかボケ」

冷ややかな視線で背後で一瞬舞い上がった馬鹿な変態を一蹴した。この人は怒らせてはいけない。フィーロは直感で理解した。

しゃがみこんでいじけだした馬鹿な変態を気の毒とは思いつつも、相手をすれば付け上がるだけなので放っておく。シオンと名乗る女性に目を向けた。バツジは白銀。三年生だ。

「キミがフィーロ君だよな？」

「え？ ええ、そつですが」

「ふうん……へえ……」

シオンはそう言つとフイーロを見回し始めた。見透かされているような気分だ。正直、あまり居心地がいいとは言えない。

「あの……」

「じろじろ見ないでよ!」

何故お前が言う、シエリカ。

「ん? ああ、ごめんごめん。でも、なるほどなあ……あの娘がきにするわけだ」

「はい?」

「いや、何も無いよ。気にしないで」

「千テールよ」

「……へ?」

「フイーロを見るのなら一回千テールよ」

「……えーつと……誰に払えばいいの?」

「あたしに決まつてるじゃない」

何故俺の価値を千テール一律に設定する権利をお前が持っているんだ。お前は俺の管理者か。違うだろ。むしろ逆だろ。

「たまにおかしなことを言うんで放っておいてやってください」

「へ? あ、そう」

「おかしなことって何よ!」

お前の発言のことだ。自覚しろ馬鹿。つか少し黙っていてくれよ。話が進まないから。

「それで、あのサイン会は……」

「ああ、それなんだけどさ、リトルリップはアミナが四年生である二年と三年で一年生がいないのよ。あ、アミナはこのマスターね。おっとりお姉さんの」

「はあ……」どうでもいい。

「だからこういう場でしかなかなか黒髪君に会えないからって」

「クランコンテストを利用した?」

「まあ、そういうこと」

それは……また面妖なことを。

「カタハネって一年生クランにしては郊外活動がかなり多いからさ、普段なかなか会えないし」

「でも、戦闘中っていうのは……」

「それはルミナが『それくらいインパクトを与えないと覚えてもらえない』って言うてね。あ、ルミナはアミナの妹ね」

「はあ……」心底どうでもいい。

「じゃあ何ですか。このためだけにクランコンテストに出たんですか？」

「うーん。色々プランはあったらしいけど、同じブロックになれたからこのプランになった、が正しいかなあ」

「……」

その色々なプランとやらが気になるのは間違いでしょうか。ただ聞いたら後悔するような気がしたのでやめておこう。命は大切にしなければ。

「……で、このあとはどうするんです？」

「目的は果たしたんだろうし棄権するんじゃない？ わたし自身あんまりコンテストに興味なかったからどっちでもいいんだけどね」

「……そうですか」

豪胆というか何というか。変わった人である。リトルリップ自体もそうだが。

ガナツシユのほうに目を向けると、複雑そうな表情をしていた。

一通り終了したらしく、何やら囲まれて質問攻めにされたりしていた。夢に出るんじゃないだろうか。御愁傷様である。

十

「くっ……」

扉を出ると、ガナツシユは膝をついた。相当疲労困憊していた。よく精神力を削られる奴だ。コイツが死ぬときは多分怪我とかじゃ

なくて発狂とかそんな内的なものな気がする。

リトルリップの皆さんはあったかいねーなどと言いつつもうホクホクしていた。遅しい方たちだ。ある種の尊敬の念を感じた。

因みに三回戦は結局、リトルリップのリタイアという形で終わった。マスターが「We concede.」と言えば強制転送される。思う様ガナツシユとの会話を堪能したリトルリップのマスター、アミナはあっさりそれを口にした。本当に恐ろしい人である。

「お疲れさん」

「全く……だ」

「戦っていないのに全員疲弊しきっているってのもおかしい話だな」

芯まで冷えた体を夏の太陽で必死に暖めている女性陣。リトルリップを見習え。すごい精神力だぞ。ガナツシユへのサインのためにあれを乗り切ったんだから。

「だからクロアは離れてくれ。さすがに冷たい」

「……………さむい」

「そりゃそうだろうよ……………ほら、本部から毛布かなんか貰ってきてやるから。放しなさい」

「……………あなたでいい」

「俺は嫌だ」

嘘を吐きました。

いや、一瞬ドキッとした自分がいます。そんなこと言われたことないからね。少しは嬉しかったりするからね。それでも理性はまだ保ってるんだよ畜生。

クロアを引き剥がし、本部に向かう。あんなフィールドがあるのだ。毛布の一枚や二枚は用意しているだろう。

「……………あれ」

でも何で体が冷たかったのだろう。扉を抜いたら怪我などは治ってくるのに。

そういえば、目隠しをした奴にこの鉄棒は熱くて触ると火傷しますと暗示をかけ、常温の鉄棒に触れさせると火傷するとかそんな感

じの話聞いたことがある。曖昧にしか覚えていないが。プラーシーボ効果……だったか。それと同じ効果だろうか。

「ま、どうでもいいか」

「何が？」

「うあつ!？」

突然声を掛けられフィーロは飛び退いた。

「そんな驚かなくても……」

「も、モランか……ごめん。考え事してたから」

「そっか。こちらこそごめんね？」

「いや、いいよ。モランはどうしたんだ？」

「シエリカちゃんも寒がってたから、毛布でも持ってきてあげようと思って」

滅茶苦茶いい娘だ。今泣きそうになった。感動で。

「俺もそのつもりだったからさ、一緒に行こうか」

「うん」

にこりと微笑むモランに微笑み返し、本部に向かった。

思った通り、毛布は用意されていた。四枚受け取り、二枚ずつ持った。

渡してくれたのがイネス先生だったのだが、渡しざまに「凍えた人の中に魔術士はいたかしら？」と聞いてきた。いると答えたら意味深に笑っていたが、よく解らなかつた。謎な女性だ。それもまた彼女の魅力なのかもしれないが。

「……イネス先生、なんて？」

「雪原フィールドで凍えた魔術士はいたか、だってさ」

「へえ……何でそんなこと聞いたんだろうね」

「さあ」フィーロは肩を竦めた。「……それよりも、暖かい飲み物も持って行ってやるうか」

「うん、いいと思うよ」

本部横の給水場で暖かいお茶を四人分汲んだ。毛布のほうが重い

わけだし、そちらを受け持つ。モランは四つの湯呑みを盆に載せて持っていた。

「大丈夫？」

「ん、大丈夫。モランも倒けるなよ」

「平気だよ。フィーロ君こそ倒けないでね」

「いやいや、倒けないって……ん？」

目の前から何か叫びながら向かってくる人影があった。よく見ると見覚えのあるシルエットである。小柄な体系に犬耳。

「ルツ君……？」

モランが呟いた。そう、ルツ君だ。マスコットのルツ君だ。よく解らない奇声を発しながら走ってくる。

「どーけどけどけどけどけどけどけどけどけどけどけどけど
どけどけ　　っ！」「

真直に走ってくる馬鹿^{ルツ}はこともあるのに「どけ」と叫んでいた。何様だよつは。

フィーロはモランの前に進み出て、右足を前に突き出した。同時にそれが馬鹿^{ルツ}の腹に直撃した。カウンターみたいな感じになった。

「ぐえっ……！？」

弾き飛ばされ、蹲ってプルプル震える馬鹿^{ルツ}。

「ルツ君！」モランが駆け寄る。ヤバイ。やり過ぎたか。「大丈夫……っ？」

「ぐ、ぐおおお……ハラが……ハラがあああ……」

「や、やり過ぎだよフィーロ君……」

「わ、悪い」

馬鹿^{ルツ}ではなくモランに謝るフィーロ。当然だ。別に悪いとは思っていない。モランの目の前でやり過ぎたことに悪いと感じただけだ。

「ぐ……フィーロ！　ひどいぞ！　いきなり蹴るなんて！」

だから起き上がった馬鹿^{ルツ}が文句を言ってきたも、

「直進したらお茶運んでるモランに当たるからな。退いてもらっただけだぞ」

フィーロは謝らない。

「……大体、何をそんなに急いでいる？」

「はっ！ そうだ、こんなことしてる場合じゃない！ シェリカさんがピンチなんだ！」

「……どうピンチなんだ？」

「凍えてるんだよ！ 直ぐに毛布か何か持って行ってあげないと……！」

「いや、もう俺とモランで取ってきたぞ」

「何いいいつ！？ くそっ……遅かったか……！ いや、まだだ！

オレは諦めない……！」

何言っただコイツ。頭大丈夫か？ せっかく取ってきたのにお前が取りにいったらどっちか無駄になるぞ。察しろよ。諦めろよ。

「フィーロ！ その毛布をオレにくれ　　っ！」

「……」

いや、取りに行かないでと願ったのは確かに俺だけどさ。この馬鹿。もう馬鹿って書いてルツって読むのも面倒だよ馬鹿。お前はプライドないのか。

フィーロは救いを求めるようにモランを見やった。眉を八の字にして顰めていた。モランも呆れているらしい。

「……ほら」

駄目と言えば駄々を捏ねそうだったので、諦めて毛布を一枚渡した。ぱあーっと言んだ馬鹿は尻尾を振りながら「ありがとう友よっ！ 恩に着るぜ　　っ！」と走り去っていった。

「面倒臭い奴だな……モランも大変じゃないか？ 相手するの」

「まあ、弟みたいなものだし……」

「存外、ああいうのが母性をくすぐ樂めるのかもな」

「え……？」

「好きなんだろ？ ルツのこと。世話も焼いてるしさ」

「……」

モランは黙ってしまった。ルツはシェリカが好きなのだ。あまり

デリカシーのない言葉だったかもしれない。

「モラン、わ」

「違うよ」

「え？」

「わたしが好きなのはルツ君じゃないよ
早く行く。」

モランはそう言って歩きだした。その後ろ姿を見つめる。フィー口の脳裏に焼き付いたのは何かを押し殺したような眼差し。いつもからは想像が出来ないものだった。

「どうしたの？」

だがそう言って振り返った時の彼女の瞳は、いつもと同じ、優しい暖かなものに戻っていた。

「……いや、何でもないよ」

フィー口はその脳裏に焼き付いたそれを払うように頭を振って、それから笑いかけた。ちゃんと笑えているように思えなかったが。

第一章(20) Shambles of Women

F i r o

「うつつうつつ……ファイロ」

「寄るな気色悪い」

泣き付いてくる馬鹿ルツを引き剥がす。鬱陶しいことこの上ない。何でもこの馬鹿はシエリカに毛布を持っていったはいいが、拒否されたらしい。玉砕もいいところだ。しかも相手はシエリカ。容赦ない言葉を雨霰の如く浴びせられたらう。救いがたい話だ。

「何で断られたんだろ……うつつ……」

「そりゃあ、知らない奴から受け取らないだらうさ。普通」

「同じクラスだけど!？」

ファイロは指を振った。併せて舌も三度目鳴らす。

「甘いな。シエリカは同じクラスの名前でさえ半分も覚えてない。興味ない奴は徹底的に自分の視界から除外するのがシエリカだからな」

「興味ない!? ガーン!」

ますます落ち込む馬鹿ルツ。しゃがみこんでぶつぶつ何かを唱え始めた。気色悪い。それにしても「ガーン」など口に出す人を俺は始めてみた。

「まあ元気だせって」

馬鹿ルツの背中をポンと叩いて慰める。既に顔が(、)、こんな感じになっている。哀れだ。

「シエリカ以外にもいい女は一杯いるからさ。な?」

ファイロはそう言ったが、考えてみれば“いい女”が仮に一杯いても馬鹿ルツに振り向かなければ意味がない。つまりなんの慰めにもなっていないわけだ。

「……いい女って?」

だがしかし馬鹿ルツは食い付いた。フィーロは“いい女”とやらを頭の中で浮かべてみた。意外に、いない。

もう仕方ないから“いい女”かどうかは別にして、片っ端から上げてみることにした。

「んー……ユーリとかは？ 顔は悪くないぞ？」

頭は空だが。

「倍率高いじゃん」

馬鹿ルツは膝に顔を埋めながら言った。倍率って狙ってる男の数か？ いや、シエリカもそれなりに高いと思うぞ。つかお前は倍率で好きな女決めてんのか。馬鹿だろ。

「……じゃあ、んー……モニカは？」

「あいつレズじゃん」

ああ確かに。聞いた俺が馬鹿だった。

「……クロアは？」

「ロリじゃん」

「お前も似たようなもんだろ」

「誰がちびワンコだっ！」

「言つてねえよ」

情緒不安定な奴だな。そういうところがガキだろ。そう思ったが、フィーロは口には出さずに、他の女の子を思い浮べる。

「ベアトリーチェは……ガナツシュのファンだったな……ロリエは」

「あれもロリだろ……それに、オレ、アイツ苦手だし」

まあ、俺も苦手だ。

「あー……んじゃモランならどうだ」

正直、馬鹿ルツには勿体ないくらいいい娘だと思う。最後に上げたのは、半ば言いたくなかったからだ。他の男なら許せても、馬鹿ルツにはやれない。なんとなく、娘を手放したくない父親のような心境だった。

因みに、ガナツシュや変態^{レイジ}でも許さない。多分、いや絶対に全力で阻止する。

「モランか……アイツ口煩いしなあ……」

世話焼いてもらってるだけありがたいと思え馬鹿野郎。ぶん殴つてやるるか。

「それに、アイツ好きな奴いるし」

「……ああ、そんなこと言ってたな。確か。誰だろな、そいつ」引き千切つてやりたい。フィーロは何かを引っ張って千切る仕草をした。「つか、お前何で知ってるの？」

「相談されたからな」

馬鹿ルツに相談してもよい答えは導きだせないだろうとフィーロは思った。が、馬鹿ルツよりもモランの名誉を尊重してここは何も言うまい。

「じゃあ、お前は相手知ってるのか」

「……」馬鹿ルツはフィーロをじつと見た。「……はあ」そして呆れたような溜め息を漏らした。

「何だよ」フィーロはムツとした。馬鹿ルツに呆れられるなど癪である。

「いや、別に……」

そう言つてまた溜め息を吐いた。ぶっ飛ばしてやるるか犬っころ。「ま、『言うな』って言われてるから、オレからは何も言わないぜ？ 約束は守るのがこのオレだからなっ」

立ち上がって、馬鹿ルツは元気よく言った。ばっちり決めポーズ付きだ。全く決まっちゃいないが。

決めポーズはともかく、そこはルツのいいところの一つだったりする。コイツは約束は絶対に守る。よくも悪くも馬鹿だ。つまりは愚直な奴なのだ。フィーロには少し羨ましくも感じられた。

ルツがそう言うならば、もうこれ以上の詮索は望めない。それに、しないほうがいいだろう。

諦めたフィーロは、得に意味もなく後頭部をポリポリ搔いた。すると何か言つて欲しそうなルツの視線に気付いた。格好いい台詞を吐いたから誉めてもらいたいのか。フィーロは薄く笑いながら、馬

鹿ルツを見た。

「全然格好よくない」

「ひでえ」

十

また落ち込んだ馬鹿ルツをさすがに面倒臭いと放って、さっさと逃げ出した。あと三十分近く暇である。自分のブロックの戦いを見てもいいが、戦闘済みのクランだし、得るものはあまりない。技術を盗もうにも視点はころころ変わるから、盗めないというのが実状だ。

そもそも、駄目剣士が他人から盗めるものなどない。自分は剣を振り続ければそれでいいのだ。戦闘も大体は後ろで見ればガナツシュあたりがなんとかする。

「クランコンテストが終わったら二週間くらいサボタージユしようかな……」

今回これだけ頑張れば二週間くらい許されるはずだ。苦あれば楽あり。後の楽しみのためにもう少しだけ踏張ろう。頑張れ、俺。

フィーロは自分にエールを送った。ここにガナツシュがいれば、「クランコンテスト頑張つて本業サボったら本末転倒だろう。どっちも死ぬ気でやれ」と言われるのは目に見えているが、フィーロは敢えて気にしなかった。

「アイツの言葉気にしてたらキリがないしな」

「何ぶつぶつ言ってるの？」

「うわっ!？」

背後から声を掛けられ、飛び上がる。実際は飛び上がったはいないが、まあ心臓は跳ねた。

しかしよく背後から来る人だ。わざとやってるのか。表情からは読み取ることが不可能だが。

「うわって……ひどいなあ」

口を尖らせてみせるリリーナ。実年齢はフィーロより上のはずだが、仕草がやけに幼く見える。天然だろうか。計算でやってるならそれはそれで称賛に値する。が、やはりフィーロとしては天然であることを祈りたい。

まるで我が姉のように頬を膨らませるリリーナを見て、フィーロは肩を竦ませた。

「そりゃ誰でも後ろからいきなり声を掛けられれば驚きますよ。考え事もしてましたし」

「考え事？」

「……いえ、こちらの話です」

まさかクランコンテスト後にサボる算段を考えていたなど到底言えない。

「ふうん……まあいいやつ」リリーナは訝しみはしたものの、追及してくることはなかった。すぐに向日葵のような笑顔を作った。「それよりも、おめでとう！ 三連勝だねっ！」

「勝った気はしませんけどね」

苦笑いが零れた。一回戦はともかくも、二回戦と三回戦については戦いすらしていない。三回戦に至ってはただのサイン会だった。

「勝ちも勝ちだよ？ 素直に喜ばなきゃ」

「そりゃまあ……そうですね」

いくら何でも不戦勝みたいな終わり方が続けば素直には喜べない。笑おうと試みたが、零れ出るのはやはり苦笑だった。

「も〜」

それに納得いかないのか、リリーナはまた頬を膨らませた。

「会長直々に誉めて上げてるんだからもつと喜んでよ」

そう言っつてフィーロの頬をぐにっ、と引っ張り上げた。

「……ふみまへん」

「ほら、スマイルスマイルっ」

何というか勝ったことよりも、リリーナの行動のほうに笑えてきた。弱々しくはあったが、ようやくと笑うことができた。

「やっと笑ったね」

リリーナは満足気に微笑んだ。

一瞬、ドキツとした。それくらい魅力的な笑みだったのだ。

不覚。そう思わずにはいられなかった。

「……で、用件は何です？ 俺を笑わせに来ただけじゃないでしょうに」

半ば照れ隠しのために、フィーロは話題を変えようとした。が、失敗だった。

「用がなくちゃ……話しちゃダメ、かな？」

フィーロは思わずたじろいだ。もの哀しげな表情でそんなことを上目遣いで言われれば、たじろぐのは当たり前だ。「いや……そういうわけじゃ……」しどろもどろになりながら何とか言葉を探すが見つからない。語彙の貧相なフィーロにこの場を凌げるだけの力はなかった。

しかしながら幸いなことに、救いの手が差し伸べられた。

「よーフィーロ。なんだあの三回戦。笑っちまったぞ？」

手を挙げて近寄ってきたのはエリックだった。フィーロ的にはナイスなタイミングである。

「ども」

「おう。しっかしなんだよ、あれ……は……つとー……スマン」

しかしエリックは口元を押さえて、フィーロから視線を逸らした。

「いや、スマンって……」

「まさか逢引き中だとは思わなかった。スマン」

「逢引つ……!？」

「いやん」いやん、じゃない。

「じゃ、な」

気まずそうな表情で立ち去ろうとするエリック。

「いや違いますから！ 深読みしすぎです！ ちよっ……まっ……

！ 違あああああううう……!」

思いの外、エリックは救いの手ではなかったらしい。

引き留めようとするフィーロは自分でもよく解らないくらい焦っていた。取り敢えず、誤解を解かなくては。ただそればかりが頭を駆け巡っていたのだけは確かである。

十

「……へえ。この前知り合ったばかりねえ」

「だからさっきたまたま会って話してただけです」

「にしては空気がふわふわしてたぜ？」

「いやん」だからいやん、じゃない。

「……。いや、だから……。ああもう……。！」

フィーロは頭がこんがらがって掻き筆るように頭を掻いた。

「ハハハ。解ったから心配すんなよ。からかっただけだつて」

エリックが笑つて言った。そしていきなりフィーロの首に腕を掛け、引つ張つて顔を近くに寄せた。リリーナには背を向けた状態で、小声で話し始めた。

「……それより、よくアレと知り合えたな。同学年なら解るが」

「偶然ですし……」

「それでも、だ。アレは同学年でも手が出ねーんだぞ？ 他学年なんか論外だつっの」

「はあ……」

「お前、ことの重大さ解つてねえな？ あのな、普通アレに近寄ろうと思つたらまず関門があんだよ」

「関門？」

「七百二十度全開でアレの周りに悪い虫が付かないか見張ってるこえー般若が……」

「ほほー誰が般若だつてエリック君？」

エリックの体がびくと跳ねた。間違いなく背後からする声が原因だ。しかし、聞き覚えのある声だ。かなり最近聞いたような。

エリックがゆっくりと後ろを向いた。釣られてフィーロも振り返

る。

「……ようシオン。ご無沙汰」

「そだねー。ご無沙汰な割りには失礼な言い草だよね」

「……事実じゃねーか」

「何か言った？」

「言ってます……」

こんな縮こまったエリックを見たことはない。そもそも、知り合
って間もない。知りようがないというのが本当のところだが。それ
でも普段からは想像がつかないのは確かだ。

にこやかに笑っているのに冷ややかな雰囲気を纏っている目の前
の女性は、ついさっき三回戦で話したシオンだった。これがエリッ
クの言う般若か。一見してそうは見えないが。

「や、フィーロ君。さっきぶり」

「え？ ええ。さっきぶりですね」

「あれ、シオンちゃんとフィーロ君知り合い？」

シオンの後ろからひよこつと首を出すリリーナ。

「ん？ さっき知り合ったんだよ。ね？」

「まあ、そうですね」

そう肯定すると、見る見るうちにリリーナの表情が変わっていつ
た。曇ったというか、怒っているというか、とにかく不機嫌そうだ
った。

シオンはリリーナに視線を落として、微笑んだ。リリーナの頭に
手を乗せて、軽く撫でる。

「心配しなくても盗らないって。三回戦が契約してたりトルリップ
とカタハネの試合だったからだから。本当にたまたまだよ」

「むう……」

納得は出来ないが理解はしたという感じでリリーナは唸った。何
というか、端から見ると姉妹みたいだ。

にしても盗るとは何のことだろうか。深くは詮索しないほうがい
いか。それよりも、フィーロにはもつと気になることがあった。

「契約……?」

「ん? ああ、うん契約。わたしは正式なクランには加盟してないからね」

「でもリトルリップのクランメンバーで……」

「だから契約だよ」

「コイツ特定のクランには入らずに、助っ人みたいなことしてんだよ。変な奴だろ?」

「変な奴は余計だよ。いいじゃない。禁止されてるわけじゃないし。渡り鳥みたいで格好いいよね?」

シオンがこちらに振ってきた。それについてどう答えたらよいか。取り敢えず「はあ」と曖昧に答えた。

「ほら見る。変な奴だと思ってんじゃねーか」

「違うよ。今のは肯定だよ」

曖昧に答えたせいで、エリックとシオンは言い合いを始めた。何なんだろう。どう答えてもあまりよろしい結果にはならなかったよ。うな気がする。

言い合う二人を交互に見た。

両者とも、犬猿の仲というわけではないようで、どこかシエリカとベアトリーチェの関係に似ているとフィーロは思った。

「二人、仲いいでしょ?」

何時の間にやらリリーナがフィーロの隣にいた。

「そうですね」

「一年生からクラスが一緒に、シオンちゃんとエリック君はよく張り合ってたんだ。ライバル関係っていうのかな。なんか、羨ましいなあ」

「……」

最後の言葉は、フィーロではなく、自分自身に言っているような気がした。この人は気丈に振る舞ってはいるが、もしかしたら寂しがり屋なのかもしれない。

でもリリーナとシオンはきつと親友だ。だとしたら、リリーナは

寂しがり屋であると同時に、欲張りでもある。親友なんてものは、一生に三人も出来れば上々なからだ。

「それが幼く見える所以……なのかな」

「？ 何か言った？」

「いえ、何でもありませんよ」

「えー何か言ったよ絶対！」

「何でもありませんって……！」

「ほらほら正直に言いなさい！」

リリーナがのしかかってくる。ぐっ……まずい、背中にたわわな

感触がっ……！ 眠れ！ 俺の野性の魂ッ……！

「ほらほらっ！」

「やめ……何でもないですから本当に！ だからやめてくださいマジで！」

俺だつて男だ！

それ以上はいろんな意味でまずい！ マジで目覚める！ 俺の中の野性の魂が！

フィーロはリリーナを引き剥がそうと必死になっている。目の前の二人に助けを求めようにも、あつちはあつちで未だに言い合っている。自分で何とかしなくてはいけない。が、しかしリリーナも剣士学科だけあって力は並みより強い。なかなか引き剥がせない。

もつと言えば、フィーロは必死でも端から見ればいちゃついているようにしか見えないわけで、恐ろしい視線が集中している。中でも一番恐ろしいのが、

「仲、よさそうね。フィーロ」

この悪魔の声だ。

冷気というレベルを越えた凍てつく空気を纏った悪魔の声が聞こえた。これにはさしものリリーナも動きを止めた。言い合いをしていたエリックとシオンも言わずもがな、だ。

例のごとく油の切れたブリキ人形のようにギギギと上を向くと、案の定、悪魔のシェリカがいた。

口には笑みが浮かんでいるが、目は笑ってない。人を殺せるような死の眼光線を放っている。蛇に睨まれた蛙よろしくフィーロは硬直した。

「仲、いいの？ その人と」

その人とはリリーナか。なんと答えればいいのやら。

まあ、「うん、そうだよ」と言えば間違いない死ぬ。燃やされて凍らされて爆発させられるのが目に見えるだからといって「違う」と言っても「嘔吐き」と言われて感電させられて爆砕させられるのがオチだ。要するに、結局最後は死だ。なんだこりゃ。なんのいじめだ畜生め。

「ねえ。仲いいの？」

また同じ質問。逃げ道を封鎖しやがった。もう答えないといけない。フィーロは生唾を呑み込んだ。どうする。どうすればいい……！
「いいよ」

そう言ったのはフィーロではなく、リリーナだった。驚きのあまリフィーロは目を見開いた。リリーナは挑むような目付きでシェリカを見据えている。一瞬たじろいだが、シェリカも負けじと睨み返した。

「フィーロ君が誰と仲良くしてもいいと思うけど？」

リリーナが言う。まあ、正論だ。仲良しうんぬんはさておいても別に人の交友関係に口出しされる言われはないのだから。ならば俺はなんで焦っているのだろうか。後ろめたさ？ 何に？ よく解らない。

正論だけに反論出来ないと思いきや、シェリカはキツとリリーナを睨んだ。

「あたしが嫌だもの」

なんだその理由は。

「あなたの気持ちなんて関係ないと思うよ？」

「嫌なものは嫌だもの」

「それでフィーロ君を束縛するなんて可哀相だよ」

束縛って……。そこまではひどくないが。

「フィーロはあたしの弟なのよっ！」

理由になってないし、反論になってない。

「反論になってないよ！」

そりゃそう返すわな。

「うるさいうるさいうるさい！ とにかく、アンタだけは絶対に嫌なのっ！」

どんな理由だそれは。

単に毛嫌いしてるだけか？ 天下の生徒会長をアンタ呼ばわりして、駄々を捏ねるなどなかなか出来ない所業ではある。つか誰もしないし。

大体、なんたってこの二人は言い争っているんだ。まずそこが謎だ。

「愛されてるねえ」

エリックがクククと含み笑いを漏らしながら言った。

「よく解りませんよ、俺には」

今一つ、彼女らの考えていることは解らない。俺には何か足りないのだろうか。そう自問するが、フィーロには答えは見つけられそうにもなかった。

「ま、今はそれでいいんじゃないか？ 取り敢えず今やるべきは……」

「……そうですね」

フィーロとエリックはお互い肩を竦め合って、口喧嘩を鋭意続行中の美人二名を止めに向かった。無傷で済めばいいのだが。……無理だろうな。

自然と深い溜め息が漏れた。

第一章(21) 四回戦

F i r o

ユーリの手から仄かな光がゆっくりと消えていった。同時に施術特有の温かみも引いてゆく。

「痛みはないですか？」

「ああ、ありがとう」

フィーロは右肩をぐるりと回して痛みがないか確かめた。どうやら大丈夫のようだ。まあ、ユーリの治療なら当然だろう。

しかしこの程度の怪我で済んだことに感謝せねば。一触即発どころか未触既発の状態だったあの場で、右肩と両脇腹、左の太股から脛にかけて擦り傷やら打ち身やら。想定していた怪我はこれに頭から出血と首と両腕の筋を傷めて、あばら骨二、三本の粉碎にアキレス腱切断くらいはあるかと思っただが。

今回はエリックとシオンも協力してくれたお陰もあって被害は最小で済んだ。二人には感謝だ。

しかしかの生徒会長がそこまでお転婆だとは思わなかった。うちのじゃじゃ馬姫といい勝負だ。もともと忙しい人だったし、予想はしていたが。それでもあれは想像以上だ。

まさに地獄だった。

最初は口喧嘩の延長だったが次第に手が出て足が出て。まさか頭まで出るかと思いきや、いきなり魔術をぶっ放すわ。下位要素魔術に限定はされていたが、火だの雷だのが飛び交うのだ。当たれば最悪死ぬ。彼女らはその辺考えていたのか。まあ、考えていないんだろうな。

シエリカが中位要素魔術を唱えようとしたそこでギリギリ止めることが出来た。触媒まで取り出していたからマジで危なかった。

羽交い締めにしてようやっと収めたはいいが、近くにいた生徒数

名が被害に遭っていたらしく、先生からこっぴどく叱られた。何故止めた俺まで怒られたのか。明らかに不条理だ。

一番不条理なのは、仁王立ちしている馬鹿姉が、無傷だということだ。神さまよ。嫌いなんだろう、俺のことが。知ってるよ。よく知ってる。俺もアンタのことは嫌いだからもう互いに無視し合おうよ。一方的にいじめるなんてひどくね？ 切にそう思った。

「……つかユーリはいつまで俺の身体触ってんの？」

「しょ、触診です」

嘔吐け。そんな長い触診あつて堪るか。触るっていつか撫で回してるだろ完全に。そこまでディーブな触診があつたら逆に怖いわ。もう治療も終わっているんで、フィーロは脱いでいた外套を掴んで立ち上がった。

「ああ……！」

絶望感溢れる声を漏らすユーリ。何なんだこの娘は。まったくもって意味が解らない。

いちいち構うのも面倒だと、無視した。外套を羽織る。じつと内部がモニタリングされている扉ゲートを見つめるガナッシュのもとに寄った。

「何見てんだ？」

「ん？ フィーロか。怪我はいいのか？」

「ああ。頭は空でも優秀な治癒士がいるからな。つか質問に違う質問で返すなよ。質悪いぞ」

「別に見たら解るだろ。試合を見てるんだ」

「もう戦った相手なの？」

「だが、まともなクラン同士の対決だ。夢工場とマッドボイズ。一応先輩のクランだし何かしら得るものはあるだろう」

「ふうん……勤勉なことだな」

フィーロは扉を見た。戦闘の風景が映し出されている。あれは……クスカか。速い。トリッキーな動きがより速く見えさせる。要は捉えにくくしているわけだ。レイジとは違う速さだ。あれは確かに

クソ速いが、意外に動きは直線的なのだ。ある程度の動体視力と運があれば捕捉出来ないわけではない。ガナツシュなら出来るだろう。「……勤勉というか、普通だろう。ボクらは未熟なんだ。得るべきものは得ないと、学園にいる意味がない」

「首席の言うことは違うな全く」

「他人事みたいに言うな。お前だって……ってどこにいく!？」

「説教は御免だよ」

フィーロはそそくさとその場を離れた。説教は御免だ。本当に。

何度も言うが俺は無能な剣士だ。剣しか振ることが出来ない。その剣だつて型もへつたくれもないただのがむしろ剣法だ。それでずっとやっている。今更何かを取り入れる気にはなれない。それに無理だ。俺にはそこまでの才能はないのだから。

なんだか暗鬱とした気分になってきた。試合前だというのにモチベーションは最悪に近い。

「やつてらんねー」

呟いてみる。

余計に怠くなった。最悪だ。

懐中時計を取り出した。あと二十分といったところか。意外に長い。ブルーな気分がそうさせているのだろう。迷惑なものだ。

秒針を見つめた。一秒は相も変わらず正確だ。コイツが千百回くらいで時間になる。どうせならば一と数えてみようか。いや、面倒臭い。それこそ本当にやつてられない。

フィーロはその場に座り込み、空を見上げた。快晴だ。夏だし、この時期は晴れるときはとことん晴れるから別に当たり前ではあるのだ。それでもクソ暑い。外套は戦闘の時だけ羽織ることにしよう。外套を脱ぎ、丸めて膝の上に置いた。

もう一度空を見上げ、雲を見つめる。子どもころはあれが何に見えるかなどと孤児院の奴らがやっていた。フィーロはそれを眺めているだけだった。どちらかというと院内では孤立気味だったのだ。

まあ、じゃじゃ馬姫のお守りをしてたら自然とそうなる。親しい奴

もいるにはいたが、今はどうしているのだろうか。家出に近い形で孤児院を出た（というか引き摺られた）わけだし、心配掛けているかもしれない。

別に戻りたいとも思わないが、一度くらい顔を出すのもいいかもしれない。これが終わったら二週間を使って出向いてみようか。

そんな自分のかつて育った場所に思いを馳せて、雲を見つめた。すぐに飽きたが。

十

四回戦の始まりまで十分前になった。場所は燃え盛る山。まあ、火山地帯だ。ゴツゴツした岩場だらけで、溝に真っ赤な溶岩が流れている。

「あつづー……………」

もうヤダ。暑かったり寒かったり。確実に風邪引くよ。

「暑いよフィーロお……………」

「そればっかりはどうにもできねーよ」

暑いなら近付くんじゃない馬鹿。余計に暑いだろうが。離れる。

三メートル離れる。

「しかし、視界が悪いな。遠距離は難しいぞ、これは」

平然とした面持ちのガナツシュ。神経麻痺してるのか？ 暑くないのか？ その黒い外套の下はもしかして裸なのか？

「クロアの射撃は無理か……………てなんだその格好はツ……………！」

「……………いける」

「いけるじゃない！ 服を着ろ破廉恥娘！」

ガナツシュが叫ぶのも当然で、クロアは公衆の面前だというのにキャミソール姿になっていた。羞恥心がないのかこの娘は。

「うぴよおおつー！」

奇声を発する馬鹿な変態レイジがいた。コイツはダメだ。早く始末せねば。

ファイロはレイジの後頭部をガシツと掴み、近場の岩に押しつけた。

「うわっづあっづあっづあぁあぁあぁあぁ……！ やめてっ！ マジやめてっ！ 死ぬ！ 死ぬうううううう……！」

手をバタバタさせて叫ぶレイジ。大袈裟な。お前はこれくらいじゃ死なん。寮の三階から落ちても死なないんだから。

「やめてやれ、ファイロ。もう着たから」

ガナツシュが制止してきたので、やむなく手を離す。顔が真っ赤になっていた。少し火傷しているかもしれない。まあ、変態なら大丈夫だ。

それでも怪我は怪我だ。そういうのに反応するのは当然ユーリだ。「た、大変です！」と大変そうに駆け寄って、変態の治療を始めた。だが再度言うが変態はしぶとい。チャンスと言わんばかりにユーリのお尻向かってゆっくり手が伸びている。変態め。しかしもう遅い。手が守護神に踏まれた。

「ぐっぎゃあああああぁんっ！ そこ尖ってるう！ 手の甲刺さってるうううう……！」

「愚かな行為にはそれなりの代償が伴うのだわ」

ユーリの操のみを守る守護神モニカが下目遣いでレイジを見た。据わっている。あれは殺やる時の目だ。

「だ、大丈夫ですかっ！？ そんな、ちゃんと施術したはずなのに……」

気にするなユーリ。ちゃんと施術は成功している。奴が感じている痛みは自らの業の痛みだ。

「あっ」ユーリが変態の手をモニカが踏ん付けていることに気付いた。「モニカちゃん踏んでますよ、レイジ君の手！ もう、足元には注意しないとダメですよ？」

そういう問題じゃない。

「ごめんなさいなのだわ」

変態には目もくれず、ユーリに向かって謝った。少々変態が哀れ

に感じなくもない。所詮変態だから仕方がないのだが。

「それにしてもホントに暑いわ……あたしも脱ごっかな……」

突如シエリカがそんなことを言った。何故、俺の方を見る。フィードはガナツシユを見た。

「……………」

形容しがたい表情で見返してきた。

「……………」

フィードもまた、形容しがたい表情で、そのまま明後日の方向を見た。

「何よ！ そのリアクション！」

蹴られた。痛い。暑いからシエリカもイライラしてるのかもしれない。

変態の治療を終えたユーリが立ち上がって、こちらに来た。

「でも、これだけ暑いと脱ぎたくもなりますよね」

「ちっ……………」

「えっ……………!？」

シエリカの舌打ちにショックを頭にするユーリ。そろそろ学習しようぜ。

……………しかし、ユーリが脱衣ね。

フィードはガナツシユを見た。「……………」「気まずそうな表情で見返してきた。なるほど、いくらシスコンでもやはり気まずいか。

「……………」

フィードもまた、同意するような表情で見返した。頭の後ろをポリポリと掻く。

「何でちよっと嬉しそうなのよっ！」

シエリカに蹴られた。痛い。脛は反則だ。地味に痛い。でも当然だろう。

だって男とは、

悲しい生き物なんだ。

コケティッシュに弱いんだよ。基本的に。余程ガツチガチの貞操

観念でもない限りは。フィーロ自身、別に軟派ではないが、硬派を
気取るつもりもない。経験があるわけではないが、興味はある。ま
あ、でも、未だに好きだの愛だのはよく理解してないんだが。

「えっ、フィーロ君……嬉しいんですか……？」

いやはやこつちがえっ、である。なんでユーリが嬉しそうなんだ。
フィーロは訝しんでユーリを見たが、既に違うほうを向いて何か呟
いていた。心配になってきた。

「おい……だ　いいっ!？」

大丈夫かとユーリに近付こうとした瞬間、足に鈍い痛みが走った。
モニカがフィーロの足を踏んでいた。ご丁寧に踵でだ。

「……痛いんですけど」

「痛いように踏んでるもの」

あーなるほどー。

いやいや、んなことは解ってるっつーの。違うだろ。離せって言
ってんだよ。馬鹿かコイツ。馬鹿だろ。

「ムカつく目なのだわ」

「目!？」

目は口ほどにものを言うってこと？　馬鹿って思ったのばれた？

「腐海のような瞳なのだわ」

「腐海!？　ひどくね？」

俺の花緑青エメラルドグリーンの目は腐海の色なのか。青粉ってこと？　もう泣いて
いいかな。つか大体なんでそこまで言われなといけななんだ。俺
なんか悪いことしたか？

まだ戦闘は始まってもないのに、フィーロの心は早くも挫けそ
うだった。これも全てこのフィールドが悪い。暑いからみんなピリ
ピリしてるんだ。八つ当たりされる身にもなれ。

ぶつけようのない不満をひしひしと胸の内に蓄めて、フィーロは
さっさと終わらそうと誓った。

アンセムスターはCL3。克蘭レベル数値的な実力差はない。

実際、トリオで活動していたときのベアトリーチェ、モラン、ロリエの三人は一年生の間ではそれなりに有名だった。

武門の出であるベアトリーチェの才覚ある剣技。性格に似合わず戦斧による破壊的な攻撃を繰り出すモラン。火力不足は否めないが、多彩な魔術を駆使できるロリエ。普段がアレだから想像しにくいのが、侮ることの出来ない相手だ。

それでも一応実力は把握しているから問題ない。フィーロが気になるのは新参の二名だ。名前はユミイとエミリだったか。学内で顔を見た覚えがない。単にフィーロの記憶力が悪いだけだろうか。

詳しい情報が解らないのだ。どちらかが確か特戦学部だったのは聞いた。特殊戦闘学部 略して特戦学部の戦闘スタイルは一言で言うなら『意味不明』だ。

大体学部で戦闘スタイルというのは決まる。少なくとも相手の戦う間合レンジいは特定出来る。

しかしながら特戦学部というのは、特殊な能力を使った戦闘スタイルゆえに、間合いが個々でバラバラなのだ。トリックスター奇術士学科という学科があるのだが、そいつはまあム力つくことに相手を舐めきった攻撃しかしてこない。入学当初に一人だけ会ったならぬ遭ったことがあったが、腹が立った。

鳩を飛ばしてきたかと思えばそれが爆発したり、「イリュージョン」と叫んで分裂したり。トランプ手裏剣とかいって鉄製の刃の付いたトランプまで投げってきた。拳げ句「バーカ」と書かれた煙幕弾入りびっくり箱を投げってきたときはマジで殺してやろうかと思っただ。馬鹿はお前だ馬鹿。

まあもともと特戦学部がいい思い出がないフィーロには、あまりいい気はしなかった。せめてまともな奴であることを祈ろう。まあ、まともなはずだが。

フィーロがそんなことを考えながら走っていると、ガナツシュが

口を開いた。

「……今回は数で押せる敵じゃないだろうな。いくらボクらが攻撃側だといつても、深追いすればやられかねない」

「まあ、同感だな。取り敢えず、出来るだけ早く終わらせられるようにしよう。……後ろの奴らが反乱しそうだ」

「……善処しよう。ただ……今回はユーカリスティアは使用出来ない」

「何で……ってああ。そうだな。忘れてた」

ここは完全な火山地帯だ。水の精霊はかなり少ない（全くいないわけではないだろうが）。だからユーカリスティアを使ってもあまり意味がないのだ。出力不足で逆に不利になる。意外に条件が厳しい武器である。

「んじゃシエリカの出番だな」

「そうなる。癪だが、最善だ」

まあ無駄に火と土の精霊がいるだろうから、シエリカの火力で圧すのが手っ取り早い。結局、ごり押し戦闘だ。

岩陰に差し掛かった辺りで、ガナツシュが右手を挙げて止まれる合図を出した。前に出たそうな馬鹿がいたが、全員が停止した。

「レイジ」

「ほいさ」

ガナツシュの呼び掛けに待つてましたと言わんばかりに斥候に出掛けるレイジ。何故仕事面は真面目なのに変態なのか。永遠の謎である。

一分かそこらでレイジが戻ってきた。

「四人しかおらん。旗はあったで」

「……作戦か？」

「解らんわ」

「そんなのまとめてぶっ飛ばせばいいじゃない」

猪突猛進な馬鹿シエリカが言った。ガナツシュが呆れた顔をした。だが、相手の意図も解らないのだ。それにじっとしているわけにも

いけない。暑いから。

「虎穴に入らずんば虎児を得ず、だぞガナツシユ」

なのでフィーロは賛成の意見を述べた。ガナツシユはフィーロの思わぬ賛成意見に目を見開き、ばつが悪そうに頬を掻いた。

「む……まあ、そうだな。一理ある。でも全員行くのはまずい。行くのはボクと……」

「シエリカとレイジでいいな。……頑張れ」フィーロは敬礼をした。「ちゃっかり自分を外すんじゃない。行くのはお前だ馬鹿」

「嫌だよ」

「嫌でも来い。これの面倒を見るのはお前の役目だろうが」

シエリカを指差して言う。すると“これ”呼ばわりされたことに不満を顕にしたシエリカが乗り出してきた。

「それどういう意味よ!」

「馬鹿! 声がでかい……!」

「おいシエリカ……!」

フィーロが慌てて止めようとしたが、シエリカが暴れた。

「放してよフィーロ! 変態シスコン野郎にこれ呼ばわりされるなんて言語道断だわ!」

「解った、解ったから静かにしろよ! 敵に捕捉されるだろ……!」

「あー……もう捕捉されたで……」

「……マジかよ」

途端、フィーロたちの足元に影が出来た。でかい影だ。圧力もあった。何かが落ちてくるような

「……マジかよ」

また同じ言葉が漏れた。

「回避だ……!」

ガナツシユが叫んだ。それが鶴の一声となった。

「シエリカ……!」

「ひゃっ!」

「ユーリ、こっちなのだわっ!」

「うにゃあつ!?」

「え、オレはどっち行けばいいんや!?」

「知るか勝手に死んでろ!」

「ひどっ!　　つて……ぎゃふっ……!」

散り散りに回避する。

フィーロは取り敢えず近くにいたシェリカを引つ張って、バックステップで避けた。他の奴など考えてられなかった。

ズン、ボガン、

鈍重な着地音に岩の破壊音が妙な不協和音を奏でた。いくつか破砕した岩の欠片が飛んできた。抱き抱えたシェリカを庇う形でしやがみ込み、背中を向ける。幸い欠片はそれほど当たらなかつた。

しかしながら土煙が立ち籠めている。視界が塞がれた。ただ、黒く大きな陰だけが目の前に立っているのだけは視認出来た。

「でけー……」

思わず呟いた。

身の丈三メートルはありそうだ。丸いフォルムで雪だるまのようにも見える。こんな灼熱のフィールドに雪だるまなんて作っても数分で溶けるだろうが。

「全員無事か……!?」

離れた場所からガナツシュの声が聞こえた。フィーロは「ああ!」と答えた。他の仲間も返す。クロアの返事はなかつたが、もとが声を張り上げる奴じゃないし、仕方ない。きつと無事だろう。

「大丈夫か?」

「……うん。ごめん」

「シェリカが謝るなんて似合わないな。ま、怪我がなくて何よりだ」
フィーロは微笑んだ。

「ほーっほっほっほっ!　　ざまあないですわシェリカさん!」

聞き覚えたつぷりの高笑いが聞こえてきた。いや、戦っている相手が決まってるのだから、自ずと高笑いの主も限定されるのだが。

ある程度土煙が晴れてきて、片手を腰に、もう片手は口元に添え、

いかにもといった姿勢で岩につつ立っているベアトリーチェの姿が現われた。

「あんのクソアマ……!!」

「そんな言葉遣いするなっつってんだる馬鹿」

ぺし、と額を軽く叩いた。本当にこの姉は。

それよりもまずはアンセムスターだ。まさかのアクシデントで先手は取られたが、こちらが攻撃側である以上、接触したのは有利に傾いた。

立ち上がって、シエリカを助け起こした。シエリカはもう戦闘態勢に入っていた。血の気の荒い奴だ。

「フイーロ！」

ガナツシュの声が近付いてくる。こちらに来ようとしているのだろう。だが、ズズ、と黒い影がほぼ同時に動きだした。形のせいで解りづらいが、こつちを向いたような気がした。

嫌な予感がした。

そしてそれは的中した。

「来るなガナツシュ……!!」

「な……」

ブオン、と何かが振り下ろされる音がして、目の前で爆発が起きた。茶色い何かが見える。影の手か。爆発じゃなくて殴った音だ。これはきつと。

「くっ……!!」

一体、あれはなんなんだ。

土煙が漸く晴れてきた。だんだん頭になる。茶色い肌だ。フサフサかつフワフワしている。丸い耳。丸い瞳。 こんな口。

そう、あれは……

「……クマ？」

シエリカが惚けた眩きを漏らした。うん。まあ、クマだけどね。クマっていったらもつとこつ、蛮族の森の炎の蠶みたいなの思わない？ あれ、かなり可愛くカリカチュアライズされてるね。

完全に、又イグルミだよね？

「ほーっほっほっほっ！ 人形士パベッターの力に恐れをなしているようですよわね！」

パベッター。

パベツト。つまりは人形。人形士パベッター。人形士学科か。特戦学部の相手の学科は人形士か。面倒な相手だ。

一応、超能力オーバーアーツの部類らしい。召喚魔術の人形版とでも言えばいいか。ちよつと違つかもしれないが。魔術ではないが、魔術チックではある。

確か人形パベツトに自分の魂の一部を移して動かす技術だ。

人形ならばなんでもいいらしく、それこそ鉄製だろうが布製だろうがなんでも動かせる。それは『物言わぬもの』ならばなんでもいということだ。

例えば、人の死体とか。

しかしながらそれは人形士とは呼ばれていない。

俗に、侮蔑の意を籠めて、『死霊リミ使い』と呼ばれる。一時はネクロマンサーと呼ばれたが、あれは降霊魔術を専門にする降霊士をさすのであつて、一緒にするのは降霊士に対する侮辱だと改められた。あれも魔術とはまた違ったものなのだが。

いや、そんなことは今はどうでもいいことだ。現実逃避する前に眼前の問題をなんとかしなくては。

人形を止めるには中枢 操作している人形士を押さええないといけない。四人しかいなかったとレイジは言った。つまり一人は隠れて人形を操っているわけだ。

簡潔ではあるが、そう簡単には探せまい。なんせ他の四人がいる。人形士と一緒に旗を隠さなかったのは保険だろう。まとめてやられないようにするための、一種の用心だ。もともと、そのための四人でもあるだろう。

人形士の遠隔操作による人形を主戦力とし、四人がフォローと防衛側なら加えて旗の防衛。シンプルだが確実だ。有利に傾いたとか

思ったが結構ピンチだ。

因みに作戦がここまで事細かに解ったのはフィーロの名推理ではない。お馬鹿さんが高笑いしながら今語ったからだ。あれがマスターでいいのだろうか。

身の丈三メートルのヌイグルミは小回りは利かないらしく、フィーロはシェリカを引き連れて回り込んで近くの岩場に隠れる。ベアトリーチエは高笑いしてるし、追撃はあと少しはないはずだ。

岩場には先客がいた。隣にしゃがみ込んだ。

「ガナツシユ、無事か？」

「ああ……他の奴らも大丈夫だ。……しかし厄介だな。人形士とは……」

「隠れてるのは間違いないな。どのくらい離れても動かせるのかが解ればいいけど。俺は生憎専門じゃないからな。一般知識しかない」
「単純に考えてフィールドの端から端までってわけじゃないだろう。なら探せなくはない」

「いや無理だろ」

「ボクらならな」

ガナツシユは薄く笑った。

「出来る奴が一人いるだろう？」

「……いるな。そういや」

「？ 何の話？」

「なんでもない。シェリカは何時も通りぶっ飛ばせばいいから」

「ふうん……解ったわ」

「作戦会議は終わった？」

「！ やばっ……！」

「避ける……！」

フィーロとガナツシユは咄嗟に飛び退いた。「ふひゃっ」というシェリカの奇声が聞こえたが無視だ。

岩が砕けた。景気のいい爆砕っぷりだ。血の気が引いた。

モクモクと土煙が舞う中から現われたのは予想どおりモランだっ

た。でかい大斧を担いでいる。顔に似合わず狂戦士だ。

「ようモラン……作戦会議の時間待っててくれたのか？」

「ううん。こっちの作戦バレちゃったから、フィーロ君たちの作戦も聞いてただけだよ？」

「……そ。耳いいね」

バレちゃった、というかバラしちゃっただと思っよ、とは言えなかった。モランの優しさを考慮すればこそだ。本当にいい友人を持ったよね、ベアトリーチエは。

「それじゃ、友達だけど、遠慮しないよ」

考え事している間に真横から戦斧が襲い掛かる。なんて脅力だ。本当に女の子か。

フィーロはシェリカを抱えてまた飛び上がった。モランの上空を飛び越えて、背後に着地した。

「凱裂尖d e y罅F u鑠朦g r a v e鋭巖鎗」

ヤバイ。

自分の背を叩く声。雰囲気は違うがロリエだ。回避は不可能。咄嗟にシェリカを突き飛ばした。「きゃっ!？」悲鳴を上げて倒れこんだ。許せ。

秒単位で土が盛り上がり槍となってフィーロに差し迫る。ギリギリで視認した。身を出来るだけ擦った。

衝撃が走った。

遅れて、鋭い痛み。

「がっ……」

これはマジで痛い。

だが、痛がつてる場合でもない。刺された勢いを利用して前に飛ぶ。ずりゅっ、という嫌な感触。ぶしゅっ、という勢いよい赤い噴水が吹き出た。

とにかく、刺さった岩の槍を身体から抜くことには成功した。

「つてー……肩やべー……」

刺さった箇所を確認。左肩、脇腹の二ヶ所。致命傷ではない。

「あわわっ、避けられちゃった」

緊張感のない声だ。

離れた場所にロリエが立っている。バツと何かが飛びずさった。モランがロリエの前に立った。モランの表情は焦りはないものの、驚きが見え隠れしている。

おそらく、一連の作戦だったんだろう。まさか回避されるとは思わなかったと。まあ、当たったからな。致命傷じゃないだけで。

「さすがフィーロ君だね」

モランが言った。構えは崩していない。

「当たっておいてさすがもクソもないけどね」

苦笑いで返した。

「普通ならあれで勝ってたから。やっぱりさすがだよ」

「そりゃどうも」

「悠長に話してる場合かフィーロ。怪我は」

ガナツシュが隣に立った。太刀を引き抜いている。

「平気だ。痛いけど。……もう伝えたのか？」

「いや、アイツ、どこかで聞いてたらしい。勝手に行った。……と

もあれ、ここからが本番だぞ」

そう言っただ刀を構えた。

つかどこかで聞いてたって。抜け目ない奴だな。いいけど。

「解ってるさ。……シエリカ、立てるか？」

足元で未だ起き上がるうとしない姉に視線を向ける。手を差し出すと、すぐに掴まってきた。そのまま引つ張り起こす。

「うん。でもひどいわ。いきなり突き飛ばすなんて！」

「いや、やむを得なかったし」

「それでも……あつ！ け、怪我してるじゃないフィーロ！ 誰！

誰にやられたの！」

「え、まあ、強いて言えばロリエだが……」

「あのロリガキね。解ったわ」

ギラン、とロリエを睨み付ける。つかロリガキって。年齢は一緒

だぞ。多分。

「ひえっ。も、モランちゃん……めっちゃ睨んでるよう」

シェリカの視線のレーザービームにビクリとするロリエ。少しだけ可哀想に思えた。

「大丈夫だよ。それより、あれの準備はしといてね」

「う、うん」

あれ……ね。まだ何かあるか。まあ、どんとこい。次はガナツシユを盾にするからきつと避け切れる。

「今、何を考えた？」鋭いお方。

「なんでもないよー」

「目線逸らすな」

フィーロは肩を竦めた。

「ほんの冗談だ」

「……まったく。もう準備はいいな？」

「んー……ビミョー」

「行くぞ……！」

「聞けよ」

ガナツシユが駆け出した。それに促されるように、フィーロとモランが前に出た。

友人と戦うのは気が引けるが、手を抜くのも失礼だろう。雑魚は雑魚なりに出来る限りやろう。

フィーロは剣を振りかぶった。

第一章(22) 四回戦

Monica

「りゃあああああああああつ………!!」

「ちつ………!!」

エビスだがエビルだか知らないが、繰り出してきた一撃を三叉槍トライデントで弾く。なかなか重い一撃だった。

同じ中戦学部だ。武器が棒術具であるので棒術士学科に間違いないだろう。打撃杖スタンロッドでも使っているのか、やけに一撃が重い。あれは外は木製の棍だが中に鉄芯が仕込まれている。丈夫で重い攻撃を放てる。

棒術士学科はあまり冒険的な学科とは言えない。魔物を相手にするのにぶん殴るといっだけの棒術士は火力が足りないのだ。撲殺で死ぬ魔物などそうはいない。それこそ魔物の脳天を一撃で破壊するには、墜落死くらいの衝撃がいるだろう。

だからこそ少しでも攻撃の威力を高めようと作られたのが打撃杖だ。他にも種類がいろいろあり、最近では棒術士学科も有力な生徒が出てきはじめた。このエビス(エビル? なんでもいいけど)もそれなりの実力だ。

だけどアタシの敵じゃない。

だが実際は圧されている。それはエビル(エビス? あれ、どっちだっけ)が強いというよりは、

「ほーほっほっほっ! 隙ありですわッ!」

このですわ女が原因だ。

二対一はさすがに厳しい。加えて厄介なことに、このですわ女は強いのだ。

馬鹿な高笑いしたり、作戦駄々漏れにしたりと見るからに残念な女なくせに、無駄に強い。鬱陶しいことこの上ない。

モニカの背面を突く攻撃を、寸でのところで身を振り、躲す。だが細剣の強みはその速さだ。直ぐ様突きが放たれる。モニカは距離を取らせるため、槍を横薙ぎに振るった。

「ちよこざいすわ」

「二人掛かりのアンタが言うセリフじゃないのだから」

「煩いですわッ！ エミリ！」

「はい！」

ですわ女とエビス（あくまでエミリとは呼ばない）が同時に駆け出す。構えからして両方が突きだ。

舐められたものだ。

棒だの細剣だの、たかだか攻撃の中に『突き』というスタイルが組み込まれているだけの武器が、アタシの嵐を運ぶ者に勝てると思っっているのか。

槍とは『突き』の体現だ。すべてが突きの動作を主体に置かれている。細剣も一応は突く武器ではあるが、所詮は刺突剣エストックと同レベルだ。

モニカは重心を下げ、槍を構える。狙うはですわ女だ。

迎え撃つ。

予想外だったか、ですわ女の目が見開かれた。モニカはすくい上げるように突いた。背後からエビスが近づく。十分承知している。身体を捻りながら槍をぐるりと縦に回した。突き出されたエビスの棒が下から弾かれる。

一周してきた槍を地面に叩きつけ、弾ける反動を利用してですわ女を再度突く。ですわ女は下がろうとする。しかしモニカはそのまま高速で四回連続で突いた。一発目が擦ったが、大きく飛びずさつたため、三発は空を突いた。

「ちっ………」

仕留め損なつたことを叱咤するように舌打ちをした。

「はあああああああああああああ………！」

気迫とともに背後から態勢を立て直したエビスが迫った。弾いた

だけだったのがまずかったか。四連突きをしたのがまずかったか。避けられない。

「モニカちゃん……!!」

離れた場所にいたユーリの叫ぶ声が聞こえた。隠れていると言っただけなのに、あの娘はまったく。だけど、そこが好きだ。

自分が怪我をしても他人を優先するような、そんな優しい心を持ったユーリが好きだ。

世の下衆どもはユーリの胸しか見ていない。だから男は下衆だ。滅ぼしてやりたい。

だけど一番滅してやりたいのは、あの金髪野郎^{バッキン}。

フィーロ・ロレンツ。

ユーリを誑かそうとするあの小猿。今すぐにも抹殺してやりたい。跡形もなく消してやりたい。

怒りが沸々と沸き上がってきた。実に、怒りとは恐ろしいもので、どこからか力が湧いてきた。

「……RUaaaaaa……!!」

軸足を中心に回転しながら、槍を薙いだ。ブオン、と空気を裂く音が鳴りながら、エビスの横腹に直撃した。「あぐつ……!!?」呻き声を発しながら、真横にぶつ飛んでいったエビスは、そのまま岩に激突した。

「エミリ! くつ……よくもツ……!!」

ですわ女が向かってきた。迎え撃とうとしたが、如何せん、重たい槍を無理矢理振り回したため腕に力が入らない。

「モニカちゃん、避けて……!!」

ユーリ。

ごめんね。無理なの。人はそんな咄嗟に動けるものじゃないのよ。ですわ女の細剣がモニカの目前にまで迫った。

その時、

ひゅん

風を切るような音をたてて、モニカの真横を細い何か走り抜け

た。

矢だ。

木で出来たありふれた矢がモ二力の横を通過し、ですわ女に一直線に向かつていった。

ですわ女は驚いたが、冷静にサイドステップで躲した。だが矢はそれだけではなかった。的確に、ですわ女が着地した地点を突いて放たれる。ですわ女は慌てて回避したが、また矢が襲った。

一体何人射手がいるのか。そう思うほどの的確さと、連射だ。解っている。これは一人がやっていることだ。

今までどこで何をしていたのかがは知らないが、随分と狙ったようなタイミングで現われたのは、無口なスナイパー　クローア　だった。

「ちよございですわッ……！」

ですわ女は細剣を鞭のように鋭く振り、矢を払った。

「……………」

物言わぬ無口女はただ冷徹な瞳ですわ女を見据えている。既に矢をつがえ、いつでも射てる状態だ。

先に動いたのはですわ女だ。

射ち手の構えサジッターリアと呼ばれる細剣を前に突き出した構えで駆ける。

呼応するかのごとく無口女は弓を放った。あの無口女はどういうわけか連射が出来る。どう考えても無理な行為を軽々やってのけるのだ。

一発目の矢を足捌きで避けたですわ女に次々に矢が浴びせられる。ですわ女はそれを（癩だが）見事に足捌きのみで躲した。

流れるような、それでいて宙を舞うような足捌き。

あれが『胡蝶の舞』と呼ばれる所以だ。

しかし無口女も負けてはいない。十五連射という阿呆な連射が出来る。右腕が違う生き物のように見える。異常な速さで矢筒から矢を取り、つがえ、放つという一連の動作を行っている。もはや機械だ。

しかしここは胡蝶の舞が一步上手だったらしい。全ての攻撃を避け切ったですわ女は無口女を射程内に収めた。

「終わりですわ」

「終わるのはアンタなのだわ」

みすみす相手の隙を見逃すほどお人好しじゃない。腕が回復した瞬間には三叉槍をですわ女に向けて突進していた。

「くっ……卑怯な……！」

身を振りながらそんなことを吐くですわ女。自分のことを棚に上げすぎだ。腹が立つ。

ですわ女は無口女を仕留めるのをやめ、距離を取るようにバックステップで離れた。エビスのもとに駆け寄り、無事を確かめる。見たところ、大丈夫らしい。あれで気絶していればいいものを。

「取り敢えず……これでおあいこなのだわ」

「……べつに……かてた」

「ふん」

可愛くない女だ。

「モニカちゃん、大丈夫ですか？」

こつこつこのを可愛いというんだ。見習うがいい、無口女。

駆け寄ってきたユーリに微笑みかける。

「大丈夫よユーリ。もう少し下がって頂戴」

「うん……気を付けてくださいね？」

「もちろんなのだわ」

ユーリのエールがあれば億万倍だ。今のアタシは誰にも止められない。

「……きも」

「黙るのだわ」

煩い無口女を黙らせて、モニカは愛槍を構えた。

戦闘は気にはなるのだが、やることがある以上向こうは仲間任せざるえない。少しばかり歯痒いが、さっさと済ませれば問題ない。^{バベッター}人形士は遠隔操作で人形バベッターを操れるらしい。ある意味強みでもある。だが一方で弱点でもある。

どれくらい離れて動かせるのかは解らないが、フィールドの端から端までとはいくらなんでも無理だろう。なら周辺からぐるりと回るように搜索すれば人形士は見つかる。

並みの者なら時間が掛かるが、レイジは最速の男。なればこそ出来る芸当だ。

レイジは目もいい。さすがに人間テレスコープのクロア嬢には劣るだろうが。まあでも、人形士は女の子らしいし、可愛ければ多分クロア嬢にも負けない。

美の研究者であるレイジは美しいものに対してならば全てのパラメーターが一・五倍になる。速さ、視力、嗅覚は三倍だ。そしてレイジの嗅覚が人形士はこっちだと告げている。

可愛い匂いにする。

女の子の匂いだ。

うははははははははははははははははははははははははははははは。

楽しみだ。

可愛いは正義。

美しいは絶対。

もう神速のレイジは誰にも止められない。

「待っていやあーマイハニー」

まだ見ぬ人形士を追い求め、変態は駆ける。

F i r o

悪寒がした。

ファイロの直感が、背後からの攻撃を察知した。

横に飛んだ瞬間、又イグルミの強烈なパンチが地面を砕いた。つかかなんで又イグルミにあんなパンチ出来るんだよ。

舌打ちしたい気分だったが、そんな場合でもない。

「はああああっ……………！」

斧を振りかぶって飛び上がったのはモランだ。戦斧が煌めく。

「斧顎……………襲碎ッ……………！」

ファイロは慌てて回避した。モランの戦斧が地面を叩く。地面が陥没し、半径一メートルくらいに罅が入った。

あんなもの、剣で受けたら腕が壊れる。

「ファイロ、旗持ちを狙うぞ……………！」

ガナツシュが、駆け抜けた。

野郎、人を囷にしゃがつたな。平然としやがって。

「させない！」

モランが戦斧をぶん投げた。ぐるぐる回転しながら、ガナツシュの目の前に突き刺さる。「くっ」ガナツシュは飛びずさった。

でももうモランに武器はない。ファイロは攻めようと剣を握る手に力を籠めた。

「ファイロ！」

シェリカの声にファイロが反応した。なんだと聞き返す前に横に飛んだ。また地面が破壊される。

本当にこの又イグルミ邪魔。

早く探せよ変態レイジ。

「又イグルミ風情がファイロを攻撃するなんて百年早いわ！ 燃えてなくなりなさい！」

百年たつたらいいのかよ、とは言わずにいた。くだらないし。ただ、あの馬鹿、と思った。

よく考える。

「Aggni雅Ia焼Tο爆烈火」

又イグルミの肩辺りから爆発が起こった。爆烈火。いわゆる爆発。

エクスプロージョン

あの馬鹿。

やったわ、とか言ってる場合ではない。

フィーロは一目散に駆け出した。シエリカを横から抱き抱えるようにして走り抜ける。同時にシエリカのいた場所に又イグルミのパンチが降りた。

「なんで……」

「馬鹿、考える。ただの又イグルミならいざ知らず、戦闘に使う又イグルミなら耐久素材を使うに決まってるだろ」

こんな灼熱の大地にただの布と綿で出来た又イグルミなんか置いても燃えてなくなるだけだ。何らかの耐久素材を使っているのは考えれば解る。

「じゃあ火の魔術は……」

「あんまり効かないな」

厳密には効いているがなかなか壊れないだが。

魔力全開で火の魔術を連発したりすればいつかは燃えるだろう。耐久素材だけで完全に防御するわけでもないのだから。

まあ、そんなのは今はどうでもいい。取り敢えず、

「暑いから降りろ」

降りそうとしているのになかなか離れない馬鹿姉を引き剥がそうとする。

「今ので足挫いちゃったの」

「嘔吐け。いいから離れる。暑いし戦えない」

せつかく少しはやる気出しているのに水を差されると萎えるだろうが。大体足はぴったり地面についてるだろうが。何が挫いただ。

「劫爆 Feuer 炎罪流 aim 炎虎砲」

詠唱が聞こえたかと思えば真ん前から火の玉が飛んできた。慌ててシエリカごと回避する。

今のは炎虎砲か。真っ直ぐしか飛ばない下級炎弾だ。撃つたのは他の誰でもない、ロリエだ。

「うわわっ！ また避けちゃった！」

避けたら悪いか畜生暑い。

「いい加減離れるシエリカ。暑いし戦えないつつつてんだろ」

「うー」

「唸っても駄目だつて」

で、もう暑くて思考回路が麻痺していたのか、俺はすべからくま
ずい発言をしてしまった。あとで滅茶苦茶後悔することになるのだ
が、この時はさっさと離れてほしい一心だったから気が付かなかっ
た。後々思えばそれもどうかと思うが。

「……あーもーあとでいくらでも抱いてやるから今は離れる」

ピタリとシエリカが停止した。何かと思つたら、やけに上気し
た顔に上目遣いでこちらを見てきた。

「それ……ホント?」

「あーホントホント。だから離れて頼むから」

「……解つたわ」

シエリカがフィーロから離れた。気持ち悪いくらい素直である。
なんだ。一体。怖いんですけど。

「……まあ、いいか」

フィーロは剣を握り直した。汗で滑りそうだ。

「取り敢えず、又イグルミがなんとかなってくれないとな……」
変態レイジがもう少し早く見つけていればよかったのだが。

「魔術が全く効かないわけじゃないでしょう?」

「多分な」

「なら問題ないわ」

そう言つて触媒カタリストを取り出した。黒曜石オフシディアンと紅玉ルビーだ。黒曜石は雷の精
霊のものではなかったか。魔術は専門家が詳しいだろうし、何も言
うまい。

それよりもシエリカがいつになく集中しているのは何故なんだ。
逆に怖い。

「Amb絶乖xb劫號褥爆罪Coup De冥識楔Apt……」
詠唱が始まった。おそらく長い。ならばフィーロがするべきは一

つだ。

シエリカの詠唱を守る。

邪魔されたらまたやり直した。そう思えばもっと後方でやらなくてもいいものだが、今更言っても遅い。だったらつべこべ言わずに守るしかない。

又イグルミがこちらを補足した。まずあれを離れさせなければ。剣を構え、駆け出した。

倒す必要はない。距離を離せばそれで十分だ。又イグルミがパンチを繰り出してきた。フィーロはそれを飛び上がって避ける。勢いにのった跳躍で又イグルミの腹部まで到達した。飛び蹴りを食らわせる。

しかし、又イグルミは一メートルほど下がっただけで吹っ飛ばなかつた。

「どんだけ重たいんだ。中身は鉄か？ げっ……」

真横から又イグルミの腕が飛んできた。まだフィーロは空中にいた。回避不可能。見事にぶん殴られた。

「ぐぶっ……」

地面に叩きつけられ、転がった。クソ痛い。骨は大丈夫だ。が、全身擦り傷だらけだ。

又イグルミはシエリカに向かっていった。まずい。

「K u b i i 醜贖M O T 黠譎蟋悪w o 滅b o s u 必滅n o 炎念……」

「シエリカ！」

詠唱をやめさせないと。

いやだけどそれが何になる。意味がない。違っただろ。俺が助けないといけないんだ。

起き上がれ。走れ。奔れ。

「鳴F a i 雉煤輦h a l e 鳴動雷」

背後からの詠唱。ロリエの鳴動雷。轟き地を奔る雷。当たれば感電死だ。

だからなんだ。

「邪魔を……すんなッ……！」
剣で払った。

「うそ……！？」

フィーロは駆けた。今はロリエは後回しだ。ガナツシュ、お前が
適当にやっつけ。

ヌイグルミはもうシェリカの目前。右手を振り上げた。させるか。
俺が守る。

「うおおおおおおおおおおおつ……！！」

S h e r i c k a

信じていた。

フィーロなら必ず守ってくれると。それは約束でもあったから。
フィーロが覚えているかは解らないけど。

詠唱を続ける中、目の前に迫ったヌイグルミのパンチを、フィー
ロは間一髪止めた。少し、胸が熱くなった。さっきの「抱いてやる」
宣言で五割増しだ。体を張って守ってくれているフィーロのために
も、詠唱を続けた。

「戦滅災劉爆 G a r a n t 遥命裁 k u 神壊霸天撲滅紅烈……」
要素魔術にもピンからキリまである。簡単に上位、中位、下位な
んてあるけれど、その中にも順列がある。

この、今詠唱している要素魔術は上位の中でも強力なものだ。高
速詠唱を得意とするシェリカでも長く感じる。手に持つのは黒曜石
と紅い鋼玉。紅玉は火の精霊が好む触媒だ。黒曜石は単体なら雷の
精霊。

触媒は掛け合わせるといろんな効果がある。以前の混合魔術アマルガムもそ
うだ。だが、掛け合わせ方によって、触媒に対応する精霊が変わっ
たりする。

紅玉だけだと中位要素魔術が限界だが、黒曜石と合わせると一定

「I do strongly ordain to follow
w me under the pledge of my bl
ood.」

「な……!?!?」

あれは、まさか。

「フィーロ!」

「な、何?」

「ロリガキを止めて! 今あたし反動で魔術使えないから、フィー

ロ……お願い、早く!」

「ヤバイのか?」

「ヤバイわ……あれは……召喚魔術よ!」

第一章(23) 四回戦

Shericka

召喚魔術は比較的新しい魔術と言える。それでも数百年の歴史はあるのだが、それでも要素魔術よりは歴史は浅い。

名前の通り、異界より扉を経て異形エニグマを召喚する召喚魔術サモネイジ。魔力や触媒を使う点では要素魔術に酷似しているが、シエリカから言わせれば全く違う。

森羅万象そのものとも言える要素精霊を使役するには、そのための言葉が必要になる。要するにそれが呪文詠唱である。しかし召喚魔術にはその呪文は意味をなさない。違う言語が必要になるのだ。

この世界と異界との架け橋となる精霊 時精霊と呼ばれているそれらは、要素精霊に使う言語を聞き入れない。その時点で精霊と呼んでいいのかすら怪しい。が、魔力を食らい等価交換として力を与えるその体系は精霊とも言える。つまるところ、詳しいことは未だに不明なのだ。

時精霊に必要な言語は、二十六文字を組み合わせた単語を並べた詩文みたいなものだ。黄昏の古き都セイルエンダリアより発見された碑文に印された文字と同じことから古代神聖語アルバークと呼ばれた。

先ほど聞こえたロリガキの呪文。あれがそうだ。
そしてそれは今も続いている。

「Thou art the solid knight」

召喚魔術の呪文は固体によって違う。似た文があっても、別物なのだ。シエリカには何となくそれが聞き覚えあるように感じた。一体、何だったか。

「And thou art the sword of pure justice」

「召喚魔術って……あれがか？」

「そつよ！ 今ならまだ間に合うわ！」

「わ、解った」

ファイロが剣を構えて駆け出した。召喚魔術の詠唱は長い。上位要素魔術と大体同じくらいだ。ロリガキの実力なら滅茶苦茶危険な異形を召喚するとは思えないが、止めておかないと厄介だ。

上位要素魔術を使用した反動で暫く魔術が使えない自分が口惜しい。回復まであと早くて三分。とてつもなく、永い。

「Therefore thou shalt not be tainted with vice」

ロリガキにファイロが迫る。

「させない！」

「ぐっ……」

「りゃああああっ……！」

それを阻止すべく、モランがガナツシュを振り払い、ファイロに向かって飛び上がった。

「岩斬……爪破ッ！」

「ぐおっ……！？」

斧が地面に叩きつけられた。破碎し、衝撃波が地面を砕きながらファイロに迫った。それを寸前で回避する。

「なんっ……」

「Thy lily armor is symbolic of innocent」

着地したファイロが再びロリガキに向かう。

「いかせません！」

しかし、真横から来襲したのは棒を持った女。「ぬおっ……！？」
真っ直ぐ顔面を狙った突きを、ファイロは首を曲げて避ける。そのまま飛び退いた。

「危な……まさかモニカたち……は大丈夫か」

「ベアトリーチェさんが相手しています！」

「解説どーも」

棒を持った女が横薙ぎにそれを振るう。フィーロは剣でそれを受け止めた。

「ガナツシュ、頼む！」

「解った！」

フィーロは受け止めざまにシスコンにロリガキを止めるように頼んだ。命令でいいと思う。シスコンがロリガキに急行した。

シェリカはまだ魔術は使えない。あと少し。早く。早く。気持ちばかりが急いだ。

「And thy noble spirit is why thou art the guardian。」

「おおおおおおおおおおおおおおおっ……！」

シスコンが太刀を振りかざす。

「行かせないって……言ってるでしょっ……！」

太刀と戦斧が激突した。甲高い金属音が鳴り響く。

「素直に……通せッ！」

力任せにシスコンが太刀を押し出し振り切った。モランはその勢いを使って跳躍。一気に戦斧を振り上げて、叩きつけた。

「やああっ……！」

「ちいっ……」

半径一メートルを陥没させる一撃だ。さすがのシスコンも退避した。いや、別にお前死んでもいいからとにかく突っ込め。

「Hence, cut thyself off from the Thanatos。」

「やああああああっ！」

「のわっ!? ちょ……危なっ……うおっっ！」

女が棒を連打する。フィーロが慌てながら剣で弾いた。正確に弾いているあたり、慌てているように見えるが冷静だ。

「The glance of indomitable daughter will……」

「あークソ！」

ファイロは女に向かって剣を縦に振り下ろした。止められる。しかしそれを予想していたかのように、ファイロは女の横つ腹を蹴り飛ばした。

「あぐつ……！」そのまま横に転がる。

「Do keenly slash an unlimited darkness。」

「……ごめん」

ポツリと何かを呟き、咳き込む女をファイロは一瞥した。

黒光りする剣を握り直し、ファイロは地を蹴った。

「Here I invoke。」

「……」

ロリガキの足元に文様が表れた。それは大小異なる幾つかの円が重なり合った、不思議な形をしていた。円の中には文字やら模様やらが描かれている。

「これが扉だ。」

ミラーシユホール

魔方陣と呼ばれる。ここから異形の思念を異界より喚起し、この世界に介在する^{キテル}霊素と呼ばれる物質で身体を構築し、顕現させる。

それが召喚魔術だ。

「Now actualize... Luxeria！」

「うわっ……！？」

「ファイロ！」

激しい閃光とともにファイロが弾き飛ばされた。二メートルほどごろごろ転がった。シェリカは慌ててファイロのもとに駆け寄った。

「大丈夫……？」

「ああ……」

起き上がり、頭を掻く。いや、押さえている。打ったのだろうか。心配で見つめていると、ファイロがシェリカの視線に気付いた。

「大丈夫だよ」

にこりと笑った。可愛い……じゃなくて本当だろうか。もう一度ファイロを見たが、彼は前　　閃光の発せられた場所を見据えている

た。シエリカもその視線を追う。

光は一瞬のもので、すぐに晴れた。そしてそこにはロリガキともう一つの人影があった。

長身のそいつは、身を白銀に輝く甲冑で身を包み、同じく白銀のラウンドシールド装飾華美な円盾とこれまた装飾華美な白銀の片手剣を手に持っていた。

そつ。

どこからどう見ても騎士だった。

F i r o

で、あれはなんだ。

見たところ人っぽいが。

身長は一メートルと九十センチくらい。フィーロより頭一つ分以上デカイ。

装飾華美じゃないかと思うくらい煌びやかな武具に身を包んだそいつは、いきなりこちらに背を向けたかと思えば、ロリエに向かつて片膝をついた。

まるで騎士だ。いや、騎士なんだろう。召喚魔術で召喚された騎士。異様な雰囲気身を纏っている。

「ルクセリア、わたしはなに？」

「You're my lord。」

「わたしをお願い聞いてくれる？」

「Yes, my lord。」

ロリエの言葉に白い騎士　ルクセリアは跪き、答える。

「じゃあ、お願いね？」

「Yes, my lord。」

ルクセリアが立ち上がった。こちらを見る。兜の奥は真っ暗闇だ。がやたら視線を感じる。つか視線というか完全に殺意だ。

バリバリ殺る気だよあの白騎士。

「騎士系の……」傍にいたシェリカが口を開いた。「騎士系の喚起は難しくないわ……比較的忠実だから。……だから下位なんだけど、それでも強いわ」

「そう。……それより、もう魔術は使えるか？」

「上位はきついけど、下位ならいけるわ。でも、白騎士は魔術効かないわよ」

「マジで？」

リフレクトソーサリー

「反射魔術特性があるの」

「何それ」

「要は魔術が跳ね返ってくるってこと。だから中位要素魔術までなら弾かれる。その代わり打撃には弱いわ。頑張って、フィーロ」
嫌だ。

とは言える状態でもない。

しぶしぶ頷いた。白騎士を見つめる。未だ不動ではあるが、いつでも動ける態勢だ。

「ほーっほっほっほっ！ どうですシェリカさん！ わたくしたちの実力は！」

後ろの方で岩場に仁王立ちして高笑いするベアトリーチェがいた。本当なんなんだあの人は。

「なんであたしに言うのよ……」

「それはわたくしと貴方がライバルだからですわ！」

「う……ウザイ……」

少しばかり同感だ。

「さあ、反撃で」

「いちいち煩いのだわですわ女」

「ひゃっ……！？」

三叉槍で一気に貫かんとするその突きを、ベアトリーチェは回避した。ちっ、というあからさまなモニカの舌打ちが聞こえた。

「ひ、卑怯ですわッ！ 最後まで待てないのですか！？」

「戦争に待ったはないのだわ」

「慮外者めえ……」

「結構な言われようなのだわ。まあ何にせよ、アンタの相手はアタシなのよ」

「くっ……解りましたわ！ 相手して差し上げます！ シェリ

カさん！」

「何よ……」

もう既にげんがりしている。ちょっと可哀想に思えてきた。

「次は貴方の番ですわよ！ 首を洗って待っていなさい！」

「あ……そ……」

心底どうでもよさそうだ。

ベアトリーチェはモニカ目がけて駆けていった。

「一体、何なのよ……」

それについては俺にはどうとも言えない。

残り時間はあと二十分。

人形の消失で人形士が一体どうなったか皆目見当もつかない。変態がやれるとは思えないが、ここにいない以上どうとも言えない。

というか、それどころじゃない。変態より先に目の前のこいつだ。真横からの斬撃を身体を引いて避ける。すぐに剣を振った。盾に弾かれた。続けざまに突きを放ってきた。身体を擦ってやり過ぎ、バックステップで距離をとった。

何が打撃に弱い、だ。当たんなかったら意味がねーよ。

白騎士ルクセリア。

普通に強い。

「フイーロ、大丈夫か！」

ガナツシュが近付いてきた。モニカは健在だ。丁度ロリエの少し前で戦斧を構えている。

「ん。大丈夫に見えるんならお前の目は節穴だ」

召喚魔術については人並み程度には知っている。知識としてある

だけで、見るのは初めてだ。シエリカはフィーロの目の前で要素魔術以外の魔術を使ったことがないのだ。

たまにそれとなく聞いたりするが、大体お茶を濁す。要するに出来ないのだ。

要素魔術のみしか使えないシエリカ。凄いのかそうでないのか。単に努力不足か。

「旗^{フラッグ}最優先で行くぞ。以外にタフだ、あいつら」

「もともとそういうルールだから」

旗無視して相手を戦闘不能にしている時点でおかしいのだ。別にルールは間違っちゃいないが。ただなんとなく人として間違っている気がする。

「旗はボクが獲る。お前は白騎士を頼む」

「なんで面倒臭いヤツばっか俺に押し付けんだよ」

フィーロはぶつくさ文句を言うが、無視してガナツシユは前に出た。かと思いきや、顔をこちらに向けた。そしてニヤリとキザつたらしく笑った。

「信頼してるのさ。行くぞ……!!」

前に向き直り、駆け出した。

モニカがそれに対して走りだす。すぐに両者が激突した。

「ルクセリア、ゴー！」

「Yes, my lord.」

ロリエの号令で白騎士がこちらに向かってきた。

「たく……何が信頼してるだよ」

振り下ろされた刃を受け流して斬る。白騎士は飛びずさったが、切っ先が胸部を捉えた。薄く筋が入る。確かに、鎧自体の防御力は弱いらしい。

白騎士が着地と同時に突きを放つ。鎧が傷付いた焦りなどはないのか。まあ、感情なさそうな奴だしな。フィーロは身体を擦った。右脇腹のあたりをすれすれで剣が横切る。フィーロは左手に剣を持ちかえ、横薙ぎに振るった。狙うは奴の顔面。

「獲った……！」

剣が兜に直撃して弾け飛んだ。空中を舞い、地面に転がる。「な……」そしてフィーロは啞然とした。

白騎士に首はなかった。

正しくは、空洞だった。鎧の中に人などは入っていないかったのだ。ふと、シエリカの言葉を思い出す。騎士^{デュラハン}。だからだ。旧き記憶^{ふる}のみで動く亡念の首なし騎士^{デュラハン}。その眷属、白騎士ルクセリア。不覚にもほどがある。

動きの止まったフィーロに白騎士は盾を突き出し突貫した。

「ぐう……！」

直撃し、地面を転がる。息が詰まった。

「フィ、フィーロ……！」

シエリカの声がして、なんとか立ち上がると、目の前に既に白騎士が迫っていた。繰り出される剣撃をギリギリで防ぐ。まずい。押し切られる。

すくい上げるような逆袈裟斬りの一閃がついにフィーロの剣を弾き飛ばした。汗で握りが甘かったのも一つだ。とにかく、剣を飛ばされたフィーロはそのまま突き飛ばされて、尻餅をついた。

そのまま一旦腰まで剣を引いた白騎士はフィーロ目がけてすくさま突いた。遮るものがなくなった白騎士の剣はフィーロの腹のど真ん中を貫こうとして、

途中で停止した。

「……………え？」

何が起こったのか一瞬理解出来なかった。

恐る恐る白騎士を見上げると、カタカタと震えていた。鎧の隙間で鎧同士が擦れて鳴いている音だ。何事かと思った瞬間、いきなり破裂した。

いや、破裂というより分解か。籠手が白い小さな粒となって消えていった。剣と盾が持つ者を失い、地に落ちて同じように粒になって消えた。だんだん鎧が白い小さな粒となって、最後に脛当てが消

え去って白騎士は完全に消失した。

「何が……」

起こったのか。そこまで言わずとも、フィーロはなんとなくだが理解した。

ロリエの足元に広がっていた魔方陣のようなものに、蒼く波打つ太刀が突き立てられていた。紛れもない、ユーカーリスティア聖体の秘蹟。

「わ……わわ……？」

完全にテンパっているロリエに、黒髪の魔剣士は口元を歪ませて言った。

「チェックメイトだ」

十

フィールドから転送されたフィーロたちは、運動場の扉前ゲートにいた。フィーロは呆然としてみると、地面に座り込んでいる自分のもとに歩み寄ってきたガナツシュに気付く。手を出してきたので掴まれた。引っ張り起こされる。

「どうにか勝ったな」

「うん。でもなんで勝てたんだ……？」

「……わたしのおかげ」

「うお！？ 何時の間に……」

気付けばクロアがフィーロの隣にいた。神出鬼没な娘である。

「まあ、クロアのお陰だな」

「クロアの？」

「ああ。モランを狙撃してくれたから、ボクが合間を抜けれた。相変わらずいい腕だ」

「そうか」

「……ほめて？」

そう上目遣い（反則）で言ってきたので、フィーロはクロアの頭を撫でた。別に減るものじゃないからこれくらいなら構わない。

しかしクロアがガナツシユの援護をするなんて珍しいな。気紛れで動く奴だから今回も気紛れだろう。月に何回あるか解らないが。フィーロが苦笑混じりにクロアを見ると、視線に気付いたクロアは首をかしげていた。こうしてみると可愛い女の子である。

もう一つ気になることがあったフィーロはガナツシユに視線を移した。

「じゃあ白騎士が消えたのは……」

「異形は魔方阵の通して操るものだからな。あれを壊すか、魔術士を殺すかすれば異形は強制退去出来る。例外はあるらしいが」

「そっか」

「フィーロ！」

ガナツシユの解説に頷いていると、怒気を孕んだ姉の声が響いた。何故に怒っている？

「お疲れシエリカ」

取り敢えず無難な返事してみた。だが寄った眉間の皺が戻る気配はない。

「ど……どうした？」

「……まで……」

「え？」

「いつまで頭撫でてんのよ！ 馬鹿フィーロ！」

「ぐえっ……！？」

いい感じにシエリカのアップercutがフィーロの顎を捉えた。

よろけて二歩ほど後退する。

「な、何するんだよ！」

「煩い！ この浮気者っ！」

「ハア！？」

何言っただコイツいい加減にしろよマジで。

「約束！ 忘れたの！」

「約束う？」なんの約束だよ。

「したじゃない！」

「何を」

「だ……」いきなり声が小さくなる。

「だ？」

「だ……抱いてくれるって……」

「……」

空気が、凍った。

もう比喩とかそんなんじゃないで、カチカチに凍った。ガナツシユの表情が完全に啞然としたまま固まっている。クロアでさえ数少ない感情を顕にしている。目を見開いて停止していた。

空気より時が止まった。

周りの喧騒さえ耳に届かない。この場だけ沈黙の帳がぼとんと降りていた。

ややあつて口を開いたのはガナツシユであつた。こちらを啞然とした表情のままで見つめてきた。

「……本気が……ファイロ、お前……」

「いや、違う！ 言っていない！ 断じて！ 言っていない！」

「言ったわ。さっきのフィールドで、『あとでいくらでも抱いてやる』って」

シェリカが腕を組んでふんぞり返りながら言った。なんでそんな偉そうなんだ。いや、つーか、

「ハア！？ いや……ハア！？ 言っつてねーよ！ いや言っつたとしても俺は認めない！ 絶対に認めない！」

「ホント？ って聞いたらホントって答えたじゃない！ 嘘吐く気！？」

「嘘以前の問題だろーが！」

「じゃあ何よ、この女の頭は撫でてもあたしは抱けないっていうの！」

「比べるもんが違つだろおお！」

「とにかく！ 約束は約束なの！」

「してねーよ！」

「……あとで待つてるから」

「聞けエエエエエエエエエエエエエエ！」

嵐のようにシエリ力は去っていった。頬が桜のようにほんのり薄く赤みがさしていたのは気のせいだと思いたい。つかもつ夢だろ。夢だ夢。誰かそう言ってくれ。

「やっちまつたな……」

「……うるせー」

もつ見えなくなった馬鹿すぎる姉を呪った。茫然自失になっていると、クロアが袖を引っ張ってきた。

「……何だ？」

「……心配ない……先にわたしと寝てしまえば無問題^{もしまんたい}」

「いや、ありまくりだろ」

わけの解らないことを言うクロアの額に軽くデコピンする。「…

……あう」という声が少し可愛いと思ってしまった。

つかそれよりも、ともかくにも今後の打開策を早急に導きださねば。人として終わる。若干十五歳にして人生泥沼だ。

「だークソ……いつそんなこと言った……？」

記憶を掘り返し、確かにそんなことを言ったことを思い出し、フイーロは跪いて絶望した。

俺の馬鹿野郎。

フイーロはユーリが慌てて止めに入るまで地面に頭を打ち付けていた。あわよくば記憶が吹っ飛んでくれることを祈ったが、無理だった。額が腫れただけだ。

第一章(24) 愛に火が点いた

Ganache

ともあれ、ブロックの試合は全勝で終わった。中には納得いかない終わり方をしたもの(特に三回戦とか三回戦とか三回戦とか)もあったが、勝ちも勝ち。素直に喜ぶとしよう。

戦績は一位だが、総合的な評価で順位は変わる。要するに審査員の気分次第で二位にも三位にもなる。なんともアバウト極まりないルールだ。

何分イレギュラーが多かったから最後までどうとは言いきれない。大丈夫だとは思っただが。

大丈夫といえはフィードだ。失言したらしく、何だかヤバイことになっている。抱くとか抱かないとか。ま、好きにしろと思うが。

「で、実際大丈夫か、お前」

「……現状を打破する策を考えている。……ああそうだ。旅に出よう」

「帰ってこい」

しゃがみこんで虚ろな目で恐ろしいことを吐くフィード。本当に大丈夫か。

とはいえ何だかんだで乗り切る奴だから放っておいていいだろう。あれだけ派手に言い寄られても他人の好意に気付かないような馬鹿だ。過ちが起きているなら当の昔に起きている。心配するだけ無駄だ。

ガナツシュはフィードにエールだけ送ってその場を離れた。

取り敢えず、今日は夕方の抽選会まですることもない。大体昼飯時だったので、食堂ヘルペクに行くことにした。

フィードを誘おうか思案したが、あの調子だしやめておいた。

ベルベットに入ると、疎^{まば}らながら人がいた。お昼の休憩で混み出す前にいち早く行動を起こした懸命な生徒たちだろう。

丁度その中に、ベアトリーチェらアンセムスターの姿があった。向こうもこちらに気付いたので、無視するわけにもいかず、右手を拳げながら近寄る。

「やあ、お昼休み?」

「ええ、次も試合がありますから簡単な食事だけですけど」

「食べ過ぎると動けないしな」

ガナツシユは微笑した。

「ガナツシユ君もお昼?」

モランがそう尋ねてくる。

「ああ、そうだが」

「じゃあ、みんなで食べよう。ね? リーちゃんもいいでしょう?」

「へ? あ、も、勿論ですわ。あの……どうでしょう、ガナツシユ様……?」

おずおずといった感じでベアトリーチェが上目遣いで見てきた。

普段気丈な彼女にしては珍しい表情ではあった。

「それは構わないけど……それより」ガナツシユは先ほどから気になっっていることを聞いた。「なんでその娘泣いてるんだい?」

ベアトリーチェとモランの後ろで、女の子が泣いていたのだ。ロリエともう一人の女の子に慰められている。これで気にならないほうがおかしい。

「なんか、変態さんに襲われたんだって」

「変態……?」

ロリエの言葉に眉を顰める。女の子に視線を戻す。手には人形。ウサギのヌイグルミだ。ヌイグルミ……ああ、この娘が人形士^{バベッター}か。名前はユミイだったか。なら慰めているほうがエミリか。

すぐにぴんときた。

変態。ああ、アイツか。あの変態か。姿を現さないとすれば何を
してやがるんだ。

ユミイはウサギのヌイグルミを抱き締め「うう……汚されちゃったよ……わたし……わたしどうしたらいいんだろう……マルボロ二号……」と泣き泣き呟いていた。本当に、一体何をやった変態^{レイジ}。「さつきからこの調子なんですのよ……ほらユミイ、気をしっかり持ちなさい。泣いていては幸せは逃げていきますわ」

ベアトリーチェが背中を擦りながら叱咤する。だが優しい口調だ。高飛車なように見えるが（というかそうとしか見えない）、克蘭を纏めるだけあって、やはりそれなりの器を持った女性のようなだ。

自分にはそれだけの器があるかどうか。自信はない。結局、首席だの何だのいつても、仲間の助けがなければ何も出来ないのだからこれではいつまで経ってもあの人には届かない。

いや、今はそんなことを考えるのはよそう。せつかく勝ったのに自ら水を差すのも不粋だ。

ガナツシユは嫌な考えを振り払うように、ユミイに近付いた。背が自分より低いので、少し視線を落とす。肩に手を置くと、ユミイが顔を上げた。目が合う。ガナツシユはにこりと微笑んだ。

「変態はボクが抹殺しておこう。だから泣き止むんだ。次も試合があるんだろう？」

「は、はひっ」

ユミイが湯気が出るんじゃないかと思うくらい顔を赤くし、呂律の回っていない口調で答えて倒れた。慌ててロリエとエミリが支える。

「……？」

一体、どうしたというのだろうか。

困惑したまま振り向くと、ベアトリーチェが手を組んで目をキラキラさせていた。

「ガナツシユ様……なんてうらやま もといお優しい……」

「ガナツシユ君ってなかなか罪作りだよ。カタハネの男の子はみんなそうなの？」

モランの溜め息混じりの言葉に頬を掻く。フィーロはともかく自

分までそう見られるのは心外である。自分が愛するのはイリアただ一人なのだから。

「というか早く食べようよ。おなか空いた〜」

ロリエが業を煮やしたらしくぐずり始めた。モランがそうだね、と答え、一行は料理を取りにいった。

「ごちそうさま」

ガナツシユが手を合わせた。周りは皆まだ食べている。もう少しゆっくり食べてもよかったかもしれない。

「ガナツシユ様、お水はいかがですか？」

「ああ、ありがとう。いただくよ」

ベアトリーチェがお冷やの入ったボトルを手に尋ねてきた。コップを差し出し、注いでもらう。

「どうぞ」

「ありがとう」

それを受け取り、一口だけ飲んだ。それからテーブルに置く。

「……それで、結果っていつ出るんだった？」

「今日の五時くらいじゃないかな。っていうかガナツシユ君は終わってるけどわたしたちまだ終わってないからね？」

モランが軽く窘める^{たしな}ように言った。

「そうだったな。頑張ってくれ」

「上から目線〜」

「そんなつもりはないけど……」

ロリエの言葉に苦笑する。まあ、若干そんな気もあつたかもしれない。ブロック戦績一位なら次のトーナメントに進めるのは通例だと聞いているせいだろう。別に彼女らを侮っているわけではない。

「カタハネとの試合には負けましたが……まだわたくしたちは諦めませんわ」

ベアトリーチェの言葉にアンセムスターのみんなが頷いた。いい克蘭だ。団結力がある。カタハネにはあまりない力だ。フォロ-

はあっても団結はないカタハネ。苦戦した原因はそこにあるような気がする。

まあ、あの曲者ばかりのカタハネを纏めるなど土台無理な話なのかもしれないが。

ガナツシユはちょっとだけ眩しく見えるアンセムスターを見て薄く微笑んだ。

「そうか……ボクは敵だから応援はしない。でも、健闘は祈るよ」「勿論ですわ」

ベアトリーチエは不敵に笑って手を差し出した。ガナツシユはそれを握り、握手した。

小さく、柔らかい女の子の手。この手でクランを支えている。ボクはどうだ？

少し、悔しさが胸を締め付けた。

S h e r i c k a

現在、シエリカは男子寮のフイーロの部屋の前にいた。

夏には似合わない分厚いローブを目深に被っている。因みに中は秘密兵器だ。言うまでもない。念願の夢が今日にも叶うのだ。ドキドキワクワク。脳内は既に桃色だ。リリカル全開だ。

フイーロが寮に戻ったのは確認済みだ。待つてるとは言ったが、フイーロは照れて来ないかもしれない。ならばこちらから行くまで。そういうわけで部屋の前にいる。

いわゆる夜這いならぬ昼這いだ。

「フフ……」

笑いが漏れる。

さて、そろそろ入ろう。限界だから。

シエリカは扉に手を掛けた。しかし鍵が掛かっている。どんだけ照れ屋なんだろうかフイーロは。ああ、でもそこが可愛い。だから

大好き。

「Agni雅Ia焼T○爆烈火」

瞬時に集中と交信を行い火の精霊の力でドアノブを爆破。ドアの意味をなさなくなった板を押し開け、中に入る。薄暗い。カーテンが締まっている。

これは案外フィードも万更ではないのでは？

取り敢えず、戸を閉める。開くとこまるので近くにあつた椅子で止めておいた。

目の前のベッドを見つめる。盛り上がっている。あれだ。

シエリカはローブを脱いだ。

中は薄いピンクのネグリジェだった。なんかどつかの男子が「ネグリジェ最高」と呟いていたのを聞いてチヨイスした。考えてみればそれはあの男子の好みであつてフィードの好みとは限らない。だがまあ、これはこれで煽情的に違いない。

靴を脱いだ。裸足で床に立つ。少しひやりとした。

ゆっくり、ゆっくりと近づく。

ひた、ひたと小さな足音が耳に届いた。自分の息遣いが聞こえる。若干興奮気味らしい。少し落ち着かせようと深呼吸した。

よし、落ち着いた。

拳をぎゅっと握り締めてから緩める。一步、また一步とベッドに近付き、目の前にまで到達した。

心臓が早鐘のように鳴っている。顔が熱い。なんだか暑いのに寒かった。喉がカラカラだ。生唾を呑み込む。

気付けば体が震えていた。怖いのか、嬉しいのか、それともまた別の感情か。解らない。だけど体が硬直した。

目の前に、フィードがいる。

愛する人が。

大好きな人が。

最近やたらと増えてきた悪い虫ども。巨乳に無口にあの生徒会長とかいう生命体。渡すものか。フィードはあたしのものだ。身も心

もすべてあたしのものなのだ。

意を決し、踏み出す。

ベッドの端に右膝を掛ける。ギシ、と沈む。左膝め寄せた。少しずつ進み、フィーロの頭のあるところまで来た。

毛布を被っている。頭まで。夏だというのに一体なんで。……いや恥ずかしいのか。なんて可愛いんだろう。

「フィーロ……」

愛しい名を呟く。返事はない。まさか本当に寝てる？

怪訝に思ったシエリカはゆっくり毛布を剥ぎ取った。

そして驚愕した。

「な……ななな……」

そこにいたのはフィーロではなく、

「むにゃ……あれ……シエリカさ……ん……？」

「なな……なん……なんで……」

「ぬ……ぬうわあああああ……！？ な、ななななんでそんな格好……い、いや……あの……お、お綺麗ですッ！」

犬みたいな耳をびしつと立てながら、そいつは目を丸くしてそんなことを吐かした。

「いいいいやああああああああああああああ……！」

F i r o

ドオオオオン……。

遠くの方から爆発音が聞こえてきた。おそらく男子寮。

「大爆発だねー」

「そですね……」

こうなるんじゃないかなあ、とは思っていたが、本当にこうなるとは。意味不明で破天荒なわりに案外解りやすい行動パターンをとる馬鹿姉の底の浅さに溜め息が漏れる。

すると視線を感じたので、そちらに目を移すと、リリーナが頬を膨らませていた。どうやら怒っているらしい。なんで？

「わたしといるのに溜め息吐くなんてひどいよっ」

「あ、ああ………すみません」

溜め息に立腹していたらしい。別にリリーナに対しての溜め息ではなかったのだが。

フィーロは中庭にいた。丁度、昨日リリーナと昼食を取った場所と同じだ。やはり穴場らしく、人は通らない。まあ、うっかり誰か通ろうものならフィーロの明日の命はない。

失言で窮地に立っていたフィーロはガナツシュにも見放され、孤立無援の状態で独り打開策を考えていた。何もこんな阿呆臭いこと律儀に考える必要もないのだが、シェリカは有言実行がモットーの人間。放っておくと後々怖い。何か打開策を見つけてうやむやにしないでほならない。

しかし悲しいかな、フィーロは何も思い付かなかった。そこに現れたのが救世主リリーナ生徒会長だった。

今日も昼食を一緒にするというのを条件に案を貰った。

取り敢えず、リリーナに言われた通りにルツを言い包めて（具体的には首筋を手刀で殴って眠らせた）フィーロの部屋に押し込んだ。毛布被らせて窓から脱出した。あとはなるようになるらしい。アバウト過ぎる。

いまいち不安だが頼れるものもないので藁にも縋る思いで従った。ともあれ爆発があったということは、ルツを発見し発狂して爆発させたのだろう。多分ルツはもう死んだ。せめて最期に愛しのシェリカが見れたんだからいいだろう。安らかに眠れ。

フィーロはパンに噛り付いた。また視線を感じる。今度はなんだと思ひ、リリーナを見ると、

「あーん」

「………」

またか。

「あ〜ん」

「……………あーん」

折れた。

フィーロは自分の芯の脆さに嘆きなくなった。

口に放り込まれた卵焼きを頬張り、飲み込む。甘さ控えめでフィーロの好みの味である。別に自分のために作ったわけではないだろうが、それには感謝だ。甘いのは苦手だし。

「美味しいです」

素直な感想を述べると、にぱーっと太陽のように笑った。なんとなくか裏を感じさせない笑顔だ。俺には出来そうにない。

「でも、よかつたんですか？」

「何が？」きよとんとした顔で問い返してきた。

「間接キスですよ？」

「……………」

リリーナはその表情のまま硬直した。フィーロは不安げに見守ると、いかなり真っ赤になった。ボン、という音が聞こえてきそうなくらいの変わりようだ。耳まで赤い。

つか、気付いてなかったのか。

孤児院じゃ日常茶飯事だったし、今でもたまにあるからフィーロとしてはあまり抵抗はない。が、リリーナはそうでもなかったらしい。昨日もだったのに、気付かないというのもおかしい話である。

まあ、わりと自然な流れ（？）だったから仕方がないっちゃ仕方がないかもしれない。

「すみません。デリカシーなかったですね」

俯いてしまったリリーナに罪悪感を感じ、フィーロは頭を下げた。途端、リリーナが物凄い勢いで顔を上げた。

「だ、大丈夫だよ。その……………わたしとしては嬉しかったしっ」

「はい？」

「うわわっ、な……………なんでもないよっ」

また顔を赤くして、今度は横にぶんぶん振った。フィーロはよく

解らず惚けていたが、そんなリリーナが面白かったので、笑みが漏れた。

リリーナが首を振るのを止めた。また俯く。まだ頬が赤みを差している。

「その……ごめんね？」

「何がです？」

「え、と……その……」

口籠もってしまう。だが何となくフィーロはリリーナの言いたいことは解った気がした。薄ら微笑みながらリリーナを見据える。

「俺は気にしませんよ」

「え？」

「リリーナさんくらい美人だったら俺としては大歓迎ですから。役得ですし」

まあ、それこそ誰かに見られたら俺の居場所はもう土の下だが。

あれだ。時と場合によるという意味だ。

「……そっか……じゃあ『あーん』は嫌じゃない……？」

「構いませんよ」

いや、構うけれど。その上目遣いはいい加減反則だろう。なんだか押し流されている気がしないでもない。いいんだろうか、これで。

フィーロの不安とは裏腹に、リリーナはまたにこやかに笑った。

本当に向日葵みたいだ。これを見たら、細かいことはどうでもよくなる。気付けばフィーロも笑っていた。

「じゃ、じゃあじゃあ！」

手をポン、と打ち合わせたリリーナ。突然のことで、フィーロはきよとんとした。リリーナはまた箸を手に持ち、卵焼きを摘んだ。そして突き出す。

「はいっ！ あーん」

「……」

「あーん」

「……」

「あゝん」
「……いやあの」
「あゝん」
「……あゝん」
もうなんか情けなすぎて泣きたくなってきた。

G a n a c h e

「……で、なんだこれは」
「お前こそ引き摺っているのはなんだ」
「ゴミだ」
「そうか」
「再度聞くがこれはなんだ」
「暴風雨の影響だろ」
「暴風雨で爆撃痕がつくのか。雨なのに焦げるのか」
「さあ」
「さあじゃない。どうするんだ、これは」
自分たちの部屋の前に立つガナツシュとフィーロ。目の前はもはや自分たちの部屋ではなく見たこともない焼け野原だった。
簡易キッチンが火を吹いてもこうはならない。十中八九、犯人はシエリカ暴風雨だ。
「というか現行犯だ。」
焼け野原の真ん中に魔王よろしく無傷で立っている。何故、ネグリジエ姿なのかは知らないが。
シエリカがこちらを見た。目が血走っている。般若が見えた。こちらにズンズンと近寄ってくる。
「フィーロ、これどうということよー！」
それをお前が言うか。
「いや、俺が逆に聞きたいよ」

同感である。

「約束したじゃないっ！」

「あー……まあ、なんだ。俺は約束は守るが嘘は吐くから」

それは要は約束を守るといふ言葉も嘘といふことか。どんな言葉遊びだ。

「何よそれ！ あたし待ってたのにつ！」

「じゃあなんでここにいるんさ」

「待ちきれなかったのっ！」

「なんじゃそりゃ……」

「それより、あの転がってるのなんだ？」

ガナツシユは焼け野原の片隅に転がっている何かを見つけて指差した。ファイロはそれを見て、妙に慈愛に満ちた表情で、

「ああ、ルツじゃね？」

これでガナツシユは合点がいった。コイツの仕業か。確信犯め。

「幸い生きているからいいとして、一体どうしてくれる。部屋が半壊、ボクらの私物も半分焼失したぞ」

「ドンマイ」

「なんだその言い種は……ってちょっと待てッ！ お前自分の荷物だけ避難させたなッ！？」

「実はドンマイというのは間違いでネバーマインドと言っらしい。

略してネバマイ」

「知るかッ！ ここにはまだ書き終えていないイリアへの手紙もあったんだぞ！ どうしてくれるッ！」

「愛に火が点いた」

「誰が上手いこと言えと言った！」

この馬鹿姉弟ッ……！！

沸々と込み上げる怒り。眉間が狛犬の如く皺を寄せている。青筋が浮き出ているかもしれない。ガナツシユはこの怒りをゴミを蹴飛ばすことでぶつけた。「げびよ」何か聞こえた気がするが知るか。ゴミは鳴かない。

シェリカがフィーロとガナツシユのやり取りに業を煮やし、ガナツシユを押し出してずい、と進み出た。キツ、とガナツシユを睨み付ける。

「アンタの手紙なんかどうでもいいわっ！ あたしはどうしたらいいのよ！」

「いや、部屋戻れば？」

そりゃそつだ。もう掃除しろとか言わないからおとなしく部屋に帰れ。

「それじゃあ問屋が卸さないわッ」

「いやいや……」

頼むからややこしくするな。

しかしこのまま押し問答を続けても仕方ない。こっちとしてもさつさと休みたい。ガナツシユはフィーロを引き寄せ、耳打ちした。

「……取り敢えずボクは焼け野原をなんとかする。フィーロ、お前はその馬鹿をなんとかしろ」

「えー……」

「お前の不始末だろう」

「……解ってるよ」

フィーロがしぶしぶといった表情で頷いた。それを確認し、ガナツシユはフィーロを解放した。

焼け野原の入り口まで進み、シェリカを一瞥してから、もう一度目線だけフィーロに向ける。

「じゃ、頼むぞ」

「ハイハイ」

やる気なさ気なフィーロに一抹の不安を覚えながらも、やれやれと肩を竦めてガナツシユは焼け野原に足を踏み入れた。

まずは清掃だ。

焦げ臭い空間をなんとかせねば。ゴミを蹴る。「あだっ」「手伝え、ゴミ」「……うい」のそりと起き上がったゴミとともに、ガナツシユは清掃を開始した。

「……なんで誰もオレを助けしてくれないんだ……？」
隅の方で、そんな声が聞こえてきたが、ガナツシユはシャットダウンした。

F i r o

ガナツシユはゴミとともに部屋に入っていた。目の前にはシェリカ。明らかに怒っている。ただその怒りは理不尽ではないかと思う。が、フィーロは何も言わなかった。

つか、なんでネグリジエ？

意味が解らん。

突っ込むべきなのか。それとも華麗にスルーするべきなのか。おそらく後者か。いや、第三の選択として誉めるという手もある。だがそれは人としてまずい気もする。

つか問題はそこじゃない。

シェリカは何も言わない。ただフィーロを睨み付けている。一体どうしたらいいんだろうか。

「あー……」

「嘔吐き」

「……」

一蹴された。喋る機会も与えないつもりか。理不尽にもほどがあるぞ。悪魔がお前。

大体人間なんだから嘘は吐くだろうに。そもそもコイツは何に怒っているんだ。

……ああ、嘘にか。

原因は解るが、あれは……いや、おかしいだろ。世の中にはどうでもいい約束と死んでも守らないといけない約束があるが、あれは紛れもなく前者だろ。本当にわけの解らない姉貴である。

とはいえ、何もしないままいるのもヤバイ。人が戻ってくる前に

なんとかしないと俺が死ぬ。社会的な意味で。

フィーロが悩んでいると、シェリカが口を開いた。

「……フィーロは、あたしのこと……嫌いなの？」

「はア？」何言ってるの？

「だって……」

そのまま何も言わずに俯いてしまう。だって、なんだよ。フィーロはシェリカを見つめた。なんで落ち込んでるんだ。さっきまで怒っていたのに。感情の起伏激しい姉である。

フィーロは後頭部をポリポリ搔いた。黙りのシェリカ。目線は降下一直線だ。気まずいなんてレベルじゃない。

なんだってそこまで落ち込む？

嫌われていると感じる理由はなんだ？

シェリカを見据え、考える。

ああ、そうだ。俺はシェリカと約束を破ったことがない。

だからか。だから怒っているのか。約束を破られて、裏切られたとでも思ったのか。

だとしたらなんて幼稚というかなんとというか……、

馬鹿だろ。

フィーロは溜め息を吐いた。同時に笑えてきた。寸で堪える。

ここで笑えば俺は炭になる。

解決策も何も、答えは一つしかなかったのだ。

約束は守るもの。

だから、

「フィ、フィーロ……！？」

抱き締めてやればいい。

あたふたしていたシェリカだが、すぐにおとなしくなった。背中にシェリカの腕が回された。なんか恥ずかしいが、まあいいやと思っただ。どうかしているのかもしれない。

どれくらい経ったか解らないが、暫くそのままだった。

この無鉄砲で我が儘で、時たまいじらしい馬鹿な姉を離さないよ

うに。フィーロは優しく抱き締めた。

無駄に早鐘の如く鳴り響いていたシェリカの胸の鼓動が凪いだころ、フィーロはゆっくり離れた。何故かほんのり頬に赤みの差しているシェリカを見つめる。

「約束守ったぞ。下まで送ってやるから部屋に戻れ」

「……うん」

シェリカは小さく頷いた。フィーロは肩を竦めて、歩きだした。シェリカもそれに促されて歩きだす。

二人が廊下の中頃に差し掛かったとき、そつと手を握られた。フィーロは、どうするべきか迷った結果、握り返すことにした。冷たい手だった。

男子寮の入り口に着くまで終始無言だった。「着いたぞ」フィーロが言うと、暫し逡巡したふうに動かなくなったが、シェリカは手を離した。

何も言わず、振り返ることもなく、自室へと戻っていった。

フィーロはその後ろ姿をじっと見て、呟いた。

「リリーナさんの案、あんま要らなかったな……」

G a n a c h e

取り敢えず解決したらしい、心なしかスッキリした顔のフィーロを交えてガナツシユは部屋を清掃した。

終わったのは午後四時半過ぎ。ヘトヘトになっていると、フィーロがコーヒーを煎れてくれた。たまには気が利く。

ありがたく受け取り、一口飲んで長い息を吐いた。

私物は半滅していたが、もともと大事なものはそれほどなかったからいいだろう。イリアの手紙類が焼けたのはいよいよの悲しみがあるが。

ふと、何か忘れているような気がした。

特に意味もなくカップを弄くる。揺れる水面を見た。駄目だ。思
い出せない。

「そっぴやガナツシュ」

「なんだよ」

フイーロが声を掛けてきたせいで余計解らなくなった。どうして
くれる。

「なんで睨むんだよ……。つか、クランコンテストの結果っていつ
出るんだよ」

「……………あ」

忘れてた。

「今、何時だ……………?」

「五時まで約十分前」

それを聞くなりガナツシュは立ち上がり、紫電の如く部屋を飛び
出た。フイーロが開け放たれたドアを見て「珍しいな」と呟いたの
はガナツシュは知らない。

スクランブルダツシュで運動場に来たガナツシュ。既にブロック
結果表が張り出されていた。周囲で喜んだり悲しんだりしている人
たちがいる。どうやら、張り出されてから時間は経っていないらし
い。

ガナツシュはEブロックの結果表が張られた場所に行った。カタ
ハネ以外のクランは既に集まっていた。

「ガナツシュ様」

聞き覚えある凜とした声に呼び掛けられる。

「やあ、ベアトリーチェ」

「お一人ですか?」

「ああ、うん。もしかしたらあとで来るかもしれないけど……………どう
した?」

ベアトリーチェは「きい

ッ!」と悔しげな声を上げ

て地団駄を踏んでいた。

「お、おいベアトリーチエ？」

「わたくしたちはこんなやる気のないクランに負けたというのっ！
？ 納得いきませんわっ……………！」

「……………」

一体、何が何やら。そんなベアトリーチエの姿に困惑していると、
微笑みながらモランが近付いてきた。

「おめでとうガナツシユ君」

「おめでとう？」

「うん。カタハネ一位通過だよ」

「あ、ああ。なるほど」

一位だったか。

それはよかった。のに何故か感動がない。どうしてだろう。

「嬉しくないの？」

「いや、嬉しいさ」

「マスターであるガナツシユ様だけに結果を確認させるなんて……
チームワークがなさすぎですわっ！」

ガナツシユとモランの隣で、ベアトリーチエが半ば悲鳴みたいな
声で叫んでいる。カタハネに負けたのが相当悔しいのだろう。自分
も今まで結果など忘れていたからか、ベアトリーチエの言葉が所々
痛い。

「抽選は五時十五分からマスターだけ集まるって。次はトーナメン
トだよな」

「ああ。二十四のクランでトーナメント戦だ」

「頑張つてね。応援してるよ」

「わたくしもですわガナツシユ様！」

「あ、ありがとう」

「でも、すごいよね」

「何が？」

「一年生だけのクランがトーナメントに上がるのってなかなかない
らしいから」

「ああ、らしいね」

一年生だけというのは、やはり不利なもので、余程のことがないかぎり上がれない。カタハネはある意味快拳を成し遂げたわけだ。

「それでは名残惜しいですが、わたくしたちは失礼しますわ」

「どこか行くのか？」

「天理で残念会を開くのですわ」

「そう。じゃあ」

ガナツシユは右手を挙げた。

「ええ、それでは」

ベアトリーチェは優雅に回れ右をして去っていく。モランが「バイバイ」と言っただけを追っていった。続いてロリエとエミリ、ユミイが同じように手を振ったり頭を下げたりしてベアトリーチェのあとを追った。妙にユミイの視線が熱かったのは恐らく気のせいだろう。

ガナツシユは五人を暫く見つめ、人混みに埋もれたあたりで再び結果表に向き直った。

自分の目で確かめてみる。モランの言葉を疑うわけではないが、何となく自分の目で見えたかったのだ。間違いなく、カタハネは一位だった。漸く、感動が沸き上がってきた。

「よし……」

小さくガッツポーズをする。カタハネは強い。それが証明された感じがした。ならどこまで通用するか。それが解るのが次のトーナメント戦だ。

ボクは強くならなくてはならない。進み続けるには勝つしかない。トーナメント優勝　つまり実質の総合的優勝をどうせなら狙ってやろう。ガナツシユは再び決意を新たにした。

「おつ。おい！　ガナツシユくん！」

と、そんなガナツシユに声が掛けられた。振り向くと生徒会長だった。後ろにいるのは、リトルリップにいた女だ。

というかあまりに快活に呼んでくれたせいで、殺意の籠もった視

線を一身に浴びる羽目になった。なるほど、フィーロの味わっている視線はこんな感じか。

「どうされました？」

「フィーロ君は？」

「……」

あいつ……生徒会長にまで手を出しているのか。まあ今朝の時点で半ば予想してたが。

「部屋だと思えますが」

「そっかぁ……残念。どうしよ、シオンちゃん」

「ちゃん付けやめて。まあ、あとでいいんじゃない？」

「でも感動が薄れちゃうよ」

「じゃあ自分でなんとかなさい」

「鬼っ！ 悪魔っ！」

「黙れ」女 シオンが生徒会長の額を指で弾いた。

「あうっ」生徒会長が涙目で額を押さえる。「ひどいよ」

「ひどいのは無理矢理わたしを付き合わせるあんた」

「むう……」

「……」

ボクはどうすればいいのか。目の前でコントを見せられ、対応に困るガナツシユ。シオンがそれに気付いた。

「あ、ごめんね。聞きたかったのそれだけだから。トーナメント頑張ってる」

「はあ」

どう答えればいいのか皆目見当もつかず、曖昧な返事になった。しかしシオンは気にしたふうもなく、ふ、と笑って去っていった。生徒会長を引き摺って。

「なん……だったんだ？」

五時十五分。

二十四名の各ブロック一位のクランのマスターたちが運動場に残

っていた。トーナメントの抽選会をするためだ。

周囲のマスターは全員二年生以上。一年生はガナツシユ一人だった。そのせいがかかなり視線を感じた。居心地が悪かった。

「ブロック順に並んでクジを引いていけ。最後のブロックは残り物だから帰ってもいいぞ」

ヴァイス先生が言った。

最後のはジョークなのか。笑ったほうがいいのか。

一瞬本気で悩んだが、馬鹿らしいのでさっさと並ぶ。Eブロックだから五番目だ。

案外あっさり終わっていくもので、ガナツシユの番はすぐに来た。クジの入った箱の前に立つ。すると、ヴァイス先生と目が合った。

「まさか勝ち上がるとはな」

「……どうも」

「まあ、期待している」

「……」

今のは応援の言葉だったのだろうか。声に抑揚がない人だから解りづらい。でも、悪い気はしなかった。素直に応援と受け取ろう。

「ありがとうございます」

「……早くクジを引け」

そう言っただけ顔を背けたヴァイス先生の顔は若干赤いような気がした。照れているのか。だとしたらレアな瞬間だ。意外な一面というやつだ。ガナツシユはクスリと小さく笑った。

クジを引く。番号は十一。トーナメントは二試合同時進行。山は二つに分かれている。十一番ということは、六試合目だ。

ガナツシユは列を抜け、初戦の相手を知るために全員が終わるのを待った。

だが、最後まで待つ必要はなかった。

「お、十二番」

そう言ったのは、

「つーわけでよろしくな、ルーキー」

にっとなつと笑う鳶色の髪青年　エリック・モンテディオ。
つまり、相手はKブロックの覇者　ランプ・オブ・シユガー。
ブロック戦の全ての試合を二十分以内で終わらせた、実質優勝候
補。CL5の実力を持つクラン。
ガナツシユはこの時ばかりは自分のクジ運を呪った。

第一章(25) 前夜

Ganache

「……というわけで、済まない」

そう言つてガナツシユは頭を下げた。

ここは部室^{スタジオ}だ。

緊急のミーティングということで、ガナツシユは全員を集めた。そして、クジ引きの結果を公表。自分のクジ運の悪さを嘆きつつ、全員に頭を下げたわけだ。

さあどんな罵りが来るかと心の防壁力を最大強度にして待ち構えていたが、周囲の反応は意外にも「ふーん」といったものだった。それは余裕ととつていいのだろうか。

「ま、引いたもんは仕方ないわな」

小さく口元をゆるめてフィーロが言った。この中では一番まくし立てそうな奴がそんなことを言うもんだから、ガナツシユは驚いて目を見開いた。

「そうね、フィーロの言う通りだわ。仕方ないわ」

「そうですね、フィーロ君の言う通りですよ」

「ちっ……」

「えっ……!?!」

フィーロの言葉に呼応するかのように、というか完全に呼応してシエリカとユーリもガナツシユを赦免。ただし舌打ちについては触れないでおく。ただ、いい加減学習しろとは思うが。

「………しかたない」

遅れてクロアもそう言った。

あまりにあっさりしている四人の態度に、拍子抜けする傍らガナツシユは思った。

なんだろう……

すごく 気持ち悪い。

想像ではフィーロあたりがいろいろ罵ってくると思っていた。なんせ相手は優勝候補のランプ・オブ・シュガー。怒涛の如く「ふざけんなアア」と喚き散らすとばかり思っていた。

いや、もしかしたらフィーロにも剣士としての自覚が生まれてきたのかもしれない。それはそれで喜ばしいことだ。

「で、ガナツシュ。話はそんだけか？」

「あ、ああ」

「そつか。んじゃ解散といこう」

「いや、明日の作戦も練ったほうがいいんじゃないか？」

「さくせえん？」

フィーロは首をかしげた。眉を顰めて、「何言ってるのこイツ」みたいな表情でガナツシュを見た。

「んなもん棄権だ棄権、はい決定」。じゃ、解散

「待て待て待て待て」

帰ろうとするフィーロの肩を掴んで引き止める。

「なんだよ」

「なんだよ、じゃない。棄権ってなんだ」

「自らの意志で権利を棄てる。すなわち棄権」

「意味を聞いているんじゃない！ とうがかお前まさか既に諦めてるなっ!？」

「いや、勝てるわけねーし」

フィーロはやる気なさげに肩を竦めた。滅茶苦茶イラつとした。

「一試合二十分で終わらせるようなクランだぞ？ 常識で考えたまえよ、キミ」

やれやれと言わんばかりにわざとらしく首を振ってみせるフィーロ改め馬鹿。こいつは向上心とか、相手に立ち向かう心意気みたいなものがないのか。ないんだな。もう最悪だ。

ぶっ飛ばしたい衝動に駆られ、なんとか我慢したが、我慢する必要はあるのかと考えた結果ぶん殴ることにした。拳を握り締め、振

り上げた。

「アタシはやるのだわ」

が、その言葉でガナツシユは止まった。声の主はモニカだった。皆の視線が集中する。

「アタシはやる。たとえ一人でもやるのだわ」

「モニカちゃん……」

その決意めいた何かを秘めたその瞳。ユーリが不安げにモニカの名を呟いた。モニカがユーリを見やり、口元をゆるめる。すぐにガナツシユらのほうに向き直った。

「アタシはアレを倒す。嫌なら勝手に棄権すればいいのだわ」

アレ、とは何を差すのか。ランプ・オブ・シュガーか。それとも四人の中の誰かか。なんとなく、後者な気がした。だがガナツシユたちは誰も追及はしなかった。

ガナツシユは一步も引く気がなさそうなモニカを見つめ、それからファイロに視線を移した。

「……だそつだぞ」

「じゃ、お言葉に甘えて」

「お前最低だな」

「冗談だよ。……解った、やるだけやれば？」

「お前もやるんだよ！ 上から目線やめろ！ お前がやると無茶苦茶腹が立つ！」

「あいあいさー」

ファイロは凄く嫌そうな表情で敬礼した。なんで駄目な奴なんだろうか。せめて試合中はまともに戦ってくれることを祈ろう。儂い祈りな気がするが。

「……じゃあ、ある程度の作戦を練ろう」

「あの、ガナツシユ君」

「なんだユーリ」

ガナツシユがユーリを見やると、ユーリは周囲を見渡して首を傾げてから、ガナツシユを見て口を開いた。

「そういえば一人足りない気がするんですが」

「ああ、気のせいだろう。なあフィーロ」

「そうだな。気のせいだ」

「気のせいね」

「……………気のせい」

「気のせいなのだわユーリ。さ、さっさと作戦でも何でも決めてしまいましょう」

「え、あ、そうですね……………」

今一つ釈然としないという感じだったが、まあ気のせいだろうと納得したように頷いたユーリ。ガナツシュはそれを見てから、大まかな作戦について話し始めた。

まあ、案の定というか何というか、結局力押し戦法になってしまったが。

Unknown

ふむ、予定とは多少違うが、まあ順当か。出来れば僕らと当たれば一番よかったのだが。いや、一応は当たる。二回戦でだ。しかしまず初戦が問題だろう。

ランプ・オブ・シュガー。

百戦錬磨の連中だ。いくら奴らでもあれに勝つのは厳しいだろう。が、別に勝つ必要などない。

要はタイミングだ。

相手がランプ・オブ・シュガーなら致し方ない。予定を早めるだけだ。

けど万が一奴らがランプ・オブ・シュガーに勝ったとしたらどうするか。ふむ、まあ、多分その時は予定通りに行えばいいだろう。煮え繰り返りそうなほど腹立たしいが。

大丈夫だ。抜かりはない。

準備は既に整っている。あとはあの女に邪魔さえされなければいい。“これ”が完成すればいくらあの女でも手には負えまい。嗚呼。

僕の復讐、そして悲願達成はもうすぐだ。

“これ”が成功すれば、かのクランの幹部にもなれるだろう。薔薇色の人生というやつだ。本当にこれには感謝せねば。

さあ、明日が僕の華々しい人生への第一歩だ。

せいぜいあげ。僕の手のひらの上でな。

F i r o

憂鬱だ。非常に憂鬱だ。

明日からのトーナメント戦。よりによっていきなり初戦がエリック率いるランプ・オブ・シュガーだ。憂鬱を通り越して絶望だ。

ガナツシュはともかくモニカまでやけにやる気満々だし、フィードとしては迷惑極まりないが、やるしかない。今回こそ後方支援に撤したいものだ。

無駄な気もする作戦会議も終わり、夕食も済んだ。あとはシャワーでも浴びて寝るだけだが、気分としては明日が来てほしくない。要するに寝たくない。寝たら死ぬ。

「やだなあ……」

情けない眩きを漏らしながら、フィードはぶらぶらと学園内を歩いていた。ありたいに言えば散歩だ。ちゃんと明るい場所を歩いている。ああ、いや違うぞ。怖いとかじゃない。足元が見えないと倒れたりして危ないからだ。断じて怖いわけではない。

一体誰に向かっての言い訳なのか、自分でもよく解らない。が、何度でも言おう。この震えは武者震いだ。

「見つけた！」

「ぎゃあああああああああああああッ……!?!」

「うわあっ!?!」

フィーロが絶きよ……かんせい喊声を上げると、驚いた声とどす、という音が聞こえた。慌てて振り返ると、尻餅をついたリリーナの姿があった。

「いてて……」少し顔をしかめながら呟くリリーナ。フィーロの視線に気付き、にこりと笑った。

「やっと見つけた」

「でもすごい絶叫だったねー。ぎゃあああって!」

校庭を二人で歩いていった。あはは、とリリーナが笑う。それにむつとした表情をしてフィーロが返した。

「あれは喊声ですよ。関デスクライの声。ウォークライです」

「どっちかっていうと断末魔デスクライだったよ?」

「……」

「もしかしてフィーロ君ってオバケとか苦手?」

「いや、好きですよ? ええ。滅茶苦茶好きです。あれですね。あのスリルが堪りませんよ。もう週に五回はホラー映画ムービーを見ないと逆に発狂するくらいですから。ええ」

「ふうん……」リリーナはほくそ笑むような横目でフィーロを見た。

「じゃあさ、お化け屋敷行こうよっ」

「はい?」

「学園祭が二学期にあるからさ。多分どこかのクラスが出し物でお化け屋敷やるだろうし。一緒に行こ?」

「……」

ローズベル学園は冒険者を育成する場ではあるが、あくまで学校だ。だからそういう学校行事は一応あるらしい。というか生徒の要望で出来たらしいが。

お化け屋敷。

嫌だ。

絶対嫌だ。

死んでも嫌だ。

しかしながらリリーナはにんまり笑みながら、小指を差し出して
いる。冷や汗が背中を伝った。

強がりを言うんじゃないかった。正直に言わなかった自分に後悔し
た。が、後の祭りだ。今更「実は……」などと言うのも恥だ。なん
て安いプライドなんだ。畜生ほつとけ。

フィーロはままよと自分の小指をリリーナのそれに絡ませた。リ
リーナがきゅっと小指を絞め、上目遣い（反則）でフィーロを見つ
めた。

「約束だよっ」

「……うす」

もうヤダ。

フィーロが悄然としながら歩いた。リリーナは時折小さく笑いな
がら、フィーロと肩を並べて歩いていった。

速くもなく、遅くもない。どちらが相手に合わせているのかも解
らないような、そんな速さ。フィーロは悄気ながらも、その速さに
心地よさを感じていた。

フィーロが立ち直った頃、丁度校庭の端の一角に着いた。二人は
何も言わず、ベンチに座る。いつものベンチだった。

三度目にもなると慣れたもので、フィーロとリリーナの距離は二
拳ぶんくらいだ。ああ、何にせよ他人に見られたらフィーロの明日
はないのだが。あらがったって意味がないのは重々承知した（とい
うかさせられた）ので、成り行きに任せることにした。ある種の悟
りの境地である。

「エへへ……」

「なんで笑ってんですか……？」

「うえ？ な、なんでもないよっ」

「……はあ」

シエリカもそうだが、女の子というのは突然笑いだすものなのだ
ろうか。よく解らん。

深く考えても仕方がないのでさっさと忘却する。先に気になっていたことを聞くほうが先決である。

「そういえば、さっき『やっと見つけた』って言ってましたけど……俺に何か用でもあったんですか？」

「え？ あ、うん。えーと……」

リリーナはオホン、とわざとらしく咳をした。それから満面の笑みを浮かべた。

「カタハネ一位通過おめでとうっ！」

「あー……どうも」なんだそのことか。

「なんでそんなテンション低いのさ！ 勝ったんだから喜ぼうよ！」

「ご褒美まであるのにつ！」

「いや、っーか俺一人に言うもんじゃないでしょ……それにトーナメント戦、リリーナさんも出てますよね？」

「ご褒美はスルーなの！？」

「……いや、食い付くもんでもないかと……」

「ガーン……」

ここにもガーンを口に出す人がいた。どうでもいいが。

よよと泣き崩れるようなフリをするリリーナにほんの少しだけ罪悪感を感じる。「しくしく」と声を出されているからその分は差し引かれているが。

というか、泣き真似しながらリリーナがその隙間からフィー口を見ていた。視線をびんびん感じる。これはあれか。乗れという意思表示か。もはや強制か。

フィー口は顔をしかめながら後頭部のあたりを搔いた。もう乗らざる得ないのだろうか。でもなんで。

取り敢えず言いたいことは多々あるが、その目は本当に反則だと主張したい。

フィー口は意を決した。

「わ、わーご褒美ってなんだろーなアー……」
ひどい棒読みである。

「本当……？ 気になる……？」

しかしリリーナは反応した。フィーロとしては不思議で仕方がない。が、そんなことは今は些細なことなので構わず続ける。

「え、ええ……とても」

引きつりまくった笑顔でフィーロは答えた。もう頬がピクピクしている。攣りそうさ。新手的拷問だろうか。

「じゃ、じゃあ……目、瞑ってくれる？」

「……はア……」

よく理解出来ないが、指示に従う。フィーロは目を瞑った。これで放置して帰るというのだけは勘弁してほしい。そんなことになったらおそらく人間不信になる。

とにかく、フィーロはじっと目を瞑った。

「ちゃんと瞑った……？」

「ええ」

念押ししてきたリリーナに淡々と返事する。正直、早くしてほしい。急かすのも悪いので我慢するが。

「本当に瞑った？」

我慢するが、そのしつこい念押しは少し苛々します生徒会長。

「瞑りましたよ。……なんなら手で押さえましょうか？」

フィーロは小さく笑って、右手で両目を覆ってみせた。微かな光さえも遮断され、完全に目の前は闇に吞まれた。不思議なことに、普段なら不快な感覚だが、今はそうでもなかった。

どれくらい瞑ったままか。

一分か。それとも十分か。一時間は経っていないだろうが、そんな時間があやふやになりかけた時だ。

ちゅ。

そんな湿った音とともに、頬に柔らかな何かが当たった。その何かが何であるか、自分に起こったことを理解するまでに些かの時間が掛かった。それほどまでに思考がフリーズするようなことだったのだ。

「な……だ……で……」

言葉にならない声を漏らし、フィーロは右手を解き、焦点の合わない瞳でリリーナを見た。

口をそつと押さえた彼女の顔は真つ赤だった。いや、そのリアクションはこちらのものだと心の中で突っ込む。意外に自分は冷静なのか。

そう思うと落ち着きを取り戻してきた。胸に手をあて、大きく深呼吸する。そして何か言おうと口を開いた瞬間、リリーナに手で遮られた。

「何も言わないで……ね？」

それはどういう意味か。聞くことはできなかった。手で遮られているからではなく、それ以上声が出なかったのだ。

リリーナはベンチから立ち上がって、くるりとフィーロに向き直った。まだ顔は紅潮している。でもいつものリリーナの表情だった。向日葵のような笑顔。

「以上、生徒会長からのご褒美でしたっ！ 明日もお互い頑張ろうね！ おやすみっ！」

「あ……」

一方的に言うだけ言って、リリーナは走り去っていった。

ベンチにはフィーロだけが取り残された。そつと左の頬に触れる。まだ感触が残っている。リリーナの唇の感触だ。

「いやいや……」

なんつーか、普通生徒会長が一生徒にご褒美と称してキスするか？

「いやいやいやいや……」

つーか恥ずかしいならやるなよな。マジで。大体キスつてのはそんなに軽々しくするもんじゃないよ。好きな人とやるもんだよ。ホントあの人は一体なんなんだ……？

いや、そんなんはどうでもいい。よくないけど。それよりも取り敢えず、

「明日死ぬんじゃないの、俺……」

あのスケコマシ野郎。

ユーリだけでは飽き足らず、生徒会長まで手を出すか。腸煮え繰り返りそうだ。いやもうとつくに煮え繰り返っている。

マジでいつか殺してやろう。つかあとで殺す。即行で殺す。

「……リリーナに恋人出来たんだな。カタハネの奴じゃないか？」

「知らないのかわ」

「えらく立腹しているな」

「貴方に関係ないのかわ」

「まあ、そうだな」

アレはあとで殺すとして、まずは目の前のこの男だ。男はあのスケコマシと生徒会長とのやり取りに大した興味を示すことなく歩みを再開した。モニカはそのあとを黙って追った。

「この辺でいいだろう」そう言って立ち止まった彼はこちらを向いた。顔面に大きな傷跡を持つ男は、鳶色の双眸そうまうでモニカを見据える。

「……ふむ。まあ、久しぶりだな」

「儀礼的な挨拶は必要ないのかわ。懐旧の談も」

「昔と違って可愛げがないな」

「知ったこっちゃないのかわ」

フィーロとリリーナのいたベンチから少し離れた場所に、モニカと男はいた。

獅子のような鬣を夜風になびかせる男　バルド・クロノワール
同じ獣人にして、同郷の出。つまり、ニンエルド獣王帝国の出身だ。

かつては兄のように慕っていた。あくまでかつて、だ。今は違う。

「……仇を見るような目だな。父親は元気か？」

「貴方がそれを聞く？」

「そうだな……」

ふ、と小さく笑った。

「何年ぶりだ？」

「三年ぶりなのだわ」

モニカが吐き捨てるように返した。三年という年月、モニカは彼を忘れたことはない。それほどまでにバルドという男が憎い。スケコマシと同じくらいだ。

「そうか三年か……月日とは残酷だな。記憶をだんだん白ませてゆく」

自然と拳が握り締められた。コイツの言いたいことが解ったからだ。

「弱者の記憶ほど消えやすいものはない」

「……それは挑発？」

「そう取って構わないぞ」

「そう」

ギリ、と噛み締めた。今この手に愛槍が握られていたら、問答無用で刺し殺していた。

「俺を殺したいか？」

モニカの考えを読んだかのようにバルドが言う。握った拳から血が出てきた。爪が手の平に食い込んでいた。それでも尚握り締める。モニカはバルドを睨み続けた。それが答えだ。

バルドは肩を竦めて、溜め息を漏らした。

「血の気の荒いことだ。フェルマーとは思えんな」

獣人にも種類がある。モニカはフェルマー種。アンセムスターのモランなどはシエルノ種と呼ばれている。そしてバルドはラグノス種だ。

フェルマー種は温厚な種と言われる。戦いを神聖なものとし、必要な時しかその力は使わない。

この男は挑発しているのだ。

否、嘲っている。

それはモニカだけではない。敬愛して止まない父までも、この男は嘲っているのだ。それに追い打ちを掛けるようにバルドが口を開く。

「一つ言っておくが……お前では俺には勝てん」

「やってみなくては解らないのだわ」

「やらないと解らないのは愚者だ。昔から言っただろ。経験に学ぶは愚者、歴史に学ぶは賢人とな」

「……せいぜいほざくがいいのだわ。父の教えは間違っていない。アタシはそれを証明してみせるのだわ」

「お前の父親を倒した俺を倒して？」

「粉々にしてやるのだわ」

「ほう……やってみろ」

バルドは口元を歪めた。ひどく不快な笑みだった。

「明日を楽しみにしている。……おやすみ」

身を翻してバルドは去った。

モニカはその背をただ睨み付けた。それしか出来ない自分がひどく遣る瀬なかつた。

十

「お帰りなさい、モニカちゃん」

部屋に戻ったモニカを出迎えてくれたのは、ユーリだった。その天使のような微笑みに少しばかり心癒される。

「ただいまユーリ」

口元をゆるめてモニカは返した。そのモニカの表情を見て、ユーリが訝しんだ様子で尋ねた。

「モニカちゃん、何かあつたんですか……？」

「え？」冷や汗が出た。

「ちよつと元気ないです」

「……なんでも」

ユーリの心配そうな表情を見て、モニカは一瞬口籠もった。

「なんでもないのだわ。心配しないで、ユーリ」

「そう……何かあったら言うてくださいね？ モニカちゃんはわたしの友達ですもの」

微笑むユーリに胸を痛めた。どんな些細なことでも、ユーリを欺くのはモニカには耐え難いものだ。だがこれは自分自身の問題だ。巻き込んだりは出来ない。してはいけない。

それでも、

「モニカちゃん……？」

「ごめんなさい……」

ほんの少し、その優しさに縋ってしまうのは弱さだろうか。

本当は不安だ。バルド・クロノワールは強敵だ。種など関係なく、天賦の才ともいえる力。モニカはそれを越えなくてはならない。そうでなければモニカは今まで培ってきたもの全てを失う。“勝ちた”ではなく“勝たなくてはならない”のだ。

だけど、やっぱり恐怖心はある。

二つの感情が自分の中で渦を巻いて、それはいつしか震えとなって表れていた。どんなに大口を叩いても、若干十五才の少女には重すぎるプレッシャーだったのだ。

モニカはユーリにしがみつくようにして震えていた。こんな姿、死んでもアイツらには見せられない。心の片隅でそう思った。

ユーリは何も言わずにモニカを抱き締めた。そしてモニカの背を軽く叩きはじめた。赤子をあやすようなそれは、ちよつと恥ずかしかったが、とても心地よかった。

モニカはゆっくり目を閉じた。その音をもつと感じるために。そう思ったけれど、思いとは裏腹に微睡んできてしまった。

ややあつてユーリの声が耳元で何かを呟いた。独り言のような、小さな声だった。モニカは微睡みの中で、その声を微かに聞いた。

「心配いりません……怪我したってわたしが治しますから……安心して戦ってください……だから」

だから、全部背負い込まないでください。

ユーリの言葉は深い眠りとともに暗闇の底に沈んでいった。それでも、何故か涙が出てきた。それはすう、と頬を伝っていった。

第一章(26) 当日

F i r o

嗚呼、来てしまった。昇っちゃった。なんて忌々しい朝日だ。目に染みるぜ畜生め。

翌朝になって、フィーロはそんな悪態を吐きながら起き上がった。首をぐるりと回した。ポキポキと音が鳴った。身体は軽くなった。気分は重いので差し引き零だ。丁度いい。

「よくねーよ……」

「なにをぶつぶつ言ってるんだ？」

ガナツシュが訝しげにしていたが、フィーロは肩を竦ませるだけに留めた。この憂鬱は千の言葉をもつてしても表せまい。言うだけ無駄だ。

溜め息が漏れそうになったが呑み込んで、服を着替え始めた。外套を羽織り、剣帯を提げたあたりでガナツシュが「準備は出来たか」と聞いてきた。見りゃ解るだろうボケとは言わないでおく。

「ああ」短く返事をして、振り向く。

「それじゃ行くか」

ガナツシュは部屋を出た。フィーロもそのあとを追って部屋を出る。鍵を閉めるか迷って、結局閉めた。レイジはここ最近帰っていないがどこにいるのやら。まあ、平和でいいけど。

相も変わらず混雑しているベルベット。もう朝はこれから購買部で済ませようか。そのほうがずっといいような気がしてきた。

ようやっと料理を盛り付け、人混みから脱出。それからガナツシュと合流した。フィーロもガナツシュも、出来の悪いジャンクフードみたいな盛り付け方である。ちょっととした山だ。いつものことだが、いつまで経ってもこれだけは上達しない。

「きつたねー」

「お前もな」

などと下らない応酬を繰り返したあと、座席探しを始めた。

今日は結構混んでいる。空気がない。フィーロは何度か周囲を見渡したが、やはり空席は見当たらなかった。

「しばらく待つしかないな」

「そうだな」

外にも幾つかテーブルがあったが、そこも既に埋まっている。あまり遠くまで行く気にはなれない。弁当でも買えばよかった。今更だ。

目の前に食べ物があるのに食べられない。そんなひもじい思いをしながら二人が立ち尽くしていると、

「あれ、フィーロ君たちも席ないの？」

誰かがこちらに声を掛けてきた。振り向くと、モランだった。隣にはシェリカもいた。料理が盛られた皿が二、三載った盆を手に入れている。

「おはようモラン。お前も席ないのか？」

「うん。今待つてるどころ」

「そっか。なら俺たちとい　って！　蹴んなよシェリカ！」

頬を膨らませてフィーロの足を蹴る馬鹿姉。とんだ暴力女だ。なんなんだコイツは。

「どうしてあたしには挨拶してくれないのよ」

シェリカはむくれっ面で睨み付けるようにフィーロを見た。

「……………」

フィーロは溜め息を思いつきり吐き出したい衝動に駆られたが、なんとか呑み込んだ。火に油を注ぐような行為を自らしたりしない。そんなことをすれば本当に比喻ではなく火が燃え盛る羽目になる。絶対に御免だ。

「……………おはようシェリカ」

最上級の作り笑顔付きでフィーロはシェリカの要望に応えた。顔

が痙攣しそうだ。拷問かこれは。

しかしシエリカはそれで満足いったらしい。「うん！ おはよう！」満面の笑みで返してきた。取り敢えずこれでいいらしい。よく解らんが。

ニコニコと笑顔を向けてくるシエリカ。フィーロは唇を歪めて頬を掻いた。モランがクスクスと笑った。眉を顰めて一瞥したが、笑顔で切り返された。反則だ。

「なあ……そろそろ席を探さないか？」

ガナツシュが溜め息混じりに言った。

シエリカの笑顔光線から逃れるように視線をガナツシュに移す。

「そうだな」

「あ、あそこ空いたね」

モランが座席の一つを指差した。一角の窓際に四人席が丁度空いていた。返却場に向かう四人組がいたので、今しがた空いたのだらう。

「それじゃ、あそこにしようか」

「そだな。シエリカもいいよな？」

「フィーロの隣ならどこでもいいわ！」

「あ……そう」

だが俺は断る。

十

朝食後すぐに雲行きが怪しくなった。天気予報では晴れと言っていたが、まあ、お天気お姉さんもたまには外すだろう。

雨天の可能性ありということもあって、トーナメントの会場は緊急でホールに作られた。学園内にホールは二つ。カタハネの含まれる山は第一ホールで行われることとなった。

ホール自体は体育館ジムナジウムと同等かそれ以上に広く作られているので、運動場よりは狭くとも優に全校生徒が入れる。

そもそも、試合自体は違う場所なのだからどこだっていいのだ。しかも今回は試合の同時進行はせいぜい二試合ずつ。ホールで十分だ。

「それでもやだなア……」

朝食を終え、四人はホールの通路を歩いていた。げんなりした声でフィーロが呟いた。

「何がやだなアだ。始まる前から士気を下げようなと言っただけだよ。フィーロはあたしが守るもの」

そんなことを吐かして前線に出るから俺が大変な思いをしなくてはならなくなるのだ。フィーロは嘆息した。

「ふふ。じゃあわたしはリーちゃんのとこに行くよ。頑張ってるから応援してるから」

モランはそう言って踵を返そうとした。「あ、おい後ろ……」しかし後ろに人影を見たフィーロは呼び止めようとした。

「きゃっ!?!」

時既に遅く、人影にぶつかったモランは反動で転んだ。尻餅をつく。

「だ、大丈夫か?」

フィーロが慌てて駆け寄った。助け起こそうと手を差し出すフィーロにモランは笑顔で応えた。「うん、大丈夫だよ」差し出された手を掴んで恥ずかしそうに微笑んだ。

フィーロはモランとぶつかったそいつを見た。謝るかと思ったが、発した言葉は全く違った。

「おやおや、ガナツシュ君じゃないか。こんなところでどうしたんだい?」

卑しい笑みで表情を飾りながらマルス・サーレストンが見ていたのはガナツシュだった。隣には黒い外套を羽織った男がいた。どこかで見たとような気がした。

「ああ、そうか。本戦に上がったんだったね君も」

「……お陰さまでね」

「僕たちも上がったんだよ。《バルムンク》と言っただがね。知っているだろう？ 君なら」

「バルムンク……」

有名なクランだ。それこそランプ・オブ・シュガーに匹敵するかもしれない。

今のところ有名クランと呼ばれるクランは五つ存在する。

リリーナ率いる女性だけのクランでは唯一のCランレベルL5のクラン《ラブリーブレイク》。エリック率いる少数精鋭型クラン《ランプ・オブ・シュガー》。学園が設立されて発足した最初のクラン《ヴェスペリア》。風紀委員直属のクラン《ピースメーカー》。

そして学部で五番以内にならなければ加盟が認められず、それ以下に転落した時点で強制脱退させられるというクラン《バルムンク》。

いずれも今回のトーナメント戦に上がってきている。正直、さつさと棄権してしまったほうがよいのではと思わなくもない。

つか、そんなことはどうだっていい。「おいアンタ」

「ん？」

マルスは今気が付いたような目でフィーロを見返す。実際、今まで眼中にさえ入っていなかったのだろう。それはそれで腹がたつが、自分のことはさて置き、だ。

「アンタ、ぶつかっただから謝るくらいはしろよ」

「は？」

マルスは目を丸くしてフィーロを見た。それからモランを見て笑った。

「アツハツハツハツ！」ひとしきり笑って、小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。「どうしてこの僕がブルートに謝る必要がある？」

「な……」ブルートは蔑称だ。先の戦いの際、獣人を呼ぶときの名だ。「お前……！」

「ぶっ殺してやるわ！」

「だ、ダメだよシエリカちゃん！」

フィーロより先にシェリカが激昂した。そのお陰で幾分か冷静になれた。モランが慌てて止めに入る。

尚も威嚇を続けるシェリカを下目に、嘲笑に醜く口元を歪めてわざとらしく嘆息した。

「全く……カタハネは野蛮人の集まりかい？」

クソ野郎。ぶん殴つてやろうか。出来ない。問題を起こせば最悪出場停止にされる恐れもある。モランはだから止めた。彼女が我慢をしたのだ。俺たちは手を出すわけにはいかない。反吐が出る。下らない言い訳だ。

「マルス……ちよつとは慎め。人が大勢いるんだから」クソ野郎の隣にいた黒外套の男が口を開いた。

「ん？ ああ、そうだねノーワン。それではガナツシュ君」

「なんだ」

「初戦、頑張ってくれたまえ」

「そのまま返すよ」

「バルムンク僕らが負けるわけじゃないか」

小馬鹿にした笑みを向けるマルス。「楽しみにしてるよ」と吐かして去っていった。楽しみにしてるよ、だと？ なに上から物言つてんだクソ野郎。

それはまだしも、一番ムカつくのはモランへの言葉だ。

今でも獣人や亜人に対する差別は多少なりとある。逆もまたしかりだ。実際に戦争があつて、たくさんの人が死んだ。仕方がない。悲しいことではあるが、そればかりは時に任せるしかないことなのだ。

それでもマルスの言葉は違う。説明しにくいだが、違うのだ。戦争で根付いた憎しみなどは違う、単に彼らを“人ならざる者”として見下している。

同じ人なのに、だ。

虫酸が走る。

「……悪かったね。あれは口が悪い」

「あ……？」

ギリと齒軋りをした時、黒外套の男が言った。謝っている辺りは常識ある奴かと思えるが、口調はどうでもよさげだった。

「僕はノーワン・クロイツ。魔戦学部魔術士学科だ」

「魔術士……」

小柄な体型。くすんだ金色のおかつぱ髪。長い前髪に隠れた瞳は何を考えているか解らない。フィーロはシェリカを見やった。シェリカは首をかしげていた。「知らないわ」……おい。

「そうだろうね。君はそういう奴だ。……だから反吐が出る」

ノーワンの最後に呟いた言葉は小さくてよく聞こえなかった。「

は？ なんだって？」

「……なんでもないさ」

肩を竦めてみせる。その時ノーワンの目が一瞬だけ見えた。ひどく鋭く、歪んだ瞳だった。

「……ま、とにかく悪かったね。頑張ってくれ」

ノーワンの目は既に前髪に隠れている。マルスのあとを追う彼の後ろ姿を見つめ、脳裏に焼き付いたあの瞳を振り払うように頭を振った。

十

「要は気持ちの問題だ」

ホールの壇上裏にある控え室の一つにカタハネは待機していた。

緊張気味なのはモニカとユーリくらいで、クロアとレイジはどこかにいっている。シェリカなどフィーロの肩にもたれかかって眠る始末だ。当のフィーロと言えば、帰りたいオーラを出しまくっていた。

控え室ど真ん中の丸いテーブルにフィーロは腰掛けている。突っ伏したいが、シェリカがいる手前出来ない。小さく嘆息しているとガナツシュがコーヒー片手にやってきて隣に座った。首だけ横を向けてガナツシュを見やる。緊張の色は多少あるが、比較的にリラックス

スしている。頼もしいことだ。

ガナツシユは抜けきった表情で眠るシェリカを一瞥してからフィ
一口を見た。なんとも複雑そうな顔である。

「情けない顔だな。まるで半死人ハーフデッドみたいだ」

「うるせーよ」

「怖いのか？」

「……当たり前だろ」

「あっさり肯定か……」

「なあ」

「ん？」

「お前なんであの時何も言わなかったんだ？」

「あの時って……モランのことか？」

「ああ」

「そうだな……」

ガナツシユはコーヒーを一口啜った。コト、と小さく音をたてて
テーブルにカップを置く。

「あとでぶっ飛ばしたほうが気持ちいいだろう？」

「二回戦でつてことか？」

試合表を見るかぎり、バルムンクは九の番号を引いたらしい。す
なわちカタハネの一つ前の試合だ。試合表の順番なら、左の山の五
試合目となる。

「そうなるな」

「そうなるなつて……それ一回戦絶対に勝つて意味じゃね？」

「まあ、そういうことだ」ガナツシユはしれつとして言った。かな
りイラつとした。「それに、一回戦敗退じゃ賞は取れないしな」

「その一回戦が強敵なんだけど……」

「モランの仇が取りたいんだろう？」

「……」

別に死んでない、みたいな阿呆臭い揚げ足取りはしなかった。

実際、さっきマルスをぶん殴ったりしていたら、悪いのはフィー

口たちになる。最悪試合退場させられるし、向こうをいい気にさせるだけだ。二回戦でコテンパンにして鼻を明かしてやるのは確かにいい案ではある。が、相手を考える。

マルス一人ならガナツシユがボコボコにしてやればいい話だが、これはクラン同士の戦いだ。しかもバルムンクは選りすぐりのエリートばかりの集まり。簡単に勝てるわけではない。勝つ可能性の方が低いのだ。そもそも、一回戦の相手からして優勝候補なんだが。そう考えると余計にチベーションの上がらない。呻くフィードを見てガナツシユが溜め息を吐いた。

「お前……いい加減たまには腹括って全力でやれよ」

「いや、いつも全力だから」

「お前のいつもが全力ならコアラの一生だって壮絶に見えるわ」

「コアラ舐めんなよ。あれ結構気性荒いんだぞ」

「知るか」

ガナツシユはカップに残ったコーヒーを一気に飲み干した。飲み終えたそれを置くわけでもなく、手の中で弄ぶ。

「要は気持ちの問題だ」

手元を見つめていたガナツシユは、視線をフィードに移した。

「戦いなんてのは意志のぶつかり合いだろう。だったら何かしら意志という武器がなければ勝利はない。強敵でも立ち向かうという意志があればそれは立派な武器だ」

「立ち向かう……ね」

俺の戦いはそんなたいそうなものじゃない。俺の戦いは……俺はなんで戦ってるんだろうか。考えたこともない。俺の意志ってなんだ。解らない。

だから自分は弱いのか。

「ブロック戦、お前は普段より戦っていた。それは、お前の意志じゃないのか？」

「俺は……」

意志なんてない。そんなもの持った覚えすらない。戦っていた。

何と。実戦になればいつも心のどこかにへばりついてる恐怖をなんとか押さえ込んで、戦っている振りをしているだけだ。結局押さえ込むことすら出来ず、ただ開き直って、荼化して、有耶無耶にして逃げ出そうとしているだけだ。

本当は剣を持つのだって嫌になるときがある。だから毎日振って言い聞かせるのだ。せめて剣だけは持て、と。

でも、それは何故だ。

俺はいつから剣を持った？

気付けばこの手に握っていた。一振りの刃を。ふと脳裏に過る光景。なんだ。俺はこんなところは知らない。泣いているのは誰だ。

その子は泣きながら呟くように言った。 助けて、と。俺はそれを握り締め

「フイー口。おい、どうした？」

「え？ あ、な、なんだ？」

「なんだはこつちのセリフだ。いきなり呆けて、冗談抜きで調子悪いんじゃないだろうな？」

「いや……そういうわけじゃないさ」

本当かどうかまだ疑わしいのか、眉を顰めるガナツシュに苦笑する。大丈夫だって、と念押しした。

ガナツシュは一応よしとしたらしく、わざとらしい溜め息だけ吐いて押し黙った。フイー口はもう一度口元もゆるめた。それから肩にもたれているシエリカに目を向ける。

あれはシエリカだったのだろうか。しゃがみこんで、泣きじゃくるあの少女は、傍若無人な我が姉なのか。

だがフイー口はあんなシエリカは見たことがない。孤児院でもわがままっぷりを発揮していたのだ。泣く姿など微塵も想像できない。でも、ならばなぜこんなにも胸が痛むのだろう。俺はお前の泣き顔を想像するだけでも辛い。らしい。らしい、じゃない。確かに辛いのだ。針が刺さったように胸が痛む。

シエリカの泣き顔は見たくない。叶うならば、ずっと笑ってくれ

ていればいいと思う。

「……うにゃ」と猫の鳴き声のような声を漏らすシェリカ。フィードは小さく笑んで、シェリカの前髪を梳すいてやった。じと目のガナッシュの視線に気付き、こっ恥ずかしくなつて顔を背けた。

ああもつ。

本当に今日の俺はどうかしている。

十

試合はつつがなく進行していた。

二試合ずつ並行して行われている試合は、ブロック戦とルールが違う。

端的には旗フラッグがなくなる、フィールドが一律、そして時間無制限の三つだ。

旗を破壊すれば勝ち、されれば負けというルールがなくなるため、攻撃側と防衛という概念がなくなる。戦略面の負担は減るだろう。ただし各クランのマスターの先頭不能と、クランの人数が四人を切ることに由る負けというルールは引き継がれている。またフィールドは平面的な場所で、少々の障害物しかないものへと変更されている。

これは要するに、完全に“運”の要素を排除されたということだ。ブロック戦では、旗という、言ってしまうえばお荷物があったために、どうしてもそれに人員を割いたりなどと負担が増えたりする。そのため必然的に作戦なども変わってくることとなる。それゆえ、それなりに有力なクランでも場合によっては“運悪く”負けることもあるのだ。しかしながらトーナメント戦にはそれが無い。だからクランの純粋な知恵と力のぶつかり合いとなる。しかも時間が無制限ということ、もはやある種デスマッチと言っても過言ではないのだ。

ガナッシュ曰く、ブロック戦に“運”の要素が含まれるのは、

本当に強いクランは運ごときで負けたりしない」かららしい。運にも負けない本当に強いクランを選出するためにあえて旗取りのルールを使う。運など力でねじ伏せるといった、なんつーか野蛮な考え方である。

まあ、それでも運というのはやはりどこまでもついてくるものだ。だから各ブロックに審査員を配置している。それもまた“運”な気がするが。

『西側第五試合はバルムンクが勝ちました！』
控え室のスピーカーが揺れる。

西側、とは左の山のことだ。右が東側となる。どうでもいい。とにかくバルムンクは勝った。別に負けるとは思っていなかったが。

ガナツシュが「行くか」と立ち上がりざまに、咳くように言った。それに続くように他の仲間たちも立ち上がる。フィーロは未だに眠っているシェリカの頬を軽く叩いた。

「おい、起きなよシェリカ。時間だ」

「にゃ……？ なに……？ もうご飯……？」

「残念ながらこれが終わってからだよ」

「そう……ふああ……」

これから試合とは思えない間抜けた欠伸をして、のびをした。肩がシェリカの頭から解放されたので、フィーロは立ち上がった。ぐりりと首を回した。ポキポキと鳴り、少し凝り固まった肩が解ほくされた気がした。

「早くしろ。置いていくぞ」

ガナツシュが急かした。

まだ眠いのか目を擦っているシェリカの開いている方の手を引いてガナツシュのもとに向かった。ユーリがなぜか指を啣くわえてフィーロを見ていた。なんだ。食う気が、俺を。

ぶるつと身震いをするフィーロをシェリカは不思議そうに見た。

「どうしたの？」

「……なんでもない」

「もういいか？」ガナツシュが呆れた顔で言った。

「それくらい自分で考えるのだわ」モニカがぴしゃりと言い放った。

「……」

そりゃ正論だ。フィーロは心の中でほくそ笑んだ。ガナツシュはわざとらしく咳払いをして扉に手をかけた。

扉を出るとレイジがいた。額に薄ら汗が滲んでいた。どこへ行っていたのかは知らないが、明らかに身体を温めているのは解った。変態だがこういうところは本当に生真面目な奴だ。

レイジがにと笑った。「いよいよやな」

「ああ。クロアは？」

「………」

クロアがガナツシュの背後に立っていた。つまりフィーロたちの目の前だ。何時の間に。

ガナツシュも少し面食らった顔をしていたが、平然を繕って尋ねた。

「どこに行っていたんだ？」

「……… 射撃場」

「そうか。それで、その背中のは？」

そうガナツシュが訊ねて、それで初めてフィーロは気付いた。クロアの背中には白い布に包まれた、なにやら大きい物体があった。本当になんなんだろう。

「………ん、秘密兵器」

「へえ。秘密兵器………そうか。秘密兵器ね」

ガナツシュは一人で納得したらしく頷いて、それから顔を上げた。ゆっくりとフィーロたちを見回す。その目には静かに、されど猛然と闘志が燃えていた。

「よし………じゃ、行くぞ」

ま、俺は正直嫌だ。

長い廊下を抜け、壇上になると、フィーロは照明の眩しきで目が眩くらんだ。割れんばかりの歓声だけはしっかりと聞こえた。

目が光に慣れてきて、前方に立つエリックの姿が目には映った。後ろにはランプ・オブ・シュガーのメンバーもいる。と、フィーロは背後から殺気にも似た視線を感じた。顔を半分だけ後ろに向ける。物凄い目付きをしたモニカがいた。一体誰を見ているんだ。もう一度前に向き直ると、エリックと目が合った。にっと笑んでみせてきた。フィーロも笑い返したが、上手く笑えているだろうか。自信はない。

『 さあ！ 西側第六試合のお時間がやってまいりました！ 司会はもちろんわたくしエリカが行います！ 』

『 そういえば、トーナメントは放送部の人の実況するらしい。澆刺はつさつな声がやたらリリーナのテンションに似通っているが、まあ、あの無表情陰険教師がやるよりは遥かにマシだろう。』

『 さっそく気宇紹介とまいりましょう！ まずは今年度初出場にしてトーナメント出場権を入れたルーキー克蘭 カタハネ！ 』
『 黄色い歓声がホールを揺らした。声の中身は「ガナツシユくん」といったものだ。別に解ってるさ。そういうものだ、人生なんて。』
『 そして！ 』

ピタリと歓声が止んだ。

『 カタハネが挑むは今年度克蘭コンテスト総合部門優勝候補。超少数精鋭克蘭……ランプ・オブ・シュガー！ きゃーエリックさま ツー！ 』

ガナツシユ以上の黄色い歓声。もはや悲鳴だ。これが三年間培ってきた人気かエリック。放送部エリカまで敵に回ったこのアウエー感。やっつけられねえ。

『 つかしかしなんでこんなに女の子が多いんだ。男が少ない。あれか、男は第二ホールか。リリーナを観に行ってるのか。確か東側の真ん中あたりがリリーナ率いるラブリーブレイクだったはずだ。』

「凄まじい人気だな」

「お前がそれを言うか？ 嫌味か？ 嫌味なのか？」

「そういうわけじゃないが……」

「じゃあどういうわけだ畜生め」

フィーロが揚げ足を取るように言い返すとガナツシユは黙った。

暫くしてから、「もうこの話はやめよう」と呟くように言った。：

…勝った。フィーロは小さくガツポーズした。

「よう、ルーキー」みみっちい勝利の余韻に浸っていると、エ

リックが近づいてきた。「いよいよだな」

「お手柔らかにお願いしますよ」

「んにゃ、本気で行くぜ？」

「そうですね……」

人生、儘ままならないものだ。予想していたことではあるが。

「ま、楽しもうぜルーキー」

「ルーキーはあっちですよ」フィーロは親指でガナツシユを指した。

「俺にはお前もルーキーだ。……と、フィーロ、耳かせ」

「……？」

よく解らなかつたが、フィーロはエリックに耳を近づけた。エリ

ックが小声で話し始める。

「モニカの奴、バルドと何かあったのか？」

「え？ いや……解りませんけど」

「そうか……なんか余人には入り込めないような事情がありそうで

な……。取り合えず、注意しとけ」

「なににです……？」

「それが解れば苦勞しないっての。……と、じゃあそろそろ時間だ。

お互い、手加減はなしだからな」

フィーロから離れて、エリックは爽やかに笑んだ。そして踵を返

して仲間の元に戻っていった。「フィーロ、行くぞ」ガナツシユの

呼ぶ声に振り向き、フィーロも仲間の元に向かった。

「なにを話していたの？」

「なんでもないよシエリカ」

シエリカの問いにフィーロがそう返すと、不満げな表情ではあったが追及はしてこなかった。だが、顔を背けられた。なんなんだよ。フィーロはこめかみの辺りを掻きながら口元をへの字に歪めた。

『それではカタハネのみなさん扉を潜ゲートつてください』

エリカの指示で扉を潜る。

目の前が真っ白になり、暫くして視界が戻った。

フィーロの目に映るのは先ほどまでのホールの壇上ではなく、岩がいくつかが点在する、巨大な円形闘技場だった。

「コロシウムかよ……」

「壮観だな」

「ああ。壮観すぎて泣きそうだ」

いぶせんだ声を漏らすと、目の前にランプ・オブ・シユガーが現れた。

「来たな」

「ああ……」

エリックの言葉を思い出す。フィーロは横目でモニカを見た。とても険しい瞳をしていた。見ているのはバルド。同じ獣人で槍術士。やはりなにかあるのか。エリックは注意しろと言った。だが、なにに注意するのか。

「どうした」

「なんでもないさ」

「そうか」

ガナツシユはそれ以上は何も言わず、太刀を抜きながら前に進み出た。他の仲間たちもそれに促されたように武器を手に持った。フィーロも剣を抜き放ち、シエリカの隣に立った。

『それではカウントダウンを始めます。十……九……八……七……

シックス ファイブ フォー
六……五……四……』

なんとというか、地獄へのカウントダウンみたいだ。つか、もうさつきから悲観的な観測しか浮かばない。

『スリー
三……二……一……』

でも、ま、どうせ相手がどんななんだってやることは一緒だ。

『フライング
試合開始ッ！』

しっかり馬鹿姉を守り抜こう。

ギリを思わせた。

レイジは後方倒立回転 要するにバク転で距離を取った。
その横を抜けたのはモニカだ。振り切った状態ならいくらスウェンでも避けれまい。

と思いきや。

モニカはスウェンを無視してバルドに向かっていった。

「Chaaaaargeeeeeeeee……!!」

チャリオット
愚直なる破碎の突貫。

轟く喚声とともに、稲妻のような突きがバルドに迫った。つーかなんでバルド？

「ぬんッ……!!」

バルドの武器は槍、というよりは斧ハルベルト槍と言える。やけにデカイ気もするが。とにかくバルドはそれを毘沙門構えから前に突きだす構えに変えて、モニカの三叉槍を受けとめた。

……。

受けとめた？

化け物か？

「この程度か……」

小さく何かを呟き、バルドは三叉槍を振り払い、その勢いで回転しながら斧槍をモニカに叩きつけた。「かふっ……」バルドと比べたら明らか小柄なモニカの身体は容易く吹っ飛んだ。ガラクタの山に突っ込み、埋もれた。

「モニカッ……!!」

「おっと、行かせねーぞ」

駆け出そうとしたガナツシュに立ちはだかったのはエリックだ。バツと扇を開く。でかい。美しい模様の描かれたそれは一メートルくらいの長さはあった。

「ぶっ飛べ」

エリックが扇を一振りした。それだけだ。それだけで変化が起きた。

烈風。

エリックを起点に、周りのもの全てを吹き飛ばすような風が舞い上がった。「ぐおっ……」直撃を受けたガナツシユは咄嗟に太刀を地面に突き立て踏張った。

あれが扇術士^{フラッター}。

初めてこの目で見たが、なんて厄介な学科だろうか。近寄ることすらままならない。

しかも扇術士^{エリック}の起こした風は、こちらには逆風でもあちらには追いつかない風なのだ。

その巻き起こされた風の勢いに乗ったスウエンが一直線に向かってきた。明らかに狙いはフィードとシェリカだ。

フィードはシェリカを後ろに突き飛ばし、剣を構えた。スウエンの勢いに乗りに乗った一撃を正面から受けるなど真つ平ごめんだが

「やるしかないしッ……！」

悲観的な叫びを力に変えて、迎え撃つ。

大剣と片手剣がぶつかり合った。火花が散った。腕が痺れる。化け物かコイツ。実際、無表情で斬撃を繰り出す姿はある意味機械的だ。

ああくそ。押し負ける。

背筋がビキビキいいだした。耐えれそうにない。出来ればさっさと起き上がって退避してくれシェリカ。

「チエストオオオ……ッ！」

九死に一生を得るとはこのことだ。スウエンが飛びずさった。圧力が消える。

スウエンの代わりに現われたのはレイジだ。顔を半分こちらに向け、笑みを浮かべている。

「愛の王子参上！」^{プリンス・オブ・ラヴ}

「……お前は変態王子だろ」^{プリンス・オブ・ヘンタイ}

「そんなつれへんこと言うなや」ウィンクしてきた。

「ウザキシヨい」

「ウザキシヨい!? その組み合わせはひどくない!? せめてキモカワイイくらいに……!」

「バカキモウザイ」

「変わってないやん!」

「お前から妙に余裕だな」

聞くに堪えなかったのか、下らない応酬をしているとスウェンが大剣を振り上げて迫ってきた。気の短いことだ。

「レイジ、回り込め!」

「合点や!」

レイジの姿が掻き消える。フィーロは前に踏み込んだ。スウェンが袈裟懸けに斬り掛かってきた。フィーロは斬り上げる。

刃と刃が衝突した。

だがこればかりは推し負けるわけにはいかない。フィーロはのしかかる重圧に耐えた。

「じゃあ! もらったア!」

レイジが背後を突いた。スウェンがそれに反応しようとする。そえはさせるか。

「く……お前……!」

「行かせませんよ」

フィーロは身体を押し出し、圧力を加えた。下がれば追う。そういう意味だ。簡単には下がれまい。

「一本やツ!」

レイジが斬り掛かる。

ランプ・オブ・シュガーは四人。一人でも欠ければ負ける。つまり、これで勝ちだ。

「甘い」

ドス。

鈍い音だった。

フィーロの視界の左端から現われた一本の棒。それがレイジに突

き刺さり、右側に吹っ飛んだ。

ズシャアア、とレイジの身体が地面を削るように転がる。暫くして、じわりと赤い液体が滲み出た。

血だ。

あれはレイジの血だ。

ならばあれはなんだ。棒じゃない。槍だ。斧槍。バルドの斧槍だ。

「レイジイイツ……！」

「仲間より自分の心配をしたらどうだ？」

「なっ……」

スウエンの身体が掻き消えた。違う。体勢を変えたのだ。視界の端に影を捉えた。首を引く。カミソリのような鋭い蹴りが鼻面を掠めた。避けたのはほとんど反射行動だった。

だがしかし、反射ゆえに選択を誤った。

「ぐはっ……」

身体ごと押し込むスウエンの肘打ち。それがフィーロの腹を叩いた。身体が浮き上がるのを感じた。

さらに追い打ちが掛けられる。わけの解らない体捌きから、頭を

膝で蹴り飛ばされた。

つか、これ知ってる。

グラッティアータ
近接剣闘術だ。

鈍重大剣がつくりやすい隙を埋める格闘術。剣士からすれば邪道とも言われる技だ。だがフィーロからすれば合理的な技と言える。戦いにフェアもアンフェアもないのだから。

スウエンはその近接剣闘術を身に付けている。いや、この動きはもはや身体に染み付いていると言ったほうがいいかもしれない。さすが地獄カ丘登頂者の名は伊達じゃない。

蹴られたフィーロは大した抵抗もなく倒れた。潰れた墓ヒキガエルのように地面にへばりつく格好になる。我ながらお似合いの格好だ。情けない。

ざ、と踏みしめる音がして、フィーロは頭を上げた。スウエンの

姿があつた。

「終わりだ」

呟くように言つて、大剣を持ち上げる。とりあえず反撃は無理だ。そもそも、へなちよこ剣士にしては善戦したほうだろう。フィーロは身体から力を抜こうとした。

「餓塵burst 碎撃櫟碧Ut織 xx蛇業火」

「蛟ッ……！」

Gooooooooooooooooooooッ……！

グオオオオオオオオオオオオオオオオ……！

別々の方向から、二つの咆哮が響いた。

それは巨大な竜……否、蛇か。あれは大蛇だ。赤い蛇と青い蛇がそれぞれ唸りながらこちらに迫っていた。

スウエンは飛びさつた。

本能が危険とでも判断したか。確かにあれは危険だ。人が受ければほぼ確実に死ぬ。

二匹の蛇がぶつかった。

激しい爆発とともに煙が発生した。水蒸気か。

水もあつさり蒸発するような高温の火炎の塊と、水の精霊を圧縮した濁流以上の威力を秘めた水鉄砲だ。当たればこつもなるだろう。辺り一面を水蒸気が包み込む。何も見えない。好都合だ。

「邪魔すんじゃないわよシスコン！」

「邪魔したのはお前だろうブラコン！」

「ブラコンゆるなッ！」

「黙れ！ 人をシスコン呼ばわりする奴に言われたくない！」

「つかアイツら何を^{いが}噛み合ってるんだ。動こうぜ。チャンスだろ。勝つ気あるのかないのかどうなんだよ。

フィーロは言い合いをしているガナツシュとシェリカを放つて、レイジのもとに向かった。位置は覚えている。

「レイジッ！」

「か……フィーロか……無事かいな」

「そのまま返すぞ！ 傷は……大丈夫だな。抜くぞ」

「オレ……もうダメみたいやわ……ってちよい待て抜くなっ！」
レイジの喚き声は無視して斧槍を抜く。

「あばばばばばばばば……！ 痛いつちゅーの！」

「叫ぶ気力があれば十分だ」

「うう……ひどいワ……初めてだったのに……」

「そうか。ならもう一度突き刺してやろう」

「いやん……ってやめてッ！ マジでやめてッ！ なんで振り上げ
てんのッ！？ 矛先心臓なんやけどッ！？」

くだらんことを言うからだ。フィーロは阿呆らしくなって、立ち
上がってレイジに手を貸す。

フィーロは膝を、レイジは尻を払って、顔を見合わせ頷いた。武
器を構える。

ぶわっ、と水蒸気が渦を巻くように割れた。

中心から現われたのはバルドだ。槍を突き出し、

「 Ruuushhhhh……！」
ばくしん
轟進。

チャリオット
だが戦車のような突貫ではない。地響きのような呐喊は、あれは
明らかにモニカの必殺技のものとは異なる。

受け切れるか？

回避はもはや考えられない。そんなことを考えれば間違いなく腹
に大穴穿たれる。

かといって受け切る自信は全くない。皆無だ。出来るわけねーだ
ろ。

いつそ潔くやられるか？

痛いのはゴメンだ。

なら、やることは一つ。

攻め込むだけだ。

「レイジ、死ぬなよッ……！」

「え、ちよ……ウソオ！？」

レイジの襟首を掴んで前に押し出した。つか、蹴り飛ばした。

つんのめりながら前に出たレイジにバルドが肉薄した。突き出した槍を斜め下からすくい上げた。

「ヒイツ……!?!」

レイジが海老反りになって間一髪で躲す。いや、赤い糸を引いている。擦ったらしい。ちよっと強く蹴りすぎたか。

バルドが連撃を繰り出す。全身を流れる水のように、しなやかに留まることなく、それでいて濁流のような勢いで槍の先、柄、腹を巧みに操った。レイジもまた身体を巧みに操り跳躍や後方倒立回転でバルドの攻撃を回避する。

フィーロはその瞬間を狙った。

バルドの激しい連続攻撃の間隙を縫うようにフィーロは側面に回り込み、下から斬り上げた。

躲された。

つか……躲しただと？

この状況を全く把握できないうちに、フィーロは身体が浮き上がるのを感じた。脇腹にのしかかる重圧もまた。

「がっ……」

呻き声を漏らし、フィーロは吹っ飛んだ。その時一瞬視界に捉えたのは、槍を二本、その各々の柄の先端を持ち、まるで独楽のように回転しているバルドの姿だった。

何本持つてんだあの野郎。

もはや呆れるしかない。嘆息しかけたところで、地面に叩きつけられ転がった。畜生、息が詰まった。超苦しい。

やはり慣れないことはするもんじゃない。

フィーロは咳き込みながらそう思った。

S h e r i c k a

フィーロが吹っ飛ぶ瞬間を見た。地面に叩きつけられ、転がる。

「フィーロ……！」

口うるさいシスコン野郎を突き飛ばし、フィーロのもとに駆け寄った。

「フィーロ、大丈夫!？」

「げほっ……いや、まあ……なんとかな……げほっ……」

激しく咳き込むフィーロの身体中に擦り傷がある。痛ましい。フィーロの玉の肌になんてことをするんだ。あの害獣め。

そもそもあのデカ乳女は何をしている。回復要員だろ。早く来い。早く治せ。傷痕全部消してフィーロを元通りにしろ。

しかし見回すと爆乳女は猫耳変態女の治療をしていた。勇ましく突っ込んで速攻でやられたくせに。真っ先に治療してもらえんとはいいご身分だ。せめてフィーロくらいの健闘してみる。

「……あ」

いや、チャンスだ。

これはチャンスだ。

確か人の唾液には殺菌作用があったはず。

フィーロは擦り傷だらけ。ここはあたしの力をもつてして癒せるのではないか。

ということでは決して疾しいことではない。治療だ。

「では失礼して……」

フィーロに顔を近付ける。あと三十センチ。十五センチ。十センチ。「何をしてる」五センチ圏内に突入したというところで髪を引っ張られた。

「痛い痛あい! な、何すんのよ!」

ヒリヒリする頭皮を押さえながら振り返り、きつと睨み付けた。ふてぶてしくも犯人 シスコン野郎は乙女の命の三大要素を傷付けたくせに、謝るでもなく、

「こちらの台詞だそれは。お前こそ何をしている」

「治療よ! 見りゃ解るでしょ!」

「全く解らん。ボクにはどさくさに紛れてフィーロにキスしようとしているようにしか見えない」

「キスじゃないわ！ 舐めようとしただけよ！ 唇を重点的に！」
「猟奇の変態だな」

「アンタだつて変態の変態じゃない！」

「なんだその変態の中の変態みたいな言い回しは！」

「事実じゃない！ シスコン変態野郎！」

「違う！ 妹を愛するのは至極当然なんだ！ 自然の摂理なんだよ！」

「その考えがもはや変態じゃない！」

「少なくともお前だけには言われたくないぞ！ ブラコンが！」

「なん」

「コントはそこまでだお二人さん」

シエリカ of 言葉を遮る敵の声。その方向を見た瞬間、敵はすでに動いていた。

敵 エリックが扇を振るった。轟、と激しい烈風がシエリカとシスコン野郎を吹き飛ばした。

「ちっ……」

「きゃっ！」

シスコン野郎は憎々しいことに、空中で体勢を整え、着地と同時に飛びずさった。しかしシエリカはそのまま尻餅をついてしまう。

「いったあ……」

お尻を擦りながら起き上がると、耳をつんざくような音が時雨のように鳴っていることに気付く。それはだんだん大きくなっていった。

「シエリカッ……！」

シスコン野郎の叫ぶ声。その声が危険が迫っていることを如実に語っていた。

「よそ見は禁物だなガナツシュ・ルフエーヴル」

「ぐあッ……！」

シェリカに注意が向いていたからか、シスコン野郎は横から迫るバルドの強襲をもろに受けた。為す術なく吹っ飛ぶ。

そしてそれはシェリカにとっても絶体絶命のことだった。

「つつ……」

何かが身体を掠めた。見えない何か。魔道装束が避けている。肉まで到達していた。深くはないが切れている。まるで刃で切り裂いたように。

そう、見えない鋭利な刃のようなものがシェリカに肉薄しているのだ。岩をも容易く両断する鎌鼬^{かまいたち}。耳をつんざくような音はすべて不可視の刃が空気を裂く音だったのだ。

しかし解ったところでどうしようもない。迫り来る音の猛襲に、シェリカは咄嗟に目を瞑った。

「ひゃふっ!?!」

ぐい、と勢い良く誰かに引つ張られた。間抜けな声がシェリカの口から零れた。次に感じたのは温もり。誰かに抱きすくめられている。そう認識した時には地を蹴る音と暫しの浮遊感。

足の裏が地面の感触を感じたとき、シェリカはゆっくりと目を明けた。

「あつぶね……」

そう呟くように漏らし、ふうと息を吐いたのは　やはりフィー口だった。

フィー口はシェリカに視線を向けた。「大丈夫か?」

「う、うん……フィー口は?」

「ん……あばら骨が軋む。けどま、大丈夫だろ」

「そう……よかった」

安堵の息を漏らすシェリカ。しかしその時不意にフィー口の足元が赤く染まっているのに気付いた。それはじわりと広がりを見せていた。シェリカはばつと顔を上げてフィー口を見た。

何が大丈夫なのか。

「フィー口、これ……!」

「ん？ ああ……避けきれなかったただけだ」

「避けきれなかっただけって……」

それは明らかにフィーロの血だ。夥おびただしい量の血が流れ出ている。

息も荒い。額からは汗も出ている。それでもフィーロは口元を緩めて見せた。

「……………」

「ようフィーロ。大丈夫か？」

フィーロが何か言おうと口を開きかけたが、それを遮るようにエリックが横槍を挟んだ。扇をパタンと畳み、にっと笑む。

シエリカの中の何かがキレた。自分がやったくせに大丈夫かとはぶち殺してやるうか。いやもうぶち殺そう。問題ない。ミディウムくらいに焼くだけだ。

「Aggni雅Ia焼Tō爆烈火」

シエリカは殺やると決めた瞬間、右手をエリックに向けた。即座に要素魔術を構築し、放つ。爆烈火。まともに食らえばミディアムじゃ済まないだろうが知ったことか。焼けて死ぬ。

「いいっ……!？」

「幼dai陵圓巖Mo掌ROCK隆障壁」

いきなりの攻撃に一驚するエリック。その周囲で爆発が起きた。土煙が舞い上がり、エリックを覆う。フィーロが剣の柄を握って、少し前に進み出た。その険しい瞳はまっすぐ爆心を見据えている。その視線を追うようにシエリカも目を向けた。

今さつき微かに聞こえたのは、間違いなく要素魔術の詠唱だ。聞き間違いではなければ、確かあれは、

そこまで考えたとき、ぶおっと土煙が渦を巻く。土煙はそのまま霧散していった。その中心には案の定、扇を構えるエリックの姿があった。しかも憎らしいことに無傷ときている。

その周囲には砕けた岩が積もっているのが見受けられた。やはり隆障壁。岩の盾を生み出す、防御に特化した土の要素魔術。

「あっち……もうちょい早く助けてくれよ」

ボタンと小気味よい音をたてて扇を閉じ、エリックは肩に積もった砂埃などを軽く払った。

「自分でもどうにかできたくせにやらなかったのは貴方でしょう。自業自得よ」

どこからか女の声が出た。澄んだ、しかしどこか妖艶さも感じる声だ。イネスの声に似たものがある。まあ、あの女の声は絶対零度の吹雪声だ。フリザードボイス今の声から感情を引き抜いたらちようどいい感じになるだろう。

しかし、シェリカの視界に女の姿はない。だが声は声が出た以上、確かにここにいるのだ。

「どうなってる……？」

フィーロが呟きを漏らす。気持ちは解る。シェリカも仕組みは解っても、驚きは隠せないでいるのだ。仕組みも解らないであろうフィーロならことさらだろう。

ミラーージュ蜃気楼というやつだ。光の要素魔術の応用で、正確には光の屈折を利用してしている。どちらかといえば“反射”リフレクションと言うべきか。

なんにせよ。

「靈黎x0纏s i e紫陽光」

目が眩むほどの光が瞬いた。紫陽光。喜悦を司る光の精霊。それを使役する光の要素魔術だ。ちなみにただ強く発光するだけ。役に立つ場面はそう多くない。

例えば今だ。

シェリカに察知されないということは使っている魔力は最小限のはず。微妙なさじ加減で光を屈折させて姿を暗ませているのだろう。だからシェリカも気付かなかった。加えて気配を殺す技術があるとすればフィーロたちも気付くまい。魔術士というよりは隠密みたいな奴だ。

とはいえ最小限の魔力で屈折させられる光など大したことはない。フィールドが薄暗いから余計消費も少ないに違いない。

ならば屈折しきれない強い光を当ててやればいいだけだ。

ただの目眩まし程度にしかないシヨボい魔術だが、思わぬところで役に立った。光の要素魔術も捨てたもんじゃない。

「ぐ……」

シエリカが心の中でガッツポーズをしていたら、フィーロがいきなり呻きながら膝を突いた。

「どうしたのフィーロ……!?!」

一体何が起きたのか。俯いてしゃがみこんでいるフィーロの顔を覗き込もうとした。

「ぐ、ぐおおおお……目がツ……目がアアアツ……!」

「……」

フィーロが目を押さえながら悲痛な声を漏らした。どうやら直視してしまっただけらしい。一言声を掛けるべきだったか。とはいえどのみち手遅れなのだが。

「ふ……甘いぜフィーロ。この程度で」

真つ赤な涙目でそんな偉そうな物言いしても格好よくも何ともない。ただの馬鹿だ。不敵に笑おうとしているのか。思い切り引きつつているから台無しだ。

「……そういう貴方も目が赤いわよ。直撃じゃない」

溜め息混じりの呆れたようすで女がぴしゃりと言いつつ放った。

漸く姿を現したかと思えば大して動じていない。憎らしい相手だ。

ボデイラインのくつきりとした黒基調の胸元が大胆に開いている、革製の妖艶な魔道装束に身を包んだ女。あれが相手方ランプ・オブ・シユガーのクランの魔

術士。

稀代の魔術士とも呼ばれるイネス・ラトクリフも認めたといい、天才魔術士。

ルミア・アーティミス。

確かにオーラがある。あれは強い。それだけは間違いない。それにしても、

どうやら胸の方はあたしと変わらないらしい。寄せて上げたところ

ろで無駄だ。

「……………どうしてわたしの胸を見てるのかしら？」

底冷えするような声。イネスとどっこいどっこいだ。さすが認められただけある。

「別に？ 無理は身体に悪いわよ？」

「く……………そういう貴方も憤み深いようだけど？」

「構わないわよ。フィーロは小さいほうが好みなもの」

「俺はどっちかっていうと大きいってえええ！」

何か余計なことを言おうとしたフィーロの足を踏ん付けておく。

空気は常に読まなくてはならないものだ。

「噂通り重度のブラコンのようね」

「ブラコンじゃないわ。愛してるだけよ。馬鹿じゃないの？」

「どっちかってーと虐げ　　いいててててっ！　　あり得ねえ、二

発目かよ！？」

「本当に生意気な娘ね貴方。もう少し敬ってみたら？」

「ギリBに遠慮なんかいらないわ」

「胸の話はもういいわよ！　　何なのこの子！？」　　ギリBへの否定はないようだ。

「まあ落ち着けて。どんな胸でも等しく夢は詰まってるぞ」

「うっさいわよ変態ッ！」

「ぐはっ！？」

フォローしたつもりなのだろうが、全くフォローになっていない。ルミアの鋭い回し蹴りがエリックの腹に直撃した。味方同士で何をしているのか。実は馬鹿なのだろうか。

ジト目で目の前のやり取りを見ていると、

「ぶふえっ……………！」

「くっ……………！」

変態コンビが転がってきた。シスコン野郎はムカつくことに受け身をとってすぐに立ち上がったが、真正変態はそのままべちゃと地面に張りついた。蛙みたいだ。気持ち悪い。

「それで」

変態コンビの吹っ飛んできた方向から野太い声が響く。

「お前たちはいつまで遊んでいるつもりだ」

そう言つて、巨体には似合わぬほど静かに地面を踏みしめたのは、獅子の鬣をなびかせるバルドだった。その手には巨大な槍を携えている。

身体には傷らしい傷が全く見当たらない。ほぼ無傷でこの変態コンビを追い詰めたのか。

「うう、ハラが……遊んでねーよバルド」

「わたしもよ」嘔吐け。

「説得力が全くないがな」バルドは深い溜め息を吐き出した。「この程度の相手に時間をかけて」

……は？

「何ですつて……？」

ブチブチブチ、と頭の中のとて大事な部分が束で切れる音が脳内で鳴り響いた。

「おい、シエリカ……？」

「ここまで見下されて黙つていられるほどあたしも寛大じゃないわ……」

「事実を言つたつもりだが？」

鼻を鳴らし、下目遣いでこちらを見るバルド。シエリカは盛大に歯軋りをした。鋭く睨み付ける。

「いいわ……アンタが言うこの程度の力を見せてやるわよ……」

「それは楽しみだ」

小馬鹿にした表情がまた癩に触る。

「むううう……フィーロ！」

「な、なんだ？」

「あの猫耳男殺すわよ！」

「猫耳男つて……まあ、解つたよ……」

フィーロが剣を持った腕をぐるりと回して、前に進み出た。そし

て背を向けたまま顔を半分こちらに向けるといつ最高のアングルから見つ尋ねてきた。

「……で、何分くらい耐えればいいんだ？」

第一章(28) VS 砂糖の塊

Moran

「 Erick様の猛攻にガナツシユ君、えーっと……あー……まあいいや。もう一人のナントカ君はたじたじです！」

沸き上がるErickクファンの黄色い歓声。モランはただただ圧倒されていた。

モランはアンセムスターの面々とともに、第一ホールの客席からフイーロたちの試合を観戦していた。

実況がやたら鼻^{ひいき}負な気がしなくてもないけれど、仕方がないのかもしれない。ただ、名前を呼ばれなかったレイジはかなり可哀相だとモランは思った。

スクリーンにモニタリングされている試合はどのように撮っているのかは解らないけれど、かなり臨場感あるものになっている。予選と同じように、視点が切り替わったりする仕様のようだが……、

「きやあああああつ！ ガナツシユ様あああつ！」
「頑張ってくださいああい！」

ガナツシユの姿が映し出されるたびに歓声を上げるベアトリーチエとユミイ。周りを見渡すと、同じように叫んでいる女の子が大勢いた。ファンクラブがあるのは知っているが、さすがにここまでとは思わなかった。Erickファンに劣らずの勢力だ。

「はっちやけてるね〜リーちゃん」
「そうだね」

ロリエの言葉に苦笑しながら答える。まあ、ある意味いつものことだ。モランはどこか遠い目で隣で狂喜乱舞している二名を見た。

しかしベアトリーチエはともかく、恥ずかしがり屋のユミイまでもが暴走するとは。いつも大事にしているヌイグルミをぶんぶん振り回している。クランコンテスト効果とは恐ろしいものだ。

「でもエミリちゃんは落ち着いてるね」

「当然です」

澄ました様子で言ったエミリなのだが……。

どばどば。

「……エミちゃん鼻血鼻血」

「はっ……いや、これはチヨコの食べ過ぎで……」

モランの指摘に顔を赤らめて、慌てて鼻を手で押さえるエミリ。

モランはまた苦笑を漏らし、ティツシュを手渡した。

「あはは、チヨコなんてないじゃん。エミリちゃんてばムツツり」

「ち、違いますっ」

ロリエの無邪気な言葉に一段と顔を赤く染めるエミリ。そんな姿は少し可愛らしいと思っただが、口に出すともっと赤くなりそうだ。

それこそ貧血で倒れかねないとモランは黙っておくことにした。

「でもガナツシュ君って人気者だよね」

「そうだね。やっぱり格好いいからかな」

「それはガナツシュ様の素晴らしさの一端ですわッ！」

いきなりベアトリーチェが立ち上がって叫んだ。

「というか、しまった。ガナツシュの話は……いや、ガナツシュと

いう名詞そのものがベアトリーチェの前では禁句だった。

「ガナツシュ様の素晴らしさはやはりその優しさ！ 他者を思いや

るあの大きな器！ クランのマスターを務めていることからそれ

はよく解りますわ！ そして」

「解った。解ったからリーちゃん、ちよつと落ち着こう？ ね？」

周りの視線が痛い。

さすがのベアトリーチェも我に返ってすみませんですわと座って

俯いた。多分、けろつとすぐ元に戻るんだろうなあ。モランは小さ

く溜め息を吐いた。

再びスクリーンに視線を戻すとちよつと映像が切り替わった。

「あ……」

そこに映るのはフィー口の姿。彼はバルドが繰り出す攻撃を必死

に避けていた。

「あ、フィーロ君だ〜。モランちゃん、フィーロ君だよ」

ロリエがスクリーンを指差しながらモランを促した。なんでわたしに言うんだろうと思わなくもないが、そこは押し留めた。

「うん。解ってるよ」

「すごいね〜全部避けてる」

「でも、避けてばっかりです。反撃も出来ないなんて。あれじゃあ逃げてるのと同じですよ」

平静を取り戻したらしいエミリだが、その表情は不服そうで少し眉間に薄く皺しわを作っていた。内容もそうだが口調もどこかしら厳しい。

「そろそろ捉えられるんじゃないですか？」

「酷評だね〜」

たはは、とロリエが笑った。

確かにそういうふうにも見えるかもしれない。ちょこまかと小動物のように避けている様は、逃げと思われても仕方がない。だけど、モランにはあれが逃げているようには見えない。

腰が引けているわけでもなく、相手から距離をとろうともしていない。一定の距離を保ち、全ての攻撃を躲くはしているのだ。

あれは消極的な回避ではない。むしろ積極的な回避だと言える。何か目的に沿って回避に専念しているのだ。彼のことだ。おそらく時間稼ぎだろう。

ただ、それをエミリに対して弁解する必要があるかといえば、そういうわけでもないし、躊躇ちゅうちゆってしまう。それは単に自分自身の問題ではあるのだが。

「モランさんだってそう思いますよね？」

「え？ あ……えと……」

だから迷ってしまう。エミリの同意を促す言葉に、モランは二の句を継がないでいた。

この気持ちは秘めておきたいもの。出来れば感付かれたくない。

だからこそ躊躇してしまうのだ。

臆病と言われても仕方はない。でも、知られたくはない。誰にも。特に、今まさに戦っている、大切な友達には。

わたしがフィーロのことが好きだということなど。

結局、打ち明けたのはルツだけだ。幼馴染みだからルツが口だけは堅いことはよく知っている。だけど、それでも本当はルツにさえ言いたくなかった。あれはなぜだか気付かれたから言わざる得なかったただけだ。

普段は鈍臭いくせに、どうでもいいことには敏感な少年に、いい迷惑だという思いはあったが、少し心が軽くなった気もしていた。ずっと押し込めていた想いは、思いの外自分にとって重石になっていたらしい。あの時ばかりはルツにちよっぴり感謝をした。

「モランさん……？」

とはいえ、どう答えたものか。

ずっと黙っていたら余計に怪しい。ほんのりフォローをする程度で済ませておけば、問題なかったかもしれない。時期を逸してしまったことに後悔をする。

「えーと……」

「あれは積極的な回避ジツキョウですわ」

なんとか句を継つごうとしているモランを遮ったのは、ベアトリーチエだった。

「バルド先輩の攻撃に対し、フィーロ・ロレンツは一定の距離を保ったまま回避していますわ。そしてその距離は、ギリギリあの斧ハルベルト槍を躲し、またギリギリで自分の剣が届く距離。ここまで言えば解りますわね、エミリ？」

「え？ えー……えと……ごめんなさい。解らないです」

しゅんとして首を竦めるエミリに、ベアトリーチエは小さく嘆息してから口を開いた。

「要するに、カタハネの戦術……というかメンバーを考えれば済む話ですわ。学部首席のシエリカさんがいるんですもの。魔術詠唱の

時間稼ぎか何かですわ」

「時間稼ぎ……」

「それに気付かずモランに同意を求めても、モランが困るだけですよ」

「あ……」

ベアトリーチェの言葉に、エミリははっとした表情を見せた。そしてこちらを向いて、悄然と頭を下げた。

「ごめんなさいモランさん……」

別にそういう理由ではないが、訂正するのめんどくさくなるだけだろうと何も言わないことにした。罪悪感があったけど。

「あ、謝ることないよ。とにかく、試合見よう？」

「はい……」

悄気つつもスクリーンに視線を戻すエミリに漸く難去ったというように、ふうと息を吐く。なんだろうか。どっと疲れた。それを誤魔化すように観戦前に購入したジュースのストローに口をつけて吸う。

「……にしてもモラン」

「うん？」

「あの男のどこがいいんですの？」

ぴゅぷつ。

いきなりの一言に、モランは吹いた。「な、なな……」口を拭うことも忘れて唇をわなわなさせる。

さらに追い討ちをかけるかの如く、ロリエも口を開いた。

「ギャップじゃないかな。成績はレベル1だけどつって」

「まあ、らしかぬ戦力ではありますわね」

「ちょ、ちょっと待って待ってお願い待って。え？ な、なんで？」

この二人はなぜさも当然のように語っているのだろう。というか、本当になんで。モランはただひたすら困惑した。

「なんでって……見てれば解りますわよ？」

「そだね」

そだね、ではない。見て解るほどあからさまだっただろうか。気付かれたくなかったのに。こっちだって気付かれてないとずっと思っていたのだ。一体いつから。最初から……？

「まあ……わたくしたちだからかもしれないけど。エミリたちは知りませんし」

「ずっと三人組トリオだったもんね」

「……」

そういうものなんだろうか。なんだかんだで結成して間もないはずだが。でも、何がどうであれ、気付かれたということに変わりはない。これでいっそのこと開き直ればいけれど。性格的に無理だ。

「というか、モランも水臭いですわ。好きな殿方がいることをずっと黙ってるなんて。相談してくれてもいいんじゃないありません？」

「それは……」

「リーちゃん耳年増だから。相談してもね」

「ぶっ飛ばしますわよ、ロリエ？」

「あはは。ごめんなさい」

「まったく……」

相談……か。出来るわけがない。特にベアトリーチェには。いや、彼女に話しても無駄だという意味じゃないけど。というよりむしろ、相談してはいけないのだ。

「……それで、どうなんですの？」

「わたしは……その……」

「すでに諦めている？」

「う……」

あっさり凶星を突かれた。

ベアトリーチェは心底呆れたように深く溜め息を吐いた。深い深い溜め息だった。

「本当にお馬鹿さんですわ」

「馬鹿ってそんな……」

「お馬鹿さんですわ。大体、諦めてなんになるんですの？ 理由は知りませんが、まあ、モランのことですわ。大方誰かに遠慮したりしているんでしょう？」

「……………」
無言のまま俯いたモラン。ベアトリーチェはそれを肯定だと捉えたらしい。小さな溜め息が聞こえた。

「それがお馬鹿なのですわ。欲しいものを諦めるなんて、わたくしからしたらあり得ませんわよ？ しかも遠慮なんかで。わたくしなら全力で奪いますわ」

「う、奪うって……………」

「あら、略奪は恋愛の極意ですわよ？ それに、わたくしはモランの味方。仲間の幸せのためならば、いくらでも力になりますわ」
「ずるいよりーちゃん。わたしも味方だよ。いろいろ聞き込んだりしてるんだよ」

以前ロリエがフィーロに彼女うんぬんと質問していたのを思い出す。あれのことを言っているのだろうか。

ああ、でも、やっぱりだ。

解っていた。だから相談してはいけなかったのだ。
心が揺らぐ。

いろんな思いが胸中でぐるぐると渦巻く。彼女との友情がある。知り得ぬ彼の気持ち。彼には誰か特別な人はいるのだろうか。彼を好く人も多くいる。それを邪魔をすることへの罪悪感。そして隣にいる、大事な仲間の気持ち。ベアトリーチェもロリエも、きつとわたしの味方でいてくれるのだろう。それを無視できるほどわたしは強くない。

「……………わたし……………頑張ってみてもいいのかな……………？」

気付けばぼつりと呟いていた。

「……………本当にお馬鹿さん」

嗜めるようにベアトリーチェは言う。だけど、この「お馬鹿さん」はなぜかとても暖かかった。

「どちらにせよ、決めるのはモランですわ。……ただ、そうですね。後悔だけはしないようにしなさい」

「わたしは……」
後悔のない選択。

結局のところ、どれを選んでも後悔は残るだろう。

というか、だからこそわたしは今まで何も選べないでいたのだ。

わたしは欲張りだ。

あれも欲しいこれも欲しいばかりで、何も手放せない。手放すことを恐れている。それでもまだ何かを欲する。

そしてわたしが唯一諦めたものが、この恋心だった。

だけどこれだってただ後悔を恐れたがゆえの選択だ。

振られることを恐がっているだけ。彼への想いと彼女との友情を一編に失うのが怖いから、わたしは諦めという選択肢を選んだに過ぎない。

とんだ臆病者だ。

でも、臆病者になつて意地はある。

大体、欲張り者でもあるわたしが一番欲しいものを諦められる訳が無いのだ。

なら臆病になっている場合じゃない。

モランは俯いた顔を上げた。そしてハッキリと自分の気持ちを口に出してみた。

「やっぱり、わたしはフィーロ君が好き」

少し恥ずかしかったけれど、口に出してみてもよく解った。わたしはフィーロが好き。それはやっぱり諦めきれない。

臆病なわたしだけど、もう少し頑張ってみよう。

「よく言いましたわッ！」

そう決心するや否や、急にベアトリーチエが立ち上がった。

「ラヴ宣言」

「え……ちよっ……」

「モランがそう言う以上、わたくしは協力を惜しみませんわ！ 必

ずやあの男とくつつけてみせますわよ！」

「泥船にのつたつもりだね」

「大船ですわッ！ 茶々いれるんじゃないですわロリエ！ ……」
「ホン。とにかく！ モランの恋の大・ハート捕獲大作戦決行ですわッ！ おーほっほっほッ！」

「リーちゃん……お願いだから静かに……その……ただ漏れだから……」

大、二回言ってるし。

というか周りの視線が凄く痛い。

なんかヒソヒソ話まで聞こえる……。

「え、モランさんあの男が好きなんですかッ！？ ど、どういこうとなんですかッ……！？」

そして聴こえてしまったらしい、信じられないものを見るかのような目をしているエミリ。どうやらベアトリーチェのせいで完全にばれた。秘密どころじゃない。

「えーとそれはね……」

「わたくしがいれば完全無欠！ もはや勝ったも同然ですわッ！

おーほっほっほッ！」

「あはは、勝負じゃないのにね」

「そんな、ガナツシユさまあああッ……！」

「……」

收拾がつかないくらいに騒ぎ立てる仲間たち。いつでも味方だと言ってくれたベアトリーチェに、感謝はしているのだけれど、今は甚だ迷惑しか感じない。

「モランさん、説明を！」

「ああうん……また今度ね？ ほら、周りの目もあるし……」

「そんなのは構いません！ 今度っていつですかッ！」

「……」

わたしは構うんだよう……。

というか、早くも心が挫けそうだった。

「ちょこまかと……」バルドは巨大な斧槍を振り上げた。一気に間合いを詰め、「動くなッ……！」

爆砕。

岩が抉りとられるほどの一撃。音にさえなっていない、そんな破壊音を撒き散らした一撃をフィーロは寸でで躲し、「ふッ……！」バルドの腹に潜り込んだ。

普通の相手ならここで抜き手からの一閃をぶち込めることも出来るだろうが、そこはさすがバルドだ。膝が飛び出してきた。丸太のようなぶつとい膝だ。当たったら死ぬんじゃないだろうか。つか、確実に骨は砕ける。化け物め。

「ぐっ……」

フィーロは膝蹴りを交差させた腕で受けた。鈍い衝撃。傷口から血が吹いた。後ろに飛びずさって受けたから、ダメージは軽減しているはずなのだが、激痛が奔った。腕も痺れている。

「う羅アッ……！」

バルドが間髪入れず斧槍を突き出してくる。本当に遠慮なしだ。一直線に向かってくる閃光のような突きを、フィーロは身体を左に捌き、その勢いで払った。逸らすくらいなら自分でも簡単に出来る。力に差があってもさして問題はない。タイミングが合えばの話だが、とはいえ、痺れた腕でやることではない。少し痺れが悪化した。

フィーロはバルドを見据えたままで腕をぶらぶらさせて解ほくした。

ちなみに、フィーロの目的はバルドを倒すことではなく、時間稼ぎだ。この身体で出来ることなどその程度だ。だからといってただ回避してればいいというわけでもないのだが。

約七分。

シエリカが一撃必殺の魔術を完成させるのに要する時間だ。その

間、フィーロはバルドを足止めしなければならぬ。向こうが前へと攻めてくる以上、こちらも前に牽制しなくては向こうは退かない。足止めとは要するに、攻防を故意に一定の場所に留める技術だ。これほど面倒臭いものはない。

それにしても、要素魔術の力は詠唱に比例するものだ。七分も必要にする要素魔術。巻き込まれやしないだろうか。一抹の不安はあるが、やはり優勝候補のクランに勝とうと思えばそれくらいは必要だろうととりあえず思い込むことにする。

「 Ru 鬘BRAIN・co 靱鬚靄」

不意に、詠唱が始まった。あと五分。ということは準備込みで七分という訳か。それならそうと言ってくれと思う。

「まあ、別にいいけど……」

「よそ見する暇は無いぞッ！」

「うおっと」

フィーロはバルドの突きを躲して飛び下がるようにして距離を取った。着地と同時に地面を蹴り出し、間合いを詰める。傷口は痛むが、こうすることでバルドに対する牽制になる。身体を気遣っている場合ではないのだ。

「闇式anxxoxy罪Ye・Fonxetia」

フィーロは体勢を低く落として、腰の剣に手をのばした。

柄を握り、二歩三歩と距離を詰めると、抜刀の要領で抜き放つ。

反りのない直剣には不向きなのだが、そこそこ上手くいったようだ。低空飛行しながら浮き上がるように奔る一閃。

しかしながら空を裂くフィーロの攻撃は、他の何者を裂くでもなく、ひたすらに空を切ることとなった。音で表すならスカツというやつだ。もともと当たればラッキーというつもりで放ったから構わないのだが、やはりちよつとへこむ。

何せだん、という音とともに、上空に向かって飛び上がって避けたのだ。飛び上がって躲すとか反則だ。しかもあの図体で。つか、軽く三メートル以上飛んでいる。そう、あの図体でだ。本当に人間

か？ いや、獣人か。

「うるあああああッ……！」

隕石みたいに落ちてくる馬鹿でかい塊。

蛮族のような雄叫びをあげながら、落下による超加速を利用した一撃をフィーロは間一髪のところまで避けた。

地面を穿ち、破片を撒き散らす様は雷とでも言うべきか。洒落にならない威力だ。

「やべ、涙出てきた……」

もし当たっていたらと想像すると、全身から力が抜けそうだ。ミンチで済むだろうか。まず無理だろう。

「魂鷲妃 bag J L e x X 皇鐔悪駈」

まだ詠唱は終わらない。あとまだ四分。まだ気を抜けない。フィーロは頬を二、三回叩いた。

「っし……」

大丈夫だ。まだいける。血はまだ足りている。意識は割にはつきりしている。それにバルドにも若干の焦りが見える。なんとかなるはずだ。

フィーロは重心を落として構える。バルドもそれに呼応するように武器を構えた。

ふと、バルドの構えを見て、何か大事なことを忘れている気がした。だが何だったか。思い出せない。大事なことははずだったが。

「正直、ここまで出来るとは思っていなかったぞ」

フィーロが記憶を辿ろうとしたところで、バルドが口を開いた。

下に向きかけた顔を上げる。バルドは構えを解いていない。フィーロは何も言わずに、足に力を込めた。

「この程度と言ったのは謝ろう」

「構いませんよ」実際、この程度だし。

「名はフィーロ・ロレンツだったか？」

「ええ」

短く答える。ここで冗談の一言でも言えたらいいんだろうが、生

憎いっばいっばいだ。

「……覚えておこう。何せ、これを初めて使う一年生だからな」
背筋を冷たい汗が伝った。どうやら俺はやっちまったらしい。今からでも謝る路線はありだろうか。……無理か。

激しい後悔も余所に、バルドが斧槍を背面に持ってゆく。地面にほぼ平行。身体を右に開いた。フィーロの方からは十字に見える。構え、なんだろう。あれが。

「 G z e e E 霞 T p d v b q T 征嶺霊 b A i 濤稜 A s L e r t
r a

詠唱はあと三分弱。

バルドの技を耐えぬければフィーロの勝ち。出来なければ負けだ。シンプル過ぎて泣けてくる。

まあ、泣いても笑ってもこれが正念場だ。やるしかない。後ろにはシェリカがいるのだ。さすがに真剣にならざる得ない。

フィーロは剣を抜き、中段で構えた。そして笑みを作ってみせた。不敵に笑ったつもりだが、上手くいっただろうか。

バルドが口を釣り上げた。これが手本だと言わんばかりだ。少々腹が立つ。

「では行くぞ」

律儀にもバルドはそう言って、

「 G U U W O O O O O O O O O O O O O O O O O O H H H H ……ッ! 」

吼えた。

世界が震えた。身体中、いや心さえも震えた。これが本能的な恐怖だと気付くのに、些か時間を要した。

そして、その一瞬だった。

その震えた瞬間。つまりフィーロが居ついた瞬間に、バルドは地面を蹴り出した。

爆ぜる大地。

弾丸のように迫りくる巨体。

それだけで圧倒的驚異。

だがバルドの攻撃がそれだけで終わるわけがない。それは重々理解していた。だが、避けずにいられるほどフィーロの肝っ玉はでない。斧槍をぶんと一振り。なんとも軽く繰り出された一閃を、フィーロは飛びずさって避けてしまった。

カシユ、という音が耳に届いた。空耳のような小さく乾いた音だが、微かに聞こえたのだ。

そして同時に、斧槍が分裂した。

バリアフルウェボン
可変型武器。

俺は馬鹿か。今さら思い出しても遅い。後悔は先には立たないのだ。

「とくと味わえ」

バルドの不敵な笑みを浮かべた。あの目は獲物を狩る狩人の目だ。間違いなく、殺られる。

「Barraaaaaaarge……！」

G a n a c h e

爆風。

台風の風など微風かなにかと思わせんばかりの風が、ガナツシユの身体に叩きつけられた。まるででかい拳でぶん殴られたかのような勢いで吹っ飛ばされる。「がっ……」そのままガラクタの山に突っ込んでボーリングみたく弾け飛んだ。

「よっしゃストライク」

そう言ったエリックは、声しか聞こえないがガッツポーズしているに違いない。凄く腹立つ。

「っ……くそ」

歯を食い縛って、起き上がる。全身が煤すすに塗れていた。無様だ。

「Ru 鬚BRAIN・CO 靱鬚霈……」

要素魔術の詠唱が耳に届いた。ルミアかと思ってすぐに身構えた

が違った。シエリカだ。考えてみれば、背後から聞こえてきているのだから当然か。ルミアは目の前にいるんだし。

にしても、あいつは一発逆転でも狙っているのか。多分そうなんだろう。バルドとフィーロが交戦している。十中八九時間稼ぎだ。だが保つかどうか。それは置いておいても、時間稼ぎが必要な時点で永い詠唱である。フィーロの負担も大きそうだ。

「ま、フィーロなら大丈夫か。というか当面はボク自身だな……レイジ、大丈夫か？」

「当然や」

にっこ笑うレイジ。何が面白いのやら。

「ならいいさ。……にしてもエリックの風は厄介だ。どうにかしないとな……」

「なんとかなるやる」かつかつと笑う馬鹿^{レイジ}。

「お前、神風やるか？」

「死ねてか！ 死ねてことか！？ 嫌に決まってるやん！」

「遠慮するな」

「ガチで嫌なんじゃい！ オレは遠慮はもつとやんわりする派や！」

「いや、知らないし」つーかどうでもいい。

「おいおいおい、オレっちの謙虚さを知らんどうでもええで華麗にスルーはひどないか？ 絡もうや！ もっと積極的に絡もうや

！ この世は絡みやで！ ポケッツコミのギブアンドテイクやで！

一人で何せえ言うねん！ ピンか！ ピン芸か！？ オレにそんな淋しいことさせんといいだだだだだだだ……！？」

とりあえずウザイから捻りあげた。「お前は一人で十分やっ

ていけるさ」

「痛い痛い！ 痛い！ ごめんなさい！」

「悪いと思うなら今すぐ死ぬか最初からするな」

「世知辛い選択肢！ いだだだだだだッ！ ごめんなさいごめんなさいいいいッ……！」

サブミッション
関節技がこんな場所で役に立つとは思ってもよらなかった。これか

らも活用していこう。主に変態相手に。

「楽しそうだなお前ら」

耳元で地面を踏みしめる音。顔を上げるとエリックがいた。

「……」

忘れていたわけではない。いや、嘘じゃない。失念してただけだ。あ、意味は一緒か。

「見てて面白かったから黙ってたんだが、いやもうそろそろいいだろう？」

「ええ……わざわざありがとうございます」

「礼には及ばねえよ。楽しませてもらったし。それに「エリックが唇の端を釣り上げた。背筋を冷たいものが奔った。エリックの笑みに、ではない。急に变化した、簡単に表せば空気みたいなものだ。「もうこっちは準備も済んだわけだしな」

「……start:imaginationiprogram.
virtuallyrevolver……charge.seria
l elementalsorcery system:all
l green.chain of sorcery disch
arge」

「ルミア・アーティミス……！」

ガナツシュは反射的に太刀を構えた。この空気の変わり具合は間違いない魔術。詠唱に聞き覚えはなかったが、ルミアが魔術士である以上、ガナツシュの知らない魔術でもそれが魔術であることに変わりはない。

だが逃げる暇など与えてくれるわけが無かった。

「attack:frist barrage……鑽Amg緋
鵜Dept策壺讖怨Coughdel紫烈閃」

閃光。

無数の閃光が四散し、屈折し、そして駆ける。ただ一点を目指して駆ける。

その一点はガナツシュたちだ。

避けることは出来ない。逃げるなど最早論外。なら道は一つだ。迎え撃つ。

「ユーカリスティア！」

鶴の一声と言わんばかりに太刀は水の刃を身に纏った。既にコイツを展開しておいて正解だった。

目醒めるのは魔性の太刀。

蒼き波打つ刃。

神の創りし武器。

ユーカリスティア
聖体の秘蹟。

ガナツシユは自ら閃光の雨に突っ込み、

「喰らい尽くせッ……！」

吼えた。

太刀を全身を使い全速で振るう。風ごと断ち切る連撃。それらはルミアの放つ無数の閃光を払い落とす。ただ、実際雨を斬るような行為だ。全てとはいかず、何発かは脚や肩をぶち抜いた。急所じゃないだけマシだとガナツシユは無心で振るい続けた。

暫くして、嵐のような攻撃が止む。ズタボロながらもガナツシユは立っていた。一発一発の威力は然程強くない。だからだろう。とはいえ何発も食らいたくはない。当たり処が悪ければ死にかねないし。

というか攻めるなら今だ。

魔術詠唱中と魔術行使後の間隙。それが魔術士の唯一の隙だ。つまり、魔術の途絶えた今こそが狙い目なのだ。ぼけつと呆けている暇などない。

「レイジ、いけるか!？」

「おうよッ」

「よし、エリックを牽制しろ！ボクは魔術士を……！」

「second barrage……鞞媒徠Tortem庵鯨珠wxw煉炎舞」

「な……！」

馬鹿な。

あり得ない。

いくら何でも早すぎる。

「ガナツシュ……！」

レイジの叫ぶ声。解っている。避けないと。だが予想外の攻撃に、ガナツシュの身体は完全に硬直していた。

そしてその身はあっけなく炎の渦に呑み込まれた。

第一章(29) VS 砂糖の塊

Chlor

クロアは弓を引いた。

鷹の目は外敵の急所に狙いを定めて、放つ。矢は一直線に駆け抜け、

「せいッ！」

叩き落とされた。

まただ。さつきから一発も当たらない。スヴェンとかいう剣士。

一体あいつの目はどうなっているんだろう。

射手^{アーチャー}学科は概してあまり接近戦が得意ではない。突破力のある戦^ウ士学科や剣士^{セイバー}学科には劣る。盾持ちなどもはや天敵だ。

それはクロアも例外ではなく、交戦中のスヴェンはそして苦手な部類だ。

だけどクロアはぶつくさ文句を言ったりはしなかった。舌打ちくらしいはするが。少なくとも言い訳めいたことは口にしない。かつてお師さまに教えられたことがあるからだ。

『弓兵は言い訳をしない。』

まあ、間違っではないと思う。する奴だっているけど、やはり一流の射手は言い訳をしないものだ。出来ることを全てやって、それでダメなら潔く死ぬ。弓兵とはそういうものだとお師さまはよく言っていた。

お師さまは誇張した表現が好きだったから、本当にそうなのかは解らない。けどお師さまがまだ現役で弓を握っていた頃は、なんか気持ち悪い通り名とかあつたくらい強かったらしいし、あながち嘘ってこともないのだろう。

とはいえあの人は接近戦も強かった。「だって弓兵だったし」とか訳の解らないことを吐かしていたのを覚えている。曰く『射手は

射っただけ。弓兵は戦うだけ』らしい。なんのこっちゃ。

要するに、射手は弓を射るしか能がないと言いたいんだろう。お師さまらしい言い種ではあるが腹立つ物言いだと思う。だいたい、弓兵が接近戦に強いなど聞いたことがない。お師さまが規格外だっただけだ。

なんにしても、確かにクロアは接近戦は苦手だ。一応護身用に短剣を仕込んではいるが、正直使える気はしない。遊撃士学科や盗賊学科なら弓矢と短剣の両方を使う者はいるが、クロアはあくまで射手。使えないものは使えないのだ。

だがそこで諦めては、お師さまの教えに背くことになる。射手は言い訳をしてはいけない。最善を尽くす。

接近戦が無理なら近付けなければいい。ヒットアンドアウェイというやつだ。幸いクロアは動きながら射つのは得意だ。勝機は十分ある。はずなのだけど、

「……あたんない」
スヴェンという男はすべて叩き落としてくる。

あんなのどうやって倒せばいいんだろう。こっちは早くフィードのもとに行きたいのに。

正直、今すぐ投げ出してしまいたい。巨乳と猫耳の生死なんてぶっちゃけどうでもいいし。巨乳にかんしてはさっさと死ねばいいと思う。あれはむしろ敵だ。

でもフィードは仲間を見捨てたりしない。優しい人なのだ。わたしのような人にも別け隔てなく接してくれる。彼の中には人種などという垣根は存在しないのだ。だからあの二匹を見捨てれば、フィードはきつと傷付く。それは、それだけはいやだ。

クロアは矢をつがえ、スヴェンに向かって放った。すかさずもう一発お見舞いする　　が、

「ちっ……」

また叩かれた。一本目は剣で、二本目は回し蹴りで潰された。本当に人か、あれは。

だが舌打ちするあたり、向こうもイライラしてきているみたいだ。それがこっちにプラスになっているのか……よく解らない。とりあえず怖い。

「……………よし」

仕方ない。これを使おう。

もともと使うことになるだろうと思っていたから問題ない。そもそもそのために持ってきたのだ。いつ使うかなどさしたる問題じゃない。

クロアは背中に背負ったそれを降ろして、ぐるぐるに巻かれた白い布をばさりと剥がす。

それは特殊な材質の角材みたいなものがいくつ折り畳まれた代物だった。三脚を思わせる形だ。ちなみに三脚じゃない。こんな太い三脚はない……と思う。少なくともクロアは知らない。

スヴェンが警戒を強め、立ち止まった。判断としてはいささか思慮に欠けている。学科を考えれば、ここは攻めるところだろうに。まあクロアとしてはラッキーだ。すぐに作業に取り掛かる。

といつても、作業はほぼ一瞬だ。一つの引き金トリガーを引いてしまえばほぼ完成する。ガシャリ、と引き金　少し短めの棒を立てると、一気に他の部分が開いた。

「そいつは……………！」

スヴェンはもう気付いたらしい。なかなか情報通だ。しかもすぐに前進してきた。それはこの武器を持つ射手学科の生徒に対して正しい判断だが、クロアに限ってはそうとは言い難い。

「………フライヤも準備は出来ているのだ。」

「……………発射」

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！

射出音というか、何か掘ってるみたいな音。反動も凄い。少しずつ後ろに退いている。

連発式自動弓銃のデカイ版。

アイバレスト

弩砲、と呼ばれる武器だ。ただし連射可能な、が付け加えられる

が。

カラミティブレイズ。

数少ない知り合い　鍛冶士学科なのだが　の試作品として提供してくれた特注品。大層な名前だと貰った時は思ったが、いざ使ってみればなんのことはない。確かに災厄だ。カラミティ

にしても、毎回思うけど腕が痛い。どっちかかっていうと使うほうに迷惑な仕様だ。使う方にも災厄が及んでいる気がする。

「ちいつ……！」

スヴェンはといえば、大剣を立てて防御していた。剣幅の広さのせいで急所には当たらない。何本か刀身に突き刺さったが、貫通まではない。まだまだもう一押し必要なのか。しかし手が無い。最大の攻撃がこれなのだ。矢が切れたら終わりだ。

やはり射手は援護に徹するのが一番なのか。自分一人ではどうやってもあれを倒しきることは出来そうにない。正直少しは残念だが、別にそれでもいいのだ。射手は務めは果たせばそれでいい。今大事なのは奴を倒すことだ。だがわたし一人では無理。せめてあと一撃を加えられる奴がいれば……。

今の状況下でそれが出来るのは一人だ。あの猫耳。それなりに優秀な銃術士学科だ。ランサー 一対一ならいざ知らず、この状況ならスヴェンを倒せるはずだ。癩だが、頼るしかない。そう思い、クロアは後ろを見た。

猫耳は、走り去っていった。

あり得ない。

Monica

今はただ憎かった。

昔はどちらかといえば好きだったと思う。兄のように慕っていたこともあった。

昔の話だ。

バルドは純血のラグノス種の家系として生まれ、武に長けていた。慢ることなく、ただ高みを目指していた。当時のバルドはとても真つすぐな眼をしていたと思う。恥ずかしい言葉で表すなら、純粋な瞳をしていた。

師団長であるモニカの父親と、副団長であるバルドの父親が同じディヴィジョン・オブ・ドラゴン竜槍騎兵師団の、ともに戦友と呼べる間柄だったのもあって、バルドとは幼い頃からよく一緒にいた。いわゆる幼馴染みという存在だった。

物心つく前から母親亡きモニカが女がてらに槍を持ち、父親の後を追うようになったのはある意味必然だっただろうが、その始まりもそれからの支えも、あの頃はバルドだった。モニカにとっては、バルドは第二の師だったのだ。

それがいつからか狂い始めた。小規模ながらも大変な戦があった。人種差別徹底主義者とも呼べる、獣人や亜人を蔑視する団体が軍を率いてきたのだ。

宣戦布告は城壁への一撃だった。

混乱する城下をディヴィジョン・オブ・ブラットリック上ディヴィジョン・オブ・ハンツァーリッターリッター、虎砲重兵師団、そして竜槍騎兵師団。一つの目的のもと、各々の役割は単純明快なまでに別れている。それぞれが自らの役割を果たし、そして最終的には蹂躪する。ナインエルドの軍隊とはそういうものだ。

モニカは年齢、性別、経験の問題で支援部隊だったが、バルドは期待のルーキー、なんの疑いもなく前線を担う部隊にいた。戦場そこで何があつたかなど、モニカには解らない。でも何かがあつたのだ。それは間違いない。現にバルドはあの頃からおかしくなつたのだから。

戦争には勝った。そもそも卑怯な手で攻撃を加えてきた奴らだ。平和の逆賊だし、同盟国もそんなことで人間に汚名を被せたくはない。すぐに各国で討伐隊が編成され、こちら側に加わった。戦争は

三日もかからず終結し、首謀者の首を刎ねることで丸く納まった。

だが舞台が城下だったのだ。復興の方が大変だった。その間も訓練はあったし、復興の手伝いもあって、モニカはくたくただったのを覚えている。といっても、別に簡単な作業だったが。

その中でバルドが唯一深刻な表情でいた。その時の表情は、なんとも表現しがたいものだったのでよく覚えている。

復興から二ヶ月。もう傷痕も目に見える分は消えた頃。とても清々しいくらいの小春日和。その日が全てを狂わせた日となった。

ナインエルドの伝統的な訓練に、『荒ぶるテンベストロアロウ獣神の魂』というものがある。最悪、死傷者まで出しかねない、完全な実践演習だ。刃は潰さず、鋭利なまま。死ななくとも、怪我は避けられない。昔から獣人の戦士はこうして自らの気を高め、戦いに臨む。良くも悪くも慣習というものだ。

とはいえ今は平和な時代だ。戦争も滅多に起こらないというのに、訓練で死人を出して獣人の数を減らしては話にもならない。それに今は治癒術というものも存在する。『荒ぶる獣神の魂』も、形式化していたの言うまでもない。

鈍い鐘の音。

始まる訓練。

雄叫びとともに戦士たちはぶつかり合う。

肉体と肉体、鎧と鎧、槍と槍がぶつかり合い、不協和音を奏でる中で、バルドはモニカの父と対峙していた。互いに向き合い微動だにしなかった。

周りが激突し合う中で、二人はじっとしていたのだ。訓練概要からは逸脱した光景ゆえに、まだ訓練参加の許可を得られず場外で見学していたモニカはじっと注視していた。周りの者もそうだっただろう。困惑さえしていたに違いない。

そして、ほんの一瞬。

周囲の音が途切れた、ほんの一瞬。一刹那。

血飛沫が舞った。

赤い。紅い。朱い。

青空にはまるでそぐわぬ真つ赤な世界が出来上がった。

モニカは瞬きすら忘れていた。何が起きた？ そんな周りの動揺の声が、ようやくとモニカを現つに戻した。

「お父様っ……！」

モニカは叫んだ。

十

「もういいですよ」

ユーリが覗き込んで言った。浮かぶ微笑みはもはや燦然と輝く太陽の如し。ああ、ユーリ万歳ユーリ最高。

モニカは起き上がる。少し軋むが、痛みはない。優秀な治癒士であるユーリに万が一の狂いもあるまい。ユーリ天才。

「痛みは無いですか……？」

「ええ、大丈夫なのだわ」

あつても言わない。そもそもユーリにミスなどない。仮にあつたとしても揉み消す。これは世界で定められた約束事だ。逆らうものはこれ悪と見なし、即劫火の中で百刺し千切りだ。

モニカは薄く笑む。心配性のユーリに、もう大丈夫だと。

ユーリはほつと息を吐いた。超ブリティー。

「でも、施術後は身体が脆いですから……無理は禁物ですよ？」

「解ってるのだわ」

ストームランガー

すく、と起き上がり、三叉槍を掴む。吹き飛ばされても握り締めていたようだ。我ながらよくやった。まだ、負けじゃない。

視線を泳がせ、目標を探す。
いた。

対峙するのはフィーロ・スケコマシ・ロレンツ。

ボロボロだ。様ない。いい気味だ。そのまま死ぬ。笑おうとして、表情は固まった。

なんだか、タブって見えた。あの時と。対峙し、動かぬ二人。まるで、あの時と同じ情景。

「……っ！」

そしてあれは。

あのスケコマシを父親と被らせたのは一瞬だったとしても、一生の不覚だ。

だとしても、ああまで似ていては。

いや、スケコマシだったからじゃない。スケコマシは父親とは全く似ていない。別物だ。仮にも、いや、仮じゃなくても憎き敵。父親とダブらせるなどあつてはならなかった。あんな人畜有害な奴。違うのだ。ダブって見えたのはバルドのせいだ。

あの作弄的なまでに作り上げられた情景が、バルドによって完全に再現された。多分、対峙しているのが他の馬鹿どもでも、今のアタシには。

「Barraaaaaaaarge……！」

「う……」

弾けた。

バルドのあの喊声を聞き、弾けた。

愛槍を握り締め、弾けた。

「モニカちゃん……！？」

この時だけは、ユーリの声は届かなかった。届くはずもなかった。矛先を奴に向け、猛進する。

無我夢中。

何を叫んでいるのか解りもせず　　驀進。

「ああああアアアアアッ……！」

奴は。

バルドだけは、

アタシが倒すのだ。

その一念だけがモニカを突き動かしていた。

F i r o

暴虐。

これは暴虐だ。あの宙を舞う九の槍は、暴力なんて生易しいものじゃない。

バリアフルウエボン
可変型武器。

旧きかの時代『空白の時代』ホワイトエイジの数少ない技術から生み出された、否復元された武器。合体と分離、変形のだいたい二種類で分類されるが、バルドの斧槍ハルヘルトは前者だろう。九つの槍が組み合わさって出来た武器だ。

槍型の合離系可変型武器なんて珍しいが、あつたらおかしいという話でもない。これを目の当たりに、つーかこの身で体感していると納得してしまう。そんな冷静にしていられる時間はないのだが。

「O o o……！」

右から迫りくる槍。

フイー口は空中で身体を捻って躲した。が、次は左斜め上から。立て続けに真左から、槍が襲い掛かってきた。九の槍をひつかえとつかえ。あり得ん手数だ。タコかコイツ。いや九本だしタコの足より多い。いやはや全く笑えない。

突くのではなく、殴る。

槍の本質からはいささか掛け離れた使い方ではあるが、だが槍を棍棒にはいけない決まりはない。だいたい、“薙ぐ”という言葉があるくらいだ。思えば槍は突きと考えてしまつのも短絡的ではある。

なんて。

冷静に思考している暇などない。空中で身体を捻るのは、人間出て一回が限度だ。何か勢いをつけるものがあれば話は変わってくるが。

この場合、剣を振る反動を使えばなんとかなるのだろうか。いや、

この場合だからなんとかならないだろう。

剣を振れば間違いなく目の前の槍とぶつかり合う。ぶつかれば止まる。向こうにいいように利用されるだけだ。

よって剣は使えず、避けられる訳もなく、

「ガッ　ぐあッ……!!」

右肩と右脇腹を直撃。また痛いところを突いてくる。ああ、殴ってくるか。しかもご丁寧^ごに地面に叩きつけられる前に救い上げてくれやがる。

あり得ねえ。

鬼だこの人。

「ち……くしょ……ッ!」

「まだ意識があるか!　ふはは、やるではないか!」

破顔し、超嬉しそうなバルド。鬼だ、絶対。やるってなんだ。サンドバックとしてですか?

「これを初めて使った相手は戦士として使い物にならなくなったものだが……お前はどうか!」

どうもこうもない。痛いし死にそうだ。いくら精神世界的空間でもやっていいことと悪いことがあるだろう。人を使い物にならなくなるくらい痛め付ける技を前途ある後輩に使うな。

とは言う暇も与えちゃくれない。ひどい先輩様だ。

滅多打ちのタコ殴り。

暴力通り越して暴虐。

取り敢えず宙を弾け舞う真つ赤な鮮血が、花火みたいで綺麗だなあとか思ってしまったくらいに感覚がイカれてきていた。

「　御徠疊・頸禍柘霰^ハEuphamie sebles」

こんなんになっても、シエリカ^{こえ}の詠唱だけは鮮明に聞こえた。もういい加減完成しないのか、その魔術。

「長すぎだつて……ッ!」

翻す。

腰に手を。

柄を握り。

振りぬく。

「甘いッ……！」

弾かれた。

容易く、弾かれた。

解っている。悪あがきだ。こっちはバルドを倒す気などないのだから。いなされて当然だ。

「熔鉄脚蹂 x x T D 業・ a x f f i a x n x i a s 隆吋」

そつだ。倒すのはシエリカだ。俺じゃあない。

適材適所。

俺に、人を倒すことは出来ない。

俺は、守るだけだ。

この身は盾なのだ。脆くも堅固な、盾。

「これで、終わりだッ……！」

一本の槍がこちらを向いた。バルドという名の槍が。フィーロにとつての死神の鎌。死へと誘う獅子の咆哮。真っ直ぐそいつはフィーロの心臓を目がけて奔った。

詰み、というやつか。

さしものフィーロも諦めに入った。詰まれちゃあ、もう挽回はない。せめて我が身を盾としよう。何があるうとも、必ず守る。それが約束だから。

でも、それはいつ約束したものなんだ。

そもそもそれは誰とした約束なんだ。

思い出せない。俺は、この約束を誰と契った……？

「ああああアアアアアアアアアアアアアアアア……！」

悲鳴。

喊声とか、鬨の声とか、呐喊とかそんなものよりも。悲鳴。甲高い悲鳴だった。

モ二カ。

いや、っーか。

「なんたって、ここにいる？」

「ぬ……」

だがそれが功を奏したか。バルドの意識が逸れた。突然のモニカの登場に、バルドの槍が勢いを失った。

槍は変わらずこちらに向かっている。状況だけならずすでに詰み。だが、勢いを失ったなら話は別だ。

「くあ……っ！」

渾身のチョップ。狙いは当然のことながらバルドの槍。心の臓を狙った槍の照準をずらす。

ずぶりと槍の穂先が肉を穿つ。だが致命的な部分は避けた。これで他の臓器がやられていたら意味がないが、まあ心臓よりはマシだろう。いやヤバイけど。すぐには死なない。ユーリに治療してもらえば問題ないだろう。余裕あるか解らないけど。

「く……そがッ！」

すぐさま両手で槍を掴み、引っ込抜く。尻餅をついて、なんと有些不恰好に着地した。

「あつつつ……マジであり得ねえ……」

絶対もうやらないこんなこと。

「 災裂 d e f j a x ・ A n o s 神刃黒羽 J g u v 犀盃 」

あと数秒だ。もう少し。

「バルドオオオオオオッ……！」

「ちい……お前では勝てんと……」バルドは斧槍をぐっと引き、「言っているッ！」

雑いだ。

保身なき突貫を敢行していたモニカは直撃を受け、吹き飛ばされる。

「あく……ッ」

「モニカ……！」

ごろごろと転がって倒れこむモニカを見て、フィーロは慌てて立ち上がり、駆け寄ろうとして 止めた。

「ちよつ……なにす」

「後にしろ！」

何か言いたげなモニカ言葉を遮って退避する。構ってられるか。それどころじゃない。

バルドから十分距離をとったと同時に、空中から光り輝く四本の剣が現れた。

S h e r i c k a

「 悠 M e D U ・ o C t 酷殺蓄怖醜裴 d e a x x T B L A D E

炎天竜極滅・二式」

魔術は完成した。

うねりをあげる火の精霊。彼らは笑っていた。狂喜していた。あるいはまるで無邪気な子どものように。そしてそれはうねりとなって顕れた。うねりは瞬時に凝縮され、四本の光り輝く剣を形成した。恐怖を司る火の精霊。

彼らを神格化してよいのかは未だシエリカにも解らないが、仮に彼らが何かを司るといふならば、シエリカは狂喜だと答えるだろう。恐怖ではなく。

狂喜。

彼らは破壊をただ純粹に楽しむ。恐怖を与える側の存在。つまり恐怖はあくまで結果だ。彼らが真に司るものは、破壊の快感。狂気の悦楽だ。

火の精霊が御しにくいのは、圧倒的なまでにイカれた精霊だからなのだ。だけど、シエリカには関係がない。すべての精霊はシエリカとともにあり、従属し、行使される。

それが“精霊憑き”の力だ。

シエリカは彼らに命じた。

壊せ、と。

ただ破壊を命じた。

シエリカの命を受け、四本の剣は輝きを増し、バルドに急襲する。まるで嬉々としているかのようだ。

炎天竜極滅・二式は“竜殺し”の魔術である。いわゆる屠竜魔術と呼ばれる魔術だ。系統としては要素魔術に分類されるが、その威力の異質さから別格扱いされている。

大元はクラン《クロムウエル》の高名な魔術士、“クリムツン深紅の”リオニカが編み出した炎天竜極滅。それをさらにイネス・ラトクリフが勝手に改造したのが炎天竜極滅・二式だ。まあイネスが自分で言っているだけだし、本当かどうかは定かではないが。

そも炎天竜極滅がオリジナルではない。ホワイトエイジかの時代の魔術が基盤になっている。どいつもこいつもパクリ野郎ばかりだ。

この魔術に必要な触媒は中に延々と燃える炎を封じた石、フランメル焰輝紘から造った短剣。紅玉。ルビ竜の血で描かれた魔方陣。

魔方陣は適当に描いたため、歪だったから発動するか不安だったが杞憂だったようだ。さすがあだし超天才。

炎天竜極滅自体は超高熱の火の精霊をさらに超高圧縮し、光剣を形成する魔術で、突き刺せば竜でさえ焼き殺すことが出来るほどの威力だ。そして二式はそれを四本作る。魔力の分配率が半端じゃないため、一本の誇る力自体は二、三割ほど減少するが、三本の矢ならぬ四本の剣だ。全部ぶつければ一本の比じゃない。

それがすべてバルドに向かうのだ。竜でもなんでもない一介の獣人に。ただで済むはずがない。

ないはずなんだが。

「温い……温いぞ魔術士ッ！」

そう叫び、バルドは斧槍をぶん回した。

そして光剣の一本を横殴りに薙いだ。

拡散。

火を、光を撒き散らしながら、光剣は拡散した。言うなれば空中分解。あり得ない現象ではないが、あり得ない行為だ。いや、あり

得ない行為だが、あり得る現象だろうか。

ただの武器に魔術は防げない。それは誰もが知っていることだ。魔術士に対抗できるのは、同じ魔術士か、一握りの、例えば神具を扱う者くらいだ。それほどまでに魔術の、こと要素魔術の構成は強固なのだ。例外こそあれ、バルドがそのどれかに分類されるとは思えない。だから、魔術を直接叩くなんて行為は常識的にあり得ない行為なのだ。

だがバルドは二本目まで破壊した。まるで木こりが木を斬り倒すかのような見事なフルスイングで、これまた見事に薙ぎ払った。

シェリカは残り二本を一旦引き戻した。無理矢理やってるから超しんどい。二本の光剣の構成を緩め、結合させて一本の剣にした。これも少し無茶だが、シェリカの仮定が正しければ、こうするしかない。要するに一か八かだ。

あれが“加護”によるものならば。魔術士ルミアの対魔術用の加護がバルドの斧槍に、いやバルドそのものに附加されているとしたら。だとすればそれはあり得ない行為ではない。加護を施された戦士に出ることは直接薙ぎ払うことなのだから。

再び命令を下す。

急襲。いや、猛襲しろと。

光剣は忠実にバルドに向かった。突き刺し、焼き払うために。

「ふははは、考えたな！　だが……」
果たして、

「　甘いッ！」

光剣はバルドの斧槍に消滅させられた。

「そんな……」
馬鹿な。

屠竜魔術を弾くほどの加護なんて。神具でも使っているのか？

「詰めを誤ったな、魔術士」
これで終わりだ。

言っや否や、今度はバルドがシェリカに猛襲を仕掛けた。土煙を

上げるほどの猛進。すでに目前。シエリカの身体能力では避けるな
ど不可能。

もはや最後に来るのは、
信じることだけだ。

そして信じている限り、いつだって飛んできて守ってくれるのが
フィーロだ。

「まだ終わりじゃねえよ」
「ぬっ……」

シエリカの前に疾風のように現われたフィーロは、次の瞬間には
黒光りする片手剣を斬り上げていた。風ごと巻き上げるような斬り
上げ。粉塵が舞った。まさか弾かれるとは思っていなかったである
うバルドは、バックステップを踏む。

「たく……なにがこの程度だよ……滅茶苦茶準備万端じゃないです
か、バルドさん？」

シエリカはフィーロの背後にいるため表情は見えないが、苦笑し
ているような口調だった。

「相手は嘗めても油断はしない質でね」

「だからって魔防バリアンサー加護はないでしょうよ」

「相手は学部首席の魔術士だろう。十分だと思っが」

「そりゃまあ、そうですね」

フィーロは剣を一旦収めて、小さく嘆息。それから首を鳴らした。
なんだろう、と思いきやいきなり浮遊感。「きゃ……!？」小さく
悲鳴を洩らしてしまった。気付けばお姫さま抱っこされていた。あ
あ、何度目だろう。もう何度されても最高。ビバお姫さま抱っこ。
フィーロはそのまま後ろに飛びずさり、バルドから距離を開けた。
ゆっくりシエリカを地面に下ろす。残念だ。

「魔術使って疲れたろ。休んでな」

「うん……でもまだいけるわよ？」

「無理をする必要ないだろ。それに、魔術を弾かれるんだ。狙うな
ら加護の効力が切れるころだろうさ」

「そう……そうね。解った」

「ん。じゃ、もう少し気張るよ。それと……モ二カ」

「……何よ」

「ユーリの護衛はどうした」

急に声のトーンが下がった。

フィーロはバルドを見据えている。猫耳女を、いやシエリカも見
ていない。なのに冷たいものを感じた。冷めた冷たさではなく、ど
こか熱い冷たさだと思った。

「……」沈黙する猫耳女。

「さつさと持ち場に戻れ。つーかクロアを助けに行け。大分ヤバい
だろアレ。このままだとやられる」

その言葉に釣られて視線を移すと、無口女がスヴェンと戦ってい
た。いや、戦っていると言っているのかどうか。完全に防戦だ。

本来あの場所にはなくてはならないのは、猫耳女のはず。つまり
この猫耳女は、役割を放棄したのだ。

「アタシは……あいつを倒さないといけないのよ。そもそも心配な
らアンタが自分で行けばいいのだから」

「……それは本気で言ってるのか？」フィーロの声に怒気が混じり
だした。

「……」黙り込んだ猫耳女。ややあつて、口を開いた。「……本気

よ」

「……そうか」

そう漏らし、目線を少し伏せる。フィーロの中で何か決心がつい
たのか。顔を上げ、身を翻したと同時に、

パン！

と乾いた音が響いた。ペチン、とか生易しい音ではなく、パン。
一瞬、何が起きたのか解らなかった。いや、解ってはいた。だけ
ど信じられなかったのだ。目の前の光景が。

フィーロが、猫耳女の頬を叩いていた。

信じられない。でも、猫耳女の赤い頬を見たら、信じざるえない。

別に猫耳女を叩いたことが信じられないのではない。フィーロが、誰かに手を上げたことが信じられないのだ。おふざけでもなんでもない。完全な怒りから手を上げたことに。

別にこれが初めてな訳ではない。でも、あの日以来、見たことはなかった。だから余計に信じられなかったのだ。

それほどまでに、フィーロは今キレている。

「何を……何をするのよ」

恨むような目でフィーロを睨む猫耳女。だけどフィーロはまったく動じていなかった。

「解らないか？ だからバルドに勝てないんだよ」

「な……」

「団体戦で独り相撲してるお前に、バルドを倒すことは出来ないと言っただ」

「そんなの……！」

「やってみなくちゃ話からないってか？ やらなくても解るし、やっつて負けてるだろ」

一切の反論を許さないフィーロの言葉。猫耳女は黙り込んだ。だけどフィーロは喋るのを止めたりはしなかった。

「バルドは、《ランプ・オブ・シュガー》の一人として行動している。どんなに彼らが個人主義でも、だ」

俺たちも大概個人主義だがな、とフィーロは付け加えた。

「だからバルドはクランの斬り込み隊長でもあり、堅固な盾として守っているんだ。それは俺たちも一緒なはずだ……なあモニカ」

じつ、とフィーロは猫耳女の目を見据えた。見つめ過ぎ。というか近い。近い近い止める離れる猫耳女。

「君は誰かを守ったか？」

「……」

猫耳女は何も返さなかった。いや、返せなかったのだろう。

いくら個人主義者の集まりでも。そこに“チーム”が存在するかぎり、個人は役割に沿う義務がある。それを果たしてこそ、自由に

戦う権利が与えられる。

シエリカならば魔術の行使そのものが役割。だからその中で、自分がやりたいようにする。誰しも役割の中で自由に動く。

だが猫耳女はただ私情に身を任せた。それが他の者に迷惑を掛けた。フィーロはそれに怒っているのだ。

それくらい仲間が大事なんだろう。それがフィーロのいいところで、シエリカが好きなどころだけど、正直複雑な気分だ。

「仮に」

でも、

「俺があの人のもとに行くとするけど……君は、いや……君にこれはさすがに、

「君にシエリカを守れるか？」

超惚れた。

複雑な気分？ 何それ。知らない。今サイコーの気分だから。

やば、鼻血出そう。

今のレコーディングして焼き切れるまで聴き返したい。百回くらい、いや千回でも万回でも聴きたい。

「……顔赤いぞシエリカ？ つーかおい、鼻血出てんぞ大丈夫か？」

「フィーロは最高よ！」ぴゅつと鼻血が飛び出た。

「汚っ！ つーか何言ってるんだお前」

まあいいや、とフィーロは首を傾げつつも、気にするのをやめた。ポケットからハンカチを取り出し、シエリカの鼻と口元を拭いた。

鼻血が出てたのは失態だが、これのおかげでちよつと幸せ。心の中

は。+。(* 、)。+。こんな状況。

「……とにかくだ、モニカ。俺が言えた義理じゃあないだろうが、なんつーか、甘え過ぎ」

シエリカの鼻血を拭いながら言うものだから、少々シニール。と
「うつか締めりがなかった。

「……甘え」小さく、猫耳女は呟く。

「頼るのと甘えるのは違うものだ。それに気付くべきだ」

「あたしが誰に甘えているっていうのよ……」

「ユーリ」

フィーロは即答した。ユーリって誰だ？ ああ巨乳女か。

「というか全員カタハネだな。つまり、自分自身にもってことだよ」

言いたいことはなんとなく解った。ゴロニヤンと甘えているとかそういうのではないのだろう。そんな猫耳女はキモイだけだ。普段とのギャップからキモさも五割増した。

心の底で、私情を優先しても他の面子メンツがなんとかしてくれろと、勝手に決め付けていたのだろう。

それは信頼ではなくて、甘え。

フィーロはその甘えが……いや、その甘えから仲間が必要以上に傷ついたのが許せないのだ。まあ、あたしからすれば仲間でもなんでもない赤の他人以下の存在だけだ。

「でも、まあ」

急に、フィーロから怒気が消えた。さっきのが嘘のように。

「ガナツシユの言葉を借りれば、僕らは“未熟者”だ。これから成長してけばいいだろ」

にっと笑んだフィーロ。凄くいい笑顔だ。写真写真カメラカメラ。ああ、そういえばこの試合はモニタリングされてるんだっけ。写真とか撮れないんだろうか。スクリーンショット。

「アンタに未熟と言われたくないのだから……」

「違う。だけど、今のモニカよりは使えるよ。多分な」

ついわけで、とフィーロは剣を勢い良く抜き放った。シャン、と美しい摩擦音とともに、黒く光る刀身が現われた。

「今から獅子狩りのお時間だ」

第一章(30) VS 砂糖の塊

Ganache

「……くそつたれ」

危なかった。

冷や汗ダラダラだ。というか死ぬかと思った。まあ、死なないんだが。とは言え心地いいものでもない。寧ろここでの死など最悪の気分だ。ただせさえ痛みがリアルだっというのに。

「ほー。その剣、盾にもなるんだな」

「自分の身を守るのがやっとですよ……」

エリックの口笛混じりの腹立つ感嘆に、ガナツシュは苦笑いで答えた。結局、己の身は守れても仲間の身は守れない。情けない話だ。

「みんな大体そんなもんだって。泣くなよ」

「泣いてませんが……」

「そか。んじゃ、そいつは汗か。イケメンの汗は爽やかだな」

「結構べたつくほうですがね……」というかそんな話どうでもいいです」

本当にマイペースな男だ。調子が狂う。

「なんにしても、自分の身を守れて初めて他人を守れるもんだろ。

そんな気を揉むなよ」

「そんな簡単なものではないんですよ……コイツは」

ユーカリスティア。ボクはコイツに救われた。

ガナツシュに迫った危機に、ガナツシュ自身は反応出来なかったのだ。ユーカリスティアがその危機に反応した。自らの使い手を守るための行動……いや、違うか。自らの餌を守るため。コイツは水の盾を生み出した。しかもちゃっかり使用分の代金だけは頂いていた。まめな奴だ。

「まあ、助けられたのは事実か……」

礼くらいは言ってもいいかもしれない。ユーカリスティアのお陰でボクは闘える。

コイツはボクを糧にし、ボクはコイツを力とする。

こんな関係がいつまで続くのか。そんなものは決まっている。願いが果たされるまでだ。そのためならこんな魂などいくらでもくれてやる。まだまだお前には働いてもらうぞ、ユーカリスティア。

ガナツシユは波打つ太刀を構えて切っ先をエリックに向けた。

「ボクはこんなところで立ち止まれないんだ！」

「そうかい」エリックは口許を吊り上げる。「そいつぁ愉しみだ。

頑張つて足掻いてくれ」

「余裕こいてられるのもそこまでだ……レイジッ！」

「どっせええい！」

待つてましたといわんばかりに吊り目の変態は一気に駆け抜けた。その速さは神速。目では捉えられない速さだ。

レイジが次に姿を見せた瞬間には、エリックとの距離はもうあつてないようなものだった。「もらったあああッ！」

「どうかかな？」

「骸×A辰天BLUE犀極架戎蒼磐幻GOOPS戲纏SiMx
葬棺電剣」

空気が冷える。目に見える程の冷気が頭上で渦巻く。まるで渦潮みたいにくるぐると廻り。真ん中に収束する。

顕れたのは氷の剣。

ルミアの魔術だ。

降下するその標的はレイジだった。「嘘ン!？」

「デッドゾーンだぜ」エリックは不敵な笑みを作りながら、扇を一閃させる。「そこはよッ！」

同時に氷の剣が地面に突き立てられる。地面が霜に覆われたかのように凍りつき、冷気が充満する。全てを凍てつかせる必滅の冷気は、急に渦を巻いた。

エリックの風で巻き上げられたのだ。

言つなれば冷気の竜巻だ。

「レイジッ……！」「まだまだまだまどうああああっ！」
ガナツシュが叫ぶと同時に、それ以上の雄叫びを上げてレイジが竜巻を突き破つて出てきた。肩の辺りが凍りついていたが、気にする様子もなく着地。

「おらああっ！　こんなもんじゃオレは止まらんでえええ！」

対の小刀を逆手に、レイジは稲妻の如く駆けた。

再びエリックとの距離を詰め、右の小刀を細かく振る。エリックはそれを防ぐが、レイジは予測していたかのように左をアッパーカットのように下から斬り上げる。

エリックは頭を引いて回避しようとした。

「く……」鮮血。浅くだがエリックの頬が裂ける。

「零蝕精T O A R 鎧鏡電障 J i H e i l e x 魔氷窮」

距離をとろうとするエリックに張り付くレイジ。それを引き剥がそうとするルミアの魔術。呀電槍に似ているが、あれは複数だったのに対しこちらは一本だけだ。すなわち一撃の重さは上と見ていいだが「させるか！」ガナツシュがそれを叩き落とした。所詮はユーカリスティアの敵ではない。

「レイジ、畳み掛ける！」

「ぬうらああああッ……！」雄叫びを上げてレイジがラッシュを掛ける。

「うおっ、やべっ」

緊張感の無い声とともに回避を続けるエリックだが、それは辛うじてなのか余裕の表れなのか。

いや、余計なことは考えるな。確実に圧しているはずだ。確実に

「ぬおっ！？」

「な……」

不意に吹き飛ばすレイジ。

何が。いや、そんなもの、考えられることなど一つしかない。浅

はかだった。何が圧しているだ。考えれば解ることだ。

エリックは風を操る扇術士だぞ。奴の武器は至るところにあるのだ。

「突風注意だ。気を付けな」

本当に。どこまでも。「気障っばい！」

「酷評だなあ」

ガナツシユはレイジの横を走り抜け、エリックに斬撃を繰り出すが、やはり躲される。避けざまに押し風を繰る。風刃。至近距離から放たれる鎌鼬がガナツシユを急襲する。

「ぐっ……」

身を擦って躲す。が、やはり避け切ることは出来ず、鎌鼬に脇腹辺りを裂かれた。構うものか。「うおおおおおッ！」体勢の崩れたままで太刀を振るう。

「おう。危なっ」

「まだだ！」

ユーカリスティアの刀身が膨れ上がった。いや、明確には違う。ユーカリスティアが纏う水の精霊が形状を変えたのだ。それは蛟にも似た頭を持っていた。一見して奇妙にも見えるが、威力は馬鹿には出来ない。

「喰らえ！」

雨竜之牙。

蛟よりは難度は低い、だがユーカリスティアだからこそなせる技だ。まあこれもオリジナルではないのだが。雨竜之牙は刀身が倍近くになる上に、こいつの顎あごは万物を砕く。接近戦では最強の一撃だ。大口開けて喰らおうとユーカリスティアはエリックに迫る。

「せいっ！」

エリックは扇を翻し、舞わせる。風の刃が顎を裂き、頭を砕いた。悲鳴を上げて消えゆく雨竜。くそ。そううまくはいかないか。もはや半分予想していたことでもあるが、それでも悔しい。

「旋劉燭S i x A X T O x 蓮菖E L D 破灰燼」

しかも休む間も与えてはくれないらしい。

炎に包まれた剛腕。明らかにまともを受ければ死が待っている。緋色の腕かいなが振り上げられ そのまま正拳突き。それだけだ。拳は空を切っている。デモンストレーションと言っても過言ではない。だが、それは紛れもなく魔術なのだ。

地を這う炎。油でも先に引いてたんじゃないかという感じに、それは真っ直ぐガナツシュに直進する。まるで地獄の業火みたいだと思っただ。同時にまだ焼かれる訳にはいかないとも。

「邪魔だああ！」

ユーカリスティアから大波が発生する。

炎とぶつかり合い、巨大な蒸気を生み出しながら対消滅した。

「はあ……はあ……」

押し寄せる虚脱感。はつきり言っただけかなり限界値まで魂アミマを喰われている。正直これ以上は命にも関わる。出来るだけ節約したつもりだが、ユーカリスティアを展開しただけでも魂は喰われるのだ。

加えて今回までの戦闘で蓄積された疲労もある。

「ヤバいな……」ポツリと呟く。

「お？ もうギブアップするか？」

「耳聡いですね」

「取り柄なんだよ」

「にわかに信じられません」

「そうかい」ハハハと笑う。「でも、実際そろそろヤバいんじゃないのか？」

「どうでしょう」

「ユーカリスティアの聖体の秘蹟ミセキだろ？」

「よくご存知で」

「有名な魔剣だ。それなりに冒険者やってたら嫌でも耳に入るさ。持つ者すら喰らう諸刃の魔剣ってな」

「大体合ってます」

「そうかい。それで俺は聞きたいんだが」エリックは形容しがたい

表情だった。真剣、という言葉が一番しっくりくるだろうか。「命を賭けるほどの勝負なのか、これは？」

「……」痛いところを突いてくる。

「俺は魂を喰われた魔術士を一度見たことがあるんでな……先輩として言わせてもらうが、もうそれ以上はやめとけ。死ぬぞ」

「解ってます。自分のことくらい……解ってますよ」

「だったら、」

「単なる意地ですよ。負けたくないっていう、ただの意地です。それに仲間たちも頑張ってくれてる」

「責任っていうやつか？」

「そんなもんじゃないですよ。強いて言うなら自分のためです」

カタハネはバラバラだ。どこまでも一つにはならない、バラバラの羽だ。

考えなんか纏まったことはほとんどない。

それでいい。

皆、誰かのために自分勝手に動く。だからいいのだ。だからバラバラでも飛ぶことができる。飛距離は大したことはないけれど、それでも少しは飛んで行ける。

それがカタハネだ。

ゆえにボクはボクのために剣をとる。ボクの目的のため。ボクの思うままに戦う。

「だからボクは負ける訳にはいかないんだ！」

「漢^{オトコ}だな」

「これで決めてやる、エリック・モンテディオ……！」

ガナツシュ自身すら喰らおうとする喰神の剣を構え、再び力を宿らせる。その伝承の禍禍しさからは想像もつかない、美しい水の音が波紋を作る。

ユーカリスティアを地面に突き立てる。

「仲良く喰らえ！ 番大蛇……！」

地面が砕け、二匹の大蛇が生まれる。しかし咆哮を上げる様は蛇

ではなく、さながら竜。それが蛟だ。

「命知らずだなあ……。こりゃ指導が必要か？」

「エリック……！」

「いい。俺がやるさ」

ルミアの言葉を遮るようにエリックが扇を翻す。

「いけええええええ！」

二匹の蛟が唸りながらエリックに迫った。曲がりなりにも精霊を使役した要素魔術。ただ風を動かすだけの術に負ける訳がない。

そう思っていた。

しやらん。

爆音のような大蛇の轟きの中で、そんな音が聞こえた。それは澄み切っていて、とても美しい鈴の音のようだった。

「風幻縛封」

二匹の蛟がエリックに喰らい付く一歩手前で、それは起こった。

「な……消えた……？」

消えたのはエリックじゃない。蛟のほうだ。

蛟の頭が消えた。

首を失った蛟は力が抜けたように身体を震わせ、ただの水となり地面に吸われた。動揺を隠せずにいるガナツシュに目もくれず、エリックはなおも扇を泳がせる。うっすらと目を細め、小さく眩きを漏らす。

「続いて風華旋衝」

ばしゃっ。

そんな音が上空でして、それから雨が降った。

驟雨よりも激しい、バケツをひっくり返したみたいな雨は五秒かそこらで止んだ。

ここは天井のある場所だ。空はない。雲すらないのだ。雨の振りようがない。解っている。頭では理解している。だが信じると言われれば無理だ。

エリックの風が蛟の頭を喰らった。

有り得る現象か？

「扇術つてのはさ、技術じゃないんだ。知ってたか？ 古来とある精霊と語らうための身体言語として編み出されたのが扇術なんだ」

「精霊……」

「風の精霊だ。俺たちの間じゃ“ジン”と呼んでいるが、ここらでは精霊と変わらんしな。要するに概念みてーな話だ」

「じゃあ、あなたは魔術士なのか……？」

「違うな。扇術士だ」

魔術の系統を受け継ぐ異文化として、独自の精霊との交信を可能にした扇術。ゆえに魔術と同じ力を有する。そういうことか。

「く……」ガナツシュは全身を襲う寒気に脱力したように片膝を突いた。

「もう限界だろ。ここは無意識の海を切り拓いて作った空間。精神体としてサルベージされてい身で魂を削るんだ。普段よりもダメージは酷いはずだ。本当に帰ってこれなくなるぞ、お前」

「ボクは……」

「十分に頑張ったよ。一年だけのクランがここまで勝ちあがった前例はほとんどない。しかも俺たち相手にここまでやれてんだ」

もう言うことなしだろ。

言うことなし。そうかもしれない。首席の座にいるとはいえ、まだ一年生。技術も経験もエリックには劣る。最小最強のクラン相手にここまでやれたら今は十分かもしれない。

そんなわけあるか。

それは言い訳だ。埋まらない差を認めることになる。ここで勝たなければ次も勝てない。

それにここで躓くようじゃ、いつまで経って大羅天には辿り着けない。

「……そうまでしてまだやるのか？」

「当然です……」

「ガナツシュ……もうこれ以上はまずいで」

「黙レイジ」

「黙レイジ!? なんでみんな略するんや!? すごい傷つく!」
「うるさい。諦めるくらいなら最後まで足掻くぞ」

「オレはそれでもええけど、ジブンはそうもいかんやん?」

「気にするな」

「マスターあつてのクランやで? 気にするやろ」

「フィーロがいる」カタハネの中心はあいつだ。

「マスターの器やないやん。人を集めるだけで。まあかく言うオレもフィーロ大好きやけどな。得にあのケツ……」

「変態が。……ボクも器じゃないさ」

「一番マシや。だからオレはジブんに付いてくんや」

「なら、力を貸してくれ」

「……合点や」

「しゃあなしやで、とレイジは笑った。

「ならクロアを頼む。あのままじゃやられる」

「……いけんねんな?」

「余裕だ」

「合点。死んだらあかんで?」

「当然だ」

レイジはギリギリ踏ん張り続けるクロアの方に向かった。その姿がぶれたかと思うと、掻き消えた。本当に速い。

「なんかこれ、俺たち悪役じゃないか?」

苦笑いのエリック。しかし手心加えるつもりは一切ないらしい。扇を羽根のように開ける。

「まあ、いたぶるのは趣味じゃないが……死なれたら困るからな。終わらせるぞ?」

「まだ、終わりじゃない……」

完全な強がりだ。正直、チエックメイト王手だ。打つ手はない。

だけど口にはしない。

諦めるつもりもない。

レイジを向かわせたのも、ボクが耐え抜く間にスヴェンを倒せば勝てるからだ。皮算用でしかないが、それでも打てる手は打つ。

それに、あいつもいる。

まだ諦めるには早い。

エリックが扇を舞わせた。「これで終わりだ」

終わりなものか。耐えてみせる。

痩せ我慢と解りつつも、ユーカリスティアを握る手をきつくする。歯を食いしばりエリックを睨むように見つめた。

そして

「ガアアアアアアアアアアッシユウウウ……」

影が奔った。

F i r o

ちなみに言えば、というかちなみにとって言うのは違う気がするけどまあいいや、獅子狩りっていうのは力の勝負ではない。百獣の王に対して力で勝てるなら、人類は裸でも荒野で生きていける。

とどのつまり獅子狩りってのは知恵を使うのだ。

幾多の罾や武器を駆使して翻弄して仕留める。それが獅子狩り。

決して、今の状況みたいなものではない。

「ずうううおおおおあああああ！」

「ぬおっつ！？」

ハルベルト 斧槍を地面に叩き付ける様は獅子つてより戦神だ。そいつを紙一重で避ける。冷や汗もんだ。

一息吐く暇もなく、叩き付ける衝撃で飛び出したのか分裂した槍がバルドの手に握られる。それを横に薙ぎ払う。それだけで台風でも起こせそうだ。

「くお……」腰を後ろの限界近くまでひん曲げて躲す。

「どうしたあッ！俺を狩るんじゃないのかア！」

「そうですね！」

とか返しても、いやはや。

知恵が浮かばんのですよ。

カッコつけてあんなことを言ったものの、具体的な策はありませんでした。はい。

モニカのある様をみていると、我慢ならなかった。人のことをとやかく言えた義理ではないが。それでも、仲間を軽んじるのは許せなかった。随分と自分勝手な物言いだ。

しかし大見得きつた以上勝たんと何言われるか……。そっちも考えると恐ろしいね。ぶるつちまう。

フィーロはバルドから距離をとった。

さて……。どうしたものか。

この化け物みたいな男に論理的な勝利など望めない。ラッキーが必要だ。運に委ねるというのは頼りない気もしくないが、それでも必要なものだ。運も実力のうちってやつだ。

それに、厳密に言えば運などという要素は予測しきれぬほどの多くの行動が生み出す必然でしかない。

とどのつまり、

「……ひたすらにやり合うしかないわけだ」

偶然という名の必然をもたらすために。

これはしんどいどころの話じゃない。いつ終わるとも知れぬ戦い。確実に心身が疲弊する。正直やりたくない。

「でもやらなきゃなあ……」

薄っぺらいプライドだ。大見得きつたことへの。なんとも情けない。

フィーロは剣を水平に、切っ先をバルドに向けた。「ほう」

バルドの表情に笑みが浮かぶ。そしてバルドは再び斧槍を一つにして構えた。

チャリオット

愚直なる破碎の突貫の構えだ。

「貴様に本物の突貫を見せてやろう」

「へえ……本物と偽物があるんですか？」我ながら変な強がりだ。

「その一寸の役にも立たん奴のとは一味違うぞ」

その物言いが気になってフィーロは何気なしに尋ねた。「なんでそんなにモニカに突っ掛かるんです？」

「あつちが突っ掛かつてるんだがな」

「モニカがおかしくなったのは先輩と戦うことが決まってからなんですよ」

「それで？」

「なんかあつたんだろうと思ひましてね」

「お前には関係ないことだ」

吐き捨てるように言ったバルドの表情は、とても人間らしかった。後悔するような、苦しんでいるような。少なくとも、さっきみたいな戦いを楽しむ顔ではなかった。

やはり、二人の間には何かあるんだろう。

それが今回の窮地に繋がっていると云っても過言ではなからう。

「まあ、関係ないことですね」

それはきつと俺の関わることじゃない。

「少し気にはなりますけど」

「知りたければ俺を越えてみる。いくぞ！

C h a a a a a

a a a a a a a a a r g e ……！」

野太い喚声。

バルドの愚直な突撃は地面を抉り取るような突撃だった。ケツにロケットブースターでも付いてんのか？ シャベル要らずだな。穴穿つてら。

音に表すならズガガガとバリゴシャといったとこだな。

「人かよホントに」

いやまあ獣人だけどさあ。

フィーロは剣を構えたままバルドを凝視する。考える。あれに勝つ方法を。

まともを受ければ木っ端微塵。素晴らしい臨死体験ができるだろ

う。夜も眠れないだろうね。

ん、いやまてよ。

ふと思う。

あの武器を破壊することは可能だろうか？

俺は戦うことが怖い。だが、どちらかというと人を傷付けることを恐れている。きっとその原因は俺の過去にあるんだろう。

思い出したいとは思わない。それは今の俺だけでなく、昔の俺も望んでいる。そして多分、シェリカも。別にそれはそれでいい。嫌なことをわざわざ思い出す必要などない。

そこでだ。俺はあの武器だけを破壊することを考えてみたらどうなんだろうか。人ではなく、物を狙えばあるいは。

相手を無力化する。

「やれば出来そうだな……」

バリアブルウエボン
可変型武器。

柔軟性に富んだ形状の変化などから明らかに丈夫。さつきから武器を狙った攻撃で空を斬った感触以外を味わったことはほとんどない。可能かといえば困難。

だがやれることはそれしかない。

まあとりあえず。

「こいつは躲すしかねえっ！」

横に飛ぶ。さつきまでいた場所が吹き飛んだ。

「むう……！ 避けるとはな、がっかりだぞ！」

「そんなもん当たったら死ぬわ！」もう敬語使うの忘れてる。

「死を恐れて戦士になれるものか！」

「あいに俺は剣士なもんで！」

「俺の祖国最強の剣士団、デイヴィジョン・オブ・プラットフォーム鷹剣尖兵師団は死を恐れなかったぞ！」

「感覚麻痺ってるだけだ！」そんなイカれた集団と一緒にすんな！

「ゆえに！」右足を鎚のように地面に叩き付けた。「貴様は三流に

過ぎん！」

話聞けや。

聞く耳もつてくれないバルドの右足を軸にした、豪快なブン回し。なにをかやいわんや、振り回しているのは斧槍だ。容赦のない一撃。岩など粘土か何かみたいに粉碎しそうな回しっぷりだ。まあ狙いは俺だが。

フィーロは剣を握る手をほんの少し緩めた。

剣は決してきつく握るものではない。手首を使うためには出来る限り柔らかく持たなければ。単純に、あれと思いつきり打つかって手が痺れるのが嫌なだけでもあるけど。

一瞬で加速する。レイジには及ばないが、スピードはそこそこある。

三流上等。

やれることやれるだけの力があれば別にそれでいい。一位である必要などないのだ。

そして、三流の俺は全力でその武器を壊す。

「せあああああつ！」「るうあああああつ！」
咆哮。

腹に溜めた空気を一気に吐き出すように、声をあげる。

激突。

同時に衝撃がくるかと思ったが、若干の沈む感覚。やはりやるか半ば予想していたから驚くこともない。目の前で分裂をし始める斧槍。沈む感覚は一本が分離した証拠。スライドするような、なんとなくバタフライナイフを連想させる動き。壊せんのか、これ？

沈む感覚もそこそこに、フィーロの剣は残った槍に受け止められる。便利な武器だなー。

「結局は無為な剣劇だったようだな！」

挑発的な物言いばっかだなあ。

煽って煽って。この人はなんなんだろう。相手を本気にさせたいのか？ 怒らせて。それでその上から叩きのめすと。

うわー性格わりー。

よくクランなんか組めたな。あの性格で。……いや組めるか。カ

タハネがいい例だ。ここまででんで噛み合わないどころか噛み付き合っただけのやつらがクラン組んでるんだから。

言っただけ悲しくなんな。

とりあえず目の前のことをなんとかしよう。煽って来てもらってるんだから、しっかり便乗させてもらうことにしようか。

「 敢えて言うなら無為ではないですよ……！」

偶然つちゃあ偶然だが。

それもまた必然だ。

バルドの斧槍の構造が見えた。

何も難しい話ではない。基本骨子となる言わば“芯”に、他の槍やらなんやらが部品のようにくっついていて。ただそれだけの構造。合体分離とは言い得て妙だ。

つーかなんでこんなもん気付かなかったんだ？

「武器に遠慮はいらねーもんな！」

フィーロは間合いを詰める。下がるのではなく、詰めた。「だらああああっ！」剣を思いつきり横に薙ぎ払う。

「何っ……！？」

バルドの分離したほうの槍が手から離れた。

「やった……！」

「くっ……！」

「そのまま全部削いでやる！」

我ながら、すげえ調子に乗っていた。

M o n i c a

何が起きたか解らなかつた。

超絶馬鹿阿呆変態間抜けカス塵野郎のビンタをくらって呆然として、ああこれが終わったら殺菌しなきゃと思いつながら奴の戦う、というかやられている姿を見ていたが。

槍を弾き飛ばした。

すなわちバルド握力を上回る一撃ということだ。

「どういう……」

「きゃあああファイロカッコイイ　　ッ！」

うっせ！　このアマうっせ！

金切り声みたいな声援を送るこのアバズレ魔女をとりあえず消去したい。

しかし。

あの男、あんな膂力があつたのか。いや、実際この目で見たことはある。炎の鬣の巨大な腕を受け止める姿を。しかもあの時受け止めるのは片手だったはずだ。

異常な腕力。

特殊能力と呼べるかは解らないが、身体能力は高いのは知っている。でもなんで今更になつて発揮しはじめたのか。戦うことすら億劫だと最後尾の位置を不動のものとしようとさえ画策するようになちよこ剣士なのに。

「二本目だ！」

「調子に乗るなアアッ……！」

バルドに斬り掛かる様からは普段の臆病チキンぶりは見られない。

意味が解らない。今まで出し惜しみしていた？　アタシに見せ付けるためにずっと臆病者を演じていたのか？　だとしたら。

「……殺してやる」

なんて嫌な野郎だ。

陰険だ。

変態だ。

雑菌だ。

糞。糞。糞。

絶対除菌してやる。なにが「シエリカを守るか？」だ。ふざんけんな。死ぬ。お前はユーリ守れんのか。馬鹿が。触らせるか。病原菌の分際で。アタシのユーリに触らせるか。ユーリを守るのはア

タシだ。

陰険変態雑菌超絶馬鹿阿呆変態間抜けカス塵野郎め（変態二回言ってる）。お前は大事な『おねえたま』といちゃついでる。ツインテール生徒会長と無口ロリ女を控えにとってせいぜいウハハしてろ。

でもな、

「ユーリはその中には絶対入らせない！」

何がなんでも阻止してやる！

「ユウウウリイイイイ……！」

愛は盲目。

モニカは全力で駆け出した。

ユーリ目掛けて。

「……なに？ あいつ……」

シェリカが珍しく呆然とした表情でその背中を見つめた。

F i r o

寒気がした。不当な怒りも感じた。

攻撃の手はしかし緩めない。

ひたすら斧槍を狙う。接合部分を弾き、何度も攻撃を加える。負荷が掛かればいつかは脆くなる。地道な攻撃をヒットアンドアウェイで繰り返す。

「ちよこざいな！」

火の粉を振り払うようにバルドは斧槍を一閃させる。

フィーロはそれを躲して斬り上げる。斧槍が分裂をした。構わず攻める。分裂した一本をバルドが掴むよりも速く剣で弾き飛ばす。

明後日の方向に飛んで地面に刺さる槍。

「ぐ……」

バルドはそこで身体をよろめかせた。おそらくこの戦いの中で初

めてとも言える、言わば仕留める機会。^{チャンス}これが最初で最後かもしれないくらいだ。

フィーロは剣を袈裟掛けに片の辺りでで振りかぶる。

バルドの表情が見て取れた。驚愕するような、それでいて嬉しうな。

そしてフィーロは、

「……………」

硬直していた。

動けなかった。いや、動かなかった。一緒か。

バルドが反対の手に握る斧槍を横に薙いだ。咄嗟にそれを後ろに下がって回避した。剣を握る手がだらんと下がる。それを見遣る。

結局はこうなるか。

「貴様……………どういうつもりだ」

睨み据えられている。バルドの怒気を孕んだ声に、フィーロは声が出なかった。

「今のは情けか何かか？」

「俺は……………」

「ふざけるなよ。一年に情けをかけられるほど、俺は落ちぶれてはいない」

情け。そんなんじゃない。俺が情けないだけだ。

そんなことを説明するのさえ馬鹿馬鹿しい。言い訳にしかならぬいし、余計に怒らせるだけだ。火に油を注ぐ行為をする気はない。

でも黙っていたところで解決するわけでもない。

「出来ることを……………するんだ」

武器なら剣は届く。

俺の剣にも意義はある。

なら、それでいいのだ。

「挑発のつもりか……………？」

「そんなんじゃないです。俺は俺の戦いをするだけです」

「甘さだな」

「臆病なだけです」

「貴様はそれが解っていて何故俺と対峙する？」

「さあ……なんででしょう。それでも守らなきゃダメな奴がいるからでしょうかね」

苦笑がフイーロの顔に浮かぶ。

「……やはり貴様は甘いな」

バルドは腰をぐっと下げて重心を落とした。少し細くなった斧槍を構える。散らばった分は拾う気はないらしい。これで決めるつもり、ということだろうか。

「あの時剣を振り下ろせば良かったと後悔させてやるう」

「もうとつくに後悔してますよ」

「なら存分に後悔しろ」すう、と息を吸い込む。 R U U U U U U U U U U U U U S H H H H ……！」

地が爆ぜる。

音速かと思うような速さで迫るバルド。

フイーロは剣を構えて、「なっ……」驚いた。

次第にバルドの姿がぶれはじめ、分身したかのように沢山のバルドが現れた。影分身というやつか。あの巨体で。

「これが荒れ狂う刹那の驟雨だ！」

フイーロの身体を蜂の巣にせんと迫り来る斧槍の怒涛の連続突き。モニカが使った覚えはない。だが名前がある以上それは竜槍騎兵師グインの技なんだろう。アバランシュ

目を見開き、バルドを見据える。

否、槍を見る。

剣を斜めに突き出す。槍とぶつかる確かな感触。側面を削るように滑らせ、接近。バルドの表情が少し変わった。

狙うはあくまで斧槍。

フイーロは身体を斜めに滑らせるように捌きつつ、剣を翻した。

斧槍の接合部分を刃が狙う。「だあああっ！」叩き付けるが感触は沈む。分裂。いい。解っている。これがバルドのパターンだ。バ

ルドは強力なアタッカーだが、戦法は基本的にカウンター主体の受け身系だ。こつちが攻撃すれば必ず斧槍のトツリキーな動きが襲う。可変型武器の特性からか、梃子のようにぶつかつた力点となつて跳ね上がる。なかなか腹立つ仕組み。とはいえ、

「いい加減覚えましたよ！」

どこから跳ね上がってくるかくらい、だいたい覚えた。この身で体験したのもあれば、向こうから分裂させたものもあるが。あとはあの時の喧嘩殺法みたいなタコ殴り術の時の分度一度バラバラの状態を見た。そんだけあればあとは大まかな予想はつく。

そして予想が出来るということは、予測も出来るということだ。

跳ね上がる斧槍。部分的には斧か。どっちにしる関係ない。フィードはそれを剣で振り払つた。小気味よい音を立てて明々後日の方向に飛んでいく。

「ちい……！ あくまで俺の槍を……！」

バルドがこちらを向いたまま、後ろ向きに駆ける。後退しはじめた。その先は突き立てられた槍。フィードが飛ばした一本目だ。

「させるかア！」

それを察知したと同時に追う。そう距離はない。フィードとバルドとの距離も、バルドと槍との距離も。取られるわけにはいかない。一気に詰める。

剣が届く範囲まで距離が縮まる。

「く……！」

振れば。

横に剣を一閃させれば、容易く片が付く。

だけど俺は。柄を握る手が汗ばむのを感じる。

どうすればいい。俺はどうすればいい。決まっている。剣を振ればいい。だが出来るか？ 言うまでもなく、否だ。きっと俺は剣を振れない。

もう槍との距離はほとんどないに等しい。

畜生が。

「 烈Xo儕Ray穿雷瘡」

紫電が奔った。

それが槍に直撃し、槍は弾け飛んだ。「なに……!?!」

バルドの言葉には概ね同意だが、誰の仕業かくらいはすぐに合点がいった。

シエリカか。

一瞥するとして顔の姉がいた。腹立つことに、すごい顔してた。いや、魔術を一度弾かれてるんだからさ、もうちょっと警戒とかしないのか？ 結果オーライだが。

フィーロはバルドの懐に潜り込み肘で打った。「ぐお……」 かつた！ 超硬い。鉄板でも仕込んでんのか？

しかしバルドは一撃でのけ反る。

「先輩、俺は“盾”なんですよ」 独白のように自然に言葉が洩れた。

「だから剣を振るう必要はないんです。“剣”なら他にいるんでとびきりのがね」

「貴様……!」

「では、お背中御免!」

バルドが何か言おうとしたが、それを遮るように背中を蹴る。見事なドロップキックであったと自画自賛する。若干心の奥底がズクンと疼いたが、これくらい我慢だ。過去何か俺にあったとしてもそれはどんな形でも向き合わなければならぬ。それが自分の場合はこの胸の痛みだ。

それだけのことなのだ。

ドロップキックを受けて、バルドは吹き飛ぶ。

しかし空中で態勢を変え、背中を地面に打ち付け、転がった。三回ほど転がったと同時に片膝を突いて起き上がる。

「まだだ!」

「こつちもまだだ!」

フィーロはそれを見越し、距離を詰めていた。飛び掛かり、空中で三度蹴る。バルドが槍でそれを防ごうとするが、態勢がまだ整っ

ていなかったのだろう、その大きく後退する。

フィーロは一気に踏み込み、バルドの手元を蹴り上げた。

「ガアアアアアアアアアアアッシューウウ……………！」

ついにバルドの手から槍が離れる。フィーロはだがそれに一瞥も与えず、蹴り上げた足を地面に叩き付け、それを軸足に回し蹴りを見舞った。

「がつ……………」

「お前が締め括れエエエ！」

G a n a c h e

叫び声が流星のように耳を襲うとほぼ同時に目の前に飛び込んできた影の正体は意外な奴だった。

「バルド!？」

エリックが思わず扇をぴたりと止める。踊るように舞っていた風が散った。

ガナツシユも驚きに目を見開いていた。バルドだ。あの巨大な獅子が目の前に吹っ飛んできた。エリックもルミアも信じられないといった様相だ。確かにそうだ。重戦車みたいな男が吹っ飛んできたのだから。

そしてそれをやってのけたのはおそらく、

「お前が締め括れつつつてんだボケえええええええ！」

「フィーロ……………」

蹴り飛ばしでもしたんだろう、金髪をボサボサにしながら着地し地面を滑る。それを眺めるように見ているガナツシユを叱咤するようにフィーロは叫んだ。

「ボサツとすんな！それでもカタハネのマスターか、ガナツシユ……………」

「ボサツとなど……………していない！」

言いたい放題言いやがって。

普段サボるくせにたまに頑張るとこれだ。まあ、これぐらいがフイーロらしいとも言えるが。

まあ、そんな気は少しはしていたさ。

期待していたと言ったらそれはなんだか負けた気がするから言わないが、それでもフイーロが何かするだろうくらいは薄々思っていた。

覇気なしやる気ゼロ根気皆無のフイーロだが、あいつはシェリカがいる限り剣を手にとる。あいつがこの学園に入った理由はそもそもそこなのだから。

だから、シェリカのためならフイーロはなんだってやるだろう。

なんだかねで、フイーロはシスコンだ。まあ、本人は否定するだろうが。

口許を緩める。

この勝負はおそらく、というか完全に負けだ。

だけど、試合には勝たせてもらおう。どっちかくらいは勝つとかないと、こつちもやる瀬ない。

ユーカリスティアを握り締める。一撃。あと一撃だ。喰った分はしっかり働けよ、相棒。

「おおおおおおおおお………!!」

エリック・モンテディオ。

次こそ勝ってみせよう。今回は負けたが、決して届かない強さじゃない。だからもつと強くなるう。彼の地を目指す者として、越えてみせる。

「喰らい付け………蛟!」

大口開けた水の大蛇は、猛然と獅子に喰らい付いた。

第一章(31) 異変

F i r o

「まさかバルドがやられるとはなあ」

「やられてなどいない。あんな他力本願、俺は認めん」

ふんとバルドはそっぽ向いた。勝負事には純粹な男らしい。子どもみたいだ。ギャップ萌えでも狙ってんのかな？

「その意味深げな目はなんだ」

「いえ、なんでもないです」

さつとこつちも視線を逸らした。

訝しげなバルドの隣でハハハとエリックが笑う。

「ガキっぽいよな、バルドって」大いに同意だ。

「お前には言われたくはない」それも同意。

「とは言え、あれじゃあ勝ちとも言えんわな。試合に負けたが勝負には勝ったなんて言葉は聞くが、まさか逆があるとはなあ。なあ、スヴェン？」

「知らん。そも団体戦は俺の性に合わん。自分の立ち位置が解らんからな」

スヴェンは無表情のままそんなことを言う。じゃあなんで克蘭に加盟したんだよ？

「ランプの面子で団体戦得意な奴なんていないじゃん」

満面の笑顔でエリックが言う。が、それは笑みを伴うことではないだろうに。まあ、うちの克蘭もたいがいなんだが。

要するにカタハネもランプ・オブ・シュガーも似たような克蘭だということだ。

「ま、今回は痛み分けてところだが……それよりお前、次出んの？」

「バルムンクでしたっけ。さあ……ガナツシュが結構疲弊してます

しね」

「曲がりなりにも俺たちとやり合えた時点でバルムンクとも戦えるだろうが」

バルドからのお墨付きを買った。やった。全然嬉しくない。

「そだなー。あそこは強いけど、伝統とやらをお堅く守る奴らだしな。とはいえ……」

エリックはベッドに横たわるガナツシュを見た。

以前眠るガナツシュ。ちなみにここは医務室だったりする。

戦闘が終わり、扉をくぐるとけたたましくらしいの歓声に包まれた。ほとんどが「きゃーガナツシュかつこいー」「きゃーエリックさまー」の類だったが。別にいいさ。悔しくないもんね。

とりあえずそれまではガナツシュは自力で歩いていたが、控え室までの廊下を渡り切ることなくぶっ倒れた。

さすがにランプ・オブ・シュガーの面々も人の血が流れる方々だったようで、控え室近くの医務室まで運ぶのを手伝ってくれた。感謝である。何気にコイツ重いんだよ。剣の重さもあるだろうけど。

「バッドコンディションで勝てるほど易しい相手でもないしな」

「そりゃそうですよね」

ガナツシュの倒れた原因など一つしかないのだ。魂の減少が激しい。次の戦闘はきついだろう。仮にユーカリスティアを一切使わず剣技のみで戦うにしても、この状態では剣劇すらまともになし得ない。

戦闘においてガナツシュは頭マスターなのだ。こんな風邪ひいたみたいな頭を連れて試合なんか出来ない。

やはり、

「棄権はしないぞ……」

「あー言うと思った。一回死ねよ死にかけガナツシュ」

「死にかけの人間に死ねとか言うな。死ね」

起き上がるうとしていいるんだろうが、力が入らないらしい。途中で身体を震わせている。

「ほれ見る。無理すんな」

「うるさい。これくらいなんともない」

「嘘付け」

フィーロはガナツシユの額を小突いた。「うお……」ほとんとベツドに倒れ込む。再度起きようとしたが、フィーロは額を押さえ付けた。

「少し寝てる」

こちらを睨むように見ていたが、程なくしてようやっと納得したか、そのまま目を閉じる。

「棄権はしないからな」

「駄々っ子かよお前。死なれたら困るんだよ」

「ボクは死なない」

「夢見すぎ。精神科医呼んでやろうか？ その妄想から砕いてやるうか？」

そう言うつとふんとふて腐れて身体ごと反対に向く。こいつは……。眉間にしわを寄せていると、エリックのクツクツと押し殺すように笑う声が聞こえた。

「お前らやっぱ面白いな」

「俺は面白くないです」「ボクは面白くない」

被った畜生。

「ハハハ。やっぱおもしろーわ。……ま、この先はお前らが決めることだし、俺は何も言わんさ。ただ、死を覚悟してまで戦うものじゃないぞ、クランコンテストは。お前ら一年だし、正直もう入賞してるだろうし、やめたって文句は言われな」

「ボクは……ボクには行かなければならない場所がある」ガナツシユはそっぽ向いたまま口を開いた。「大羅天に行くにはかなりの成績がいる。クランとしても、個人としても」

その瞬間三人の表情が変わった。険しい。珍しいくらいだ。エリックまでもが眉を顰^{ひそ}めるなど。もともと目つきの悪い二人ならともかく。

「……大羅天か。また酔狂な……気違いかお前？」

スヴェンが珍しくそんなことを言った。地獄ヶ岳（リッシュマウンテン）の単独登頂を
行した気違いが言うのだ。余程だ。

「大羅天って……」

「お伽話並の眉唾もんだ。まー言うなら天界ってやつだ」

エリックがその険しい表情を崩さず、言った。まるで吐き捨てる
かのような口調だ。

天界。

お空の上ってやつか。

それが大羅天。ガナツシユの目指す場所。しかしなんでまた。

「黒い草原を渡り碧い森を越え、深紅の丘の虹の天橋から繋がるは
輪廻の楼閣。誰もが焦がれ、誰もが届かず。空を切るその手は神威
の霹靂に焼かれるだけ……だったか？」

棒読みでバルドの野太い声が詩を紡ぐ。

「ポエマー？」

「俺の詩じゃない」睨まれた。

「とどのつまり神の領域ってことだ」

エリックは人差し指を上に向けて言った。

「神っているんですか？」

「さあ。見たことないしな。なんでも、遙か昔にほとんどが滅んだ
らしいが……詳しいことは解らねえよ」

俺たちもまだ学生だしな、とはにかむエリック。これで十人中十
人の女の子は恋に落ちるだろう。神様はどちらにしろ不公平な存在
だ。滅んで正解だバカヤロー。

それはそうと、ガナツシユはなぜそんな場所を目指すのだろう。

眉唾レベルの場所、しかも神の領域とまで言われる場所を目指すの
は何か理由がなければおかしい。観光じゃあるまいし。

フィー口はガナツシユを見据える。表情は見えない。ただなんと
なく今は見ないほうがいい気がした。そして同時に理由を聞くのも
ガナツシユが語るのを待った方がよいとも思った。

はあ、と溜め息を漏らす。

「……まあその話は置いておこう。とりあえず次の試合をどうするかだ」

「出るに決まっている」

「ユーカリスティアはもう使うなよ」

「必要にならなければな」

「カタハネのマスターはお前だ、ガナツシュ。俺たちは多分皆そう思ってる。……多分」

「なんでそんな消極的だ」

「少なくとも俺はそう思ってるさ」

「そうか」

「そうだ。だからもつと身体は大切にしろ。お前が剣なら俺は盾だ。必要なら剣ごと守ってやる」

「言うことだけは一人前だな」

「見栄だ」

フィーロは拳を突き出した。ガナツシュがこちらに身体を向ける。視線がフィーロの顔と拳を交互に見た。沈黙の帳が落ちる。一時かそれ以上か、よくわからなかったが、暫くしてガナツシュが腕を上げた。

青白い腕。いつもより弱々しい、病人のような腕だった。

ホント俺たちは馬鹿ばっかりだな。

苦笑を堪えて、そして拳を突き合わせた。

十

控え室に戻ると、なぜかアンセムスターの面々がいた。シエリカとベアトリーチェが角を突き合わせていた。何してんだあいつら。

「今日こそ決着を付けてやりますわ!」

「今疲れてんのよ! 騒ぐんなら一人でやりなさいよ!」

元氣一杯じゃねえか。

苦笑いを零しながら、気不味そうに二人を見つめるモランに近寄った。

「よっ」

「あ、フィーロ君」

「何やってんの、あいつら」

「うーん……なんだろう」

モランの言う話では、見舞いに来たベアトリーチェがシエリカに訳せば「二回戦進出おめでとう」となる言葉を贈ったらしい。まあ、あくまで“訳せば”なわけで、元が高飛車ゆえにシエリカは言葉のまま受け取ったらしい。

あとは言い合いが続いてこれだという。

「仲良く出来ないのかなあ……」

縄張り争い中の雄鹿か、こいつら。

ふっ、と溜め息を漏らし二人改め二頭に近付く。猛獣に近付く気分だ。なんなんだこれ。

いがみ合うシエリカの首根っこを掴んで引き離す。

「ふにゃん!？」

「猫か。っーかいつまでもいがみ合うな。煩いし」

「フイ、フィーロ! だつてこいつが……!」

「ベアトリーチェだつて賛辞を贈ろうとしてくれただけだろ」

結果は惨事を贈ったわけだが。

「そんな訳ないわ! 『まあ、貴方にしては頑張ったんじゃないですか?』とはいえ結局有終の美を飾ったのはガナツシユ様でしたけど。今からこの調子じゃ次は厳しいんじゃないやありませんこと? せいぜい足を引っ張らないようにするんですわね、シエリカさん』とか言ってくるのよ!」

「はいはい」

どーでもいい。

しかし、あんな勝ち方でも恋する乙女補正が掛かると、そう見えるものらしい。グダグダもいいところだったんだが。留めが刺せな

いフィーロに変わって代打ガナツシュ。ホームランというか、死球押し出しサヨナラ勝ちみたいだ。どっちが格好悪いか解りゃしない。キーキー泣きわめくシェリカの頭を何度か撫でる。

「あーあーはいはいはいはい。嫌だったんだろ？ 解った。解ったから、今は我慢しろ」

「うー……」

「なんか甘いもん奢ってやるから」

「まあ……それなら……」

物で釣るフィーロと物に釣られるシェリカ。なんだろう。生い先が無性に心配になってきた。

「次の試合まであとどれくらいだ？」

「二試合空くんじゃなかな」モランが答えた。

「そか。即効で試合が決まるとも思えないし、今のうちになんか食いに行くか」

「グランチエがいいわ！」姉バカが元気よく叫んだ。

「あのパフェを食うつもりか」

値段もでかさも特大級の乙女パフェ。乙女を肥やそうとしているとしか思えん一品だが。

肥えたシェリカを想像しようとしたが出来なかった。こいつ体重軽いしな。ダイエットと無縁の女シェリカ。女の敵みたいだ。

「新作のほうよ！」だからなんだ。

「……ああそう。まあいいけど」

もう勝手にせー。

どうせ払うのは俺だ。

とりあえず、エリックにグランチエが開いてるかだけ聞いてくか……。

「あ、フィーロ君……わたしも一緒に行きたいです」

ユーリが横から恐る恐るといった様子で言ってきた。なぜそんな恐縮してるんだろ。

「ち……」

「う、ごめんなさい……」

ああ。シエリカのせいかな。荒野の猛犬と血統書付きのペット犬みたいな関係だな。言ってるよく解らんが。

「舌打ちすんなシエリカ。別に俺は構わないよ？」

「アタシは構うのだから、雑菌」ずい、とモニカが割って入ってきた。
「雑菌!？」

酷い言われようだ。

モニカの俺に対する扱いってぞんざいとかそんなレベルじゃないよね。完全に嫌悪されてるよね。もう外敵通り越して不特定多数の病原菌扱いだしね。

そんな嫌われることしたかな、俺……。

思い当たる節がない。実は何かしたのか。考えつくとしたらユーリかな……。どうなんだろう。とはいえ自分とユーリとモニカがどう結び付くのか未だによく解らない。

聞いたら……。殺される気がする。

この件は時が解決してくれるのを待つしかないようだ。
せちがれー。

苦い顔をしていると、裾を引つ張られる感覚。「……ん？」

「……………あたしもいく」

クロア嬢だった。身長差ゆえの上目遣いはもはや人一人を心臓発作で殺せそうな破壊力だったとだけは言っておこう。なんでカタハネの女の子ってみんな可愛いんだろうね。性格に難ありだけど。

「おう」

「えー……こいつら全員来るわけ……?」

「んな露骨に嫌がるなよ……」

シエリカはシエリカで仲間を毛嫌いし過ぎだ。

「モランたちはどうするよ？」

「あ、わたしたちもいいの？」

「奢るのは無理だけどな」財布はすでに氷河期だ。

「わたくしはガナツシユ様のお見舞いに行きますわ」

「あんたにや聞いてないわよ」シェリカがジト目で言った。

「五月蠅いですわ!」

また角を突き合わせる。もう知らん。勝手にやってる。

いちいち関与しては不毛過ぎるし 面倒臭い。シェリカとベアトリーチエを無視して、フィードはモランに向き直った。

「で、どうする?」

「うーん……そうだね、折角だし一緒させてもらおうかな」

首を少し傾けて笑んで見せるモラン。これだけでご飯三杯は余裕だ。

正直、モランという常識人が傍にいてくれるだけでかなり負担が減る。フィードにとつての女神である。モランが好きな男性とやらをひどく羨む。見つけたら俺はそいつを葬ってしまうかもしれない。

ああ。愛って偉大だなあ。

「いつてえ!? 何すんだ!?!」

「ふん!」

ふて腐れてそっぽ向くシェリカ。いや、人様の足を擦込むが如く踏み付けておいてそれはナイ。

不条理だ。

Unknown

「は……はは……は……」

渴いた笑い声が喉から嗚咽のように洩れる。

まさか勝つとは。カタハネ。規格外のクラン。ふざけている。

そついうところがまたムカつく。

なんでだ。

なんでだ。

なんでなんだ。

奴らはなんであんなに輝いている。

なんで僕はこんなくすんでいる。
どす黒い感情がより一層滲み出る。

「くそ……くそ……くそ！」
髪を掻きむしる。

それも予想に入れて動いていた。もしもカタハネがランプ・オブ・
シュガーに勝ったとしたら。

その“もしも”は、可能性なら三パーセント程度のものだった。

「何が違う……何が！」
僕は。

僕は天才だったはずなのに。

すべてが奴らだ。僕がこうやって躓くのも、すべて奴らのせいだ。
絶対に……殺してやる。

『 汝が器か？ 』

不意に、声が響いた。甘美で、妖艶な声。

「な……なんだ」

『 雄の愚物が余を顕現しようとはな……愚かしい。さすが愚物じゃ
』まさか……扉はまだ……！ 』

陣は完成している。だがまだ魔力を送り込んでもない。詠唱さ
えまだだ。扉は閉ざされているはず。

『 虚けめ。貴様が扉だ。その黒き情念こそが余の扉となる』
そんな馬鹿な。

どちらにしても召喚したのは僕になるはず。なぜ権限が効かない。
陣の効果がなげない。

『 愚物に余を操れるものか。これ以上愚物にかかずらう時間などな
い。刻限じゃ……。まあ、器としては最悪じゃが、』

びき。

びきびきびきびきびき。

骨が軋む音。それが段々膨れ上がる。胸の、肋骨が、広がる。

「ああああああああああああああああ……!?!」
僕は天才なんだぞ。

なのになんでこんな目に合わなきゃ駄目なんだ。
びきびきびきびきびきびきびき。

胸が膨張し、それが込み上げて来る。喉が破裂しそうなほど拡がり、堪らず上を向く。頭が風船みたいに膨張する。いや、している気がするだけかもしれない。そうであって欲しい。口に何かがかかった。拡げられる。ありえないくらい。叫び声など出ない。
頭が破裂しそうだ。

死ぬ。

死ぬ。

死んじゃう。

「まあ、これで我慢するか。ふむ、千余年ぶりの現世じゃ。かつての故郷でも満喫させてもらおうかの……」
そんなせせら笑う声は聞こえたが、
もう何も見えなかった。

F i r o

グランチエの一角にある六人掛けテーブルに腰掛けるフィーロは右隣に座るシエリカの胃袋に苦笑を漏らした。

「よく食うな……」

「べふばはよ!」別腹な。

「がつつきすぎ。飲み込めよ」

「つか味わってください。新作のオトメチックコスモパフェ。何か宇宙的なものを味わえるらしい。なんだそれ。」

ちなみに値段も宇宙的。

財布もすでに宇宙的。

今日の水はちよっぴりしょっぱいなあ。くすん。

ちなみに左隣はクロアだ。バニラアイスをちょこちょこ突いている。小動物みたいだ。

向かいはユーリでそれを挟むようにモランとモニカ。モランはシエリカを微笑ましく見守っている。目が合つと眉をハの字にして苦笑した。心に染みた。

ユーリはいろいろ話し掛けて来るが、要領を得ない。「こ、これ美味しいですね!」とか言つてケーキを食べているが、正直俺は食つてないし解らん。甘いもん苦手だし。「ふうん、そっか」と返すとモニカに恐ろしい形相で睨まれた。なぜに?

「モテモテだなフィーロ」

「そう見えるなら目が腐つてますよ」

眼科行つてください。

一人殺気を送ってますからね。

白い調理服に着替えているエリックが厨房から出てきた。グランチエに行くといつたら、勝利祝いになんか作つてやるよと言つてくれたのでお言葉に甘えたわけだが。

金はしっかり取られた。鬼め。

「で、どれが本命よ?」

「いやいや」

「そんなのあたしに決まつてるじゃない!」スプーンを握る手を元気に突き上げる。

「いやいやいや」

本命の意味解ってますかシエリカさん? 俺たち姉弟。双子ちゃん。

「……あたし」クロアが手を上げる。

「いやいやいやいや」

それはからかつてるんですかねえ……。どうなんだろう。イマイチ本当かどうか及びつかん。

「わ、わたしだったりして……」ユーリが言うが、

「ナイナイ」

「あれ……わたしだけ返答が違う……？」

いや、仮に俺の本命がユーリなら今頃土の下だ。

すげえビームみたいなの視線送ってるもの。壁に穴空きそうだよ？
これもう兵器じゃないか？ 痛いし怖い。

「もしかして、わたしだったり？」

悪戯っ子みたいな笑みでモランが言った。からかわれてんなー。

悔しいからフィードは少し仕返ししてみた。

「一番あり得るかも」

「え……」

瞬く間に顔が真っ赤に染まるモラン。正直ときめいた。おいマジで誰だモランの好きな男。出てこい。一発シバくから。

などと言っている場合ではなかった。

「フィード……」

隣から邪悪な声。寒気すらする。なんか「ふいふいいるおおお
おおお……」って感じで聞こえてきた。あの真昼間のオバケ体験。
ちなみに正体はオバケより怖い。

「モランが一番なの？ 本命なの？」

「本気にし過ぎだ！ 今さっき持ってたのスプーンだったよね！？
その逆手に握ってるのってフォークじゃないですか！？」

待て待て待て待て。正気に戻れ馬鹿姉！ キレル理由が解らん！
なんでただのジョークだったのにブラックジョークみたいな扱い
なってるのさ！

「だいたい俺は」

「おい雑菌。あの生徒会長はどうする気なのかしら。ラブラブして
キスしてたくせに」

「……」

時が止まった。比喻だが。テーブル内の空気が凍りついた。

「えーっと……モニカさん……？」

「嘘は言っていないのかわ」コーヒーを優雅に啜る。

「えええ……」

庄子に目あり、壁に耳あり。

一体どこで見てたんだろう。この滝のような冷や汗はどうしよう。ちびりそう。ニヤニヤ笑って「ほほう」とこちらを見据えるエリックが恨めしい。そもその発端はあんただろ。

「フイーロ……？」

身体が動かんかった。サビサビの鉄人形でももう少し稼動するだろう。

これが氷河期の寒さと言われれば信じるであろう極寒。それくらい寒いのに汗はダラダラだった。

「まあ……不可抗力だったんだよね……うん。ああ、いや頬だったしね？ 念のため言つと」

「フイーロ」

「はい」

「したのね」

「厳密に言えばされました」

「言い訳はいいわ」

「はい」なんだこの尋問。

「そう。じゃあフイーロの処遇は置いといて……まずはあの女の存在を消し去らないとね」

「はい？」今なんと？

「敵はおそらく第二ホールだよ、シエリカちゃん」

モランがなぜか斧を手に持っていた。どこに隠してたんだろう。

ていうか、敵って言った？ あれ？ 俺の知ってるモランさんですか……？

「……いつでもいける」

クロア嬢が弓矢をすでに構えていた。なんでそんなもん持ってるのさ。いつでもどこに行く気だ？

「後方支援はわたしが……！」

「ユーリはアタシと留守番なのだわ」

「そんなあ……」

後方支援つてなんの後方支援だよ。しかしモニカとお留守番が決定したらしい。意味が解らん。

「っ！かこいつら殺気立ちすぎ。温厚なはずのモランまで斧構えてるもの。臨戦態勢万端だよ。」

シエリカが魔術の触媒であるう水晶製の探検を腰から抜き取り、

第二ホールが存在する方角に切っ先を向けた。奇しくも鬼門だった。

「これより我らは修羅に入る！ 人とあらば人を斬り、鬼とあらば鬼を斬る！ 問答無用容赦無用！ 損害気にせず猪突猛進！ いざ、敵は第二ホールにあり！」

「おー！」「……………おー」

「おいおいおおおいいいい！」

ストップストップ、物騒過ぎる！ なんてそんなに一致団結！？ 普段でもそこまでの団結力を見せたことないだろ！

しかしファイアの静止など間に合わず まあ間に合っても聞く耳持たなかっただろうが 三人が駆け出して行った。恐ろしいスピードだった。びっくりするくらいの迅速さ。

「ヤベーなりリーナの奴」人ごとのようにエリックが言った。

「じゃあ止めてくださいよ！」

「無理無理。俺でもさすがにこれは止められんわ。ハハハ。スマン」

「スマンじゃないですよ！」

軽すぎだ、元凶のくせに。

「っ！かこのままにしておけん。取り返しのつかないことになる前に急いで止めなければ。くそ。何たって俺がこんな目に……………」

「自業自得なのだよ」

「まあそうだけどね！」

否定は出来ないけどさ！ でもそれを暴露したモニカが言っつてどうよ！ 鬼かお前は！

「おい、止めるなら急ごうぜ。仕方ねーから俺も手伝っしよ」

「手伝つて当然だと思います」

「手厳しいな」

笑うエリックだが、手厳しいっていう問題じゃない。
まあ、それを言及したって仕方がない。急げばまだ間に合うはずだ。フィーロとエリックは嵐のように駆けていった三人を追うためグランチェを出た。

十

結果だけ言えば、普通に追い付いた。

というかグランチェを出てすぐの場所で、三人とも空を見上げて茫然と立ち尽くしていたのだ。

「シェリ……」

呼ぼうとしたところで、フィーロも立ち尽くした。

「なんだ……あれ……」

理由を考える必要などなかった。三人が立ち尽くすのも無理はない。こんなの茫然と見てしまう。

明らかな異変。

「フィーロ、どうし……ってマジかよ？」

後から来たエリックも空の異変に言葉が詰まった。

太陽は見えなかった。

もともと雨だったし、それはいい。暗雲の裏でさんさん燦燦と輝いているのだらう。そう信じたい。

それよりも問題は、

巨大な魔法陣。

学園の空を巨大な魔法陣が埋め尽くしていた。

第一章(32) 片鱗

F i r o

魔法陣にはいろいろ異なる意味がある。

まず魔法陣とはそれそのものが魔術だ。刻まれた図や文字は詠唱を表し、そして魔術の構成を助ける触媒ともなる。要素魔術においては、より高度な精霊の構成による反動を抑える障壁となるし、召喚魔術においては、異界とこの世界を繋ぐ扉の役割を果たす。

ゆえに魔術士でなくても、魔法陣を見ればあれがどういふ魔術なのかくらいは直感で解る。だからあれが危険な代物だともフィーロにはなんとなく解った。

そもそも空に浮かび上がる魔法陣なんてものは見たことも聞いたこともない。本当に魔法陣でいいのかあは。

暫し観察して解ったのは魔法陣の直下は第一ホールだということだ。

それに気付いたとき、フィーロは嫌な予感がした。弾けるように駆け出す。「フィーロ!？」というシェリカの声が聞こえたが、今は無視した。

第一ホールの扉を蹴飛ばし、そして絶句した。

「な……なんだよこれ……」

地獄だった。

地獄を見たことがあるわけではない。でも多分これが地獄だ。

生徒が、教師が倒れている。

屍のように。

寒気がして、一番近くの倒れている女生徒に駆け寄った。「大丈夫

夫か!？」

「うっ……っ……」

幸いにも息はあった。しかし顔色が悪い。余程のことがないとな

らないレベルの真つ青さだ。つまり、これは余程のことだ。

「くっそ……なんなんだこれは……」

「フィーロ！ そっちはどうなってる！」

歯軋りをしているところにエリックが飛び込んできた。

「これは……なんだ？」

「……俺が聞きたいです」

「だよな……こういう時はルミアだな。ってことで俺はルミアを捜す。多分あいつなら解るはずだ。お前は ガナツシュたちのところに行け」

「この人たちは……」

「まだ息はある。見た感じ全員が精気^{オト}を奪われているみたいだし、これだと一番心配なのはガナツシュだろ」

「……解りました」

確かに、ここに倒れている人たちは、まだ呻くだけの息はある。

だが最初から呻いている奴もこうなったらどうなる……？ 血の気が引いた。

「あんのバガナツシュが」

ユーカリスティアの使用負荷による魂そのものの消耗。ある程度回復するとはいえ、それは生命としての根幹を喰われるということだ。それを食い尽くされればどうなるかなど想像に難くない。

そしてこの状況だ。最悪の事態すら有り得る。あいつは鉄人でもなんでもない。ただの黒髪ロン毛のシスコン剣士だ。考えてみたらそんな奴なかなかない。レアモノだった。

「冗談言ってる場合じゃない。」

階段を蹴る。医務室を一直線に目指した。倒れ呻く多くの生徒たちにもくれず走る自分自身に嫌悪した。

でも今は出来ることをするしかない。

医務室まで辿り着くと、フィーロは勢いよく扉を開いた。

「無事か、バガナツシュ！」

「せああああッ！」

「ぬおっ!？」

突如、容赦のない兜割りのような斬撃がファイロに叩き付けられようとした。慌てて剣を抜きそれを受け止める。すれすれのところで受けた。

動きが止まり、相手が解った。

「あぶねえだろ! ガナツシュ!」

「なんだファイロか。敵かと思っただぞ」

「こちとら心配して駆け付けてやったんだが?」

「そうか。そいつはすまないな」

「みんなは無事か?」

「いや……まずい状況だ」

そう言っただけで後ろに下がった。それに続き部屋を覗く。

医務室のベッドはガナツシュを見舞いに来たのである。アンセムスターの面々で埋まっていた。みなホールの生徒たちと同じように青い顔で呻いている。

「ホール全体がこれか……? つかなんてガナツシュは無事なんだ」

「ユーカリスティアだ」

ダランと左手で引つ提げている波打つ太刀に視線をやった。

「いきなり騒ぎ出してな。勝手に何か防壁みたいなものを張りやがった。そのあと揺れが来たんだ」

「揺れ?」

「地震とは違う気がしたが……よくは解らない」

「揺れ……魔法陣の発生のせいか……?」

「魔法陣? なんの魔法陣だ?」

ガナツシュは魔法陣のことを知らなかったらしい。ホールの中にいた人全員は知らなかっただろうが、しかしこいつはまたユーカリスティアに救われたわけだ。

下手をすれば自らをも殺す両刃の剣に助けられるとは皮肉な話だ。

「このホールの上空にでっかい魔法陣が浮いてるんだ。なんの魔法陣かはエリックが調べてる」

「……なるほど。少なくとも魔術の影響だということに間違いはないみたいだな。カタハネの皆は？」

「一緒にいたからな。無事だ。変態は知らないがどこに行つたのか。いつも神出鬼没な奴だ。」

「アイツは大丈夫だろ。しぶといし」

「ああ……そうだな。で、このあとどうする？」

「うん……？ そうだな……」

「生存者がいるとはな」

扉の方からの声に反応し、フィーロとガナツシュは一斉に振り返つた。

青い刺繍の入った黒い衣服に身を包んだヴァイス（先生）の姿があつた。まるで死神みたいだ。

「悪運が強いのか……まあいい。そこに倒れているので全員か？」
相変わらず説明とかそういうのを一切省く男だ。

「ええ」とガナツシュが答えたが、フィーロは黙つて睨むように見ていた。が、目線が合うと逸らした。とんだ臆病者チキンである。

「ここはいずれ浸蝕される。イネス先生が準備をしているからそいつらを連れて来い」

「何が起こっているんです？」

「知らないほうがいい」

この鉄面皮。説明義務を放棄するんじゃないやねえ。

とは言え、あのヴァイス（先生）が気を遣うとは。事態はそれ程までに深刻なのか。イネス先生が準備しているということも気になる。なんの準備だろうか。

とにかく、考え込んでも仕方がない。フィーロとガナツシュは顔を見合わせ、頷いた。伏したままのロリエを小脇に抱えて、エミリ（だったか？）を負ぶさつた。さすがロリエ。コンパクトだ。ちなみに背中にしたわわな感触があつたが、緊急事態ゆえに無心になるよう努めた。ガナツシュはベアトリーチェを背負つた。少しふらついてたが、大丈夫そうだ。

にしてもヴァイス（先生）がユミイを抱えたのだが、その抱え方が完全に人攫いだ。犯罪者にしかみえない。さすがつす先生。心から称賛を贈った。

「……なんだその目は」

「いえ？」

すぐに逸らした。

十

「coordinate fixation・trim from unconscious sea」

ホールに行くと、イネス先生がいた。風がないのに髪が揺れている。魔術だ、が聞いたことがない詠唱だ。召喚魔術に似ている気がする。

「open the gate」

フィーロがそれを眺めていると、突然空間に亀裂が入り、それがまるで扉のように開かれた。トリックアートでも見ている気分だった。

「すげ……」

「空間操作か……人の技とは思えないな」

ガナツシユもフィーロと同じ感想を抱いていたらしく、ポツリと漏らす。

「ご苦労さまです」

ヴァイス（先生）がそんな言葉を使うとは思ってもよらなかった。心臓が止まるかと思った。まさか狙ってるのか？ 変態だな！ ムツリ助平め！

「いて！」ゴンと拳骨を喰らった。痛い。っーかなんで解るんだ。

「ヴァイス先生。そちらも。それで全員ですか？」

「ええ、おそらく」

「こちらは準備できています。いつでも行けますので」

「了解です」

「先生、これは……」

話を勝手に進める二人に困惑したガナツシユが口を挟む。

「これから全生徒と非戦闘員をイネス先生の作った空間に隔離する」

「隔離……それはつまり、そういうことなんですね？」

「ああ」

ヴァイス（先生）の短い返事に、ガナツシユが深刻な表情になった。決して無愛想だからとかではないはずだ。

全生徒と非戦闘員の隔離。つまりことは教師たちの力でなければ及ばないということだ。しかも学園は戦場になる可能性が高い。フリー口も自ずと表情が険しくなる。

「あー肩凝ったわあ……大体の避難は終わったわよ」

「しゃきつとしましょうようアメリカ先生」。あ、イネス先生。やっぱりみんな生命力そのものを奪われています。施術の効果は薄いです……ごめんなさい」

空気をぶっ壊すような口調で肩を叩きながら、扉からアメリカ先生が現れた。めちゃくちゃ面倒臭そうだ。人命がかかっているとは思えない。治療術がどれほど才能に左右されるものかが解る例えみたいな人である。

その後ろからすてとちっちゃい先生が小走りにやって来た。東洋系の顔立ちから察するに、菊乃先生だろう。治療士学科の教師で直接知り合いなのは保健医のアメリカ先生しか知らないなので、交流があるわけではない。アメリカ先生も窘めてから、イネス先生に報告をしている。倒れた人たちの治療にあたっていたのだろう。が、稀代の治療士でも現状はお手上げらしい。

「ご苦労さまですお二人とも。少し休んでいて下さって結構です。他の先生方にも休憩するように伝えてください」

イネス先生は労いの言葉を投げかけるが、魔術に集中しているのか二人の方は向かなかった。それを見てアメリカは「あんたも頑張るわね」とまるで人事のように漏らす。本当にどうなんだろう、

これは。

なんとも形容しがたい表情でフィーロはアメリカ先生を見つめた。それに気付いたのか、こちらに視線を向けた。

「あら、弟クンじゃない」

「どうも」

「そんな見つめちゃって、どうしたの？ 惚れちゃった？」

「それはないですね」

「少しは動揺したら？ 可愛いげがないわよ」

余計なお世話である。

「そういえば、シエリカは？」

「え？ あー……あれ。まだ来てないのか……？」

一本道だったし、俺がホールに向かったのは明白なはずだが。

学外への避難の列に加わったのか？ ガナツシュに尋ねかけたが知るはずない。当たり前だ。そういえばエリックもいない。

ドオオオオオオオオオ……。

不意を突くように、爆発音がホールを揺らした。

「なんだ！？」ガナツシュの動揺する声。

「外からだな」

「ヴァイス先生、お願いします。私は空間の常駐とハザマへのサルベージを済ませなくてはならないので」

「ええ」

イネス先生の言葉にヴァイス（先生）は短く返事した。

「じゃあ菊乃に戻ってもらおうわ」

アメリカ先生がシガレットを加えながら言う。

「わ、わたしですか？」

「ではそれをお願いします。おそらく事態は深刻です」

イネス先生は淡々とした口調で語るので深刻性が解りづらい。が、イネス先生が言うのだ。かのクラン《クロムウェル》の魔術士が。

かなりヤバいと思っただい。そしてあの爆発音は明らかにここが戦場になっている証拠だ。

なら敵は誰だ？

一番の疑問。空の魔法陣。ということは魔術士か。断定は出来ないが可能性としては一番有り得る。だが何故この学園を狙ったのか。そもそも、今戦っているのは誰だ？

戦闘を担当できる教師の可能性は無きにしもあらずだが、学園の教員は少なくはないが多くもない。その上避難の件がある。人では少ないはずだ。そして不在の者のこと。

嫌な予感しかしない。

「俺も行きます」

「フィーロ、お前……」

「シエリカが心配だ。探す」

「駄目だ」ヴァイス（先生）が即答した。

「あなたの許可なんか求めてない」吐き捨てる。

「教師をあんた呼ばわりとはな。でかい口叩くな、臆病者。いいから避難しろ、クソガキ」

「俺は家族なかまを探す。ヴァイスセンセイにご迷惑はかけません」

「棒読みやめろ。俺はお前たちの安全を守る義務があるのだ。外に出るだけで迷惑だ」

「なら、ボクと一緒に行けばいいのでは？」

「ガナツシュ・ルフエーヴル……」

「ボクは首席です。足手まといにはなりません。フィーロを監督するということに付いていけば、問題はないでしょう」

「消耗した身体でなければな」

「痛いところを突く奴だ。」

フィーロは眉を顰めた。やはり駄目か？ しかしガナツシュは引き下がらなかつた。真っ直ぐヴァイス（先生）を見据える。

「仲間を守るくらいの余力はあります」

「……」

ヴァイス（先生）は押し黙り、ガナツシュを見つめ反した。二人の間で視線が交差する。ガナツシュは何も言わない。ヴァイス（先

生)の返答を黙って待っている。

しかし不安げなところは一切なく、確固たる意志を内包した視線をただ送る。ヴァイス(先生)はそれを見据え、フィーロを一瞥した。

果たして、ヴァイス(先生)が折れた。嘆息する。

「必ずこちらの指示に従うことだ。守れないなら残れ」

「守ります」ガナツシュそう言つてフィーロを見た。

「……多分守る」

癩だが。

「……ふん」

鼻を鳴らし、ヴァイス(先生)はホールの扉を目指し階段を昇りはじめた。なんか言えよ。無言で行くな。おいこら。俺たちはどうすりゃいい。

ガナツシュが肘で小突いてきた。

「多分とか付けるなよ」

「なんか譲れなかった」

「どっちが駄々っ子だよ……」

うっせー。

ヴァイス(先生)が扉の前で立ち止まる。顔を半分こちらに向ける。

「何をしている。ぼーっとする時間があるのか」

小馬鹿にした言い種だ。腹立つ。じゃあこっちが返事したときになんか反応させや能面教師。

フィーロは齒軋りをして睨んでいたが、ガナツシュが肩に手を置いた。目を向けると意味深に首を横に振った。

「とにかく急ごう」

「……ああ」

駆け出すガナツシュの後をフィーロは追おうとして、

「待ちなさい。フィーロ・ロレンツ」

イネス先生に呼び止められた。

「……なんです？」
「ためになることを一つだけ教えてあげます」
言つて、手招きをする。フィーロは逡巡して、ガナツシユを見た。眉を顰め、訝しんでいたが「行つてこいよ」と短く言った。フィーロはそれに小さく頷き、イネス先生の許に歩んだ。
その時、ヴァイス（先生）がとても深刻そうな顔をしていたらいいが、そんなことフィーロには知る由もなかったし、どうでもよかった。

E r i c

ヤバい。ヤバい。ヤバすぎる。これは洒落にならねえ。エリックは久々に戦慄を覚えていた。目の前の奴は化け物だ。

何が起きたかイマイチ解らないが、あの爆発でのダメージに身体が軋む。

「これはいい！ 余ら魔王の亡き時代にこれほどまでの者がいるとは！」

目の前の女はまるで異形だ。

女と解るのは上半身の胸の膨らみくらいだ。見る目が変態？ 男なんてみんなそうだ。顔立ちはとても美しい。美人だったにちがいない。過去形だ。

もはやあれは人ではない。

小柄な人間の身体の上に、女の上半身が生えていた。しかも口から生えている。想像を絶する。あれは本当に頭か。巨大カボチャのかぶり物と言ってくれた方が心に優しい。

そんな暖かい現実はないようだが。

肥大した頭。広がった口。そこから美しい女が生えていた。

「なんなんだよ……こいつは」

「解らん。解るのはあれが化け物ということだけだ」

先刻合流したバルドが答える。うちで一番ガタイのいい獅子が傷だらけだ。それだけで爆発の威力が窺える。バルドの表情もいつもの強敵を前にした楽しい表情などはなかった。

「化け物か。そんな生易しいレベルではないだろう」

スヴェンが大剣を支えに立ち上がった。傷付いているが、大丈夫そうだ。タフな連中でよかった。

「とにかく、ルミアたちを助けるぞ」

「救援は来るか？」バルドは斧槍ハルベルトを分離させた。

「犬耳ちゃんに頼んではいるが……教師でも歯が立つかどうか」
弱気になりそうな心を叱咤する。

上空に浮かぶのはルミアとフィーロの姉、シェリカ・ロレンツ。

あの化け物は突然現れたかと思うと二人を黒い影で包んだ。こちらも対抗しようとしたが、びくともしなかった。あれは普通じゃない。
い。

「ああ……潤う。失われて久しい余の美貌が……」

恍惚そうな表情をした化け物は明らかに変化していた。

若返っている。

表現がそれで正しいかは解らないが、段々綺麗になっているのだ。現れたときこそ、しわしわくちやくちやの変な婆みたいなのだった。
が。

「二人の力を奪っているのか……？」

ホルルの様子を思い出す。あれは精気オドを吸い取られていた。吸収アブソーブの力でもあるのか。どれくらい勢いで奪っているのか解らないが、出来るだけ早く助けなくては。

ここであの二人に何かあれば、特にシェリカの身に何かあればフィーロに申し訳立たない。任せておけと言ったのだから、裏切ることはしたくない。先輩としてのプライドもある。

だが勝てるか。

あの黒いのたつつ影は柔軟かつ強固。エリックの風すら防いだ。というか弾いた。つまり魔術を防いだのだ。つまりはあれも魔術か

なにかだろう。

しかし属性はなんだ。黒い影。連想するものは

「闇……か？ 聞いたことねーぞ、そんなもん」

「エリック、来るぞ！」

スヴェンが警告を放つ。

地を這う影。蛇のようだ。いや、蛇だ。そのものだ。にしても速い。倒せもしない上に俊敏とは。さすがにどうしようもない。

「くそ……！！」

扇を舞わせ、風を纏う。黒い蛇の突進を飛び上がって躲す。蛇の顎は地面を噛み砕いた。

なんて威力だ。

地面が陥没してる。直径二メートルといったところか。威力は爆破系の中級要素魔術くらい。あんな細い縄みたいなものでだ。あれが束になったら上級魔術に匹敵するだろう。考えただけで寒気がした。

というか、なにより不可解なのが、あの化け物は一人で恍惚としているだけで、こちらに気付いていないことだ。まるで興味がないみたいだ。歯牙にもかけられていない。路傍の石ころ扱いだ。

するとあれは自動で動いていると思っつていい。おそらくは化け物独自の防衛システムみたいなものだろう。

「厄介だな……」

「ぼけつとするな！」

バルドの叫び声。しまった。思考に集中しすぎた。らしくない。

目の前には黒蛇。大口開け、牙がちらつく。その牙は黒く、その奥の唾内は完全に闇だった。

「くそ……！！」

万事休すか。

そう思ったところで、頭の横を光が掠めた。蛇に直撃した。それは蛇の軌道を変えた。エリックは慌てて身を擦る。ギリギリのところで回避できた。

しかし今のは……。

「エリックー！」

「加勢しにきたよ！」

リリーナとシオンだった。シオンの手には弓が握られている。多分リリーナの魔術をシオンが放ったのだろう。

「お前らか……」

「助けたのにその残念な顔は何よ？」シオンが下目遣いで言ってきた。

「いや、助かったさ」腹立つことにな。

「生徒の避難が大方終わったから、残ってる教師陣に合流しようと思っただけど」

「そこにあんたがいたわけ。よかったわねー死ななくて」

言い方が非常にムカつく。俺の命はこいつにとってはアリンコか？にしても生徒会長も大変なようだ。だがその尽力もあって生徒の避難は完了したのだ。こういう時は行動力のあるリリーナ。人気だけの女じゃない。自分のことではないにしろ、付き合いある身としては誇らしい。

シオンはその付き添いだろう。クランより息の合う二人だ。なんとなくシオンはリリーナのクランへの加盟を断ったのか。まあ、今は関係ないか。

「っーかキモいわねーあれ」

「グロいね……」

今しつかり敵を見据えた二人の、げんなりした言葉に苦笑を漏らす。

「余裕だな、お前らは。でもこっからは余裕ねーぞ」
ルミアとシエリカの生命に関わる。

「うん。だいたい解った。わたしも全力でいくよ」

「無茶は禁物よりリーナ」

「うん」

リリーナは細剣レイピアを構えた。ただの細剣ではない。非常に魔力伝導

率の高い鉱石で作られた細剣だ。トゥアハー・デ・ダナン。おそろく現代の刀剣の中でも神具アーティファクトに匹敵するであろう逸品だ。

どこの誰が鍛えたのか。未だに教えてくれない。

「附meri悦dix剣随雷霊」

リリーナの細剣に紫電が進る。雷の要素精霊を武器に纏わせる附属魔術。先刻のシオンの攻撃はリリーナの附属魔術を受けたものだったわけだ。

同時に変化が起きた。

化け物がこちらを見た。いや、正確にはリリーナを。そしてにんまりと笑った。唇が不気味に横に引き延ばされる。

「……おお。自ら供物となる者がいるとは……殊勝なことじゃ」

「ひえ……く、供物って……」たじろぐリリーナ。

「やらせるかつての！」

シオンが弓矢を放つ。カタハネのクロアもなかなかの射手だが、シオンも射手としては一流だ。シオンは普段は狙撃を専門としているが、一番得意なのは至近距離からの射撃を織り交ぜた格闘だ。舞踊が元になっているらしいが、正直かなり荒々しい。

態勢を低く保ち、一気に接近を仕掛けた。黒蛇が地面を這いながら迎撃しようとする。飛び越えるように躲し、弓を放つ。リリーナの附属魔術によって光線のように一直線に延びる。

放たれた矢はしかし、化け物の前で防がれた。黒い影が今度は壁のようになり、波紋を浮かべながらまるで吸い込まれるように消えた。

「な……！」

「ぬらああああ……！」

空気を裂く音が響き、一本の槍が飛んで来る。バルドだ。つか尋常じゃない投擲だ。何食ったらそんななるんだ？

バルドは投擲と同時に距離を詰める。手に持つのは斧槍。

投擲された槍は、シオンの矢と同じように黒い壁に遮られる。槍は力を失ったように地面に落ちた。金属音を撒き散らし、転がる。

「遅い！」バルドはその死角に回っていた。投げた槍はフェイクであり、その間に攻撃するつもりだったのだろう。

斧槍をフルスイングする。

「さつきから虫が煩いのう……」

心底鬱陶しそうな表情で化け物は呟いた。「がつ……！？」そしてバルドは吹き飛ばされた。完全に死角からの攻撃だったのだ。それを防いだ挙げ句弾き飛ばすとは。

「つか俺たちはあいつにとっては虫程度の存在なのか。

ふざけやがって。

「俺たちは人間だ！」

扇を使って風を集約する。それを一気に爆発させ、突風を起こした。

とっておきの追い風だ。

「行け、スヴェン！」

スヴェンがエリックの風を使って超加速で突き抜けた。スヴェンは何か違う生命体かと思うくらい速い。その時何となく試しで、というか遊びで考案した追い風特攻戦法。かなりの速さで間合いを詰められ、かつ大剣の威力を増幅させる。

祖びの産物とは思えない、馬鹿みたいに使える代物だ。

「せいあ……！」

スヴェンが大剣を振るう。バルドのフルスイングを上回るスピード。威力も相当だが

「鬱陶しい劣等種じゃな。失せろ」

「ぐ……っ」

黒い壁はいとも容易く斬撃を防ぎ、そしてその壁から、黒蛇を放った。スヴェンの驚異的な反射神経で体幹を守ったが、脇腹を黒蛇が貫いた。

「スヴェン……！」

地面に着地すると同時にすぐさま距離をとる。そこで肩膝を突いた。血が滲んでいる。つか貫いたなんて威力じゃない。穿たれて

いる。

「大丈夫か……！？ すまない、俺のせいだ……」

「気色悪いことを言うな。別になんともない」

そういつた表情は苦痛に歪んでいた。脂汗が酷い。重傷だ。止血しなければ命が危ない。

くそ。

何がクランのリーダーだ。

各々が自由に戦うようなことをしているから、それに俺が甘えているからこういうことになる。カタハネを笑えない。ガナツシユは必死でやっていた。結局敗因はそこだ。勝負に負けて試合には勝った？ ただの負け惜しみだそんなもん。

学園屈指のクランなどと言われても所詮この程度か。

「きゃあああつ」

「リリーナ！」

シオンの叫ぶ声ではっとする。リリーナが影に包まれた。まずい。俺に何が出来る。

あの影は物理攻撃だろうが魔術攻撃だろうが無効化する。しかも死角はない。俺の攻撃はすべて無意味だ。

じゃあどうしろってんだ。

「畜生……」

無力だ。俺はどこまでも無力だ。

このまま何も出来ないで、仲間を死なせるのか？

俺は……。

俯きかけたその時、

「うおおおおおおお……りやあッ！」

ここ最近聞き慣れた声が背後から響いた。

自然と顔が上がる。そして同時にエリックの耳は何かを裂きながら飛んで来る音を捉えていた。

反射的にそれを確かめようと振り返って瞬間。正確には振り返ろうと首を横に向けた瞬間。黒い物体が目の前を通り過ぎた。つーか

ちよつと掠めたぞ。

それは見覚えのある剣だ。

黒光りする装飾の欠片もない、実用一辺倒の片手剣。

それが一直線に飛んでいく。そしてリリーナに纏わり付く黒い影を斬り裂いて、地面に刺さった。

「嘘だろ……？」

あのびくともしなかった影が霧散した。本当に霧だったかのように、消え去った。どうなっているのかさっぱりだった。

困惑は大きかったけれど、それでも自然と笑みが零れた。嫉妬がなかったと言えは嘘になるが、それよりも面白かった。

最近知り合った奴の中でトップクラスに面白い男。何かと色んなトラブルとかに巻き込まれる飽きさせない男。自らをチキンチキンと言って、なんののかんの剣を握る変な男。

フイーロ・ロレンツ。

本当にいちいち驚かせてくれる。

俺がこの学園にいた間にあいつが入学してきたのは本当に幸いだ。きっとあいつは俺には為し得ないことをやってのけるだろう。初めて噂を聞き、一度戦う姿を見たときから感じていたエリックの予感は今この時当たったのだ。

「たく……ちよつと早過ぎるぜ」

これはもう追い越されるかもな。先輩の面子丸潰れだ。

でもまあ、そいつも悪くない。

……？

憎い。

憎い。

憎い憎い憎い。

どうして僕は認められない。どうして。どうして。どうしてだ。

ふざけるな。僕は。

僕は頂点に立つ者だ。そうやって育てられてきたし、そうやって生きてきた。僕は特別なんだ。選ばれた者なんだ。なのにどうして

「イネス先生、どうですか？」

「菊乃先生。どうとは何がですか？」

「魔戦学部の主任じゃないですか、イネス先生。だからよさそうなお子が見つかったかなーって」

丁度、第一回目の学部内の実技試験を終えてからだ。イネス・ラトクリフの許に直談判をしに行こうとしたときだった。

筆記はほぼ統一されているが、実技試験の内容は学部によって異なる。近戦学部および中戦学部は戦闘による査定。遠戦学部は射撃の距離や速度、精度を総合的に見る。魔戦学部は多くの魔術を行使出来る範囲で行い、その成果を見る。

僕は完璧だった。

要素魔術、それに伴う附属魔術。召喚魔術は完璧にこなした。戦^{カラ}略級魔術も扱える。術式の展開までやって見せた。完璧な行程だったと自負している。

結果は次席。

有り得ない。ふざけた結果だ。僕の輝かしい人生に泥を塗られたのだ。

何より、僕が居座るはずの首席にいたのは、

「そうですね……シエリカ・ロレンツは期待できるかもしれません」
イネスが呟くように言った。

シエリカ・ロレンツ。

有り得ない結果だ。要素魔術に関してはまあいい。僕に匹敵するだけの實力を持っていた。だが附属魔術は使えないし、召喚魔術など知識がそもそも毛ほどしかないのだ。

それだけの實力で学部首席。

無意識に歯軋りをする。悔しさが滲んだ。少し唇の端から血が出る。

「へえ……」

「聞いておいてどうしてそんな目を丸くするんです？」

「いえ、イネス先生が生徒に期待するなんて」

「何気に失礼ですね。そういう菊乃先生はどうなんです？」

「そうですねーいい子は沢山いますよー。一番見所があったのはユ
ーリちゃんですねー」

「名前言われても解りません」

「おっぱいが超大きいです」

「特徴言えばいいっていうものでもありません」

阿保な会話。

「少し羨ましいです……」

「感想も結構です」

本ツ当に阿保な会話。

自分の慎ましい胸をふにふに揉む菊乃は教師とは一見して解らない幼児体型。言うなれば寸胴。哀れではあるが、かくいう自分も身長はコンプレックスだ。成長はするだろうが。あれと違って。というか僕の場合は栄養が頭脳に行き渡りすぎているせいで いや、馬鹿らしい。誰に対する言い訳だ。

この阿保な教師の阿保なガールズトークを聞いている義理はない。イネスの許に歩もうとした時、

「ああ、でもシェリカさんが期待できるってなんでなんですか？」
という脈絡のない菊乃の言葉に立ち止まった。

「確かシェリカさんって、銀髪の可愛い女の子ですよ。銀髪
うらやましいなあ……。最近髪も傷んできて……。年ですねーホン
トに。ああ、そういえば双子の弟さんがいるんですよ？ どん
かなー。やっぱり美少年なんでしょうか？」

「知りませんよそんなの。個人の容姿はともかく、それに伴う感想
も要りません」

阿保な会話だった。

立ち止まった自分が馬鹿だった。

「まあ、シェリカ・ロレンツは“精霊憑き”ですから
不意に、イネスはそう漏らした。

「精霊憑き……ですか？」

聞いたことがあった。

確か、

「精霊憑きは言うなれば『精霊に好かれる特異体質』といったこと
ろです。魔術士だけがなるものでもないし、誰にでも発症します。
病気みたいなものです」

「びよ、病気なんですか!？」

「話を聞いていませんね。比喻です。ただの。ちなみに発症の可能
性は高く見積もって一億分の一くらいですね」

「すごい確率ですね……」

「かつてはもう少し数がいたそうですが、空白ホワイトエイジの時代を境に減少し
ているようです」

「へええ……何があったんでしょうねえ……?」

「それが解れば空白の時代などと呼ばれていないと思いますが」
正論だ。

そんなことはどうでもいいが。

精霊憑きは確かに特異体質と言える。誰にでも現れる可能性がある
る。魔術士などとは関係なく。ゆえに普通の人間に発現すれば、た

ちまち魂を貪られ死ぬことになるだろう。好かれると言ったところで、精霊が求める対価は払わなくてはならないのだから。

それはだが魔術士にとっては夢のようなものだ。

イネスが言った通り精霊憑きは精霊を寄せ集める。通常魔術士は要素魔術を使用する際、自らの魔力と触媒を用いて精霊をおびき寄せる。そして仮の契約を結び、暴れないよう魔力で拘束し、使役する。

だが精霊憑は勝手に精霊を引き寄せる。つまりおびき寄せる必要はないのだ。そこかしこにいる精霊を鷲掴みにして投げ放題なわけだ。

狡^{チート}と言い換えたっていい。

あれはそういう代物だ。

それをシエリカ・ロレンツは有している。

「あとシエリカ・ロレンツの魔力量はかなり膨大です。軽く上級魔術士の二人分はあります。それも要因ですね」

「弟さんの分だったりして」

「それは……可能性がありますね。なんらかの原因があれば」

「わ、わたし名探偵ですか!？」

迷探偵だろうお前は。黙っている寸胴。

「とはいえまだ能力を使い切れていません。もしその力を使えば、期待は出来るかもしれない……その程度の話です」

「スルーされちゃった……。でも、どうして使い切れていないんですか?」

「それは知りません。自分がそういう体質ということは理解しているようですが、まだそれでどれだけのことが出来るのかを理解していないのだと思います。あとは単純に要素精霊の構成能力がまだ低いです」

「なるほど」

全然解っていない顔だった。

医術に関しては天性の才能を持つと言われるのに、日常会話が非

常に残念だ。男子生徒からは「萌え萌え先生」と言われ持て囃されているが、燃え燃えだ。燃焼してしまえ。

しかしあの女が首席になった理由は理解した。単純に運が良かった。それだけだ。一億分の一の確率で手にした才能のおかげということだ。

笑うしかない。

ああ。可笑しすぎる。

ふざけすぎて。

アハハハハハハハ！

馬鹿馬鹿しい。

そんな理由があつて堪るか。

「何か用ですか？」

目の前にイネスがいた。気付かなかった。

「先程からいたようですが」

「ファンですよきつと」違う。死ぬ。

「ぼ……僕は……その……」

唐突過ぎてしどろもどろになった。すべてを見透かすような冷たいイネスの視線がそれに拍車をかけていたのかもしれない。嫌な汗が流れた。生唾を飲み込む。「あ……」と口を開くとひどく掠れた声で無様だった。

なんとか喉を整える。

「実技試験の……結果で……その……」

「異議がある？」

聞き終える間もなく、口を挟まれる。

「……え、は……はい」

「そうですか。しかしあれは正当な位置付けです。貴方がどの位置にいるかは知りませんが、異議は認めません。話は以上ですか？」

まくし立てるように言ったイネスの言葉を噛み締めることで精一杯だった僕は返事など出来なかった。何も言えず、金魚のように口だけがパクパク言っていた。実に無様だった。

「では、行きましよう菊乃先生」

「え、あ、はい」

もう関心は無くなったかのように横を通り過ぎ去っていくイネスと、カルガモの子どものようにすてすて付いていく菊乃。菊乃の一瞥が痛かった。

やめる。哀れむな。僕を憐れむな。憐憫などいらぬ。

くそ。糞。クソ。

僕は。僕は。僕は僕は僕はッ！

壁を叩く。手から血が出ただけだ。

何も変わらない。

位置付けは正当？

知ったような口を。

貴方がどの位置にいるかは知らない。

次席だ。

興味があるのはシエリカ・ロレンツただ一人。興味の無い生徒など名も覚えぬ。あれがイネス・ラトクリフか。

「……やる」

殺してやる。

殺し殺し殺し殺し殺し殺し殺し殺してやる。

そして思い知らせてやる。首席が誰か。天才は誰かを。

殺してやるのだ。

『いいじゃろっ……』

声がした。

『貴様には興味が無いが、宿主……否余の庭を繋ぐ扉じゃ。それくらい願いは叶えてやる。それに、その女娘のことも気になるし
のう？ よい余の供物になるじゃろっ。……じゃから』

暗転する。

意識が遠退く。

前にも、こんな……ことが……。
『貴様はすべてを余に委ねて死ね』
その言葉が僕の聞いた最後の言葉だった。

F i r o

「フイーロ君……」

「怪我は無いですが、リリーナさん」

リリーナに駆け寄り、倒れそうなところを抱き留めた。なぜか顔が赤い。紅潮している。あの気持ち悪い生物のせいか。くそう。憎らしいが……やるじゃないか。

ぶっっちゃけ色っぽい。

む。いかん。そんなやましい。ダメだダメだ。頑張れ俺の理性。

「いてっ!？」

痛みに後ろを見れば、クロアがいた。背中を抓られていた。地味に痛い。口を尖んがらせて睨みつける辺りが、可愛かった。抓られるのは御免だけど。っ！かなんで抓られたんだ俺は。

「フイーロ君ってばいつまで抱っこしてるの？」

さらに後ろでモランがにっこり笑っていた。モランのこんな笑顔は初めてだ。

めっっちゃ怖い！

なんだ!？ 何かしたか!？ 俺はモランを怒らせるようなことを何かしたのか!？ 原因が解らないことほど恐ろしいものはない。
「王子モテモテだねえ」

「シオン先輩……いや、意味が解りません。とりあえず助けてください」

ニヤニヤ笑うシオンは自分でなんとかしな〜と離れていった。悪魔め。

とりあえずリリーナを起こす。「ありがと」とリリーナにしては

小さい感謝の句を呟いていたが、その表情はなぜか残念そうだった。なぜに？

まあ、それでクロアは手を離れたし、モランも納得したみたいだから、それでいいんだろう。意味は解らんが。

「つかじゃれ合っている暇はない。」

「まあなんだ……ユーリはスヴェンを頼む」

「りよ、了解です！」

敬礼はいらんが？

やる気は十分なようだから別にいいけど。モニカがすごい睨んでくるのは頂けない。怖い。

「さて、んじゃまー……」

剣を引き抜く。しっかし、イネス先生の言う通りなのかも知れない。話を聞いたいて良かった。そう思おう。感謝だ。百聞は一見に如かず。ん？ 違うか。なんだ。ぱつと出てこない。まあいいや。

俺にはシエリ力を守る力があつた。それだけは事実だ。それだけで十分だ。

フィーロは切っ先を化け物 “贄の女王” に向けた。

「とりあえずシエリ力返せ。クソババア」

十

「敵は《贄の女王》サクリファイステインで間違いありません」

イネス先生はフィーロたちがホールを出る前に呼び止めて、そう言った。

「サク………なんです？」

「サクリファイステイン贄の女王です。………召喚魔術は解りますね？」

「ええまあ………人並みには」

召喚魔術は異界から異形を喚び、使役する魔術。要素魔術とは異なる体系で、独自の言語を使用する。以前ロリエが使ったのを覚えている。戦ったし。白騎士ルクセリア。

「贄の女王も異界の住人です。元は高名な魔術士でしたが、異界サクリフアイスガーデン《贄の庭園》に墮ち異形に成り果てました」

「人だった……？」

「永遠の美を求めた憐れな魔術士です。出生などはどうでもいいですが」

結構そこ重要じゃね？

思ったけど言えなかった。こつち素人、あつちプロ。

というかその贄の女王とやらは、なんたってここに現れたのだ。自然に沸いて出るような存在じゃないだろう。聞いた感じ。

その疑問を感じ取ったか、イネス先生は口許を緩めた。

「では、なぜ現れたか。簡単です。召喚魔術です」

「……まあ、そうでしょうね」

話の流れからしてそれしかないし。それくらい解るさ。ハハハ。

このお茶目さんめ。絶対わざとだろ。

「数日前、第三図書館のストリクトペーフキーピングスタックの厳重保管書庫の錠が何者かに開けられました。管轄の者は開けられただけと言っていました。普通盗難されていたようです」

「つまりそれが……」

「そう、《贄の書》と呼ばれる黒い本です。厳重封印指定された超特A級の禁忌魔導書です」

イネス先生はやはり淡々と告白した。

あまりに言い方が淡泊だったから、なんかの冗談にも聞こえた。が、その言葉をしっかりと咀嚼してみたが……

「大事件じゃないんですか!？」

そんな危険な物がなんでうちの学校にあるんだ!　そしてそのセキュリティの甘さよ!　爆弾発言すぎる!

「そういう目的で作られた学園でもあるので」

「うわあ!　心の中読めるんですね!　すげーや!　つーか学園の知られざる一面ですね!　当初の設立の目的と完全にねじれの関係じゃん!」

「その話も今はどうでもいいです」
よくねえよ。

「贄の女王は曲がりなりにも魔術士です。しかも、稀代の魔術士でもあります。魔術士が世界を治めていた時代、魔術を極めた者を魔王と呼び畏怖していました。贄の女王はその魔王の一人です」
「曲がってないじゃん」

魔術士の究極体じゃねーか。サラっと言ってるけど、それってもう勝ち目ないんじゃないの？ 諦めてもう世界渡しちゃいましょう。今なら捕虜として扱ってくれますよ。

フィーロは完全に日和見する計画を考え始めていた。

「……それで、犯人は誰なんです」

ガナツシュが横から口を挟んできた。剣呑としている。やめるガナツシュ。ただでさえ絶望的なんだから。笑える顔をしろ。

「さあ？」

「さあ……」

「生徒か教師か……それは解りません。今の問題は贄の女王を帰還させるか、消滅させるかです」

「勝算はあるんですよね？ だからフィーロを呼び止めた」

「生徒に委ねるのは酷ではありますが、おそらく対抗しうるのはフィーロ・ロレンツのみです」

イネス先生はそう言ってフィーロに目を向けた。

「俺……ですか？」

言っている意味が解らなかった。

一斉に視線が集中する。驚きの視線と、なぜか特に驚くこともないといった視線。対局の視線がフィーロに集中した。

「いや、でも、俺は学生で。ツーカーレベルですよ？」

なんの取り柄もない。後方支援型剣士だ。そんな俺に何が出来るっていうんだ。フィーロはひたすら困惑して、助けを請うようにガナツシュに視線を送った。

「ガナツシュもなんか言ってくれ」

というか請うた。

「ボクは……」ガナツシユが俯いて少し考える仕草をして、確信し
たらしい、顔を上げた。「適任だと思う」

「ほら、ガナツシユもこうい　まてこら」

「お前には力がある。それは初めて見たときから感じていたことだ」

「御免。そんな力無いから。やめろ。ハードル上げんな。しばくぞ」

「お前ならやれる」

「肩叩くな」

「イネス先生……これは生徒に委ねる事柄では……」

いつの間にか近寄って来ていたヴァイス（先生）が似合わないや
んわりとした口調でそう言った。なんだ。キモいぞ。

「いつて！」

頭をぶん殴られた。痛い。生徒虐待だ。

「ヴァイス先生。相手はアルフレッド・クロムウェルと同等の魔術
士。いえ、魔術師です。“月の民”の力無くして勝ち目はありませ
ん」

「しかし……」

「それに、貴方が生徒を守るのでしょうか？」

「……それは……そうですね……」

「王の牙はそのための剣。ヴァイス先生、貴方は貴方の仕事をして
ください」

「……解りました」

おお。なんかヴァイス（先生）が押し負けた。普段ならざまあみ
るだが、今は結構やばいんじゃないのか？　おい。粘れ。ヴァイス
（ヘタレ）。

「いつてえ！？」

またぶん殴られた。しかもピンポイントで同じ場所だ。八つ当た
りじゃねーか畜生め。

「フィーロ。貴様は俺が守る」

「おええええええええええええ……」

「殺されたいのか」頭を鷲掴みにされた。

「俺を守るんじゃないのかよ!? 殺気立ってんぞ!」

「甚だ不本意だが、仕方なくだ」

「ツンデレかよ」

「どうやら本当に殺されたいようだな」

ヴァイス（ホモ?）の額に青筋が浮かんでいた。怖いよう。

ガナツシュがこれみよがしに溜息を吐いた。ジト目になって、ヴァイス（ホモ!）を一瞥して、フィーロを見た。

「フィーロ、ヴァイス先生……そろそろいい加減に……」

「フィーロ君!」

ホールの扉が勢いよく開け放たれた。

モランだった。

息を荒げて視線をさ迷わせ、視線がフィーロを捉えた。転げ落ちそうな勢いで階段を駆けてくる。「きゃっ!?」案の定躓いた。

「あぶな……!」

ヴァイス（お邪魔）の手を払い、駆け出す。間一髪のところではフィーロはモランを抱き留めた。真正面から支えに入ったので、端から見れば抱き合っているようだが、フィーロにそんなことは解るはずもなかった。

「大丈夫かモラン……?」

ゆっくり態勢を整えさせる。顔が真っ赤だった。まあそりゃそうか。公衆の面前であんなに豪快に転びかければ誰だって恥ずかしい。

「あ、わ。わわ……ご、ごめんなさい……ってそんなことより!

フィーロ君大変なの! シェリカちゃんが……! エリック先輩がなんとかするって……でも助けがいるって……それで……!」

がしつと肩を掴まれ、モランは叫んだ。切羽詰まっている。もはや文章になっていない。いつもおっとり構えているモランが慌てる状況なん余程のことである。もう目からは涙が浮かんでいた。

「お、落ち着け。何があったんだ……?」

「シェリカちゃんが……」

「シエリカに何かあったのか？」

「いきなり黒い影に包まれて……それで……それで……わたしなんにも出来なくて……」

「落ち着け。とにかく、シエリカが危ないんだな？ クロアたちは無事なのか？」

「クロアさんはユーリちゃんとモニカちゃんのところ……ルミア先輩も捕まって……エリック先輩が戦ってる……わたしはエリック先輩に頼まれて……」

「戦ってる……じゃあさっきの爆発音はやっぱりエリックさんか」

「相手は変な女の人の化け物で……」

「女……贄の女王か」

「サク……え？ フィーロ君はあれが何か知っているの……？」

「今イネス先生から聞いた。けどなんで捕らえる必要が……」

「召喚が不十分だったのでしょう」

イネス先生が口を開いた。

「完全な召喚がされていれば、このホールの人間は全滅していたでしょう。昏睡しているとはいえ、全員が生きているということは、まだ力が戻っていないという証拠です」

「だから魔術士で力を補充しよう……？」

「シエリカ・ロレンツの魔力はかなりのものです。ルミア・アーテイミスもそれには及ばないものの、魔力量は平均以上です」

だから捕われた。そいつの養分として。

ふざけた話だ。

「ですが今が好機とも言えますね」

「好機……？」

「補充しなくてはいけないほどに弱っているということは、まだ人の手で倒せる範疇だということですよ」

「そうか……そうですね」

イネス先生曰く。俺には奴を倒せる力がある。俺はシエリカの盾だ。決して剣ではない。だけど、守るためには盾を刃に変えないと

いけない時もある。そして、今がその時だ。

フィーロはモランの涙を指で掬った。

「フィーロ君……？」

「安心しろ。俺が……俺がなんとかする」

今出来る精一杯の笑顔で応える。そしてイネス先生に向き直った。

「イネス先生……教えてください。俺はどう戦えばいい」

日和見計画は終わりだ。

G a n a c h e

「どっせえええい！」

迫りくる影で出来た黒い蛇。フィーロはそいつをぶった切った。

音もなく霧散する。しかし、その掛け声はいかなものか。別にいけどぎ。

イネスが言うには、贄の女王は闇の要素魔術を使うという。

闇とはすなわち虚無。ゆえにあらゆる精霊はその前に挫ける。闇の要素魔術は通常の魔術では対抗出来ない、いわゆるジョーカーのような魔術なのだという。まあ厳密に言えば弾くのが限界で、相殺は出来ない、場合によっては向こうがこっちを飲み込むのだという。そもそも闇の精霊は現代の魔術士では制御は不可能とされる。膨大な魔力をもつてしても、その要素精霊は御することが出来ない。理由は不明だが、時精霊と同じような分類にいるがゆえに、特殊な言語を必要とするというのが一般論らしい。そのため詳しいことは解らないらしい。

だがそれがいかに規格外だろうと、それは精霊に変わりはない。

ゆえにフィーロのみがそれに対抗しうる。

ソーサラーズキラ

魔術士殺しであるフィーロだけが。

フィーロは精霊を『殺す』。

“精霊殺し”とも呼ばれる力。それがフィーロの力だという。

名の通り精霊を殺す精霊殺しは、あらゆる精霊を存在ごと抹消する。通常ガナツシユのように神具を持つ者ならば魔術は払える。ユーカーリスティアは水の精霊を身に纏う。特に火の精霊には滅法強い。ヴァイス先生の持つ切り裂く王者の牙も、おそらく魔術を斬ることが出来る。

しかしそれは精霊の構成を破壊するだけだ。普通に弾くことなど不可能に近い。バルドのように魔術加護があれば話は別だが。しかし蛮族の森の炎の鬣ですら、その膂力をもつても腕はずたぼろだった。生身の人間がただの剣で弾いたところで弾かれるのは魔術ではなく人間だ。魔術はそれくらい絶対的なものなのだ。

確かに片鱗はあった。フィーロはそのなんの変哲もない剣で魔術を弾いている。なんのことはない。それがフィーロの力だ。そしてそれは弾いたのではない。厳密には精霊の構成も何もかもを無視して、精霊の存在を抹消しているのだ。

初めて贅の女王の表情が驚きに変わった。そして醜悪な怒りの形相へと変貌する。

「余の影霊の力を……まさか赤月の力か……まだこの世界に居座るのか、貴様らは！」

「何言つてんだあんたは！ いいから二人を解放しろ！」

フィーロが言葉ごと薙ぎ払うように剣を一振りし、贅の女王を睨んだ。その横を影が走る。黒づくめのヴァイスが王の牙を抜き放ちながら駆けた。

「フィーロ、貴様は潜り込んで二人を助ける！ 活路は開いてやる

……！」

そつだ。呆けて眺めている場合じゃない。シェリカの命もルミアの命もフィーロ一人に背負わせることはない。

背に負ったユーカーリスティアに手を掛ける。まだいけるだろう。死ぬことを恐れて仲間を見殺しにするなど御免だ。一気に引き抜き、構える。

「どこ行くねん」

肩を掴まれた。

レイジだった。

「お前……というかお前がどこ行ってたんだ」

「んー……野暮用や。まあ、あとは俺が行くで」

「馬鹿か！ あれは……」

「心配してくれるんか？ 嬉しいわあ」

「茶化すな！」

「どうもない。死にかけのジブンよりは十分動けんでにかつと笑うレイジ。

「フイーロといいお前といい……僕はまだ」

「うるさい」

「だっ!?!」

唐突に、目の前が眩んだ。それに続くように痛み。というか、痛い。殴られた。レイジに。いや、まて。お前訛りはどこいった。今すごいナチュラルだったぞ。

レイジは愛用の小刀とは違う形の、いびつな双小剣の片方を投げて掴むを繰り返した。一方は真っ直ぐな、両刃の短剣。もう一方は玩んでいるほうで、鉤爪のように曲がっていた。

「十回くらいならこいつも保つ。そんだけあれば十分や」

「お前の野暮用ってなんなんだ……」

「企業秘密やで」

えらく男前な微笑みを浮かべた。変態のくせに。

こいつもこいつでよく解らない。考えてみれば、ボクらカタハネは互いに過去も他の付き合いも全く知らない。というか興味がない。レイジにもそれなりの付き合いがあるのだろう。変態だが。

「解った……」

「ほうか。ほな」

「お前が切り込んでボクが後方支援だ」

「話聞いてた!?!」

「聞いてたさ。でも、仲間を助けるのに命を惜しむような真似はし

たくない。もし仮に囚われているのがイリアならボクは……ボクはああああ！」

「もどつてきー」

「はっ……！ 最悪の事態を想像してしまった……いや、でもここでボクが華麗に助けるといふ素晴らしいシナリオもあるんだけどね？」

「知らんよそんなん」

どうやらレイジには伝わらないらしい。このイリアへの無限の愛は。至極当然だが。

「まあ、そういうことだから。それに……ボクはクランのマスターだしな」

フィーロも言っていた。ボクはこんな様でもクランのマスターだ。少なくとも俺はそう思っている、フィーロはそう言った。だから、それに応えなければ。

「はあ……まあ、しゃあないわ。ジブンも結構頑固やしな」

小さく嘆息し、レイジは贅の女王に視線を向けた。玩んでいた短剣を横殴りに掴み、「いつでもええで」と言った。

ガナツシユはその言葉と同時にユーカリスティアを構えた。あと何回使えるだろうか。あの人も、やはりそんなことを考えながらこれを振り続けていたのだろうか。もしそうなら、ボクは少しでも近づけられたのだろうか。

そんなこと、今はまだ解らない。だからボクは天上の地を目指すのだ。

こんなところで躓けるか。贅の女王だかなんだか知らないが、きつちり送り返してやる。

「というかフィーロだけに活躍させたくないしな。」

「行くぞ……！」

第一章(34) 失樂園(前書き)

ホントに一気にペースダウンしてました。

ごめんなさい。

でも書き上げられてよかった。内容はともかく。

では、最新話です。

追伸。

私事ですが、Dungeon Makerの改訂版もよろしく願
いします。

第一章(34) 失樂園

F i r o

「小癩な……死ぬがいい、赤月のオ！」

さつきから震えが止まらない。これは恐怖か。それとも喜悦か。果ては全く別のものか。もうフィーロには解らなかった。胸の奥が熱かった。

イネス先生の言葉は正直難しすぎてよく解らなかった。なんでも俺は魔術士にとって天敵のようなものらしい。精霊殺しだったか。物騒な名前だ。だがその能力があるからこそ今の俺は戦える。家族を救えるのだ。

もうあの頃の無力な俺じゃない。

あの頃？ いつのことだ。思い出せない。思い出さたくない。駄目だ。考えるな。今は考えてはいけない。そんな気がする。

黒い影は幾本の剣となり、また堅固な盾となる。しかしフィーロの前にはただの影であるかのように霧散した。神様なんてものがないのだとしたら、なんでこんな力を俺に能えたのか。臆病な剣士に。なんでだ？

いつだって戦うことは怖い。俺はいつも怖れている。それを今は必死で押し込んで、ただ守らなくてはならない人を助け出そうとしている。

「お前がくたばりやがれえええッ！」

影はとめどもなく湯水のように溢れる。どこにでもある影。日が落ちれば毎日フィーロたちを包み込む闇。こいつらは結局消えることなどないのだ。

要するにキリがない。

鬱陶しいことこの上ない。こん畜生め。
だからどうした。

俺はそんなんで屈してられない。

シエリ力を助けなくてはならないのだから。

「セイ……！ トウ……！ セイア……ッ！」

フィーロの隣を影が駆け抜けた。そいつは恐ろしい速さで、本当に影だった。つーか真っ黒。服装が。

明らかによく斬れそうな剣は、影を弾き、時に切り裂いている。

ヴァイスだった。

「先生くらい付ける！」

「あんた読心術のプロだな！ なら気付け、面倒なんだ！」

「括弧付けでいちいち先生と付けるのが悪い！」

「なんで知ってんだよ！ いや、だから取ったんじゃない！ 馬鹿めな！」

「馬鹿は貴様だ！ 括弧だけ取れ！ 今後の成績に気を付けるんだな！」

教師にあるまじき台詞だった。もう永久にヴァイスでいいや。先生なんて奴の死に際でも呼ぶもんか。

しかしヴァイスの作った活路は正直ありがたい。教師としては“有り難い”のに。やっぱりこの世界に神なんていないんだな畜生。この世の不条理に表情を歪めさせる。

ヴァイスは、剣士としては素晴らしい技量だった。猛々しい動きとは裏腹に、流れるような……いや、それとも違う、言うなれば機械のような精密な動き。あれが《剣狼》と呼ばれた男の剣技。

圧倒的だ。

「……王の牙じゃと……どこまでも……！ 其れは貴様の手には余る代物ぞ！」

憎々しげに贅の女王は叫んだ。が、意味が解らない。

「そんなものは百も承知だ……！ 行け、フィーロ・ロレンツ！」

正直もつお前が行けばいいんじゃない？

フィーロは胸中でそんなことを呟きながら、剣を携え走り出す。

ヴァイスが切り開いた道を駆ける。主役級の戦闘力でなんでこの教

師はフォローに回ってんだろ。

右から影が槍となり突き出た。半自動的に敵対者を攻撃するよう
に出来ているらしい。邪魔だ。本当に。

一閃。

影を破壊。避けれる分は避ける。逐一斬っていくなど時間の無駄
だ。水道から流れる水を指で斬ろうとするくらい無駄だ。そんなに
斬りたきゃ元から断つしかない。

「うっ……ぜえ！」

再び一閃。影は容易く霧散した。

これ、本当に何してるんだろう。意味はあるのだろうか。霧を切
り裂こうとしている気分しかしない。っーか見た目からして霧か煙
みたいだ。

いや、考えるな。

イネス先生に言われたことを思い出せ。信じる。この力を。信じ
ることでこいつは動く……らしいから。弱気を押さえ込め。今の俺
は強い。そう思い込め。この震えは武者震いだと言い聞かせろ。

そして為すべき事を為すんだ。

左はヴァイスがなんとかしてくれている。右と、目の前に集中す
る。それだけのことなのだが。

影が蠢き、形を変えた。飛び出す。咄嗟に剣を盾にするように構
える。攻撃は来なかった。見ればそれは浮いていた。いやそれらか
なんだっていいが。それらは球体だ。宙に浮かぶ無数の黒い人間の
赤ちゃんの頭くらいの小さい球体。

それらがボコリと泡立った。

「なんかヤバ気か……？」

フィーロの勘は当たっていた。ヤバ気だった。というかこれで何
もないと思える奴はそうそういない。

多数の球体から飛び出た針。円錐といった方がいいのか。どっち
でもいい。刺されば致命傷になるんだ。呼び方なんてどうでもいい。
根本的には飛び出してくるだけで、さっきと変わらないのだが、

攻撃の方向が読めない。しかもぶつかり合うと合体して変な方向に延び出す。どういう規則で動いているのか解らない。

見てから動くしかない。後手に回るしかない状況にフィーロは小さく歯軋りをした。

「時間が無いんだ！ 邪魔をするなよ！」

目の前から迫る針に向かってフィーロは剣を振った。

無軌道な袈裟掛けの斬撃は空を斬った。

「しま……！」

横から現れた別の針とぶつかり、方向を変えられた。体勢は崩れたままだ。別に着地したら持ち直せる程度だが、あくまで着地出来たらの話だ。

斬り損ねた球体は再びフィーロを狙う。意思でもあるかのような腹の立つ連携だ。大元があのかの化け物なんだから、連携もくそもないのか。知ったことじゃない。どうであろうと、こればかりは避けられない。

「喰らえ、蛟……！」

背後からの雄叫びとともに、渦を巻きながら一直線に駆け抜けるのは水の蛇。

蛟だ。

蛟は黒い球体を片っ端から飲み込んでいく。目の前の球体も針ごと呑み込んだ。あまりの速さに風が巻き上げられていた。それに吞まれてフィーロは飛ばされて地面を転がった。剣が飛ばされる。針が自分のいた場所を穿っていた。結果的には救われたらしい。

蛟の猛進がぴたりと止む。突然ブルブル震え出した。

「なん……！」

言い終わる前に蛟は爆ぜた。

多数の球体が浮かんでいる。その全てから針が伸びていた。嘲笑うかのような圧倒的力だ。蛟を内側から『殺した』のだ。

「やはり駄目か……！」

そんな舌打ちが飛ぶ。フィーロは声のした方向を勢いよく振り向

いた。あんなもん撃つのは一人しかいない。

「ガナツシュ！」

「右は任せろ、フィーロ！」

「馬鹿か！？ そんな身体で……馬鹿か！？」

「二度も言うな！ さつさと行け！ ボクはクランのマスターなんだろう？ ならボクはボクの役割を果たす！」

「役割って……」

それでお前が死んだら意味がない。神具の力ならそりゃ対抗できるだろうが。ヴァイスと違ってガナツシュは疲弊している。その原因はその手の神具 ユカリステイア 聖体の秘蹟だ。これ以上使えば身が保たない。

「フィーロ、危ない！」

「な……！？」

目の前に黒い球体。

まずい。こんなところで考え込むなんて。馬鹿か俺は。

球体が泡立つ。影が泡立つつても変な感じだ……などと逃避してる場合じゃない。ヤバイ。刺す気満々だ。とうかこの位置だと狙いが顔面じゃないか？ いやいや待て待て。そんなもん喰らったら即死だつて！

間に合うか……！？

剣までは一メートル。無理。届きません。しゃがんでるし。

「チエエストオオウ！」

なんか飛来した。

奇声を発しながらそいつは黒い球体を斬り払った。

「フィーロ！ この馬鹿ちゃんはオレが見とくから、ジブンは二人を助けるんや！」

「変態……！！」

「このタイミングで変態はないやろ！？ ないよね！？」

変態もある程度の対策はしているのか、いつもと違う二本の短剣 レイジ が目についた。現状ガナツシュのことを任せられるのは変態 レイジ だけだろう。変態だが信用はある。

「くそ……解った、頼むぞ！」

「あれ、もう会話進んでる！？ 不自然さ丸出しやで！？ 会話なつてないで!？」

「うおおおッ……!」

雄叫びとともにフィーロは剣を拾い、駆け出した。

今は目の前のことに集中するんだ。

「まさかのスルー！ なんでこんな空気扱い!？」

なんか後ろから聞こえたけど知ったことじゃない。

E r i c

後輩たちの戦う後ろ姿を眺めるだけの自分が齒痒かった。

それなりの実力はあると思っていたんだが……。目の前の化物に対して俺はただの無力な人間に過ぎなかった。

襲い掛かる影を切り刻んで消し去るフィーロ。明らかに異色の能力だ。

だがそれだつて実力のうちだ。能力というものは使う本人が相應の力を持っていなければ宝の持ち腐れなのだ。フィーロはそれを使うに見合つた実力がある。

「ふれーっ！ ふれーっ！ フィーロ君っ!」

何も出来ない先輩その二のリリーナはせめて応援だけでもとつてさつきから声を張り上げている。せめてっつーか生き生きしてんじゃねーか。輝いてんぜ、瞳がよ。

「大したもんよねえ」

「ん？ ああ……すごい奴だよ」

何も出来ない先輩その三のシオンがエリックの隣に来て言った。

エリックは後輩たちから目を逸らさずに答えた。

「ちよつと悔しいでしょ？」

「そんなことは……あるかもな」

悔しいというか、羨ましいというか。まあ、劣等感みたいなものはなんとなくある。あいつらは強い。多分、この先ももっと強くなるだろう。

おそらく、あくまで憶測だけど、あいつらは何か大切なものを無くしたことがあるんじゃないか。それがあいつらの強さなのかもしれない。

俺はどうなんだろう。

一年時の中頃にルミアと知り合った。単純に合コン。若気の至りってやつだ。なんでも勝手に俺の名前を出したらしく、絶対出席だった。まあ、用事もなかったし、顔を立ってやろうと出席。そこにルミアがいた。あいつは数合わせだったらしい。

つまんなそうにしていたけれど、魔術の話は結構弾んだ。俺が扇術士だと言ったら興味を持ったらしい。

それから喧嘩してるバルドとスヴェンに出会って、それからなし崩しにクランが出来た。

気付けば三年生。特に大した出来事もなく、時にクランで出掛けたり、パフェで働いたり。俺は平凡だった。どれだけ天才扇術士と言われ持て囃されても。ここに来る前だって平凡なもんだ。

ロレンツ姉弟のことを知ってから、少し変わった。えらくちぐはぐな姉弟が現れたと思った。姉はルミア並の天才魔術士だった。弟はとんでもなくへなちよこだった。

毎年恒例の新生抜き打ち実戦テスト。ちぐはぐな剣士はとんでもないことをしでかした。いや、結果的に助かったのだからよかったのだが、後で確実に絞られただろう。

その後しばらくして知り合ったが、今回のクランコンテストを通じてもよく解った。あいつは面白い。だから俺はあいつに関わろうと思った。あいつと面白いおかしく過ごせばきっと今までの二年分よりも充実した学園生活を送れるだろうから。

「極めつけはこれだもんな……」

笑えない状況。

異常事態ともいえるこの非日常に、しかし胸踊る自分自身もどこかにいる。不謹慎だから態度には出さないけれど。

「でも、充実した学園生活だ」

「どしたの？」

「感覚の麻痺した男の戯言だ。さて、と。見てばっかじゃつまんねーし、俺も抗ってみるか」

「楽しそうね」

「そうか？」

「不謹慎ね。まあ、わたしもだけど」

「共犯者だな」

にっと笑って扇を手にとる。

見る限り全く魔術が効かないわけではない。あれは攻守で役割が違うのだから。攻撃なら強固に、防御は柔軟にと分かれている。防御に使われる影はよって今のところはファイロにしか破れないが、攻撃に使われる影ならば魔術で弾ける。

扇術は言わば舞という身体言語を詠唱とした魔術。ならば、この力は充分に役立つ。というか、少しは先輩らしく活躍しないと。それこそあいつらに関わる資格がなくなってしまう。まだまだ時間はあるんだ。そいつは困る。

扇を開いた。

そして前を見据えて、駆け出す。

「エリック!？」

「後ろは任せた!」

「ちよ……!」

東方に位置する藍玉^{アンユイ}。山脈を挟んで鸞明国とは隣接する、その国の別名は“風の国”。過酷な環境ゆえに多くの生物が独自に進化を遂げた場所だ。そこに住まう暁雷虎^{キョウライイコ}の骨格に白鷄^{ハクウ}の羽と獅猿^{シエン}の尾。それが扇となる。そして風神^{ジン}に捧げるべく描かれた魔法陣と触媒^{カタリスト}。扇は舞う風を受けて風神の力を得る。

それが扇術。

「つかみ取るように、撫でるように、愛でるように、包み込むように……！」

扇は舞う。

風は世界の吐息。風を操るといふことはすなわち世界の一部を操るといふこと。だからこそ、愛さなくてはならない。じゃないと、向こうも応えてくれないだろう？

果たして、世界は応えた。

扇に纏わり付く風の感触。

いい感じだ。今なら空間すら切り裂ける気がする。気がするだけだけ。

「切り裂け烈風！」

天駆ける風の刃。

真っ直ぐ走るそれは、何者にも邪魔されることなく、フィーロの前に群がり襲い掛かる影を切り裂いた。読みは当たっていた。心の中でガッツポーズ。

一方背後からの突然の攻撃（エリックとしては支援のつもりだが、それがフィーロに届いていることやら）に驚いたのか、フィーロが後ろを振り返る。

エリックは、親指をぐつと立てた。

一瞬目を大きく見開いていたが、すぐに頷くフィーロ。再び前を向き、駆け出した。

「カッコイイな、あいつ」

いつもより何倍も遅しい後輩の後ろ姿を眺めながら、エリックは扇を構えなおした。

さて、そのカッコイイ後輩をもう少し引き立てるとしますか。

F i r o

ガナツシュとレイジ。ヴァイス、そしてエリック。

四人の支援のお陰で、フィーロは一直線に駆ける。

「小虫の分際で……余に刃向かうか！」

「うつせえ！」

眼前に迫る影の束を払う。影は霧散し、消える。もう贄の女王は目前。地面を思い切り蹴って、飛び掛かった。

追撃する影を斬った。数が多い。影の針で出来た剣山つてところか。刺さればちくりどころじゃ済まないが。刺さらなければ……

「意味はない！」

斬り払う。もう目の前に邪魔するものは何もない。ただあるのは黒い影の玉。これがきつとそうだ。二人を取り込んでいる玉だ。宙に浮かぶそれをフィーロは剣を躊躇うことなく一閃させた。シャボン玉が弾けたように消え去る。

中にはシエリカとルミアの両名がいた。気絶している。やばい。

言うまでもなく重力はこんなときでも健在だ。万有引力よろしく落下を始める。ルミアは手が届くが、シエリカが遠い。

「やっべ……！」

咄嗟に剣を投げ捨てた。邪魔だ。

思い切り手を伸ばし、ルミアの手首を掴んだ。ぐいと一気に引く。その勢いを使ってシエリカに近付いた。ちょうど二人の真ん中に入り込む形になる。

それから気付く。

どうやって二人も担げばいいんだ？

バルドみたく大きな身体を持つてているわけでもないのに、一名が限界だ。とはいえ、ポイと捨てられもしないぞ。どうすりゃいい……

……！

「フィーロ！ 避ける！」

「もう遅い」

「え？」

ガナツシュの叫び声。そして耳元で囁くような女の声。フィーロは振り向く暇すらなかった。

衝撃。身体が揺さ振られる。そして背中
の皮を突き破り、肉を裂かれる感
覚。中に異物が入り込む。腹の肉を食
い破ってそいつらは突き抜けた。

「かつ……は……？」

やられた。

後ろからだ。

ただど声にならない。血が喉を塞いで、言葉の代わりに口から血が出てきた。下目でなんとか目視する。七本くらい黒い影が土手っ腹を突き破ってファイロから生えていた。

マジか。生け花じゃーんだから。そんな場違いなことを考える。ずりゆつと引き抜かれる。

奇妙な感覚。風穴開けられたわりに熱い。燃えるようだ。というか、これは痛い。激痛だ。でも、声が出ねえ。

「ファイロ……！」

誰の声だ。誰の。

くそ。意識が。いてえ。しっかりしろ。頭使え。痛すぎだ。泣けてくる。我慢だ。今するべきことを思い出せ。やっぱいてえ。クソツタレ。俺は。何をすべきだ。

決まってる。

「ガナアアアアツシュ……！」

血混じりの叫び。畜生め。声が出づれえ。知ったことか。

「受け取れえええッ……！」

シエリカとルミアの腕を引つ掴み、何をどうやったか思い出せないが、とりえずぶん投げた。頭がぶつ壊れるような痛みを全身を襲う。涙目どころか、いろんな体液が漏れてる気がする。

ガナツシュはシエリカを慌てて受け止め、そのまま尻餅を突いた。おい。ルミアはどうすんだ。

杞憂だった。エリックが風で受け止めていた。便利な力だ。ゆっくり自分の腕まで降ろす。どこの王子様だあの人は。

まあ、なにせよするべきことは出来た。十分だ。目をつむり、

安堵の息を漏らす。フィーロの身体は落下を始めた。だけどそんなことはフィーロ自身には感じられなかった。というかどうでもよかった。

約束を守ったんだから。

約束は……守った。

守ったんだ……。

……母さん。

フィーロの意識はそこで途絶えた。

第一章(35) 失樂園

Ganache

どしゃつ。

そんな生々しい音で、フィー口は地面に落ちた。まるで羽を失った鳥のように、無残な落ち様。

次第に広がる血は留まることなく流れ出る。赤い池を作り上げるのに、さして時間はいらなかった。

「フアハハハハハハハハ！ この程度か赤月の！ 幾千の年を経てついにそこまで弱り果てたか！ それで余の前によくも立てたものよのオ！ 浅ましい……浅ましいぞ！ アハハハハハハハハ！」

サクリフェイスクイン
贅の女王は喜悦に顔を醜く歪め、高らかに笑っていた。だが、醜悪な笑みを浮かべるその容貌はうら若い、妙齡の女のものとなっていた。

「そんな……」

二の句が告げない。というかまず起き上がれない。腕にはシエリ力。あいつが必死で助けた自身の姉。軽はずなのに、今は鉛のように重い。

口の中が乾く。色んなものが渦巻いている。ボクの頭の中はもはや坩堝だ。ぐつちやぐちやだった。上手く現状が把握できない。

生唾を呑み込んで、掠れる声で呟く。

「ま まさか……死んだ……のか……？」

「いやああああ……」

誰の悲鳴か。リリーナか。ユーリかもしれない。意外にクロアかもしれないな。あるいは全員か。誰でも一緒だ。

今はそんなこと、重要じゃない。どうでもいい。

「くそ……笑えねえ……笑えねえぞ」

エリックが吐き捨てるように言った。確かに、笑えない。

こんな自体を想定していなかった。いや、冒険者として生きる以上るくな死に方は出来ないと思っただけ。でもこんな所で。冒険者養成のための学園で。死ぬなんて。

これは、甘さか。結局覚悟していたつもりで、何もしていなかったということか。

「く……」

顔が悔しさと悲しさと、そして罪悪感で歪む。

「ん……？」隣でエリックが目を凝らしていた。「あれは……まさか！ おいルーキー！」

エリックに呼び掛けられ、力無く首を上げて、エリックに視線を向ける。

「フィーロの奴、まだ微かに呼吸してる……ほら、生きてるぞ！」

そう言われ、ガナツシュも目を向ける。微かに身体が呼吸で揺れている。弱々しいけれど、まだ生きていた。

「今なら間に合う！ 助けるぞ！」

「ボクは……」

「呆けてる場合か！ このままだとマジでフィーロは死ぬんだぞ！」

お前、クランのマスターカタハネだろ！ それでいいのかよ！？」

エリックは胸倉を掴みそうな勢いで叫んだ。いや、叱咤した。

フィーロが死ぬ。現実味のない言葉だった。殺しても死ななそうな奴だというのに。骨折しながらも巨大な化け物の豪腕を片手で受け止めて、なお平然と生きている常識はずれの身体能力。そんなフィーロが死ぬ。

信じられないし、信じたくない。

ただあの出血はやばい。誰でも見れば解るほどの命にかかわる出血だ。放っておけば、十分も待たずして死ぬだろう。即死していないだけでも奇跡だ。

死。

身近な者の死。

ボクは一度それを味わったはずだ。自分の無力さを歎いたはずだ。

何もできず、彼女にあんな思いをさせてしまい、そして後悔したはずだ。だから強くなるうとした。違うのがガナツシユ。

なんのために強くなるうとしたんだ、ボクは。守るためだろう。

ここでフィーロが死ぬのを、ただ見ているだけで、本当にいいのか。

「いいわけ……ないだろ！ レイジ！」

「お、おう？」

「シエリカを頼む！ 落とすなよ」

「ジブンは……いや聞くだけ野暮か。任せときー」

合点してくれたらしく、レイジはシエリカを持ち上げて、にっと笑った。こいつ、変態じゃなかったら女にもっとモテたんじゃないだろうか。

「俺の出番は無いと思って黙っていたが、それでもないらしいな」

不意に背後から現れたのはバルドだった。可変型の斧槍ハルベルトを携えている。そのままエリックに近付いた。

「ルミア、起きてるんだろう」

「ええ……まあ」

エリックの腕に抱かれていたルミアがうつすらと目を開けた。どうやら命に別状はないらしい。だがその顔は明らかに憔悴している。

「目の前で叫ばれちゃ……誰でも起きるわ……」

「う……わりい……」

エリックが顔を引き攣らせた。

「起きてるならそれでいい。加護を」

「少しは労れよバルド。起こした俺が言うのもなんだけどさ」

「……いいのよ。あの子がわたしのせいでああなったいるんだから……協力しないと申し訳ないわ」

エリックの呆れ口調の言葉に小さく首を横に振り、すべてを察しているらしいルミアは呟くように言った。そしてバルドに視線を移した。

「武器を」

バルドは斧槍を前に差し出す。ルミアは青白い腕を伸ばし、斧槍に掌を翳した。

「靈Lang護……FES・ARS・THINESS」

掌を退ける。バルドも斧槍を引いた。

「前ほど強力じゃないわ……闇の精霊はわたしにも想定外だし、そもそも効くかも……解らないわ。弾くのがやっただと思って」

「十分だ」

バルドはこれ以上ないほどに嬉しそうな笑みを浮かべた。

「それくらいでない……愉しめない」

とんだ^{ベルセルク}戦闘狂だ。

ガナツシユはこいつが一番化け物なんじゃないかと思ったが、口にはださなかった。逆境を楽しむ気持ちは、本音を言えば解らないでもなかったのだ。

とはいえ状況が状況だ。さすがにガナツシユは笑えない。正念場だ。ガナツシユは顔を引き締めた。

「エリック、貴方も行くんでしょう？ 降ろしてくれていいわ」

「ああ、気をつけるよ」

「なんならオレが運びませ？」 すかさずレイジがしゃしゃり出る。

「結構よ」一蹴された。

「ソデスカ……」

レイジはしゅんとして俯いた。同情の余地すらない。ガナツシユは一瞥したきり放っておくことにした。

「俺も行くぞ」

「ヴァイス先生……」

機を計ったかのようにヴァイス先生が切り出す。

「曲がりなりにも生徒だ。助けるのは教師の勤めだ」

曲がりなりにもって。

まあ、とりあえずこれで救出部隊は揃ったわけだ。心強い味方たちだ。絶対にいける。ガナツシユは太刀を持って構えた。

「三分で助けるぞ！」

S h e r i c k a

剣戟の音が聞こえる。

剣かどうかなんてシェリカ判断出来ないので、何か金属的なものがぶつかる音というのが正しいかもしれない。

「ん……」

ようやく身体の機能が復活の兆しを見せる。黒い影に覆われてからどれくらいの間が経ったか解らないが、最悪の寝心地だったことだけは覚えている。まるで気力を吸い取られていくようだった。

「目が覚めたんか」

「ん……ここは……」

「オレの腕の中や」

フィーロの声じゃないのが一瞬で解った。なぜならフィーロの声はありとあらゆる全ての発言が脳内にインプットされているから。

こんな声じゃない。発音丸きり違う。なんか……キモい。

目を開けた。切れ目の男が目に入った。なんだこの男は。どこかで……ああ、クランの奴じゃん。名前忘れたけど。フィーロが変態と呼んでいたから変態という名前でもいいかな。

とりあえずあたしは変態の腕に抱かれているのか。
なるほど。

まずすべきことは解った。

「ごぶあつ……！？」

顔をグーで殴る。変態はそのままシェリカを取り落とす。ここで着地できるほどの運動神経があればいいのだけれど、無理。尻から落ちた。

「いったあ……何すんのよ！」

「いや、こっちの台詞やそれは！なにすんねん！」

「あんたがあたしを抱き上げてるからでしょ！」

「ほなどーすればよかつたんや!？」

「地面の方が幾分かマシね」

「オレの腕は……地面にも劣るんかあああいいいい……」

変態は頭を抱えて地面に臥しながら嘆いた。ざまあみる。

さて、一番最初にするとは終わった。次は現状の把握といったところか。妙に薄暗い、気色悪い天候だけど、一応学園。時計は持っていないけれど……いや持っていないから時間は解らない。

先刻から聞こえる剣戟。そちらの音源に目を向ける。

「何よ、あれ……」

変なものがいた。

生き物、なのだろうか。動いてるし、生き物なんだろう。

人の身体っぽいものの、首の上がいびつな球体で、その中心あたりからまた人の上半身が生えている。どんな二層構造？

そいつの回りを黒いうねうねしたものが蠢く。それは化け物の足元から生まれている。もしかして、あれは影か。生きている影。なんだあれは。魔術？ でもあんなものは見たことはない。

「シエリカさん……!」

背後から走って来たのは爆乳女だ。もう爆乳って言うのムカつくから肉まんでもいいかな。これでいこう。肉まん。ピッタリだ。

「怪我はないですか!？ 具合悪かったり……」

「んなのないわよ。それより、どうなってんの？ というかフィー口はどこにいるのよ？」

ビクツと肉まんの肩が震える。胸も震える。腹立つ。というか何を躊躇っているのだろう。怪訝そうな顔をしていたら、肉まんは口を開いた。

「フィー口君は……あそこに……」

「うん？」

シエリカは肉まんの指差す方向に目を向けた。

凍り付いた。

「嘘……」

見たくない光景だった。最悪だ。

これで二度目。

もう、あんなことは起きないと思っていたのに。

いつだって神さまとやらは、あたしたちに残酷な仕打ちをする。

憎らしい。あたしたちにこんなことをする奴が。人の幸せを掻き乱す奴が。そして何より、こんな時に彼の傍にいなかった自分自身が。

最愛の人が向こうで倒れていた。

ただ倒れているのではない。血塗れだ。この距離でも解る夥しい出血をしながら。

嫌だ。こんなの嫌だ。感情が整理できない。ごちゃごちゃする。

沸騰する頭はすぐに臨界まで達した。気付けば肉まんの胸倉を思い切り掴んでいた。

「どう……なってるの……どうなってんのよ!」

「く、苦しいです……」

「答えてよ!」

「なら、アンタがまずその手を離しなさい」

喉元に槍が突き付けられた。睨みつけると、そいつは猫耳女だった。肉まんの腰ぎんちゃく……いや備え付けのマスタードの分際で鼻をツンツンさせるのが仕事のくせに人の喉をツンツンしてくるとは。しゃしゃり出るな。

しかし話が進まないの、シエリカが折れた。一刻が惜しい。舌打ちをして手を離す。同時に猫耳女も武器を引いた。

「あの男はアンタを助けるためにやられたのだわ。あの化け物からね。今男どもが助けてようとしてる。影が邪魔して難航してるけど。まあ二分経過つてところかしら」

「まだ死んでない……のね?」

「助かるかもしれない程度なのだわ」

まるで助からないほうがいいような表情だった。ムカつく。フィ

「口の代わりにこいつが死ねばいい。なーにがなのだわだ。けど後回しだ。」

出血量からしてこれ以上はまずい。ショック死してないだけでも奇跡だ。フィーロだからこそまだ生きている。時間は、ない。

「フィーロを助けるわ」

「シェリカさんは魔力を吸われてるんです……！ 今行っても……」

「うるさい。フィーロを守るのはあたしの役目なのよ……なのに……」

齒軋りをする。

結局、守られているのはシェリカのほうだ。なんとかフィーロの負担になりたくなくて、気丈に振る舞っていても、それで危険に晒すことも多い。

覚悟はしていたはずなのに。あんなことがあって、フィーロが壊れてしまったときに。これからは自分がフィーロを守らなくてはいけないと思つて。だからこそ必死で魔術を勉強したし、健康にも気をつけてきた。

その結果がこれだ。

でも、まだ間に合う。今度はあたしがフィーロを守る番なのだ。敵がなんだろうと、知ったことではない。フィーロのためなら神すら殺してみせる。

「絶対……守ってみせるわ……」

そして神さまとやらに一言言つてやるのだ。

シェリカ・ロレンツを舐めるな、と。

G a n a c h e

「仲間を殺されて激情したかの！ だが……温いわア！」

縦横無尽に襲い掛かる影。まるで化け物の感情に共鳴しているかのように荒々しく動いている。

「くそ……近づけない……！」

ユーカリスティアをもつてしても切り込めない。さっきのは手を

抜いていたとでも言わんばかりの攻撃だ。凶暴性の増した攻撃。これは、あるいは魔力の補給が出来たということなのかもしれない。

「ルーキー！ 活路は開くからお前はフィーロを！」

「あ、ああ……！」

「なら俺が先行してやろう……！」

舞いを駆使して風を踊らせながら叫ぶエリックにバルドが呼応した。斧槍を構えて影の中に一気に飛び込む。

迫る影を躲し、腕力のみで薙ぎ払う。消し去ることは出来ないが、あの影を払うとは。どんな筋肉してるんだあの人は。迫る影を薙ぎ払い、叩き潰す。伐ち漏らした分を、エリックの風が仕留めていく。

「早く行け、ルフエーヴル！」

「解った……！」

一瞬とはいえ二人の絶技に見入ってしまった自分が軽く叱咤し、太刀を構えて走り出す。

目指すはフィーロ。距離にして十メートル程度。それがこれほど果てしないとは。

弱音を吐くところではない。すでに二分。これ以上はまずい。最低でもあと三分で到達しなければならぬ。

「レイジに行かせたほうがよかつたかもな……！」

頬を掠めた影を太刀で弾きながら、そんな弱音じみた言葉を吐く。とはいえ立体的直線移動が領分のレイジだ。フィーロに辿り着く前に全身蜂の巣になりかねない。あいつの速さは時と場合スピードにしか発揮できないというのが難点だ。

だからといってここで一進一退しては意味がない。

焦りのみが募る。落ち着けと言いつても心拍数は上がる。

影が迫る。右に一本、左に一本。前方からも三本。ここで退けばバルドの奮闘が無為に帰す。それだけはダメだ。

ここは、前に出るしかない。

「ユーカリスティアアアアア！」

蹴り足に一瞬体重をかけて、地面が爆ぜんばかりに蹴り出す。思

い切り踏み込んで、左右の影を回避に成功。勢いに任せて前方の影を太刀で叩き付ける。水の精霊を纏う神具は影の触手を叩き伏せた。消し去るとはいかないでも、間隙が生まれた。

ガナツシユは一気に飛び込んだ。

「SHAAAAAAA!」

「な……!?!」

目の前にいきなり醜い姿の化け物が腕を一閃してきた。腕……というか鎌だ。認識するよりも速く、それをのけ反って躲しつつ、ガナツシユは太刀で斬り上げ、その腕の付け根から切断した。

「Syyyyyyyy……!?!」

腕を失った痛みから悲痛な悲鳴を上げる目の前の化け物。

その醜い姿に嫌悪を覚える一方、ガナツシユは右から迫る物体を察知し、目の前の化け物を蹴り飛ばして後ろに飛びずさった。また後退か……クソ。

目の前の地面が巨大な肉斬り包丁に叩き割られる。後退しなければあなっていたのは自分かもしれない。それを思うと好判断だが、今の状況が喜びを打ち消す。

横槍突っ込んで人様の進路を邪魔するクソ野郎の顔を拝もうと顔を上げる。

「な、なんだこれは……」

そして絶句した。

そこかしこにいやがった。いや、現在進行形で増えている。地面から盛り上がって生まれてきたそいつらは、化け物という分類で括るには化け物に失礼とさえ思えるほどに醜かった。

かち割られた頭から腐った脳を零しても動きつづけるモノ。犬かと思えば、顔は無残に刻まれ、本当にそれが顔だったのかも解らないモノ。見渡せばどれもこれも醜い様だ。吐き気すら覚える。

今攻撃してきたのも似たような奴だった。デカイ頭に小さな身体。全身は焼け爛れていた。焦げてるのか腐ってるのかさえ解らない臭いが鼻を刺す。ガナツシユは後退りしていた。これはひどい。ひど

すぎる。気持ち悪い。

じりじりと近づくそいつの全身がいきなり縦に二分された。どちやどちやと嫌な音をたてて地面に崩れ落ちる。辛うじて人の形をしていたそれはただの腐ったどす黒い肉塊に変わり果てた。

足音が聞こえた。肉をぶちぶちと踏む音。現れたのはヴァイス先生だった。どす黒い肉片のこびりついた剣を振って、払う。ガナツシユに近付くと、全体を見渡した。

「まさかここまで力が戻っているとは……」

ヴァイス先生の表情は珍しくも驚きを顕わにしていた。

「な　なんなんですか、こいつらは！」

「《見捨てられ子》……《贅の園》の醜悪な女王の下僕どもだ……
つと、」

ヴァイス先生が言い終えるよりも早く、地面が盛り上がる。ヴァイス先生の「下がれ」という一言に弾かれ、飛びずさった。文字通り沸いて出た新手を斬り捨ててヴァイス先生は叫んだ。

「気をつける、どこからでも沸いて来るぞ……！」

沸いて来ることにどう気をつけるというのか。

しかしこの時間のないときに障害を増やすとは。どんだけ嫌な女だ、あの女王とやらは。

ちなみにその嫌な女はけたたましく笑い声をあげていた。

「ハハハハハハハハ！　染めてやるがいい醜悪で愛しい余の下僕ども！　存分にその憎しみを発散するがよい！」

嫌な女　贅の女王の言葉に醜悪な下僕、《見捨てられ子》たちは歡喜の声を上げた。耳障りな声。そもそもこれを声と言っているのか。

地獄の亡者の呻きとも思えるその喚声に、ガナツシユは無意識に足が止まっていた。こいつらは異常だ。姿形の問題ではない。存在そのものが異常だ。

これが贅の園。

地獄といっても差し支えがない。

刻限は迫る。どうすればいい。異形の化け物どもを斬り刻みながらどこまで進めるのか。影だつて健在だ。次々に現れる障害。距離は離れているわけじゃないのに。こんなにも遠い。

学部首席だと言ったところで、所詮はこの程度なのか。こつやつてボクはまた同じことを繰り返すのか。

何も出来ず、誰も救えず。

無力だ。ボクは。

力が抜けていく。これまで築き上げてきた自信が碎けるようだった。灰色の空を見上げる。悔しい。とてつもなく悔しくて、ガナツシユは唇を噛んだ。血が出る。だからなんだ。

「クソ……」

無力な自分に腹が立つ。どれだけ立派な武器を持ってても、扱う人間がこれでは意味がないのだ。仲間を救えない、無力なボク。ボクに誰かを守ることもなくて、出来ないのか？

怒りと悲しみとが渦巻き、ガナツシユはどうしようもなく叫んだ。
「クソおおおおおおお！」

「天雅降BLAZE麗極Dept戒xAxdddImg清緋朱綴死DOGMA炎棘襲鎗」

轟、と。

敵が、焼失した。

次々と。次々と。次々と。空から降り注ぐ流星……いや、槍だ。

炎に包まれた槍。それが雨のように降り注ぎ、見捨てられ子たちをことごとく貫いた。

これは魔術だ。火の要素魔術。しかも中級以上の威力。的確に敵を貫いている。闇雲な攻撃じゃない。狙っている。そして貫いている。一体誰がこんな神業じみたことをしているんだ。

この学園でそれが出来るのはおそらく三人。そして今それが出来る奴。

そんなもの考えつくのは一人だけだ。

ガナツシユは振り返った。

そこには周囲に焰を撒き散らしながら、シエリカ・ロレンツは立っていた。まるで気高い貴族か何かのように、堂々と。

棚引く銀の髪は精霊の焰に照らされ、その翡翠色シェイドカラーの瞳は宝石か何かのように光る。

そのせいだろうか。こいつは甚だ不本意で、出来れば認めたくないのだが。

その様はまるで、女神のように見えた。怒りに身を焦がす夜の女神。少し。いや本当に少しだけだが、美しいとか思ってしまった。

まあ、あれが女神だなんてちゃんちゃらおかしいけど。どんな不良女神だ。イリアの美しさに比べたらまだまだだ。というかイリアこそ女神だ。だからこれは気の迷いだ。危機的状况に際してちょっと気が動転してただけだ。

そして、その不良女神はびつと贅の女王を指差して高飛車に叫んだ。

「年増の分際で……調子乗ってんじゃないわよ！」

第一章(36) 失樂園(前書き)

何度も矛盾がないかとか気にしながらの執筆。

そのため読み返しをすることも多々あるんですが、文章力が変化していない。これ成長してないってことですね……。万年スペランカーか僕は。

一章終わったら一回ちゃんと見直そう。

そう思うもののその思いもいつまでもてることやら……。汗
暑い盛りですが、最新話ごゆるりとお楽しみいただければ幸いです。

第一章(36) 失樂園

Ganache

圧巻だった。

「 玖鳩臺廉Goxx裂烈戒断BWITHIN・Shaw驟雨辰矧
BoxxTey骸絶NiV断裂鎧旋」

シエリカの魔術は立ち塞がる全てを殲滅していく。断頭台キロチンか何かのように、空から落とされる不可視の刃が、見捨てられ子をみじん切りにしていく。この場所の全てがシエリカにとってはまな板なのだ。

とはいえ腐り、ぐずぐずに黒ずんだあの肉をミンチにしているあたりあの女は料理人には向いていない。というか軽くボクまで刻もうとした。狙ってるとしたら最悪だ。

「 黛撃鍾暴顛quake地掌天蓋滅滅壞塵XCILD压暴掌」
物凄い音が鳴り響き、地面が陥没した。

爆風に思わず顔を腕で被う。

そいつが収まったときにはその一帯には敵の存在はなかった。あるのは、色んな、出来れば想像したくないものが浮いている、どす黒い池だけだ。見捨てられ子の汚い血と臓物と腐肉が合わさればこんな地獄絵図みたいな池が出来るらしい。知りたくなかった。

それにしても、圧暴掌か。魔術の知識はそれなりだが、確か対象を圧殺する下級要素魔術だったはずだが。

「 威力が下級じゃないな……」

そもそも、要素魔術においての下級、中級、上級の区分は精霊の構成難度から決められているだけである。扱う者によっては下級だろうがあれほどの威力を発揮する。恐ろしい限りだ。

だがその恐ろしい力を持つシエリカの力で活路は開けた。未だどこからともなく沸き上がるものの、数が減った。

「まさかあの小娘は精霊王の……！ あの一瞬の違和感はこれか……！ おのれどこまでも……どこまでも余の邪魔をおおお……！」

「うるさい！ あたしの邪魔すんじゃないわよ年増！」

サクリフェイスクイーン
贅の女王もまた、シエリカの存在にその意識が集中していた。激怒の言葉を吐き出している。

これは好機だ。今しかない。

「行けるか……いや、行くんだ……！」

一気に駆ける。後はない。これで失敗したら、間違いなくファイロは死ぬ。目の前に出現してくる敵は太刀で薙ぎ払い、迫る影をなんとか躲してようやくファイロの近くまで辿り着いた。

しかし一体の見捨てられ子がファイロに目を付けていた。襲い掛かるうと近付く。ガナツシユは歯を食いしばって、飛び掛かった。

「離れる下手物がああああ！」

太刀を一閃させ、首を刎ねる。そしてその背中を蹴り飛ばした。

ぬちよという気持ち悪い触感はさておき、そいつは吹っ飛んで三メートル先程の地面に転がって絶命した。

ガナツシユはファイロに駆け寄る。息は……辛うじてしている。

だが血は未だ溢れる。これで死んでないことのほうが驚きだ。不謹慎だが、ファイロでよかった。

倒れたままのファイロをゆっくり抱き上げる。

「ファイロは回収した！ すぐに離脱するからフォロー頼むぞ！」

ガナツシユは仲間たちに向けて叫んだ。

「やれば出来る子だと思つてたぜ。任せろルーキー！」

「俺は俺で好きに暴れるだけだ」

「早く行け」

「あ、ちよ……それはあたしの役目よ！ 勝手に取るんじゃないわよシスコン！」

誰の台詞が言うまでもないくらいにハッキリと個性溢れる返答が頂けた。とんだ仲間だ。協力的な台詞が一人だけだ。頼もしいことこの上ない。

フィーロを見やる。揺らすのはまずいが悠長に歩いていけば的になる。こいつと心中など真つ平御免だ。ガナツシュは意を決して地面を蹴った。

レイジほど得意ではないが、連続走り幅跳びというかカンガル―走法というか、跳ねる要領で駆け抜ける。着地の瞬間に再び蹴り出すから揺れは小さいはずだ。方向転換しづらいのが難点だが、仲間たちのお陰で影は払われ、見捨てられ子も屠られていくので障害はなかった。

後方にも敵はいたがモニカとレイジとクロア、リリーナやシオンも次々と蹴散らしていた。怪我から復活したらしいスヴェンもまた、剣を振るっている。動きが若干鈍いが、それでも十二分に大剣を振るっていた。

ユーリの姿が目に入る。向こうもこちらの動きに合わせてくれていたようだ。人命のことになると迅速なのが彼女の利点だ。

「ガナツシュ君、早くわたしのところにフィーロ君を……！」
「解って……あ」

叫ぶユーリにガナツシュは停止を試みる……が、そこで気が付く。この走法は一つ駄目な所があった。

停止時の衝撃はかなりキツイ。

速度が出る分、馬鹿正直に着地すれば直下型地震みたいな揺れがフィーロを襲うこと間違いなしだ。どうしよう。

とりあえずなんとか緩和しようと、着地時に滑るように降り立った。地面をがりがり削りながら次第に勢いを弱めて、着地点より四メートルほどいったところで停止した。足が痛い。もう絶対にやらない。

ガナツシュはフィーロを地面に降ろした。横に寝かせる。顔は苦痛だったのか、脂汗が浮いていた。

「フィーロ君……！」

リリーナが飛んできた。もう飛び掛かる勢いだった。

「フィーロ君！　しっかりしてフィーロ君！」

「ちょ……リリーナ！ ええい鬱陶しい！」

目の前の敵を双剣で斬り殺して、シオンが慌てて追う。

「生徒会長、揺らしちゃ駄目です！ 落ち着いて下さい！」

ガナツシユはフィーロの身体に縋り付くりリーナを引き剥がした。

「でも……でも……！」

「気持ちは解りますが、感情的になるのは後です。ユーリ！」

「解ってます！」

ユーリがすぐにやって来て、フィーロの傍に膝を突いて座る。血が付くのもお構いなしで腹部に手を当てた。触診で臓器マニフレクションの損傷具合などを計る。一般の治癒士の平均なら二分かかるが、ユーリは稀代の治癒士。三十秒で解析できる。

すぐに施術を開始する。学園の基礎過程の教科書曰く、治癒士は患者の新陳代謝を促進させ自己治癒能力を高めさせ、そしてそれに加えて直接人体を操作し傷の修復をする技術だという。

超能力に近い部分があり、透視能力サイコメトリーと念動力サイコキネシスの複合ともいえるが、結局のところ詳しいことは不明だ。

人間は言ってしまうえば複数の元素の化合物だ。修復程度ならなんとかなる。だがそれでも、人の完全な蘇生は未だ成し得ていない。

頼むぞユーリ。こんなところでこいつを失いたくない。

ガナツシユはそこから背を向けて、贄の女王の方に向き直った。後ろ髪を引つ張られる思いはあつたけど、後のことはユーリの技量に任せるしかない。ボクはするべきことをするだけだ。

「レイジ、カバーを頼む！」

「さつきからやつとる！」

「じゃあ引き続きだ！」

「合点や！ お代はベッドで帰してくれ！」

「あわよくば相打ちになつて死ぬんだな！ モニカも頼むぞ！」

「ユーリは守るけど、その男は知らないのだから……ッ！」

三叉槍で敵を殲滅しつつ、モニカは言う。どこまでもユーリ一筋らしい。とはいえ、フィーロがユーリの傍にいる限りは安全だろう。

多分。

どんな状況でもいつも通りな仲間の様子に苦笑が漏れる。

「クロア、お前も頼むぞ」

「……………お前こそさっさといけ」

「……………はい」

どうもクロアは苦手だ。言葉の端々に刺を感じてならない。嫌われているのだろうか。

自分が嫌われていようがいまいがクロアは仕事はするだろう。なにせ王子様の命がかかっているのだ。普段は指示無視やる気皆無だけど、フィーロのためならなんでもやれる。彼女はそういう質だ。心配はいらないだろう。どこまでも頼もしい仲間たちに加えて、頼りすぎる先輩もいる。ボクはそのお陰で前だけ見ていられる。

アレイド兄さん。

ボクは素晴らしい仲間と出会えた。貴方のようにこの魔剣を操れはしない。真似するだけで精一杯だ。一人ではどうしようもなく無力だ。けど、ボクには仲間がいるんだ。

ボクは絶対に大羅天へ到達してみせる。イリアのためにも。ボク自身のためにも。

見ていてくれ。貴方とは違う強さで、ボクは強くなってみせる。

「……………にしても……………」

ユーリの治療を受けるフィーロを一瞥する。苦しげな声を漏らしている。痛いと思えるだけで生きている証拠だが、正直見るに堪えない。ユーリは集中しきっている。見ただけで治療すら大変な怪我なことくらいは解る。あとはユーリと天命とやらに任せるのみだ。言っとくがフィーロ。大しては待たないからな。とっとと起きないとあの化け物はボクが狩ってしまうぞ。

まあ、そんな思いは届くはずもなく、フィーロは呻くだけだ。小さな溜め息を漏らした。

「死ぬなよ、本当に……………」

お前が死ぬなんて、微塵も思っちゃんないがな、それでもそう苦

しそうにされちゃこっちが堪らん。頼むからとつと起き上がってくれ。それまではボクがお前の代わりにシェリ力を守ってやるから。ガナツシユは前に向き直った。

もう後ろは見ないからな。お前がこっちに来い。

「 附 M e e r 哀 d u 刀 随 水 霊 」

「カーリスティア」

魂をくらい波打つ魔剣とともに、ガナツシユは前へと踏み

「わあああああつ……！？ な、なんなんだこれは！？ た、助けてえええ！」

出せなかつた。

誰だ、人がせつかく前に踏み出そうつてときに。

「キミ、そんな叫んだら…… ああもう。見つかったじゃないか」

「あーあたしは非戦闘員だからねー。あんたなんとかしなさいよー」

「私も空間維持に魔力を費やしているので、何も出来ません」

どれもこれも聞き覚えのある声ばかりだ。

「お、ちよーどいいとこに剣士がいるじゃない。おーいその美少年」

びくりと肩が震えた。が、無視する。多分呼ばれたのはボクじゃない。スヴェンだ。間違いない。ボクじゃない。

「あんたよあんた。黒髪ロン毛のガナツシユ君」

くそ。

邪魔すんな。

ご指名までされて逃げるわけにもいかず、ややあつて振り返る。

見捨てられ子に追われる四人分の姿があつた。異様な組み合わせだった。今し方ご指名受けましたアメリカ保健医と、イネスならともかくも。なんたってここにマルスとキール先生まで加わっていた。教師がここにいるのはともかく、なぜマルスが？ 逃げ遅れたのだろうか。こういうときは我先に周囲を押し退けて行きそうな奴だ。が。まあ、確かに鈍臭そうな奴でもあるけど。

とりあえず助けるのが先か。こんなことに力を使いたくないんだ。が。こっちはただでさえ魂擦り減らしてんだから。

ガナツシユは溜め息を飲み込み、水刃を放ち見捨てられ子を両断する。

肉塊に変わったモノに一瞥を与えることもなく、四人に目を向ける。

「た……助かった。……あ、いや、い　言つとくが君の力などなくとも僕は別に……！」

「あーはいはい」

相手するのも面倒臭い。フィーロなら「男のツンデレなんざ需要ねーよ。五百四十度転換して性別換える」とか言うだろう。

「うわー派手にやつてるわねー。……あら、弟クンが大変なことに。ユーリが治療する……ってうわー。またやつてるし。ちよつとアドバースしてくるかなー」

アメリカ保健医はマイペースに好き勝手吐き出してそのままユーリのほうに小走りに向かつて行つた。曲がりなりにも一流の治癒士だ。任せておいて間違いはないだろう。

ガナツシユはアメリカ保健医の背中を早々に見送りイネスに視線を移す。

「思った以上に状況は芳しくないようですね」

「お蔭さまで。フィーロはシェリ力を助けてあの様だ」

「そうですね……」

目を細めてフィーロを見つめるイネス。その胸中で何を思うのか。人形よりも無表情な彼女からそれを計り知ることはガナツシユには出来ない。

「こんなところで長々と話をしたくはないのでこちらから切り出す。

「それで、これは一体なんなんですか？」

「何、とは？」

「二人増える理由です。キール先生はともかく、生徒がいるのはおかしいでしょう」

「貴方もその生徒ですよ？」

「まあそうですね……」

揚げ足取りなど求めていない。

「正直言えば勝手に増えていただけです」

「勝手にって……」

「酷い言い草ですねイネス先生」キール先生が苦笑を浮かべた。「私は彼に付き添っただけですよ。たまたま見掛けたのでね」

キール先生はそう言ってマルスを見やる。

こちらに聞くな、ということらしい。いちいち回りくどい。ガナツシユは嘆息しつつ、マルスに近付く。

「……で、お前はなんでここに？」

「僕はノーワンを探しに來ただけだ。先輩方の指示だったからな」

「ノーワン？ 誰だそれは」

「魔戦学部次席の魔術士ノーワン・クロイツ君ですね。同じバルムンクのメンバーだったはずですよ」

キール先生が補足説明してくれた。聞いたことないな。次席にしては影の薄いことだ。シェリカの影が濃すぎるだけか。

「……で、そいつが行方不明だと？ 単に違う場所に避難しているんじゃないのか？」

「避難用に創った空間は一つに統合しています。そこにいないとすれば学園内でしょう」

イネスは表情を変えず機械的に言った。

「バルムンクの人間が逃げ遅れて行方不明など笑い者だ。だから一刻も早く見つけだせと言われたんだ」

「ああそう」

この場合我先に逃げていることの方が恥である。生徒会長およびランプ・オブ・シュガー、そしてボクらカタハネは死に物狂いで戦っている最中なんだが。これは二回戦勝てたかもな。

「それで探しに来てみればこの有様だ。一体なんなんだ、あの化け物は!？」

サクリフェイスクイーン
「贅の女王ですか……凄いですねえ……」

贅の女王を指差して怒鳴るマルスの横で、キール先生は感心した

声を漏らす。

そういえばこの男は確か召喚魔術に詳しい魔術士だったか。そこの方面じゃそこそこの名前を通った人だと聞いたことがある。どちらかと言えば学内じゃ女たらしで有名だが。

フィーロが嫌っていたが、解らなくもない。気障っぽいし。笑顔がいちいち鼻につく。フィーロほど嫌いじゃないけど。

「想像以上にまずいですね」

イネスは少しもまずそうな素振りもなく、淡々と呟いた。

「まずいとは？」

マルスの質問には取り合ってられないので、イネスの言葉にだけ反応。

「召喚が不安定です。完璧な召喚ではないことは解っていましたが、ここまで不安定とは……いや、なるほど。解りました」

「勝手に納得しないでください。何が解ったんです」

「あれ」すつと贅の女王を指す。「あの化け物の下半身に見覚えありませんか？」

「見覚え……？」

ガナツシュは目を懲らして贅の女王の下半身部分を注視する。字面だけなら最高にド変態だな。

影が蠢いていて見えにくいのが、奴の下半身は人の身体だ。それは解る。首から上が風船のように膨れ上がっていて奇妙な風体だが、四肢があるから人であることは解る。それが何かなど気にはしていなかった。もともと化け物なんだから、あれが本来の姿とも思っていた。

改めて見て、気付いた。違う。あれは異常だ。

ベージュのブレザーに、紺色のパンツ。あれは見紛うことはない。ボクのクローゼットにも仕舞ってある。

それは、

「あれ、うちの制服ですよ」

腹部の損傷、被害度は甚大。心拍未だ危険域。造血能力低下。輸血の必要性あり……。ファイロ君は確かO型だけど……。輸血用パツクを取りに行く隙はないし、それまで身体が保つかも解らない。

ヴァイス先輩の方が容態はマシだった。

「傷口は修復できたけど……」

ファイロ君は傷もそうだが、内臓が酷いことになっていた。心臓は無事だったけれど、腹部に集中する臓器の七割が損傷していた。傷口から腸が漏れかけていた。最悪の部類。生きていることの方が不思議なくらいの被害。

でも生きている。彼は虫の息でも呼吸していた。助かる可能性は大いにある。絶対に助けてみせる。

そう意気込んでみても、これ以上なす術が思いつかない。自分の技術ではこの程度だ。切った貼ったは治癒士にとっては日常的なもの。だけど臓器や、もしくは病気などの身体の内起因するものに関しては治癒士にとって難関だ。

スヴェン先輩は貫かれはしていたけど、臓器は無事だった。おそらく衝撃でのものだろう一部の損傷はあったけど、ユーリの技量でなんとかなる範囲だった。

自己治癒の能力を高めるだけでは臓器は回復しない。臓器修復は直接的に細胞を操作して治さなくてはならない。本当の施術オペレーションといえるこの規模の人体修復を一人で出来るのは教師クラスだけだ。

わたしに出来るの……？

不安になっている場合じゃない。今は一刻を争う。やるしかないのだ。

「ぐ……ア……つく……」

「ファイロ君……！」

大好きな人の苦しみげな声。それだけでユーリは身が裂けそうだった。

た。だけど、ここで焦っては全てが台なしになる。
深呼吸する。

大きく息を吸って、吐き出す。もう一度吸って一旦息を止めた。
やれる。わたしなら。やれる。やるんだ……！

「施術開始……！」
手を腹部に当てる。血管修復と臓器回復の同時進行。失敗は許さ
れない。

精密に。緻密に。かつ迅速に。

フィーロ君自身の新陳代謝を促進させ、自己治癒力を強化。フィ
ーロ君の人体構造を脳内に投影。それを図として施術を開始する。
損傷した血管部と各種臓器をほぼ同時に修復していく。ただ目の
前の人を助きたい一心で、ひたすら作業に没頭する。

しかし技術力というものが邪魔をした。
いや、違う。手順に狂いはなかった。現にずっと順調に進んでい
た。四割まで成功しているのだから。でも、だったらなんで……！

「ぐああ……！」

顔を苦痛に歪めるフィーロ君。それが決定打だった。

心身が竦む。出来ないと思ってしまう。

「そんな……わたし……」

駄目だ。もう駄目だ。でも、この手を離せば本当に終わる。怪我
の規模によっては施術途中に手を離すことがどれだけ危険なことか
怖い。これ以上先に進めない。戻れもしない。完全な行き止まり。
目の前は真つ暗闇になったみたいで。

どうすれば……。

「教科書の第一章第三節『施術環境の整備』」

「え……？」

目の前に。

誰かが。

「悪い癖よ。緊張すると手順を一つずつ飛ばすところ」

「あ……アメリカ先生……」

アメリカ先生はフィー口君を挟んでわたしの前に座った。シガレットを啣えて、ヤンキー座りしていた。パンツ見えてます先生……。ふざけている場合ではない。言われたことを思い出す。教科書の第一章第三節の『施術環境の整備』。……あ。

「わ、わたし……」

「はい解つたらさつさとやる……つても今は無理ね。そのまま続けなさい。あとはやっといたげるから」

よっこいせ、とアメリカ先生は立ち上がると、シガレットを投げ捨てた。そして少しも悩むことなく四方八方に手を添えていく。環境整備。もともと施術は無菌室で行われるべきもの。外部で行うにはそれ相応の準備がいる。特に、デリケートな部分を治癒するときなどは。

スヴェン先輩の時は覚えていたのに。なんでこんな時に。

治癒士学科が魔戦学部に分類されているのか。それは治癒術が空間制御の技術を少なくとも有しているがゆえだ。アメリカ先生のやっているのはその顕著な例。空間を一部区切り、一時的に施術のための空間を作る。

「うーし終わりー。ユーリ、滅菌は先にすることよ。焦っていてもね」

「は……はい」

「ボーツとしてる隙はないわよ。体内環境正常化ってね。手順が増えたんだから。……そうねえ、ホントは大怪我ほどゆっくり治療するのがいいんだけど、緊急事態なわけだし……」

口許に指を添えて、考える仕草をする。これするときは大概、

「十五分で出来るわよね？」

無茶なことを言う。

「え……ええと……十」

「出来る、わよね？」

「や、やりますっ」

アメリカ先生の剣幕に圧されて、ユーリはすぐに作業を開始した。

十五分。集中力全開かつ持てる技術力を総動員しないと絶対に無理。死ぬ気でやらないと……！

再度呼吸を整えて、神経を研ぎ澄ませた。患者の少年を見つめる。大事な人。大好きな人。掛け替えのない人。初恋の人。失いたくない。きつとそれはわたしだけじゃない。

だからファイロ君、貴方はわたしが絶対に助けます！

「施術再開します……！」

ユーリの戦いはこれからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6561i/>

すばらしきかなこの世界

2011年8月5日19時03分発行